

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第263集

浦 和 市

下野田稻荷原遺跡

一般国道463号線建設事業関係埋蔵文化財発掘調査報告

2 0 0 1

埼 玉 県

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



下野田稻荷原遺跡透景



平成11年度A区



平成12年度C区



第7号住居跡出土遺物



第1号溝跡出土遺物



第10号住居跡出土遺物



第8号住居跡出土遺物



グリッド出土遺物

発刊によせて

私は、知事就任以来、「道路の善し悪しは、地域発展のバロメーターである」との考えから、「県内1時間道路網構想」を目標に掲げ、高速道路から生活道路に至るまでの体系的な道路網の整備に努めております。

このうち越谷市と浦和市東部とを結ぶ「一般国道463号越谷浦和バイパス」につきましては、越谷市内の国道4号から、浦和市の国道17号に至る東西連絡道路として整備をしているものです。

このバイパスは、ワールドカップサッカー大会が開催される「埼玉スタジアム2002」へのメインアクセス道路でもあり、平成13年3月末の供用開始を予定しています。

さて、この一般国道463号の整備予定地周辺には、先人たちの歴史を伝える遺跡があり、そのいくつかは発掘調査され、貴重な成果があがっております。

今回報告いたします下野田稻荷原遺跡でも、弥生時代から平安時代にかけての村の一部が発見されるなど、新たな成果を得ることができました。この報告書は、その成果をまとめたものでございます。

文化財という県民共有の遺産の記録を後世に伝えますことは、郷土に対する理解を深めるとともに、地域文化を向上させるうえでも極めて大切なことであります。こうしたことから、本書の刊行は誠に意義深く、私は、多くの方々に活用されますことを願ってやみません。

終わりに、事業の実施にあたり深い御理解と御協力をいただきました地元の皆様、並びに献身的な御努力をいただきました関係の皆様方に対し、心から感謝を申し上げます。

平成13年3月

埼玉県知事

土屋新彦

序

埼玉県では、「環境優先」「生活重視」を基本理念により豊かな彩の国をめざして多彩なまちづくりを進めております。

首都圏の「北の玄関」にあたる本県は、多くの人口を抱える県南部の浦和市、与野市、大宮市に跨る首都機能を含めた新しい中核都市、「さいたま新都心」の整備を進めています。また、来年に開催される日韓共催サッカーワールドカップでは、埼玉会場が浦和市に建設され、多くの来場者が予想されることから、周辺には関連するアクセス道路の整備も急務となっております。

一般国道463号線の建設は、県道浦和越ヶ谷線のバイパス、東北縦貫道浦和インターやワールドカップ埼玉会場へのアクセス道路として浦和市東部の重要な幹線道路となるものです。

浦和市は、埼玉県の県庁所在地、県花サクラソウの自生地としても有名であります。江戸時代には中山道の宿場町として栄え、それ以前では縄文時代の大谷場貝塚をはじめ、多くの遺跡が存在するところとしても知られております。一般国道463号線の建設予定地内にも埋蔵文化財包蔵地が所在し、既にいくつかの遺跡が調査されております。

その遺跡の取り扱いについては、関係諸機関が慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置を講ずることになりました。当事業団では、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整により、埼玉県の委託を受け、発掘調査を実施いたしました。

今回の発掘調査では、弥生時代から平安時代にかけて住居跡が多数発見され、貴重な遺物も得られました。

本書は、これらの成果をまとめたものです。本書が埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及啓発の参考資料として、広く活用していただければ幸いです。

刊行にあたり、発掘調査から報告書刊行に至るまで諸調整にご尽力いただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、埼玉県土木部道路整備課、浦和土木事務所、浦和市教育委員会並びに地元関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成13年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 中野 健 一

例言

1. 本書は埼玉県浦和市に所在する、下野田稲荷原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番及び発掘調査届けに対する指示通知は、以下のとおりである。
下野田稲荷原遺跡 (SMND-INRHR)
浦和市大字下野田字稲荷原67番地2他
平成11年6月30日付 教文第2—32号
平成12年5月29日付 教文第2—10号
3. 発掘調査は一般国道463号線建設工事に伴う事前調査であり、埼玉県教育局文化財保護課が調整し、埼玉県の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 本事業は、第1章の組織により実施した。本事業のうち発掘調査については、平成11年度は田中正夫、大谷徹が担当して平成11年6月1日から10月29日まで、平成12年度は西井幸雄、新屋雅明が平成12年5月1日から8月31日まで実施した。整理・報告書刊行については昼間孝志が担当し、平成12年8月1日から平成13年3月23日まで実施した。
5. 遺跡の基準点測量、空中写真、空中写真測量は、平成11年度・12年度とも㈱中央航業に委託した。
6. 発掘調査における写真撮影は、田中、大谷、西井、新屋が行い、遺物写真撮影は大屋道則が行った。
7. 出土品の整理および図版の作成は、真野目洋子の協力を得て昼間が行った。本書の執筆はI—1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、II—1を真野目洋子、IV—1を上野真由美、その他の記述を昼間が行った。
8. 本書の編集は調査部資料整理担当の昼間が行った。
9. 本書にかかる資料は、平成13年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。
10. 本書の作成にあたり、下記の方々からご教示、ご協力を賜った。記して感謝の意を表します。(敬称略)
小倉 均、郷堀英司、桜井元子、佐々木健策、
山田尚友、渡辺 一、浦和市遺跡調査会、
浦和市教育委員会

凡例

1. 挿図中のX、Yによる座標表示は、国家標準直角座標IV系に基づく座標値を示す。また、各挿図における方向表示は、すべて座標北を示す。
2. グリッドは、国家標準直角座標に基づいて設定し、10m×10m方眼である。グリッドの名称は、方眼北西隅の杭番号である。
3. 遺構の表記番号は、以下のとおりである。
S J……………住居跡 S B……………掘立柱建物跡
S D……………溝跡 P……………ピット
S K……………土壌・地下式墳・空路
G P……………グリッドピット
4. 遺構の名称は原則として、調査時のものを使用したが、一部付記したものもある。遺構別一覧表参照。
5. 挿図の縮尺は、遺構1/60、遺物1/4（断面図は1/3）を基本とするが、一部例外もある。縮尺は各々項目ごとに記した。
6. 遺構断面図、地形図における水準の標高は、すべて海拔標高である。
7. 遺構図中に示した遺物の番号は、遺物の出土位置及び接合関係を示し、遺物実測図と一致する。
8. 遺構図中のスクリーントーンは、住居跡の伊跡及びカマド内の焼土部分を示す。
9. 遺構の計測値については、10cm以上はメートル単位、10cm以下はセンチメートル、ミリメートルで表記した。
10. 遺物実測図の網掛けで示した部分は赤彩された範囲を示し、網目の粗いスクリーントーンで示したものは灰釉陶器及び陶器の施釉範囲を示す。なお、黒色処理した土器については文章と観察表に記したので、参照されたい。
11. 遺物観察表は、以下のとおりである。
 - ・口径・器高・底径は、cmを単位とする。
 - ・()内の数値は推定値を示す。
 - ・胎土は肉眼で観察できるものを以下のように示した。
A—白色粒子 B—角閃石 C—石英
D—雲母 E—長石 F—赤色粒子
針—白色針状物 砂—砂粒 他—その他
 - ・遺物の焼成aは良好、b普通、c不良の3ランクに分けた。
 - ・色調は以下のように分類した。
I—灰色・黄灰色・オリーブ灰色 II—青灰色
III—灰白色・白色 IV—褐灰色 V—褐色
VI—黒褐色 VII—赤褐色・赤色 VIII—茶褐色
IX—橙褐色 X—暗褐色 XI—灰褐色
XII—灰黄褐色・灰黄色・黄褐色・黄橙色 XIII—橙色
XIV—灰オリーブ色 XV—青緑色 XVI—黄緑色
 - ・残存率は図示した器形に対するもので、5%単位で示した。残存率10%以下のものについては、それ以下のものも含む。
 - ・須臾器は土器実測図の断面を黒塗りとし、ロクロ土師器については、土器実測図の断面を白抜きとした。
12. 地形図の作成にあたっては、以下の地図を使用した。
国土地理院 1/50000地形図
[大宮][野田]
浦和市地形図10 1/2500

目次

目次

発刊によせて

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	(2) 掘立柱建物跡	103
1. 調査に至る経過	1	4. 中・近世の調査	105
2. 発掘調査・報告書刊行の経過	2	(1) 井戸跡	105
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	4	(2) 溝跡	107
II 立地と環境	5	(3) 土墳	113
III 遺跡の概要	9	a. 土墳	113
IV 遺構と出土遺物	13	b. 地下式墳	129
1. 縄文時代の調査	13	c. 家跡	133
(1) 土墳	13	(4) ビット	141
(2) その他	13	(5) グリッド出土遺物	147
2. 弥生時代後期から古墳時代前期の調査	15	V 調査の成果	151
(1) 住居跡	15	1. 遺構の分布と集落形成	151
(2) 溝跡	75	2. 弥生時代後期から古墳時代前期における	
3. 平安時代の調査	83	出土遺物の分類と課題	153
(1) 住居跡	84		

挿図目次

第1図 埼玉県の地形	5	第12図 第6号住居跡遺物分布図	19
第2図 周辺の遺跡	7	第13図 第6号住居跡出土遺物	20
第3図 下野田稲荷原遺跡全体図	10	第14図 第7号住居跡	21
第4図 下野田稲荷原遺跡グリッド配置図	11	第15図 第7号住居跡遺物分布図	22
第5図 下野田稲荷原遺跡位置図	12	第16図 第7号住居跡出土遺物(1)	23
第6図 第53号土墳	13	第17図 第7号住居跡出土遺物(2)	24
第7図 縄文時代の出土遺物	14	第18図 第9号住居跡出土遺物	25
第8図 第1号住居跡出土遺物	15	第19図 第9号住居跡	25
第9図 第1号住居跡	16	第20図 第10号住居跡	26
第10図 第4号住居跡	17	第21図 第10号住居跡遺物分布図	27
第11図 第6号住居跡	18	第22図 第10号住居跡出土遺物	28

第 23 図	第11号住居跡	29	第 60 図	第30号住居跡出土遺物	55
第 24 図	第11号住居跡遺物分布図	30	第 61 図	第31号住居跡出土遺物	56
第 25 図	第11号住居跡出土遺物	31	第 62 図	第31号住居跡	57
第 26 図	第12号住居跡出土遺物	31	第 63 図	第33号・第34号・第45号住居跡	58
第 27 図	第12号住居跡	32	第 64 図	第33号・第34号住居跡遺物分布図	59
第 28 図	第12号住居跡遺物分布図	33	第 65 図	第33号住居跡出土遺物	60
第 29 図	第13号住居跡	34	第 66 図	第34号住居跡出土遺物	60
第 30 図	第13号住居跡出土遺物	34	第 67 図	第35号住居跡	61
第 31 図	第14号住居跡	35	第 68 図	第35号住居跡遺物分布図	62
第 32 図	第14号住居跡出土遺物	35	第 69 図	第35号住居跡出土遺物	62
第 33 図	第15号住居跡	36	第 70 図	第36号住居跡出土遺物	63
第 34 図	第15号住居跡出土遺物	36	第 71 図	第36号住居跡	64
第 35 図	第16号住居跡	37	第 72 図	第37号住居跡	65
第 36 図	第17号住居跡	37	第 73 図	第37号住居跡出土遺物	65
第 37 図	第18号住居跡・出土遺物	38	第 74 図	第38号住居跡	66
第 38 図	第19号住居跡	39	第 75 図	第38号住居跡出土遺物	67
第 39 図	第19号住居跡出土遺物	39	第 76 図	第39号住居跡	68
第 40 図	第20号住居跡出土遺物	40	第 77 図	第39号住居跡出土遺物	69
第 41 図	第20号・第22号住居跡	41	第 78 図	第40号住居跡	70
第 42 図	第20号住居跡遺物分布図	42	第 79 図	第40号住居跡出土遺物	70
第 43 図	第22号住居跡遺物分布図	43	第 80 図	第41号住居跡	71
第 44 図	第22号住居跡出土遺物	43	第 81 図	第41号住居跡出土遺物	71
第 45 図	第21号住居跡	44	第 82 図	第42号住居跡	72
第 46 図	第21号住居跡遺物分布図	45	第 83 図	第42号住居跡出土遺物	72
第 47 図	第21号住居跡出土遺物	45	第 84 図	第43号・第44号住居跡	73
第 48 図	第23号住居跡	46	第 85 図	第43号住居跡出土遺物	74
第 49 図	第23号住居跡出土遺物	46	第 86 図	第44号住居跡出土遺物	74
第 50 図	第24号住居跡・遺物分布図・出土遺物	47	第 87 図	第1号・第13号溝跡	76
第 51 図	第25号住居跡	48	第 88 図	第1号溝跡遺物分布図	77
第 52 図	第25号住居跡出土遺物	48	第 89 図	第1号溝跡出土遺物(1)	78
第 53 図	第26号住居跡出土遺物	49	第 90 図	第1号溝跡出土遺物(2)	79
第 54 図	第26号住居跡	49	第 91 図	第13号溝跡出土遺物	80
第 55 図	第27号・第28号住居跡	50	第 92 図	弥生時代後期から古墳時代前期の遺構 配置図	81
第 56 図	第27号住居跡出土遺物	51	第 93 図	平安時代の遺構配置図	82
第 57 図	第28号住居跡出土遺物	52	第 94 図	第2号住居跡	83
第 58 図	第30号住居跡	53	第 95 図	第2号住居跡遺物分布図(1)	85
第 59 図	第30号住居跡遺物分布図	54			

第96図	第2号住居跡遺物分布図(2)	85	第128図	土壌(5)	117
第97図	第2号住居跡出土遺物(1)	86	第129図	土壌(6)	118
第98図	第2号住居跡出土遺物(2)	87	第130図	土壌(7)	119
第99図	第3号住居跡	89	第131図	土壌(8)	120
第100図	第3号住居跡遺物分布図	90	第132図	土壌(9)	121
第101図	第3号住居跡カマド遺物分布図	90	第133図	土壌(10)	122
第102図	第3号住居跡出土遺物(1)	91	第134図	土壌(11)	123
第103図	第3号住居跡出土遺物(2)	92	第135図	土壌(12)	124
第104図	第5号住居跡	93	第136図	土壌(13)	125
第105図	第5号住居跡出土遺物	94	第137図	土壌(14)	126
第106図	第8号住居跡	95	第138図	土壌(15)	127
第107図	第8号住居跡遺物分布図	96	第139図	土壌(16)	128
第108図	第8号住居跡出土遺物(1)	97	第140図	地下式墳(1)	129
第109図	第8号住居跡出土遺物(2)	98	第141図	地下式墳(2)	130
第110図	第29号住居跡	99	第142図	地下式墳(3)	131
第111図	第29号住居跡出土遺物	99	第143図	地下式墳(4)	132
第112図	第32号住居跡	100	第144図	宝跡(1)	133
第113図	第32号住居跡遺物分布図	101	第145図	宝跡(2)	134
第114図	第32号住居跡出土遺物	102	第146図	土壌出土遺物(1)	135
第115図	第1号掘立柱建物跡	103	第147図	土壌出土遺物(2)	136
第116図	第1号～第5号井戸跡	104	第148図	土壌出土遺物(3)	137
第117図	井戸跡出土遺物	105	第149図	ビット概略図	141
第118図	溝跡配置図	106	第150図	ビット(A)	142
第119図	第2号溝跡	107	第151図	ビット(B)	143
第120図	第3号・第11号・第12号・第14号・ 第15号溝跡	108	第152図	ビット(C)	144
第121図	第2号～第4号溝跡出土遺物	109	第153図	グリッド出土遺物(1)	147
第122図	第4号・第8号・第16号溝跡	110	第154図	グリッド出土遺物(2)	148
第123図	第5号～第7号・第9号・第10号溝跡	111	第155図	グリッド出土遺物(3)	149
第124図	土壌(1)	112	第156図	下野田稲荷原遺跡周辺の主な遺構分布図	152
第125図	土壌(2)	114	第157図	土器分類図(1)	154
第126図	土壌(3)	115	第158図	土器分類図(2)	156
第127図	土壌(4)	116			

表目次

第1表	第1号住居跡出土遺物観察表	17	第26表	第35号住居跡出土遺物観察表	63
第2表	第6号住居跡出土遺物観察表	20	第27表	第36号住居跡出土遺物観察表	64
第3表	第7号住居跡出土遺物観察表	24	第28表	第37号住居跡出土遺物観察表	65
第4表	第9号住居跡出土遺物観察表	26	第29表	第38号住居跡出土遺物観察表	67
第5表	第10号住居跡出土遺物観察表	27	第30表	第39号住居跡出土遺物観察表	69
第6表	第11号住居跡出土遺物観察表	30	第31表	第40号住居跡出土遺物観察表	70
第7表	第12号住居跡出土遺物観察表	33	第32表	第41号住居跡出土遺物観察表	71
第8表	第13号住居跡出土遺物観察表	34	第33表	第42号住居跡出土遺物観察表	72
第9表	第14号住居跡出土遺物観察表	35	第34表	第43号住居跡出土遺物観察表	74
第10表	第15号住居跡出土遺物観察表	36	第35表	第44号住居跡出土遺物観察表	75
第11表	第18号住居跡出土遺物観察表	38	第36表	第1号溝跡出土遺物観察表	79
第12表	第19号住居跡出土遺物観察表	39	第37表	第13号溝跡出土遺物観察表	80
第13表	第20号住居跡出土遺物観察表	42	第38表	第2号住居跡出土遺物観察表	87
第14表	第22号住居跡出土遺物観察表	44	第39表	第3号住居跡出土遺物観察表	92
第15表	第21号住居跡出土遺物観察表	44	第40表	第5号住居跡出土遺物観察表	93
第16表	第23号住居跡出土遺物観察表	46	第41表	第8号住居跡出土遺物観察表	98
第17表	第24号住居跡出土遺物観察表	48	第42表	第29号住居跡出土遺物観察表	100
第18表	第25号住居跡出土遺物観察表	49	第43表	第32号住居跡出土遺物観察表	101
第19表	第26号住居跡出土遺物観察表	49	第44表	井戸跡出土遺物観察表	105
第20表	第27号住居跡出土遺物観察表	51	第45表	第2号～第4号溝跡出土遺物観察表	109
第21表	第28号住居跡出土遺物観察表	52	第46表	土壌出土遺物観察表	138
第22表	第30号住居跡出土遺物観察表	56	第47表	土壌一覧表	139
第23表	第31号住居跡出土遺物観察表	56	第48表	ピット一覧表	145
第24表	第33号住居跡出土遺物観察表	59	第49表	グリッド出土遺物観察表	150
第25表	第34号住居跡出土遺物観察表	61			

写真図版目次

図版1	平成11年度B区 平成11年度C区	図版4	第1号住居跡遺物出土状況 第1号住居跡
図版2	平成11年度C区 平成11年度C区	図版5	第2号住居跡(平成11年度) 第2号住居跡(平成12年度)
図版3	平成12年度A区 平成12年度D区	図版6	第2号住居跡カマド遺物出土状況 第2号住居跡カマド

- 図版7 第3号住居跡遺物出土状況
第3号住居跡
- 図版8 第3号住居跡カマド遺物出土状況
第3号住居跡カマド
- 図版9 第4号住居跡（平成11年度）
第4号住居跡（平成12年度）
- 図版10 第5号住居跡
第5号住居跡カマド
- 図版11 第7号住居跡
第7号住居跡炉跡
- 図版12 第7号住居跡遺物出土状況
第8号住居跡遺物出土状況（平成11年度）
- 図版13 第8号・第9号住居跡遺物出土状況
（平成11年度）
第8号・第9号住居跡（平成11年度）
- 図版14 第8号・第9号住居跡（平成12年度）
第8号住居跡カマド遺物出土状況
（平成12年度）
- 図版15 第10号住居跡遺物出土状況
第10号住居跡
- 図版16 第10号住居跡炉跡
第10号住居跡遺物出土状況
- 図版17 第11号住居跡遺物出土状況
第11号住居跡
- 図版18 第11号住居跡炉跡
第11号住居跡遺物出土状況
- 図版19 第12号住居跡遺物出土状況
第12号住居跡
- 図版20 第12号住居跡遺物出土状況
第13号住居跡遺物出土状況
- 図版21 第13号住居跡
第13号住居跡遺物出土状況
- 図版22 第14号住居跡
第15号住居跡遺物出土状況
- 図版23 第16号住居跡
第17号住居跡・第51号土壇
- 図版24 第18号住居跡
- 第19号住居跡
- 図版25 第20号・第22号住居跡
第20号住居跡遺物出土状況
- 図版26 第21号住居跡
第22号住居跡
- 図版27 第23号住居跡遺物出土状況
第23号住居跡
- 図版28 第23号住居跡・第91号土壇
第23号住居跡遺物出土状況
- 図版29 第24号住居跡
第25号住居跡
- 図版30 第25号住居跡炉跡
第26号住居跡遺物出土状況
- 図版31 第27号住居跡
第27号住居跡炉跡
- 図版32 第30号住居跡遺物出土状況
第30号住居跡
- 図版33 第30号住居跡炉跡
第30号住居跡遺物出土状況
- 図版34 第31号住居跡
第31号住居跡遺物出土状況
- 図版35 第32号住居跡遺物出土状況
第32号住居跡遺物出土状況
- 図版36 第32号住居跡
第32号住居跡遺物出土状況
- 図版37 第33号住居跡遺物出土状況
第34号住居跡炉跡
- 図版38 第35号住居跡遺物出土状況
第35号住居跡
- 図版39 第35号住居跡遺物出土状況
第35号住居跡遺物出土状況
- 図版40 第36号住居跡遺物出土状況
第36号住居跡
- 図版41 第37号住居跡
第37号住居跡炉跡
- 図版42 第38号住居跡
第39号住居跡

図版43	第40号住居跡 第42号住居跡	第167号土墳
図版44	第43号住居跡 第44号住居跡	図版50 第2号住居跡出土遺物
図版45	第1号溝跡遺物出土状況 第1号溝跡	図版51 第2号住居跡出土遺物 第3号住居跡出土遺物
図版46	第4号溝跡 第14号溝跡 第2号井戸跡 第3号井戸跡 第5号井戸跡 第1号掘立柱建物跡 第1号土墳 第4号土墳	図版52 第3号住居跡出土遺物 図版53 第3号住居跡出土遺物 第5号住居跡出土遺物 図版54 第7号住居跡出土遺物 第8号住居跡出土遺物
図版47	第5号・第109号土墳 第7号・第8号土墳 第16号土墳 第29号・第30号土墳 第36号・第37号・第38号・第42号土墳 第31号・第32号・第50号土墳 第53号土墳 第57号土墳	図版55 第8号住居跡出土遺物 図版56 第8号住居跡出土遺物 第10号住居跡出土遺物 図版57 第10号住居跡出土遺物 第11号住居跡出土遺物 第13号住居跡出土遺物 第20号住居跡出土遺物 第23号住居跡出土遺物
図版48	第59号土墳 第67号土墳 第75号土墳 第81号土墳 第89号土墳 第96号土墳 第99号土墳 第100号・第101号土墳	図版58 第29号住居跡出土遺物 第30号住居跡出土遺物 第31号住居跡出土遺物 第32号住居跡出土遺物 図版59 第32号住居跡出土遺物 第35号住居跡出土遺物
図版49	第102号土墳 第108号土墳 第111号土墳 第134号土墳 第135号土墳 第150号土墳 第164号土墳	図版60 第35号住居跡出土遺物 第37号住居跡出土遺物 第43号住居跡出土遺物 第1号溝跡出土遺物 図版61 第1号溝跡出土遺物 図版62 第1号溝跡出土遺物 第4号溝跡出土遺物 図版63 第4号溝跡出土遺物 第16号土墳出土遺物 第51号土墳出土遺物 第52号土墳出土遺物 第148号土墳出土遺物
		図版64 グリッド出土遺物

I 発掘調査の概要

1. 調査に至る経過

埼玉県では、豊かな彩の国づくりの重点施策の一環として、県内1時間道路網構想の推進を図っている。

特に、県内を東西に結ぶ道路網の整備は、県土の均衡ある発展のためにも必要であると位置づけられている。

その一方で、浦和市・大宮市を中心とした地域に、高次都市機能の集積を図り、全国的、国際的な都市活動の拠点とするべく整備を行っている。

国道463号越谷浦和バイパスは、こうした施策の一環として計画されたものである。

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課では、このような施策の推進に伴う文化財の保護について、従前より関係部局との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

国道463号浦和越谷バイパスにかかる埋蔵文化財の所在および取扱については、平成10年10月27日付け道建第427号で、道路建設課（現道路整備課）長より文化財保護課長あて照会があった。

文化財保護課では確認調査を実施し、その結果をもとに、平成11年4月20日付け教文第76号で、下野田稲荷原遺跡の取扱について次のように回答した。

1 埋蔵文化財の所在

名称	種別	時代	所在地
下野田稲荷原遺跡 (01-076)	集落跡	弥生 平安	浦和市大字 下野田外地内

2 取扱い

上記の埋蔵文化財包蔵地は、現状保存することか望ましいが、事業計画上やむを得ず現状を変更する場合は、事前に文化財保護法第57条の3の規定に基づく文化庁長官当への発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施すること。

発掘調査については、実施機関である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と道路建設課と文化財保護課の三者により調査方法、期間、経費などの問題を中心に協議が行われた。その結果、平成11年6月1日から平成11年10月29日まで及び、平成12年6月1日から8月31日までの期間で、実施することになった。

文化財保護法第57条の3の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事から提出され、第57条1項の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。

発掘調査に係る通知は以下のとおりである。

下野田稲荷原遺跡

平成11年6月30日付け 教文第2-32号

平成12年5月29日付け 教文第2-10号

(文化財保護課)

2. 発掘調査・報告書刊行の経過

発掘調査

下野田稲荷原遺跡の発掘調査は平成10年度から12年度まで3次にわたって行われているが、今回報告されるのは平成11年度及び12年度に行われたものについてである。

(平成11年度)

平成11年度の発掘調査は、平成11年6月1日から平成11年10月29日にかけて実施した。調査面積は3775㎡である。

6月 現地において浦和土木事務所との打ち合わせを行い、調査範囲の確認、現場事務所及び排土置き場の位置などについて協議をした。その結果、調査区内を通る市道を分断するには調査期間との兼ね合いが難しいことから、市道部分及び未買収地については、次年度以降に調査することになった。したがって、調査区は市道や未調査区に分断される形になったため、便宜的に西からA～Cの調査区を設け、6月上旬からA区の表土掘削から行った。中旬頃には現場事務所の設置、調査区の閉鎖工事、重機によるA区の表土掘削、基準点測量などを終えた。その後、遺構確認調査を行い、調査区内は擾乱が多く入っていたものの、弥生時代後期から古墳時代前期及び平安時代の住居跡、掘立柱建物跡、井戸跡、土壇などを確認し、本格的な調査に入った。

7月 梅雨に入っていたため、天候には苦慮したが、下旬までには遺物の取り上げ、遺構の実測、写真撮影などを完了させ、埋め戻しを行ってA区の調査を終了した。

8月 月上旬にB区の表土掘削、基準点測量を行って、遺構の調査に入った。B区はA区以上に擾乱が多く、弥生時代後期から古墳時代前期及び平安時代の住居跡や土壇など多くの遺構が重複していた。下旬までに遺物の取り上げ、遺構の実測及び写真撮影を行った。

9月 月上旬にはセスナを使った空中写真撮影を実施し、後に埋め戻しを行って調査を終了した。中旬になってC区の表土掘削、基準点測量を行い、その後に遺構

確認調査を行った。A区と同様に遺構の密度は濃かったが、部分的に大きな擾乱が入っている箇所があり、調査区の大半は東寄りとなった。下旬から本格的に調査に入った。

10月 天候が安定していたため、調査は順調に進んだ。中旬にはすべての遺構を掘り、遺構の実測、写真撮影を行ったが、深く複雑に重なっている遺構があったため、下旬になって、航空写真測量を実施した。その後、調査区の埋め戻し、囲柵の撤去などを行ってすべての調査を終了した。

(平成12年度)

平成12年度の調査は、平成12年5月1日から平成12年8月31日にかけて実施した。調査面積は1018㎡である。調査範囲は平成11年度に調査されなかった市道部分及び隣接地が対象である。

5月 現地において浦和土木事務所と打ち合わせを行い、調査範囲、現場事務所及び排土置き場の位置などについて協議した。その結果、着手順に調査区をA～D区に分け、行うことになった。中旬までに現場事務所の設置、調査区の閉鎖工事を行い、下旬になってA・B区の表土掘削を行った。B区については、作業工程上一部表土掘削が残った。

6月 月上旬に表土掘削を終了したA区及びB区の一部について、基準点測量を実施した。A区については、遺構の確認、遺構の調査、写真撮影、平・断面図の作成など順調に調査を進め、6月中に調査を終了した。また、中旬にはラジコンヘリによる空中写真撮影も実施した。B区については、残りの表土掘削と基準点測量を実施した。

7月 月上旬にB区の調査と併行しながら、市道の迂回路建設に伴ってC区の表土掘削を行った。C区の遺構確認が終了した時点でB・C区の空中写真撮影を行った。B・C区の調査も順調に進み、中旬にはB区の東半分、下旬にはB区の西半分とC区の調査をすべて終了した。

8月 工事用道路の迂回に伴い、D区の調査に着手した。表土掘削、基準点測量、遺構の確認、遺構の調査、遺物・遺構写真撮影、図面等の作成を行った。後に埋め戻しを行ってすべての調査を終了した。

整理・報告書刊行

(平成12年度)

整理・報告書の刊行は、平成11・12年度に調査された第2次・3次調査について行い、平成12年8月1日から平成13年3月23日まで実施した。

8月 上旬～中旬遺物の水洗、注記、併せて遺構図・写真類の整理を行った。その後、遺物については遺構ごとに整理分類を行い、下旬には接合に入った。遺構図については、第二次原図の作成を行った。

9月 遺物については、上旬までに接合が終了し、復元が必要なものについて石膏を用いて補強した。また、拓本を必要とする遺物については上旬から開始して下旬には終了した。遺構図は第二次原図の作成が完了し、トレースに取りかかった。

10月 下旬までに遺物の復元作業が終了し、破片の

接合関係を確認し、分布図の下図の作成に取りかかった。遺物の実測については住居跡、溝跡、土壌の順で開始し、トレースも併行して行った。遺構図は全体の約8割のトレースが完了した。

11月 遺物の実測については中旬、トレースについては下旬までに終了した。遺構図については上旬にトレースが終了し、直ちに版組に入った。また、遺跡全体図の作成、遺物分布図のトレースにも取り掛かり、ともに下旬に完成した。

12月 遺物の版組を開始し、上旬のうちに完成させた。中旬、本書に掲載する遺物の写真撮影を行い、写真図版を作成した。また、併行して遺構図、遺物実測図の縮尺図の作成、地形図の作成などを行い、下旬に割付を完成させた。原稿の執筆については、一部については中旬より開始した。

1月 本格的に原稿執筆を行い、下旬に終了した。また、遺構図、遺物実測図など図版類の見直し作業を行った。

2月 上旬に人稿し、その後校正を行った。

3月 中旬に本書の印刷を行い、下旬に刊行した。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査

(平成11年度)

理事 長 荒井 桂
副理事 長 飯塚 誠一郎
常務理事兼管理部長 広木 卓

管理部

副部長兼経理課長 関野 栄一
主 任 福田 昭美
主 任 腰塚 雄二
主 任 菊池 久隆
庶務課 長 金子 隆
主 査 田中 裕二
主 任 江田 和美
主 任 長滝 美智子

調査部

調査部長 増田 逸朗
調査部副部長 水村 孝行
専門調査員(調査第二担当) 坂野 和信
統括調査員 田中 正大
主任調査員 大谷 徹

(平成12年度)

理事 長 中野 健一
副理事 長 飯塚 誠一郎
常務理事兼管理部長 広木 卓

管理部

管理部副部長 関野 栄一
主席(庶務担当) 阿部 正浩
主席(施設担当) 野中 廣幸
主 任 菊池 久

主席(経理担当) 江田 和美
主 任 長滝 美智子
主 任 福田 昭美
主 任 腰塚 雄二

調査部

調査部長 高橋 一大
調査副部長 石岡 憲雄
専門調査員(調査第二担当) 大和 修
統括調査員 西井 幸雄
主任調査員 新屋 雅明

(2) 整理・報告書刊行

(平成12年度)

理事 長 中野 健一
副理事 長 飯塚 誠一郎
常務理事兼管理部長 広木 卓

管理部

管理部副部長 関野 栄一
主席(庶務担当) 阿部 正浩
主席(施設担当) 野中 廣幸
主 任 菊池 久
主席(経理担当) 江田 和美
主 任 長滝 美智子
主 任 福田 昭美
主 任 腰塚 雄二

調査部

調査部長 高橋 一大
資料副部長 鈴木 敏昭
主席調査員(資料整理担当) 磯崎 一
統括調査員 昼間 孝志

II 立地と環境

下野田稲荷原遺跡が所在する浦和市は、埼玉県の南東部に位置し、地形は、主に大宮台地と呼ばれる洪積台地と、見沼低地、荒川低地と呼ばれる沖積低地からなっている。

大宮台地は、埼玉県吹上町から浦和市までの長さ約30kmにわたって延びる細長い台地で、多くの谷が緩瀬川や芝川をはじめ中小河川によって細かく開析され、全国でもめずらしい樹枝状の地形を形成している。下野田稲荷原遺跡は、こうして分かれた台地のうち、東側に位置する鳩ヶ谷支の東縁に立地している。遺跡の東側には緩瀬川が流れ、西側は溺れ谷である。標高は約11m-14mを測る。

また、大宮台地上は、ゆるやかな起伏となっており、各時代にわたる数多くの遺跡が残されることとなった。

ここでは、下野田稲荷原遺跡の周辺の遺跡について、概観する。

浦和市内で、旧石器時代の遺跡がはじめて発見されたのは、昭和49年、大古里遺跡の第一次調査であった。

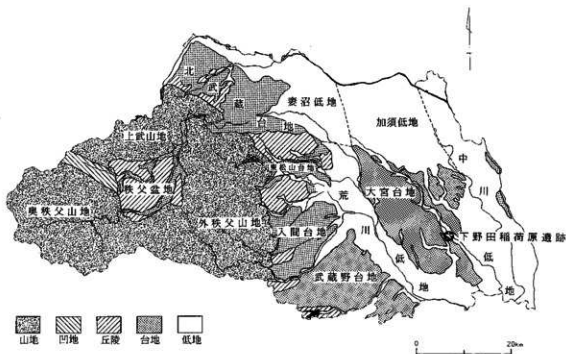
第1図 埼玉県の地形

その後、明花向遺跡で、遺物集中地点4箇所が確認されたのをはじめ、現在のところ浦和市内では最古とみられている約3万年前の剥片が出土している。和田北遺跡では、昭和55年の調査時に、黒曜石製の国府型ナイフ型石器が出土し、注目を集めることとなった。その他、北宿西遺跡、松木遺跡、井沼方遺跡、不動谷遺跡など、多くの遺跡が確認されている。

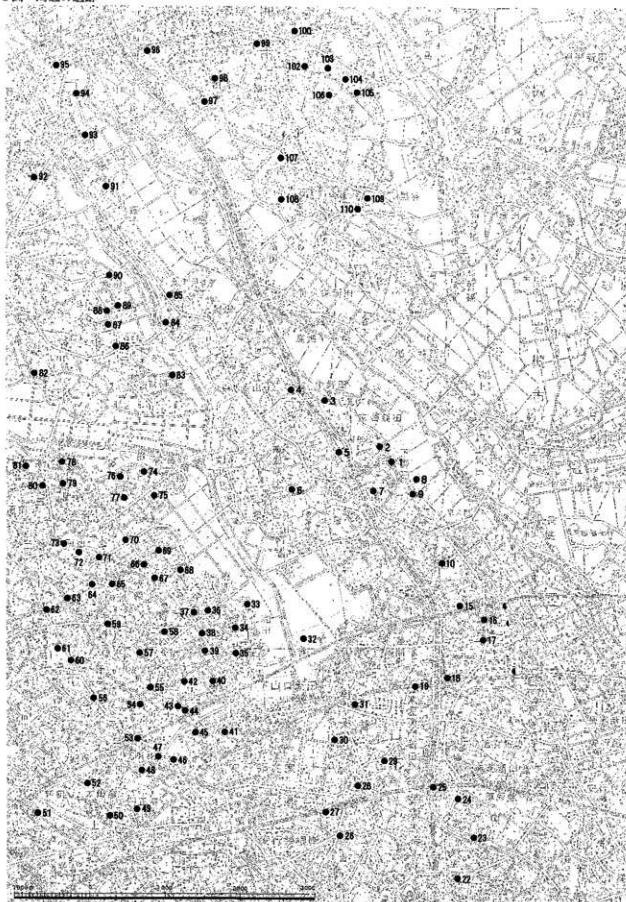
縄文時代に入ると、大宮台地上にも数々の遺跡が見られるようになる。

草創期では、まだ出土例は少ない。えんぎ山遺跡では、陸線文系土器、爪形文系土器、多縄文系土器などが出土し著名である。その他、臥原遺跡などがある。

早期に入ると、遺跡の規模や数は飛躍的に増加する。大古里遺跡はその代表的な遺跡である。既に20回近くの調査が行われ、燃糸文系土器・沈線文系土器・条痕文系土器をはじめ、100基を超えるガ穴群と2軒の住居跡が確認された。北宿西遺跡・明花向遺跡では、スタンプ状石器と呼ばれる食物加工用の石器が出土した。その他、松木遺跡、井沼方遺跡、梅所遺跡、芝原



第2図 周辺の遺跡



遺跡、和江北遺跡、東浦西遺跡など、多くの調査例が報告されている。

早期の末頃からは、気候の温暖化が徐々に進んでいく。前期には海進がピークを迎え、大宮台地の縁辺部を中心に、数多くの貝塚や集落が形成されるようになった。貝塚では原山貝塚、太田窪貝塚、八雲貝塚、浮谷貝塚、集落跡としては井沼方遺跡、会ノ谷遺跡、松木遺跡、大古里遺跡、北宿遺跡などがある。井沼方遺跡では、30数軒の住居跡が重複せずに分布しており、比較的短期間に営まれていた集落跡と考えられている。会ノ谷遺跡では、早期初頭の住居跡が検出された。浦和市内でも貴重な例である。松木遺跡では、高さ約2.7mの日本最小の土偶が出土した。

前期の中頃以降は、気候の寒化により、海の状況が変化したためか、遺跡の規模・数ともに減少する。中期後半から後期において特筆すべき遺跡は、馬場小室山遺跡であろう。過去の30数回の調査において、縄文時代中期から晩期を中心とした大規模な集落が確認されている。他に、原山坊ノ在家遺跡や、駒形北遺跡、会ノ谷遺跡などがある。

後期から晩期にかけても、馬場小室山遺跡の規模の大きさは類を見ない。昭和57年に行われた調査におい

て、第51号土壌から人面付土器が発見されたのをはじめ、土偶装飾付の土器や、土偶、土版、独鈷石など、さまざまな信仰的遺物が出土しており、注目されている。猿貝貝塚は、縄文時代晩期の安行式土器の標準資料として採用された土器を出土したとして著名な遺跡である。

その後、周辺地域では、弥生時代前期までの出土例はみられない。中期にはいと、台地縁辺部を中心に遺跡が確認されるようになる。上野田西台遺跡では、16軒の住居跡が発見され、優品の挟入磨製石斧や鉄製鉋が出土している。弥生時代の鉄製品としては浦和市内初の出土例である。明花向遺跡からは方形副溝墓や、集落を囲む環壕も確認されている。その他、松木遺跡、大北遺跡などがある。

後期になると、遺跡の数は増加する。中期に引き続き、台地の縁辺部が中心である。下野田稲荷原遺跡をのせる大宮台地場ヶ谷支台でも、隣接する下野田本村遺跡をはじめ、東裏西遺跡、上野田西谷遺跡、谷ノ前遺跡などが確認されている。また、芝川右岸の浦和支台東縁部には、県内でも最大規模の環壕集落や方形副溝墓群、埋葬施設が確認され、鉄剣やガラス玉が出土している井沼方遺跡、120軒を越える住居跡が検出さ

周辺の遺跡

1 下野田稲荷原遺跡	2 下野田本村遺跡	3 中野田中原遺跡	4 谷ノ前遺跡	5 鏡巻遺跡
6 えんぎ山遺跡	7 東裏西遺跡	8 大門貝塚	9 東裏遺跡	10 野谷遺跡
11 糠通場遺跡	12 川口市№3遺跡	13 川口市№8遺跡	14 戸塚上台遺跡	15 南方遺跡
16 川口市№5遺跡	17 上台遺跡	18 野伝場遺跡	19 川口市№102遺跡	20 猿貝北遺跡
21 猿貝貝塚	22 新井宿下斗跡遺跡	23 上斗跡遺跡	24 石神貝塚	25 土伝遺跡
26 川口市№129遺跡	27 川口市№128遺跡	28 八木木遺跡	29 八雲遺跡	30 木曾呂原遺跡
31 川口市№119遺跡	32 四本竹遺跡	33 和台北遺跡	34 和台南遺跡	35 吉場遺跡
36 梅所南遺跡	37 会ノ谷遺跡	38 和台西遺跡	39 西谷遺跡	40 宮前遺跡
41 川口市№136遺跡	42 大北遺跡	43 井沼方馬場遺跡	44 井沼方遺跡	45 井沼方南遺跡
46 明花向遺跡	47 明花南遺跡	48 明花ノ台遺跡	49 門正寺遺跡	50 太田窪貝塚
51 小松原高坂遺跡	52 善前南遺跡	53 明花東遺跡	54 とうのこし遺跡	55 東中尾遺跡
56 広ヶ谷戸稲荷越遺跡	57 中尾中丸遺跡	58 大間木内谷遺跡	59 駒形南遺跡	60 不動谷南遺跡
61 原山坊ノ在家遺跡	62 不動北遺跡	63 駒形遺跡	64 駒形北遺跡	65 駒形遺跡
66 水原北遺跡	67 水原遺跡	68 梅所遺跡	69 芝原遺跡	70 松木遺跡
71 松ノ木遺跡	72 南宿北遺跡	73 三堂遺跡	74 馬場東遺跡	75 松木北遺跡
76 馬場北遺跡	77 馬場小室山遺跡	78 北宿遺跡	79 北宿南遺跡	80 北宿西遺跡
81 大古里遺跡	82 篠山遺跡	83 大宮市A-3遺跡	84 中臺遺跡	85 上野田西台遺跡
86 大宮市A-116遺跡	87 上野田藤子遺跡	88 上ノ宮遺跡	89 原山貝塚	90 八雲貝塚
91 大宮市A-21遺跡	92 大宮市A-176遺跡	93 大宮市A-20遺跡	94 藤子八幡神社遺跡	95 鏡巻遺跡
96 加倉中島遺跡	97 柏崎中組遺跡	98 柏崎遺跡	99 真福寺貝塚	100 木曾良貝塚
101 村岡貝塚	102 飯塚原地遺跡	103 飯塚北貝塚	104 飯塚貝塚	105 飯塚南貝塚
106 南下新井善場北遺跡	107 浮谷遺跡	108 尻山貝塚	109 黒谷貝塚	110 黒谷田崎前遺跡

れた環壕集落である馬場北遺跡、北宿遺跡、芝原遺跡、宮前遺跡、梅所南遺跡など、多数の遺跡が存在する。

弥生時代後期から古墳時代初頃にかけての遺跡も数例確認されている。本報告の下野田稲荷原遺跡をはじめ、会ノ谷遺跡では、13軒の住居跡が検出され、集落跡が確認された。上野田西谷遺跡は、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての住居跡が合計35軒検出され、また、和田南遺跡でも住居跡が2軒検出されている。

古墳時代になると大宮台地周辺の遺跡の分布に変化が訪れる。古墳は、東部の大宮台地上にはわずかしか見られず、集落跡もそれに伴うように浦和市西部の荒川流域の自然堤防上に多数見られるようになり、大宮台地にはそれ以前のように遺跡が確認されていない。

このことは、古墳時代に、生産基盤の変化などにより、集落が台地上の遺跡から大規模に低地へと移動したことを裏付けるものであろう。

周辺地域における古墳時代前期の遺跡の数は減少し、浦和支台東縁辺周辺では、8軒の住居跡を検出した芝原遺跡、12軒の住居跡を検出した和田北遺跡、14軒の住居跡を検出した会ノ谷遺跡、宮前遺跡、水深遺跡、水深北遺跡などが確認されているにすぎない。

後期にもその傾向は続く。現在までに周辺地域において、後期の遺跡として確認されているのは、馬場東遺跡、北宿遺跡などに限られている。

奈良・平安時代には、再び台地上に集落が営まれた。

下野田本村遺跡、東裏遺跡などからも、下野田稲荷原遺跡でみられたロクロ土師器が出土している。さらに和田北遺跡では、ロクロ土師器を生産したと見られる土器焼成遺構が検出され、注目を浴びることとなった。その他の集落跡では、鉄製品を研いだと見られる砥石が発見された大間木内谷遺跡、内黒の墨書土器が出土した駒形前遺跡、駒前遺跡、駒前南遺跡、桐谷遺跡、北宿遺跡、宮前遺跡、松木遺跡など多くの調査例が報告されている。

中近世における代表的な遺跡としては、四本竹遺跡が挙げられる。ここでは、中世から江戸時代の享保年間にわたって続く祭祀遺構が確認された。さらに古代にまでさかのぼる可能性も指摘されている。永川女体神社で行われていた祭祀の際に使用されたと見られる800本近くの竹と、100枚近くの古銭が出土し、この地域ののみま信仰を考える上で貴重な存在となっている。他には、中世の居館の跡の可能性が想定されている馬場東遺跡、包含層から浦和市内で初めて火縄銃の弾が発見された中尾中丸遺跡などがある。

江戸時代には、中山道をはじめとした交通路の整備が進み、浦和市内にも日光御成道や赤山街道などが走る。下野田稲荷原遺跡の南側1kmには日光御成街道が通っており、火門宿の本陣・脇本陣ともその表門が現存している。また、会ノ谷遺跡の北西側には赤山街道が通っており、竪穴状遺構や古銭、焙烙などが出土している。

III 遺跡の概要

下野田稲荷原遺跡は浦和市大字下野田字稲荷原67番地2他に所在する。遺跡は浦和市東部の大宮台地鳩ヶ谷支台東縁の標高11~14mの洪積台地上に立地している。鳩ヶ谷支台は大宮台地の東側に位置し、北西から南東方向に延びる細長い台地で、西は芝川、東は綾瀬川に挟まれ、台地内部には複雑に小谷が入り込んでいる。

今回調査された下野田稲荷原遺跡は綾瀬川に面した鳩ヶ谷支台東縁部を中心とし、東側の低地とは7.4mの比高差がある。下野田稲荷原遺跡に隣接して北側に下野田本村遺跡、南側に東墓遺跡があるが、両遺跡では下野田稲荷原遺跡と同様、弥生時代後期から古墳時代前期及び平安時代の集落が確認されており、これらの遺跡が連続する一つの遺跡であることがこれまでの調査からも明らかになっている。発掘調査は平成11・12年度に行われ、調査面積はあわせて4773㎡である。

検出された遺構はあわせて住居跡45軒、掘立柱建物跡1棟、溝跡16条、井戸跡5基、土壇179基(地下式墳、宝跡含む)、ピット150基である。住居跡は弥生時代後期から古墳時代前期が39軒、平安時代が6軒である。弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡の平面形態は方形または隅丸方形であるが、一部円形に近いものもある。住居跡の規模は一辺の長さが3~7mに及んでいるが、4.5m前後のものが大部分を占める。出土遺物には複合口縁壺、小型壺、甕、台付甕、器台、鉢、甌、甌、高坏、ミニチュア土器、土玉、砥石などがある。遺物の中では壺、鉢類が多く、高坏がこれに続く。また、高坏や壺の多くは赤彩されている。

平安時代の住居跡は平面形態が長方形で、平均的な規模は3×4mである。コマドはいずれも北側又は東側に敷設されている。出土遺物には須恵器環、埴、甕、灰釉埴、土師器甕、台付甕、ロクロ土師器環、皿、埴、砥石、刀子などがある。遺物の中でロクロ土師器の占める割合は高く、須恵器は客体的である。ロクロ土師

器は隣接する東墓遺跡でも多量に出上し、焼成遺構も確認されていることから、一部は近郊での生産、供給が行われた可能性が考えられる。掘立柱建物跡は調査区の西側で1棟検出された。2×1間の小規模建物であるが、出土遺物がなく、帰属時期を特定できない。

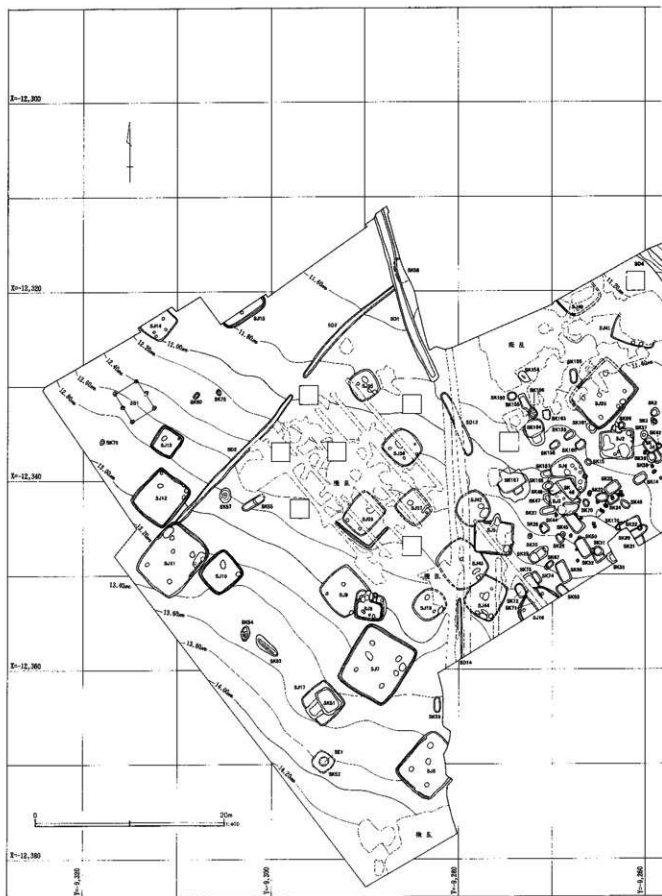
溝跡は調査範囲が狭かったことや擾乱によって分析されたこともあり、全体像を捉えられるものはなかった。SD1及びSD13は集落と同時期の弥生時代後期から古墳時代前期の溝跡である。当初は隣接する東墓遺跡と同様に方形周溝墓とも考えられたが、直線的に延びており、集落の区画溝の可能性も考えられる。

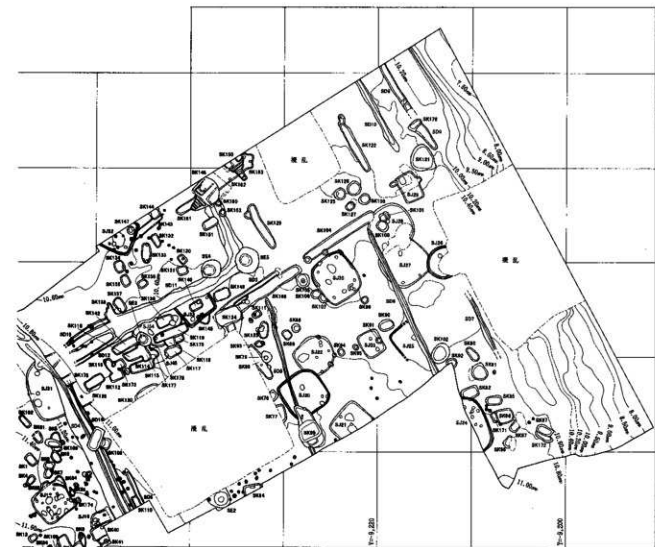
井戸跡は5基のうち4基が台地の縁部に構築されていた。いずれも素掘りで出土遺物が少なく、時期を特定できないが、一部に断面形態が中世の井戸に多いものがある。

土壇については、大半が調査区の東側から検出された。SK53が縄文時代に属するTピットである他は集落が存在した弥生時代後期から古墳時代前期、平安時代のものは確認できず、多くは中・近世に属するものとみられる。特異なものとして地下式墳と宝跡がある。地下式墳は6基検出された。いずれも南側付近に出入り口部があり、常滑産の大甕や播磨の破片が出土している。宝跡は2基検出された。地下式墳と同様南側に出入り口部があり、陶磁器類や寛永通寶などが出土した。この他に調査区の中央部付近からピットが多数検出されたが、擾乱が入っていることもあり、住居跡や掘立柱建物跡の柱穴として特定することはできなかった。

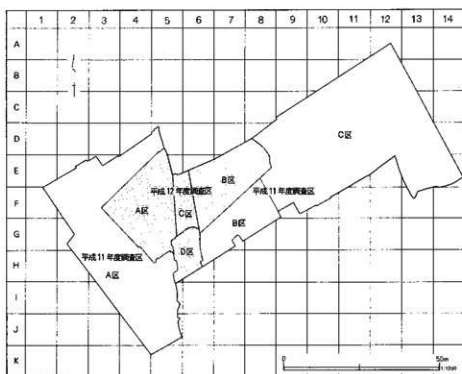
今回の調査では、弥生時代後期から古墳時代前期及び平安時代の住居跡が多数検出されたが、隣接する遺跡との成果から、大凡の広がりが見明らかになった。また、平安時代のロクロ土師器の発見については、房総や常陸地域との流通関係を考える上にも重要な成果となった。

第3図 下野田稲荷原遺跡全体図

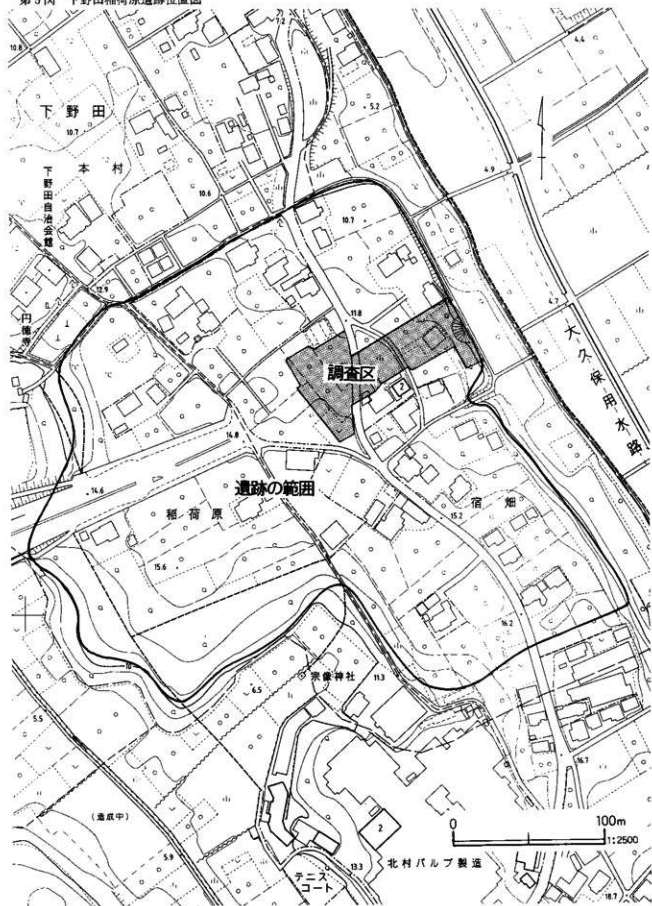




第4図 下野田稻荷原遺跡グリッド配置図



第5図 下野田稲荷原遺跡位置図



N 遺構と出土遺物

1. 縄文時代の調査

概要

縄文時代の遺構は調査区の西側で土壌が1基検出された。遺物については調査区内から縄文早期～晩期

にかけての上器・石器が他の時代の遺物とともに出土したが、遺構については検出されなかった。

(1) 土壌

第53号土壌 (第6図)

H-3・4グリッドに位置する。いわゆる落し穴状土壌と呼ばれるもので、開口部が狭く短軸の断面がY字状となるものである。形状は楕円形で、長軸2.92m、短軸0.86m、深さが0.95mである。主軸方向はN-49°-Wである。遺物は検出されなかった。

(2) その他

出土土器 (第7図1~45)

縄文時代の遺物は調査区内全体から、少数であるが検出された。いずれも破片である。時期幅は早期から晩期まであり、時期的なまとまりは認められなかった。

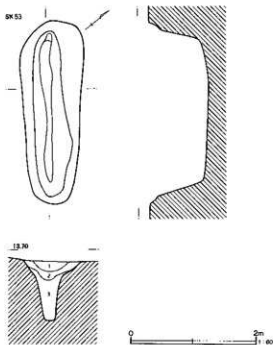
1~6は早期の土器で、1~5は沈線文系の土器である。1と3は沈線文を施すもので、3はやや太い沈線文を施している。2は刺突文を施すものである。4と5は条痕文が施されている。1~5はいずれも器面調整が丁寧に施されている。

6は早期木葉の条痕文系の土器で、内外面ともに斜め縦方向に条痕を施している。

7~13は前期前半の胎土に繊維を含む土器で、いずれも黒炭質に相当すると考えられる。すべて胴部分の破片である。地文は7、10、12は無節Rの縄文で、8、9、12は単節LRの縄文を横方向に施している。また13は内面の調整が丁寧になされており、7~12とは明らかに違うことから、陶山式とも考えられる。

14~36は中期中葉から後期初頭の土器である。14と15は中期中葉の勝坂式土器で、14は頸部の破片で隆帯が貼付されている。15は胴部の破片で、地文は単節LRの縄文を施し、その上に楕円形状にキャピラ文を

第6図 第53号土壌



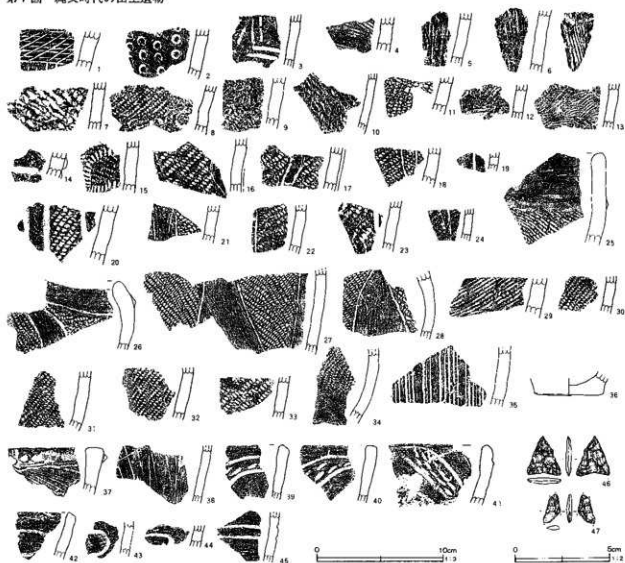
SK 53

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- 2 黄褐色土 ローム粒子多量含む。
- 3 黄褐色土 ローム粒子多量、暗褐色粒子少量含む。

施文する。16~36は加曾利E式期の土器で、16~24は加曾利E II~III式に相当する時期で、いずれも胴部の破片である。16、17は地文単節RLで、その上に隆帯を蛇行させて施文しているものである。また18~24は地文の上に沈線文を施文するものである。そのうち19~24は沈線文間を磨消している。地文は21が単節LRの縄文を縦方向に、ほかは単節RLの縄文を縦方向に施している。

25~28は中期中葉から後期初頭の土器である。25は口縁部の破片で、頸部には断面三角形の微隆帯を巡らしている。地文は単節LRの縄文である。26は波状口縁部の破片で、口縁部を区画する微隆帯に沿って、比較的細い沈線文が施文されている。波頂部から垂下す

第7図 縄文時代の出土遺物



る文様は、沈線と磨消し縄文によってのみ施文されている。地文は隆帯直下部分は横方向に、ほかは縦方向の単節LRの縄文が施文されている。27と28は同一個体と考えられる胴部の破片で、逆V字状に沈線を施文している。地文は単節LRの縄文を施文している。

29～35は地文のみの胴部破片で、35以外はいずれも単節RLの縄文が施文されている。35は糸線が地文として施文されている。36は底部の破片で、直径約5.5cmと推定される。

37～45は後期中葉から晩期初頭の上器で、37と38は後期の加曽利B式で、胴部には斜方向に糸線を施文している。

39～45は晩期初頭の安行3C式と考えられる土器である。39～41は沈線間に列点を施文するもので、42～45は沈線文のみで、42～44は棒状に施文している。

出土石器 (第7図46・47)

石器は46と47の石鎌が2点検出された。46は基部がわずかに欠けるもので、正三角形に近い形状をしている。長さ2.1cm、幅1.75cm、厚さ0.3cm、重さ1.0gで、石質は黒曜石である。47は先端と基部を欠損するもので、残存している長さ1.55cm、幅0.90cm、厚さ0.25cm、重さ0.26g、石質は黒曜石である。

2. 弥生時代後期から古墳時代前期の調査

概要

下野田稲荷原遺跡では、第二次・第三次調査において弥生時代後期から古墳時代前期の遺構が住居跡39軒、溝跡が2条検出された。土壌については単独で検出されたものはなかった。住居内で検出された土壌に当該期の遺物を伴う場合もあったが、が跡を壊して構築していたり、攪乱と重なっていたりと住居跡とは同時性が難しく、混入したものと判断し、土壌の項目の中に記載した。

住居内から出土した中・近世の遺物については、便宜上住居跡の調査を優先したことや攪乱などによりそれらの帰属する遺構を確認できなかったため、別項に記した。

住居跡の分布は調査区全体に及んでいる。住居ごとの重複は6箇所確認できたが、3軒以上の重複は1箇所だけであった。住居跡の平面形態は隅丸方形、長方形、円形があり、相対的に隅丸方形が多い。一边の長さは3～7mまでであるが、4～5mの規模をもっている住居跡が中心である。遺構確認面から床面までの平均的な深さは約0.3mで、隣接する下野田本村遺跡の場合と比較すると、0.1m以上浅い。柱穴は基本的には4本であるが、小型や円形などの住居跡には柱穴のない場合や不規則に配置する場合もみられた。炉跡

は住居跡の規模を問わず中央やや北側に敷設され、複数もつ場合やつくり直している場合がある。貯蔵穴を有する住居跡は少なかった。検出された貯蔵穴は北東隅に構築されていた。床面は貼床にしている住居跡が多くみられたが、中央部やほぼ全体を貼床にする場合が最も多かった。また、壁溝は大半の住居跡に設けられていた。

溝跡は調査区が道路の路線幅ということもあり、全体の規模を確定するまでには至らなかった。SD1は幅が1m前後、深さ約0.5mであるが、当該期の遺物を多量に包含し、形態や方向性などから区画溝の可能性がある。溝跡には他に中・近世の遺物も混入していたが、それらについては別項に記した。

出土遺物は、壺(複合口縁含む)、甕、鉢、甔、高環、器台、土玉、ミニチュア土器などがある。土器類の特徴は壺類には縄文や貼付文、格子文などが施文される他は押しキザミ、ハケ、ミガキなどの調整が主体を占める。また、高環、壺類の一部は赤彩されている。土器類は弥生時代後期の様相を残しながらも全体的な印象は古墳時代前期の感がある。また、遺物からみた集落内の年代幅はいくつかの住居の重複関係による程度で、特に大きな時間差は認められない。

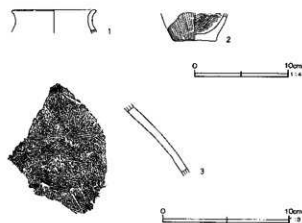
(1) 住居跡

第1号住居跡(第9図)

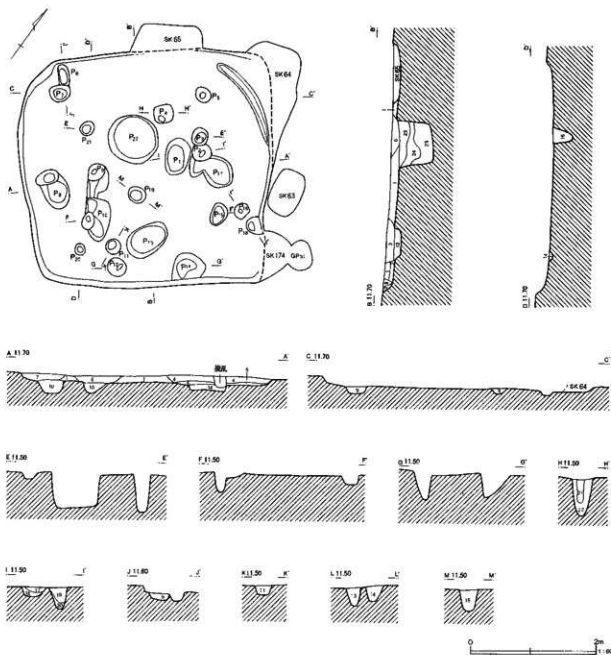
F-8グリッド中央に位置している。平面形態は正方形に近く、規模は長径4.05m、短径3.7m、床面までの深さは0.22mである。北辺と東辺の一部についてはSK64、65などと重複して壊されるため、長辺の長さはやや不明瞭である。覆土は焼上粒子・ローム粒子・炭化粒子を含む暗褐色土で構成されるが、後世の攪乱が多く絡んでいるため、層位は安定していない。

床面は平坦であるが、貼り床、炉跡、壁溝は検出されなかった。ピットは多数検出されたが、主柱穴はP3・10・15・21とみられる。他のピットについては支

第8図 第1号住居跡出土遺物



第9図 第1号住居跡



SJ1

- | | | | |
|---------|--------------------------------------|---------|----------------------------|
| 1 暗褐色土 | 焼土粒・炭化粒子・ローム粒子少量含む。 | 13 暗褐色土 | ローム粒子・ロームブロック・黒褐色ブロック少量含む。 |
| 2 暗褐色土 | 焼土粒・炭化粒子少量、ローム粒子・ロームブロック少量含む。 | 14 黒褐色土 | ローム粒子・ロームブロック含む。 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒子・ロームブロック・黒褐色ブロック少量含む。 | 15 暗褐色土 | ローム粒子・ロームブロック・黒褐色ブロック少量含む。 |
| 4 暗褐色土 | 焼土粒・ローム粒子少量含む。 | 16 暗褐色土 | ローム粒子・ロームブロック多量、黒褐色土少量含む。 |
| 5 黒褐色土 | ローム粒子少量含む。 | 17 暗褐色土 | 炭化粒子・ローム粒子含む。 |
| 6 暗褐色土 | ローム粒子・ロームブロック・黒褐色ブロック少量、ロームブロック多量含む。 | 18 黄褐色土 | ローム粒子・ロームブロック多量含む。 |
| 7 黒褐色土 | ローム粒子・ロームブロック少量含む。 | 19 黒褐色土 | 炭化粒子・ローム粒子少量含む。 |
| 8 暗褐色土 | ローム粒子少量含む。 | 20 暗褐色土 | ローム粒子・ロームブロック多量含む。 |
| 9 暗褐色土 | ローム粒子・ロームブロック多量、黒褐色ブロック少量含む。 | 21 暗褐色土 | ローム粒子少量含む。 |
| 10 黒褐色土 | ローム粒子・ロームブロック含む。 | 22 暗褐色土 | ローム粒子・ロームブロック多量含む。 |
| 11 暗褐色土 | ローム粒子少量含む。 | 23 暗褐色土 | 炭化粒子・焼土粒子少量含む。 |
| | | 24 黒褐色土 | ローム粒子少量含む。 |
| | | 25 暗褐色土 | ローム粒子・ロームブロック少量含む。 |

柱あるいは後世のピットの可能性もある。また、床面下からはP13・17・22などの大きめの掘り込みが検出されたが、出土遺物もなかった。床下土壌ではなく、住居跡構築以前の遺構である可能性も考えられる。

第1表 第1号住居跡出土遺物観察表(第8図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残厚率	備考
1	小型甕	(8, 8)			A砂	b	V	10	内外両横ナデ
2	小型壺			4.6	A砂	a	VII	60	外面縦方向ミガキ 内面横・斜方向ミガキ
3	壺				A砂	a	V	10	外面縦いハケ 内面ヘラナデ

出土遺物(第8図)

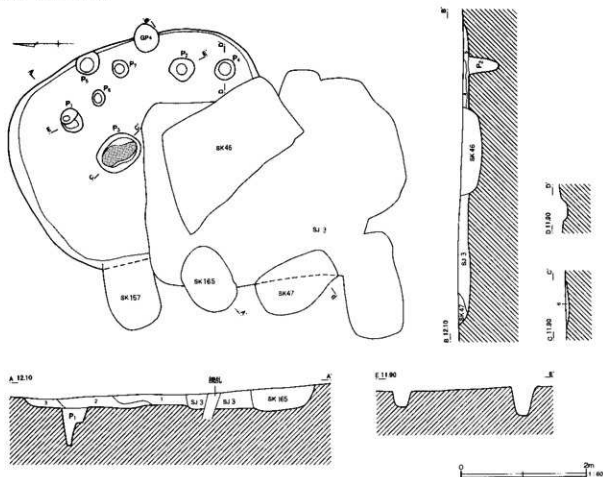
出土遺物は少なく、小型甕、小型壺、壺がある。いずれも覆土中から出土した小破片である。2は内外面ともミガキで調整される。

第4号住居跡(第10図)

F-7グリッド付近に位置し、平安時代の住居跡S J 3や後世のピットなどと重複している。平面形態は隅丸方形で、長径約4.2m、短径はSK157と重複するため不確定な要素が含まれるが、3.2m前後、床面までの深さは約0.15mと推定される。覆土は暗褐色土で、

ローム粒子が多量含まれる。床面はやや凹凸が目立ち、貼床や壁溝などは検出されなかった。炉跡(P7)は中央北寄りで検出された。掘り込みは浅く、焼土は底面付近で確認された。ピットは7基検出された。P1と2は位置や掘り込みも深いことから主柱穴とみられ

第10図 第4号住居跡

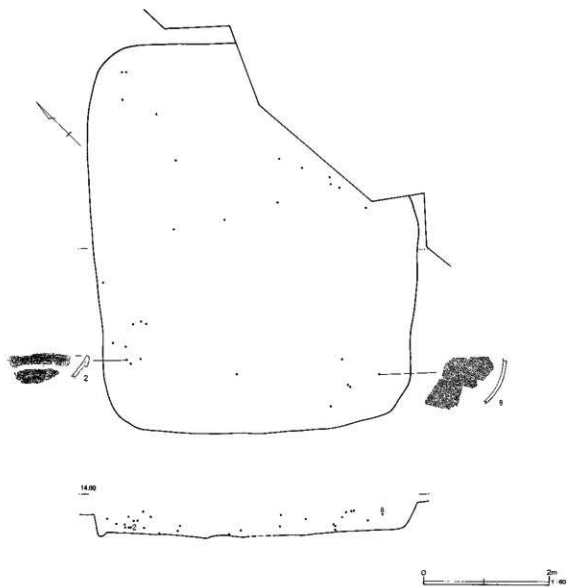


S J 4

- 1 黒褐色土 ローム粒子少量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子多量含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒子微量含む。

- 4 黒褐色土 焼土粒子・ローム粒子少量含む。
- 5 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子多量含む。
- 6 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子少量含む。

第12図 第6号住居跡遺物分布図



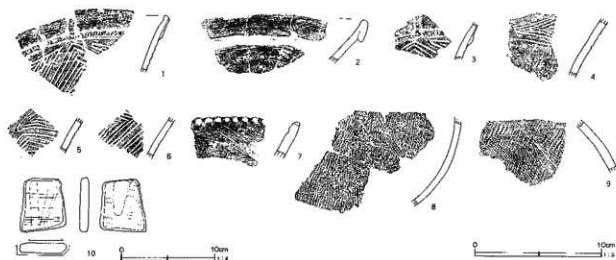
が確認された。壁溝は貼床を行った後につくられるが、西側及び南側だけに限られる。南西壁には約0.5mの幅で壁溝の途切れる箇所が確認されたが、入り口の可能性も想定される。が跡は中央やや西寄りに設けられ、中心部がやや深く掘り込まれている。焼土は厚く堆積していた。ピットは各々の壁面から約1.2mの位置で規則的に3箇所検出された。配置から4本柱穴と考えられ、他の1箇所は調査区域外と想定される。P1及びP3からは柱痕も確認でき、約0.5mの掘り込みが

あった。

出土遺物 (第13図)

遺物は住居跡の南西部を中心に小破片が30点余り覆土中より出土した。出土遺物には壺、甕、砥石がある。1・3～6は堀之内式の深鉢で混入したものである。2は無文の複合口縁甕である。7は無文の口縁端部に押圧の刻みを入れた鉢又は甕である。9は縄文を施す、壺の胴部破片である。10は滑石製の砥石で、全面にわたり、研磨された痕跡が認められる。

第13図 第6号住居跡出土遺物



第2表 第6号住居跡出土遺物観察表 (第13図)

番号	器種	口径	器高	底径	粉土	焼色	焼成	残存率	備考
1	深鉢				砂	a	V	10	隆帯に押ヒキザミ、区画下に沈線文 内面ナデ 堀之内
2	壺				砂	a	VI	10	外面斜方向ハケ 内面ヨコナテ
3	深鉢				砂礫	a	V	10	隆帯に押ヒキザミ、区画下に沈線文 内面ナデ 堀之内
4	深鉢				砂	a	V	10	外面沈線文 内面縦方向ヘラナテ 堀之内
5	深鉢				砂	a	V	10	外面沈線文 内面ナデ 堀之内
6	深鉢				砂	a	V	10	外面沈線文 内面ナデ 堀之内
7	鉢				砂	b	VII	10	外面ナデ 内面ナデ 口縁端部キザミ
8	甕				砂	a	V	10	外面ハケ 内面ヨコナテ
9	壺				砂	a	VII	10	外面縄文LR
10	砥石	長さ5.7cm	幅4.9cm	厚さ1.1cm	重さ60.05g			100	滑石製 全面に研磨あり

第7号住居跡 (第14図)

H-4・5、I-4・5グリッドに位置している。今回調査された住居群の中ではS J 11とともに大型である。平面形態は長方形である。主軸はやや北寄りの北東に向いている。規模は長径7m、短径6.45m、床面までの深さは約0.5mである。覆土は黒褐色土で、上層ではローム粒子が少量含まれる。下層ではローム粒子に加えて焼土粒子や炭化粒子などが含まれる。撓乱については、数箇所で直径0.1m前後のピット状になったものが確認できたが、住居跡は殆ど影響を受けていなかった。

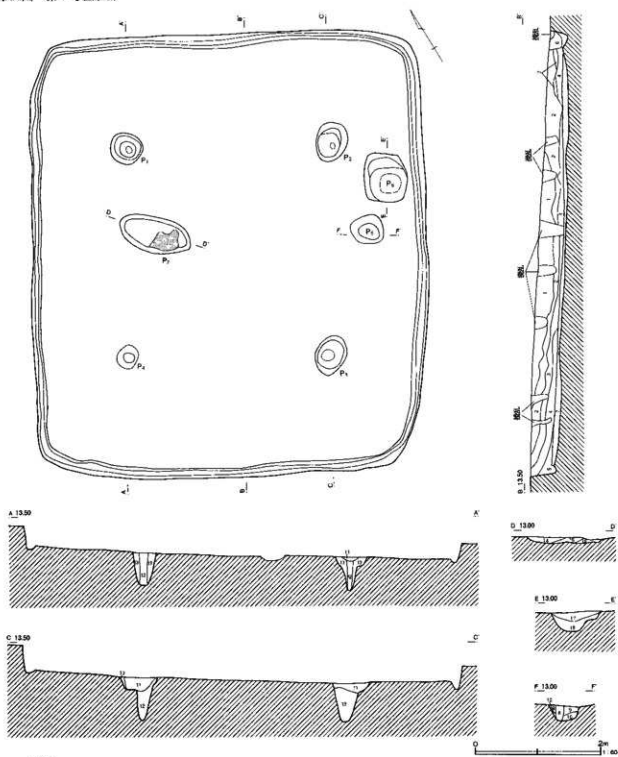
床面は平坦で、ほぼ全域にわたって、貼床が確認できた。貼床の厚みは3～10cmあり、壁際に近いほど薄くなっている。壁溝は幅0.15～0.2m、深さ0.1m前後で、壁に沿って全周する。ピットは7基検出された。このうち主柱穴となるP 1～4は、柱掘形が0.35～0.55m

と住居の規模と比例して大型である。深さは0.5～0.6mあり、P 1と4では直径約0.15mの柱痕が確認できた。P 5については掘り込みが主柱穴に比べて浅く、位置もやや壁に寄っていることから、支柱の可能性がある。P 6については、やや浅いが、位置や規模などから貯蔵穴とみられる。P 7は炉跡である。長楕円形の掘形で、住居跡の中央西寄りに設けられている。焼土は中央部に集中して堆積していた。

出土遺物 (第16・17図)

遺物は覆土、床面、壁溝内から160点余りが出土した。遺物は分布図 (第15図) に示したように平均して床面よりやや浮いた状態で出土し、密度の濃さでは炉跡及び貯蔵穴付近に比較的集中していることが窺える。出土遺物は複合口縁壺、壺、ミニチュア土器、甕、高坏、器台、白付甕、甕、土玉である。土器類の調整方法に

第14岡 第7号住居跡



S J 7

1 黒褐色土 ローム粒子少量含む。

2 暗褐色土 ローム粒子少量含む。

3 褐色土 焼土粒子・炭化粒子少量含む。

4 黄褐色土 焼土粒子・炭化粒子少量含む。

5 黒褐色土 炭化粒子・ローム粒子少量含む。

6 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。

7 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。

8 黄褐色土 ローム粒子少量含む。

9 褐色土 ロームブロック少量含む。

10 褐色土 ローム粒子少量含む。

11 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量含む。

12 褐色土 ローム粒子少量含む。

13 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒子少量含む。

14 黒褐色土 焼土粒子・ローム粒子少量含む。

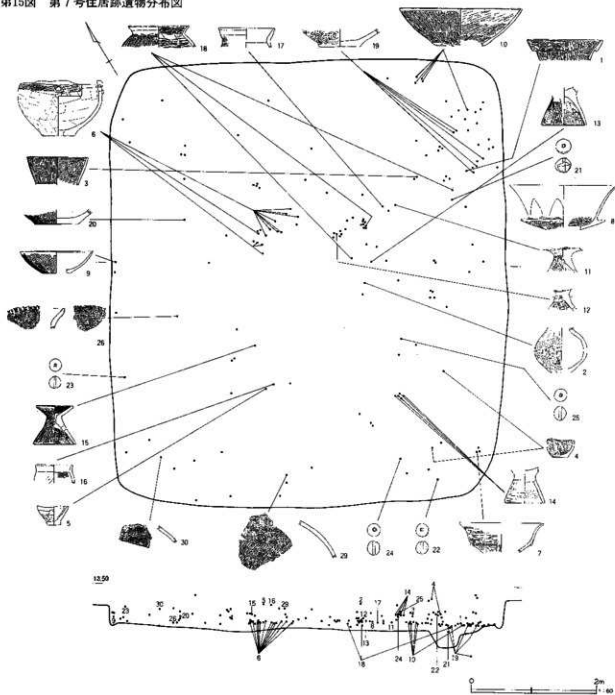
15 暗褐色土 焼土粒子・焼土ブロック少量含む。

16 褐色土 ローム粒子少量含む。

17 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量含む。

18 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量含む。

第15図 第7号住居跡遺物分布図

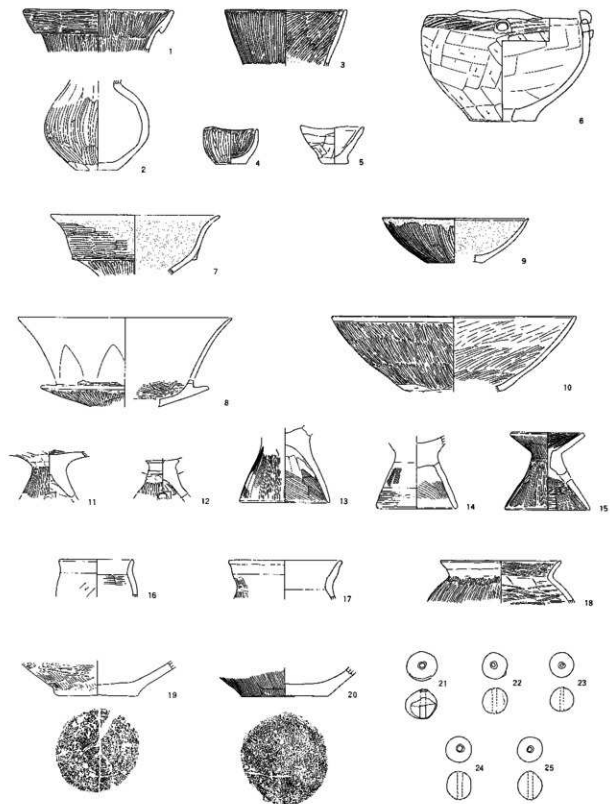


はミガキ、ハケ、ヘラケズリ、ナデがあり、外観上の調整ではミガキが最も多い。また、壺、高坏の大部分は器面が赤彩される。

1の複合口縁の壺は、折り返し部分が丁寧に面取りされる。口縁部外面は横方向のミガキで、他は縦方向のミガキである。4、5はミニチュア（鉢）である。この遺跡では土器の特徴として、鉢や甕（特に小型の甕）は底部を明確につくりだすことがあげられる。ミ

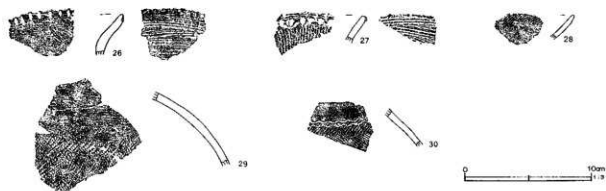
ニチュア上器にもこうした特徴が反映されている。6の甕はやや厚手で、口縁部付近に対になる孔を設け、さらに周辺に粘土を付加している。口縁部は粗いハケ、外面はヘラケズリである。形態的には鉢である。S J 10でも形態はやや異なるが対になる孔を口縁部付近にもつ甕が出土しており、孔の位置からすると釣り手がついていた可能性が高い。11・12は三方に透かし孔をもつもので、ミガキで調整される高坏もしくは特殊器

第16图 第7号住居跡出土遺物 (1)



0 10cm 1:4

第17図 第7号住居跡出土遺物(2)



台の脚部破片である。13・14は内外面ともハケで調整される台付甕の脚部破片である。19・20は大型の甕または壺の底部破片である。19は木葉痕が明瞭に残り、

20はヘラケズリで底部調整される。21~25の土玉は円形に近い楕円形で、長径に直径約5mmの孔を穿つ。外面はすべて縦方向のミガキで調整される。

第3表 第7号住居跡出土遺物観察表(第16・17図)

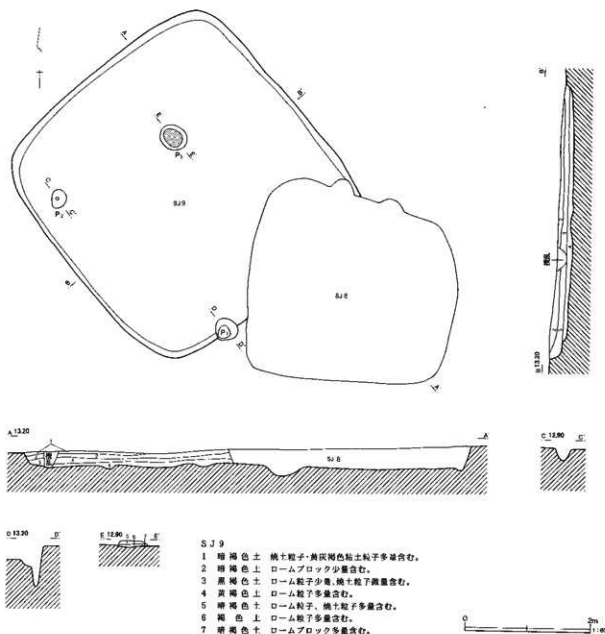
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(15.4)			A C 砂	b	V	15	口縁部外面横ミガキ 頸部縦ハケ 後縦ミガキ 内面ミガキ
2	壺			4.3	A 砂	a	V	90	外面上部ヘラケズリ 下部ヘラミガキ 内面横ナデ
3	壺	(13.0)			A 砂	b	VII	10	内外面赤彩 外面縦ミガキ 内面斜ミガキ
4	ミニチュア	5.7	3.9	3.2	砂	a	V	10	内外面ミガキ
5	ミニチュア	6.7	4.1	3.0	砂	a	V	100	外面輪郭明瞭 一部ヘラケズリ 内面横ヘラナデ 底部ナデ
6	甕	17.0	11.7	7.0	ABCDE	b	VII	90	口縁部粘土貼付・穿孔2ヶ所 底部1ヶ所穿孔
7	壺	(18.0)			砂	a	VII	20	内外面赤彩 外面ミガキ 内面風化著しい
8	器台				A F 砂	b	VII	15	無彩 内外面ミガキ 比較的大きい非円形の透孔の痕跡あり
9	高環	15.3			ABCD	b	VII	60	内外面赤彩 全面ミガキ 内面は風化
10	高環	(26.0)			A 砂	b	VII	40	内外面ミガキ
11	高環				A C 砂	b	V	70	外面ミガキ 内面ナデ 脚部円形透孔3ヶ所
12	高環				A 砂	b	VII	50	外面ミガキ 内面ナデ 脚部円形透孔2ヶ所残存
13	台付甕			9.2	A C E	b	V	90	外面ハケ 内面上部ヘラケズリ 下部ハケ
14	台付甕			(8.2)	A C E	b	V	50	内外面ハケ 器面風化
15	器台	7.5	8.2	8.8	ABC	b	V	100	外面タテハケ後下部ミガキ 内面ハケ後ミガキ 透孔3ヶ所
16	小型甕	(7.6)			砂	a	VI	20	口縁部ココナテ 外面ヘラケズリ
17	甕	(11.8)			砂	b	VII	20	口縁部ココナテ 外面タテハケ
18	甕	(12.8)			A 砂	b	V	40	内外面ミガキ
19	壺			8.8	A F 砂	a	V	80	外面タテハケ後ミガキ 内面ハケ 底部木葉痕
20	壺			9.4	A C E 砂	b	VII	100	外面タテハケ 内面風化 底部ナデ
21	土玉	直径3.40cm			砂	a	VII	75	孔径0.55cm 重さ21.46g
22	土玉	直径2.60cm			砂	a	VI	100	孔径0.45cm 重さ17.91g
23	土玉	直径2.55cm			砂	a	V	100	孔径0.40cm 重さ15.23g
24	土玉	直径2.60cm			砂	a	VII	100	孔径0.55cm 重さ20.62g
25	土玉	直径2.65cm			砂	a	V	100	孔径0.55cm 重さ18.62g
26	甕				砂	b	XI	10	内外面ハケ 口縁部キザミ
27	甕				砂	a	VI	10	外面タテハケ 内面ココハケ
28	壺				砂	a	VII	10	内外面赤彩 口縁部縄文施文
29	壺				A 砂	a	V	10	外面赤彩 上部縄文施文 下部ミガキ 内面風化LR
30	壺				砂	a	VII	10	外面一部赤彩 羽状縄文施文 内面ナデ

第9号住居跡 (第19図)

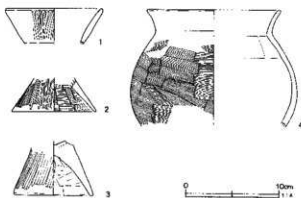
G・H-4グリッドに位置し、平安時代の住居跡S J 8などと重複している。今回調査された住居群の中では平均的な規模をもつものである。平面形態は隅丸正方形で、規模は長径4.5m、短径4.4m、床面までの深さは約0.3mである。覆土は黒褐色上で、ローム粒子、焼土粒子、炭化粒子などが少量含まれ、層位は安定している。

床面は部分的に凹凸があり、南側の壁付近を除いて厚さ5~10cmの幅で貼床が確認された。炉跡(P3)

第19図 第9号住居跡



第18図 第9号住居跡出土遺物



は中央やや北寄りに設けられていたが、焼土は浮いた状態にあり、掘り込みも浅かった。ピットは2基検出されたが、ともに浅いことや不規則な位置にあることから、後世に帰属する可能性もある。壁溝は確認されなかった。

出土遺物 (第18図)

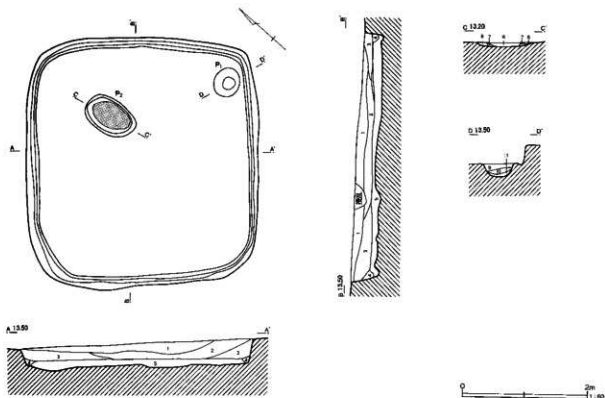
覆土中より約10点出土した。出土遺物は小型壺、器

台、甕、台付甕である。1は小型壺の口縁部破片で、内面は風化しているが、基本的には外面と同様縦方向のミガキが施されるものとみられる。2は器台、3は台付甕の脚部破片で、3の内面はヘラケズリで調整される。4は甕で、口縁部は横ナデ、胴部は斜方向のハケ、内面は風化している。

第4表 第9号住居跡出土遺物観察表 (第18図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存#	備考
1	小型壺	(10.1)			ABCE	b	VI	10	内外面ミガキ
2	器台			(8.9)	ABC	b	V	20	外面ミガキ 内面ハケ 円形透孔1ヵ所残存
3	台付甕			8.3	ABC	b	VI	90	外面ミガキ 内面ヘラケズリ
4	甕	(14.0)			ABC	b	VI	40	外面ヨコハケ

第20図 第10号住居跡



SJ10

- 1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。
- 2 黄褐色土 焼土粒子・ロームブロック少量含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒子・炭化種子少量含む。
- 4 褐色土 ローム粒子少量含む。
- 5 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。

- 6 暗褐色土 焼土粒子・焼土ブロック多量、ローム粒子少量含む。
- 7 赤褐色土 焼土。
- 8 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子少量含む。
- 9 暗褐色土 焼土粒子・炭化種子少量、ローム粒子少量含む。
- 10 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- 11 褐色土 ローム粒子少量含む。

第10号住居跡 (第20図)

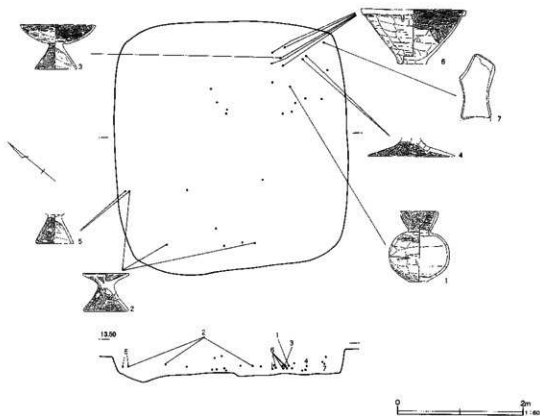
G・H-3グリッドに位置している。大型の住居跡S J 11と接するため、同時存在の可能性は難しい。平面形態は隅丸正方形で、規模は長径3.95m、短径3.8m、床面までの深さは約0.35mである。覆土は暗褐色土で、ローム粒子やロームブロックが多量含まれ、壁際はどロームブロックの量は多くみられた。

床面は部分的に凹みがあるものの、ほぼ平坦である。貼床は全域で確認された。壁溝は幅0.25~0.3m、深さ5~10cmで、壁に沿って全周し、南西の壁側面がやや深くなっていた。ピットは2基検出された。P 1の規模

は小型であるが、位置的に貯蔵穴とみられる。P 2は炉跡で、掘り込みの浅い楕円形の掘形をもつ。焼上は底面付近に厚く堆積していた。

出土遺物 (第22図)

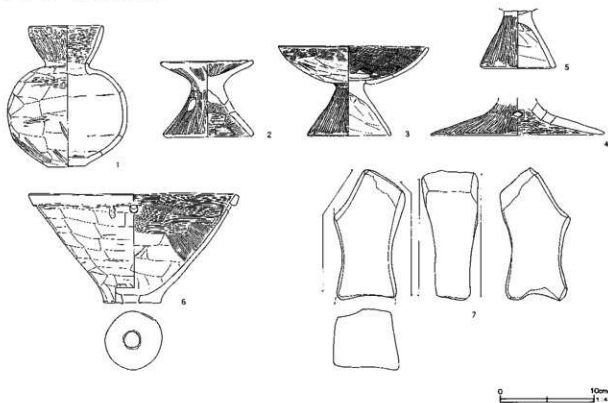
遺物は覆土及び床面から30点余りが出土した。出土遺物には小型壺、器台、高環、甕、磁石がある。1は小型壺で、口縁部は縦横のミガキで調整されるが、胴部から底部にかけては全体にヘラケズリされた後部分的にミガキが施される。2は器台で、内外面ともミガキで調整される。3の高環は環部が曲線的に立ち上が



第5表 第10号住居跡出土遺物観察表 (第22図)

番号	器種	口径	器高	底径	粘土	焼成	色調	残存率	備考
1	小型壺	8.0	14.8	4.0	A砂	b	Ⅷ	90	外面赤彩 口縁部内外面ミガキ 胴部ヘラケズリ後ミガキ
2	器台	9.9	8.0	9.0	ABC	b	V	80	外面ミガキ 内面ハケ
3	高環	16.0	9.4	9.0	A砂	b	Ⅶ	85	内外面赤彩 環外面ヘラケズリ後ハケ 内面ハケ 脚外面ミガキ
4	高環			(18.4)	A E砂	b	V	25	脚部透孔2ヶ所残存 内外面ミガキ
5	高環			(8.0)	A砂	b	V	40	外面ミガキ 内面ナデ
6	甕	22.4	11.7	6.1	A砂	b	Ⅷ	85	口縁部1ヶ所穿孔 外面・内面下部ナデ 内面上部ハケ
7	磁石	長さ13.8cm 幅7.6cm 厚さ6.4cm					Ⅲ	90	重さ664.72g

第22図 第10号住居跡出土遺物



る。脚部の内面を除いてはミガキで調整される。4は高杯の脚部で、基部が大きくひろく。6は鉢形の甗で、S J 7-6と同様対になる孔が口縁部付近に設けられ

第11号住居跡（第23図）

G-2・3、H-2・3グリッドに位置している。大型の住居跡で、S J 10・12に隣接し、北隅を後世の溝跡SD 2と重複する。平面形態は長方形で、S J 7に規模、形態が類似する。規模は長径約7m、短径5.7m、床面までの深さは約0.4mである。覆土は黒褐色土で、ローム粒子、焼土粒子が含まれる。壁際では焼土粒子に代わってロームブロックの量が増す。攪乱はいたるところにみられるが、層位は安定している。

床面はほぼ全域にわたって、貼床がみられ、平坦に仕上げられていた。貼床は相対的に西側が薄く、東側が厚かった。炉跡は中央やや北側に設けられ、貼床を僅かに掘り込んでいる。焼土は楕円全体に数cmの厚さで堆積していた。P 1-4はいずれも位置、規模から主柱穴と考えられる。楕形は円形または楕円形である。

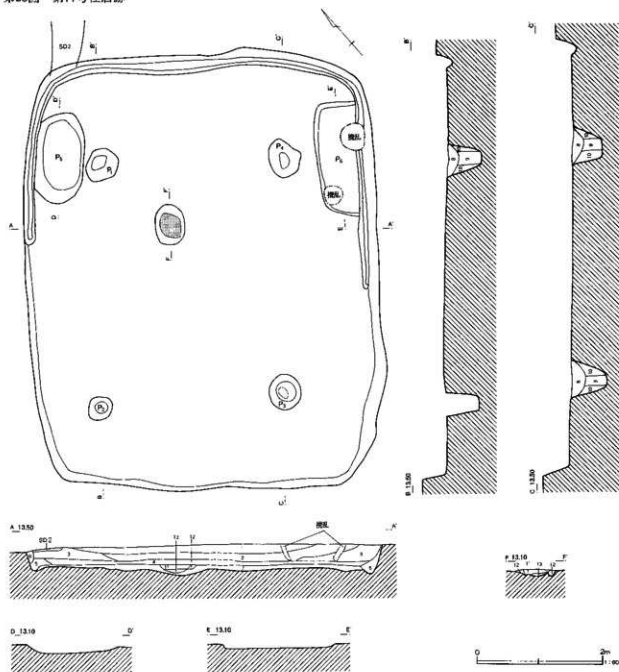
る。口縁部は短い複合口縁で、形態的には鉢に近い。7は砂岩系の石材を用いた砥石である。一部欠損しているが、全面に研磨痕が認められる。

規模は直径0.35~0.55m、深さ0.45~0.55mである。覆土には上層に焼土が少量含まれ、P 2を除いては直径約0.15mの柱痕が確認できた。壁溝は北側半分まで確認できた。幅は0.15~0.25m、深さ8cmである。また、北辺寄りには柱穴と壁溝の間に浅い掘形をもつ土壌が2基検出された。2基の土壌は壁溝にかかるように位置しており、調査所見では住居跡より古いか同時期かとみられる。西辺のP 1は楕円形で、規模は長径1.45m、短径0.75m、深さ7cmである。東辺のP 2は長方形で、規模は長径1.8m、短径0.7m、深さ0.1mである。ともに覆土にはローム粒子が含まれる。

出土遺物（第25図）

遺物は覆土、床面、壁溝内から30点余りが出土している。遺物には複合口縁甗、高杯、甕（小型甕含む）、

第23図 第11号住居跡



S J 11

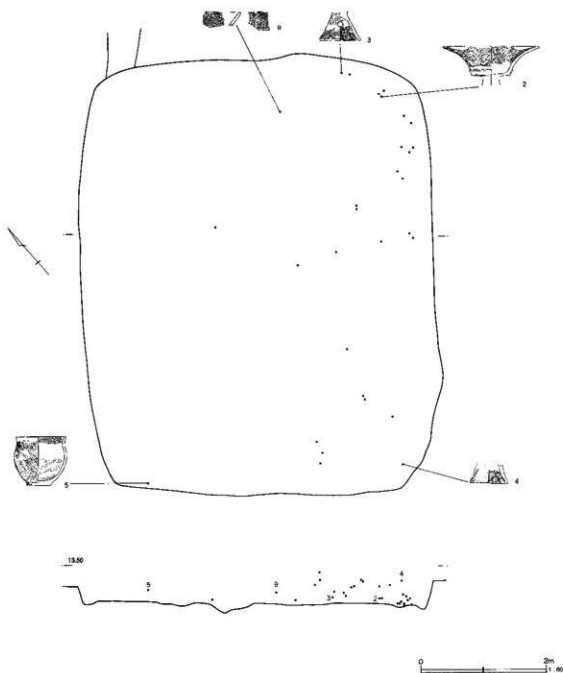
- 1 黒褐色土 ローム粘土・粘土粒子少量含む。
- 2 暗褐色土 粘土粒子多量、ローム粘土少量含む。
- 3 暗褐色土 ローム粘土・粘土粒子少量含む。
- 4 褐色土 ローム粘土多量、粘土粒子少量含む。
- 5 褐色土 ローム粘土・ロームブロック多量含む。
- 6 黄褐色土 ロームブロック少量含む。

- 7 暗褐色土 ローム粘土・ロームブロック多量含む。
- 8 暗褐色土 粘土粒子少量、ローム粘土少量含む。
- 9 暗褐色土 ローム粘土多量含む。
- 10 暗褐色土 ローム粘土多量含む。
- 11 暗褐色土 粘土粒子・粘土ブロック多量、ローム粘土少量含む。
- 12 暗褐色土 ローム粘土多量、粘土粒子少量含む。
- 13 赤褐色土 粘土。

土玉などがあるが、破片が多い。この住居跡では遺物分布図（第24図）で示したように、出土位置によって遺物の出土状況が床面に近い状態で検出される炉跡付近と浮いた状態で検出される壁付近に概ね二分され

る。1の複合口縁壺は折り返しの口縁部が横ハケ、下段は縦方向のミガキである。内面は風化のため不明瞭であるが、横ハケの可能性がある。5は小型の甕で、口縁部は横ナデ、胴部上半は縦ハケ、以下はやや粗い

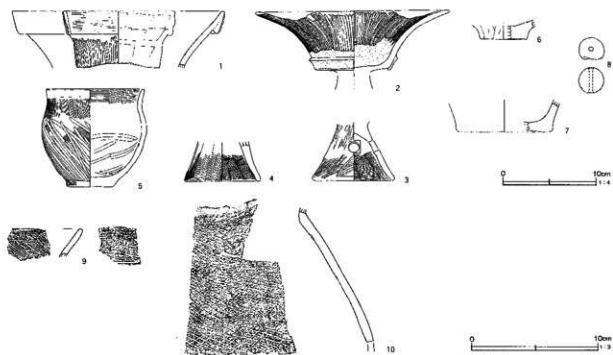
第24図 第11号住居跡遺物分布図



第6表 第11号住居跡出土遺物観察表 (第25図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(22.0)			ABD	b	Ⅷ	10	無彩 外面ミガキ 口縁部棒状浮文1本残存
2	高塚	(20.5)			ABC	b	Ⅶ	60	内外面赤彩・ミガキ
3	碁台			8.1	ABCDE	b	Ⅸ	60	外面ハケ後ミガキ 内面ハケ 円形透孔4ヶ所
4	高環			7.8	A砂礫	b	V	90	内外面ハケ
5	小型甕	(10.2)	10.3	4.8	AC	b	Ⅸ	60	外面ハケ後ミガキ 底部外面煤片着
6	壺			(5.0)	ABC	b	Ⅸ	30	内面ナデ 外面ハケ?
7	壺			(9.8)	ABC	b	Ⅸ	10	外面ミガキ(風化)
8	土玉	直径2.65cm			A砂	b	Ⅵ	50	孔径0.45cm 重さ14.24g
9	甕				AC	b	X	10	内外面ハケ
10	壺				ABCE	b	V	10	無彩 外面格子目状捺糸文

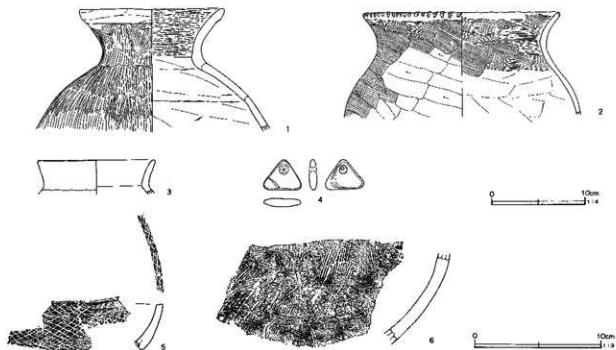
第25図 第11号住居跡出土遺物



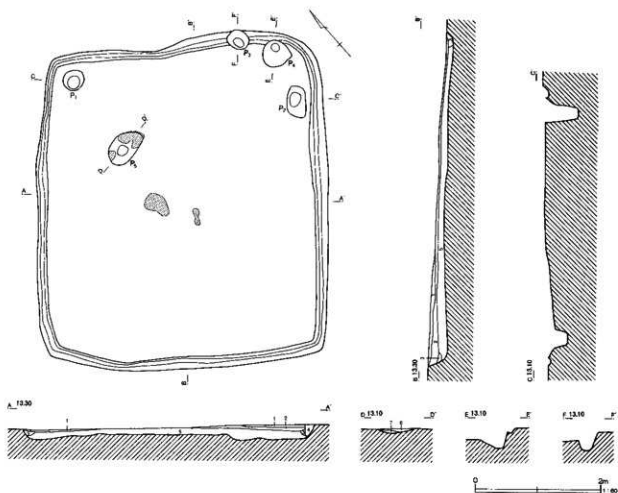
縦ミガキが施される。内面は口縁部が横ハケ、胴部はミガキ状のヘラナデが施される。2は特殊器台風の高環で、口縁部が大きく外反する。調整は内外面とも縦ミガキが施され、赤彩される。3は器台の脚部である。

透かしは4箇所ある。4は高環の脚部で、外面は縦ハケ、内面は横ハケである。10の壺は胴部上半が格子目状燃米文である。

第26図 第12号住居跡出土遺物



第27図 第12号住居跡



S J 12

- 1 褐色土 ローム粒子少量含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒子少量含む。
- 3 褐色土 ローム粒子少量含む。

4 暗褐色土 ローム粒子少量含む。

5 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。

6 暗赤褐色土 焼土粒子少量、ローム粒子・暗褐色粒子少量含む。

7 赤褐色土 焼土。

第12号住居跡 (第27図)

F-3、G-3・4グリッドに位置している。平面形態は正方形に近い長方形で、北辺の東隅が膨らんでいる。規模は長径5.25m、短径4.7m、床面までの深さが約5cmである。覆上は暗褐色土で、ローム粒子やロームブロックが比較的多く含まれる。

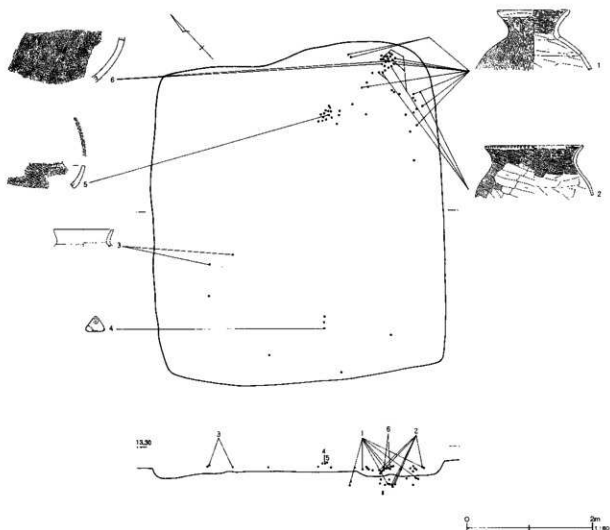
床面は全域が貼床となっているが、中心部から壁際に向かって緩やかに傾斜している。貼床は0.1~0.15mあり、特に南西側に厚くなっている。炉跡は中央北寄りに設けられている。平面形態は東西方向に長い楕円形で、掘り込みは浅い。焼土は下層に厚く堆積している。また、炉跡の南側にも2箇所、焼土がまとまっ

て検出された。いずれも床面に貼り付いたような状況で検出され、掘り込みも確認できなかったことから、炉跡ではなく、北側に位置する炉跡から灰とともに掻き出されたものと推測される。ピットは北側で4基検出された。いずれの位置も住居の柱位置としては不規則で、主柱穴の可能性は低い。壁溝は幅約0.2m、長さ5~10cmで、四方の壁に沿って検出された。

出土遺物 (第28図)

遺物は炉跡周辺の床面から約70点出土している。遺物には壺、甕、石製垂軸がある。1は短い折り返し口縁をもつ壺で、複合口縁を除いてはミガキで調整され

第28図 第12号住居跡遺物分布図



る。2・3は壺の破片で、2は口縁部に押圧キザミがある。4は滑石製の垂飾りと考えられる。直径2mm程の孔を隅丸に磨いた三角形の隅に穿ったものである。

5は口縁部と端部に格子目状捺糸文をもつ複合口縁壺の破片である。6は壺の胴部破片である。

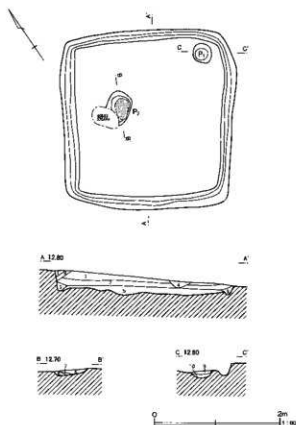
第7表 第12号住居跡出土遺物観察表（第26図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	凡砂率	備考
1	壺	15.4			A砂	c	V	65	口縁部外面ナデ 内面ミガキ 頸部外面ハケ 胴部外面ミガキ
2	壺	(21.0)			A砂	b	V	40	外面ヘラケズリ後ハケ 内面上部ハケ 口縁部キザミ
3	小型甕	(12.5)			A砂	b	VI	15	内外面ナデ 成形時の 凹凸目立つ
4	石製垂飾	長辺4.0cm 短辺3.7cm 厚さ0.9cm						95	孔径0.3cm 重さ13.06g 全体的によく研磨される
5	壺				A砂	a	IX	10	口縁部格子目状捺糸文 内面ナデ
6	壺				A砂	a	VI	10	外面ハケ 内面ナデ

第13号住居跡 (第29図)

F-2・3グリッドに位置している。平面形態は正方形に近く、今回調査された住居跡としては最も小型に属するものである。規模は長径2.9m、短径2.85m、

第29図 第13号住居跡



S J 13

- 1 暗褐色土 ローム粒子・炭化粒子少量含む。
- 2 黄褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量含む。
- 3 褐色土 ローム粒子多量含む。
- 4 褐色土 ロームブロック少量含む。
- 5 褐色土 ロームブロック多量含む。
- 6 暗褐色土 ローム粒子少量・焼土粒子・炭化粒子少量含む。
- 7 赤褐色土 焼土。
- 8 黄褐色土 ローム粒子多量・焼土粒子・炭化粒子少量含む。
- 9 暗褐色土 炭化粒子少量、ローム粒子含む。
- 10 暗褐色土 ローム粒子多量含む。

第8表 第13号住居跡出土遺物観察表 (第30図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	小型壺		7.4	5.6	A砂	b	VII	60	外面赤彩・ミガキ 器壁やや荒れる
2	小型瓶	(13.4)		4.8	A砂	b	V	60	多孔(5箇所) 器形やや歪み有り 外面ハケ

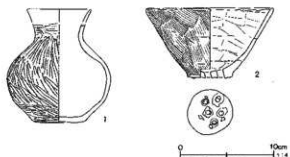
床面までの深さは約0.2mである。覆土の上層はローム粒子、炭化粒子が少量含まれるが、下層では人為的に埋め戻したようなロームブロックを多量に伴う層が床面までみられた。住居の廃絶時に埋め戻したかあるいはその後埋め戻したかは明瞭ではないが、層には自然堆積としては不自然な面がある。

床面は平坦で、全域にわたり貼床が確認された。壁溝は幅約0.2m、深さ約0.1mで、全周する。ピットは2基検出された。P1は東隅に位置し、小規模ながらも貯蔵穴の可能性がある。P2は炉跡で他の住居跡のものに比べて掘り込みがしっかりしており、方形の掘形をもつ。西側から撈乱が入っているためか焼土は中心部付近に限られた。

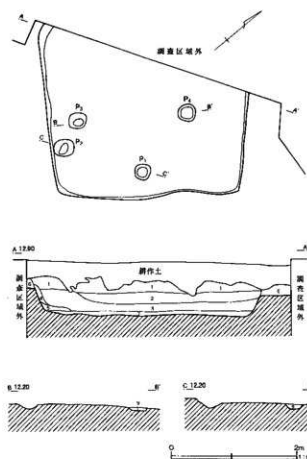
出土遺物 (第30図)

遺物は出土量が少なく、10点弱であった。1は小型の壺で、口縁部を欠く。内面はナデで調整されるが、外面は縦方向、斜方向のやや粗いミガキが施される。2は小型の瓶で、口縁端部は横ナデ、内面は横ヘラナデ、外面は斜方向のハケで調整される。底部には5箇所の凹孔が穿たれるが、片側半分に寄っている。

第30図 第13号住居跡出土遺物



第31図 第14号住居跡



- S J 14
- 1 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
 - 2 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒少量含む。
 - 3 黒褐色土 ローム粒子・炭化粒子少量含む。
 - 4 褐色土 ロームブロック少量含む。
 - 5 黒褐色土 ロームブロック多量含む。
 - 6 褐色土 ローム粒子多量含む。
 - 7 褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。
 - 8 暗褐色土 焼土粒子多量含む。
 - 9 褐色土 焼土粒子少量含む。

第9表 第14号住居跡出土遺物観察表 (第32図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	甕				AB	a X	X	10	内外面ハケ 口縁端部キザミ

第15号住居跡 (第33図)

E-2グリッドに位置し、大半が調査区域外にかかるため、約2割を検出した。平面形態は隅丸方形とみられ、規模は確認可能な長径が5.2mである。床面までの深さは約0.45mである。覆土は黒褐色土で、焼土粒子、炭化粒子が少量含まれ、下層になるとローム粒子やロームブロックが増加する。攪乱は7層に数ヶ所入る他は確認されなかった。

床面は貼床によって平坦に仕上げられている。貼床

第14号住居跡 (第31図)

E-2グリッド、調査区の北西に位置している。北西側約1/3は調査区域外になるため全体像は不明瞭であるが、平面形態は西辺はやや広い不整形と考えられる。規模は長径3.3m、短径3.1m前後とみられる。床面までの深さは約0.3mである。覆土は黒褐色土で、ローム粒子、焼土粒子、炭化粒子が少量含まれるが、上層には攪乱を受けている部分が多い。

床面は平坦で、全域にわたって貼床が確認された。貼床はロームブロックを多く含むもので、厚さは約7cmである。火跡や壁溝は確認されなかった。ピットは4基検出された。いずれも南東側に位置しているが、配置も不規則で、床面からの掘り込みも浅いことから、この住居には伴わない可能性も考えられる。

出土遺物 (第32図)

遺物は甕の口縁部破片が1点出土した。1は口縁部が短く、口縁端部に押圧キザミを入れるものである。調整は縦と横のハケである。

第32図 第14号住居跡出土遺物

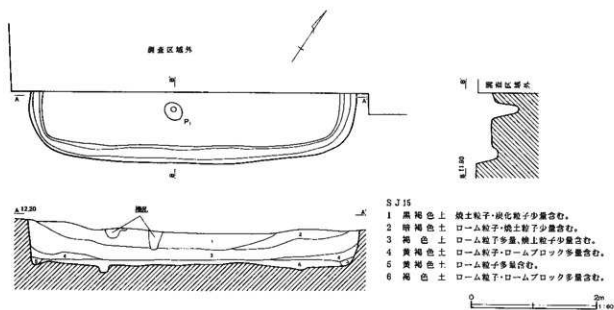


は調査した範囲内では全域に及んでいる。ピットは1基検出された。P1は南側の壁面から約0.8m、長径の中央の位置にあり、椀持ち柱や支柱などの可能性が考えられる。壁溝は確認された範囲では全周する。規模は幅約0.25m、深さ約0.1mである。火跡などは検出されなかった。

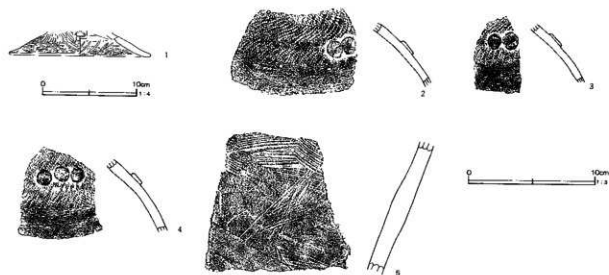
出土遺物 (第34図)

遺物は小破片で、30点近く出土した。大部分は覆土

第33図 第15号住居跡



第34図 第15号住居跡出土遺物



第3層中から出土したものである。遺物には高環、壺などがある。1は高環の脚部破片である。内外面ともミガキで調整される。透かしは3箇所とみられる。2～4は壺の胴部上半破片である。LRの細縄文の上に

円形粘土が貼付される。内外面とも赤彩される。5は大型壺の胴部下半の破片と考えられる。外面は斜ハケとヘラケズリで調整されている。

第10表 第15号住居跡出土遺物観察表（第34図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高環			(15.0)	ACE砂	b	XII	20	内外面ミガキ
2	壺				AF砂	b	VII	10	内外面赤彩 外面上部縄文LR 内面ナテ 円形浮文
3	壺				AC砂	b	X	10	内外面赤彩 外面上部縄文LR 内面ナテ 円形浮文
4	壺				A砂	b	VII	10	内外面赤彩 外面上部縄文LR 内面ココハケ 円形浮文
5	壺				AD砂	a	VI	10	外面斜ハケ・ヘラケズリ 内面織・斜ハケ

第16号住居跡 (第35図)

F-8・9グリッドに位置している。約2/3が調査区域外にかかり、調査できた部分も後世の土壌SK 40・41やピットと重複しているため、残存状況は不良であった。平面形態は楕円形または隅丸方形と考えられ、長径は4m前後と推定される。床面までの深さは約0.15mである。床面は比較的平坦であるが、貼床は

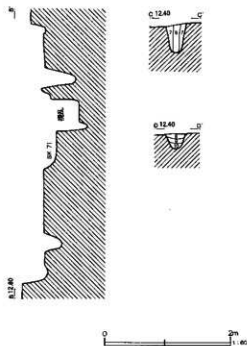
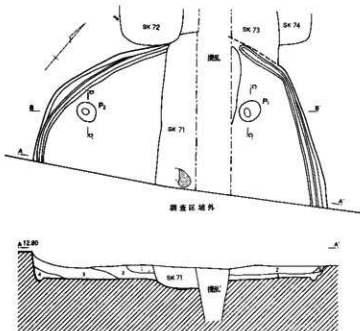
確認されなかった。ピットは3基検出されたが、いずれも壁に近い位置にあり、主柱穴とは考え難い。壁溝は北側の壁に沿って約1m検出された。連続するものではなく、部分的に設けられたものとみられる。また、炉跡や遺物は確認できなかった。

第17号住居跡 (第36図)

I-4グリッドに位置している。住居跡の中心部分が後世の土壌SK51と重複している。平面形態は正方形に近い方形で、規模は長径3.9m、短径3.55m、床面までの深さは10cm弱である。覆土は灰黄褐色土で、ロームブロックが少量含まれるが、この集落における該期

の住居跡は覆土の色調が黒褐色土または暗褐色土であることを考慮すると、この遺構は住居跡としては異質である。また、この遺構についてはSK51が大部分を壊しているため、その性格付けに疑問符が付く。遺物は出土しなかった。

第37図 第18号住居跡・出土遺物



S J 18

- 1 褐色土 ロームブロック少量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子多量含む。
- 3 暗褐色土 ロームブロック少量含む。
- 4 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 5 褐色土 ロームブロック多量含む。
- 6 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- 7 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック・暗褐色ブロック多量含む。
- 8 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- 9 黄褐色土 ローム粒子多量含む。
- 10 黄褐色土 ローム粒子・暗褐色ブロック多量含む。

第11表 第18号住居跡出土遺物観察表 (第38図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	焼率	備考
1	高坏				A砂	a	VII	80	外向くびれ部格子目状文 脚部縦ミガキ 内外面赤彩

第18号住居跡 (第37図)

H-6・7グリッドに位置し、約半分は調査された。遺構の中心部をSK71と攪乱などによって壊されているが、平面形態は楕円形と考えられる。規模は長径4.8m、床面までの深さは約0.2mである。覆土は暗褐色土で、ローム粒子が比較的多く含まれる。

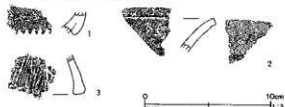
床面は平坦で、貼床は確認されなかった。ピットは2基検出された。P1・2は平面形態がほぼ円形で、規模は直径0.25-0.3m、深さはP1が約0.4m、P2は約0.25mである。位置関係からみて主柱穴と考えら

第19号住居跡 (第38図)

H-5グリッドに位置している。平面形態は円形に近い隅丸方形で、東側を大きな攪乱によって壊されている。規模は長径3.1m、攪乱の影響のある短径は3m前後と推測される。床面までの深さは約0.25mである。覆土は暗褐色土で、上層はローム粒子やロームブロックが少量含まれるが、下層になると焼土粒子や炭化粒子が含まれるようになる。

床面は平坦で全域にわたって貼床が認められた。貼床は約5cmの厚さがあり、中央がやや厚く、壁際が薄くなっていた。ピットは3基検出されたが、柱穴とみられるP2は直径約0.20m、深さ0.15mと小規模である。P1の平面形態は楕円形で、長径0.70m、短径0.45m、深さ5cmの規模をもつ。貯蔵穴の可能性があるが、掘り込みが浅く疑問も残る。P3は炉跡であるが、住居の規模に対して炉跡の掘形は大型である。覆土は焼土に加えて炭化物が多く確認された。また、P2の南側でも床面に焼土がまとまって確認されたが、炉跡の

第39図 第19号住居跡出土遺物



第12表 第19号住居跡出土遺物観察表 (第39図)

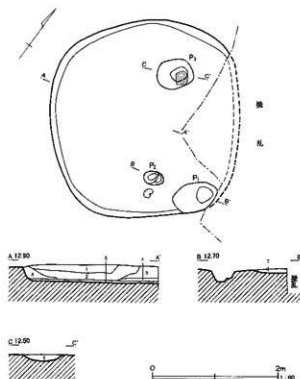
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	保存率	備考
1	釜				砂	a	VII	10	外周羽状縄文施文 内面ヨコナテ
2	釜				砂	a	VI	10	外面一部赤彩 口縁端部縄文施文LR
3	土付甕				A砂	a	VII	10	外面タテハテ 内面ヨコナテ

れ、P1からは柱痕も確認された。壁溝は北側で一部途切れるが、全周するものと考えられる。炉跡は検出されなかった。

出土遺物 (第37図)

遺物は覆土中から高環の脚部付近の破片が1点出土した。内面は横へらナデ、外面は折れ部にへらで格子に施文し、脚部はミガキが施される。環部内外面は赤彩されている。

第38図 第19号住居跡



SJ19

- 1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 2 黒褐色土 焼土粒子・ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子少量含む。
- 4 褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子少量含む。
- 5 暗褐色土 ロームブロック多量含む。
- 6 暗褐色土 焼土粒子・炭化粒子多量、ローム粒子・黒褐色ブロック少量含む。
- 7 黄褐色土 ローム粒子多量、炭化粒子・黒褐色ブロック少量含む。

ような掘り込みはなかった。壁溝も確認されなかった。

出土遺物 (第39回)

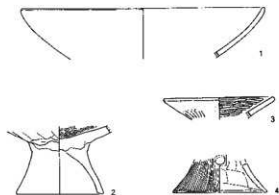
遺物はいずれも細片で、覆土中から約10点出土した。遺物には壺、甕(台付甕含む)などがある。1は複合口縁部の口縁部破片である。折り返し部分には細縄文

第20号住居跡 (第41回)

E-10・11グリッドに位置し、同時代の住居跡S J 22を切り込んで構築されている。住居跡の西寄りには後世の溝跡S D 5や地下式墳S K 99と重複している部分がある。平面形態は隅丸方形で、規模は長径4.8m、短径4.65m、床面までの深さは約10cmである。覆土は黒褐色土で、ローム粒子、ロームブロックが少量含まれる。上層には部分的に後世の攪乱とみられる灰黄褐色土がのる。

床面は緩やかな凹凸があり、殆ど全域にわたり貼床が確認された。貼床は殆どがロームブロックで、中心部が薄く、壁に向かって厚くなっている。炉跡(P 9)は中央やや北側で検出された。平面形態は楕円形で、掘り込みが浅く、焼上の量が比較的に少なかった。主柱穴と考えられるピット(P 6・7)は2基検出された。P 6・7に対応するピットは確認されなかった。また、

第40回 第20号住居跡出土遺物



で羽状に施文され、端部は押圧キザミされる。2は広口壺の口縁部破片で、内外面ともハケで調整される。

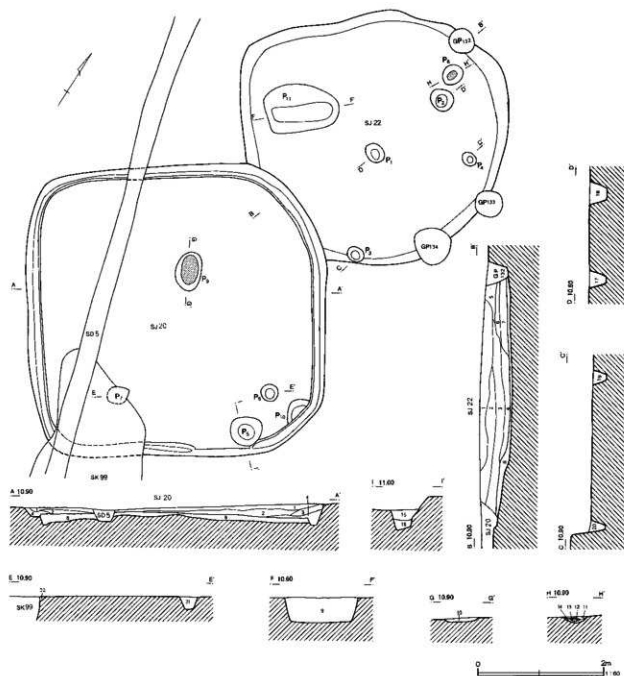
3は台付甕の脚部破片である。外面は粗い縦方向のハケで調整される。

この他にピットが2基検出されたが、やや規模の大きなもので、P 5については壁溝との関係から出入り口部分の施設と考えることもできよう。P 10については壁溝に壊されており、住居構築以前の遺構の可能性も考えられる。壁溝はP 5付近から西側に約1m切れる他は全周する。

出土遺物 (第40回)

遺物は床面を中心に40点余りが出土した。遺物には高杯、器台、壺、甕などがある。1は高杯の杯部破片である。2は台付甕の底部、3は器台の杯部、4は脚部である。5は壺で、口縁部を欠く。出土状況は床面に正位に置かれた状態であった。内面は風化が進んでいるが、外面は部分的にヘラケズリ後、ミガキが施される。6～8は甕または壺の破片で、内外面ともハケで調整される。

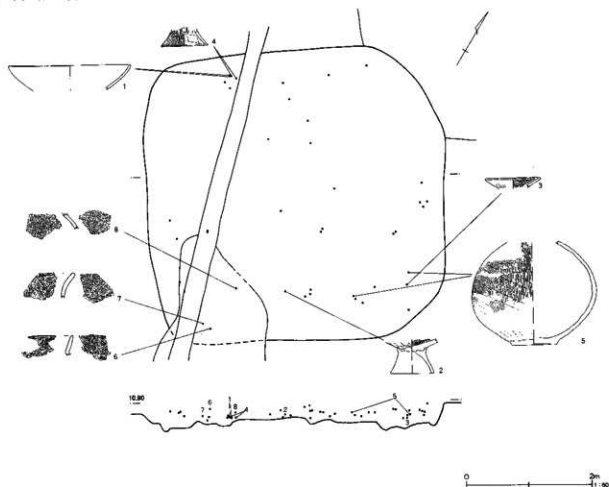
第41図 第20号・第22号住居跡



S J20-22

- | | |
|--|---|
| <p>1 灰黄褐色土 ローム粒子少量含む。
 2 灰褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
 3 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
 4 褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。
 5 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子数層含む。
 6 黄褐色土 ロームブロック多量含む。
 7 暗褐色土 ロームブロック少量含む。
 8 暗褐色土 ローム粒子少量、ロームブロック多量含む。
 9 褐色土 ローム粒子少量含む。
 10 暗赤褐色土 焼土粒子・焼土ブロック・炭化物少量含む。
 11 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量含む。</p> | <p>12 暗赤褐色土 焼土粒子多量含む。
 13 赤褐色土 焼土層。
 14 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
 15 褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
 16 暗褐色土 ローム粒子多量含む。
 17 暗褐色土 ローム粒子・黒褐色粒子少量含む。
 18 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
 19 褐色土 ローム粒子少量、黒褐色粒子少量含む。
 20 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
 21 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック・炭化物少量含む。
 22 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。</p> |
|--|---|

第42図 第20号住居跡遺物分布図



第13表 第20号住居跡出土遺物観察表 (第40図)

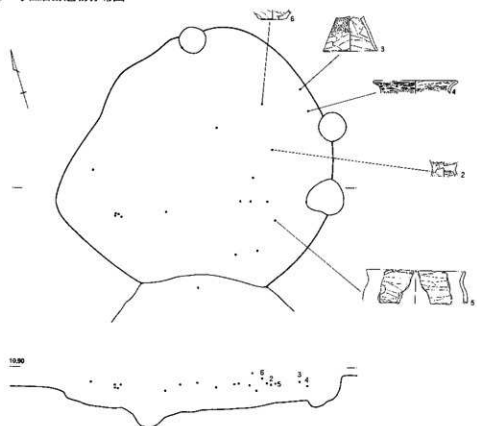
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高坏	(26.0)			砂	a	VII	15	内外面ミガキ(風化)
2	台付甕				A砂	b	V	40	外面ナデ 内面ミガキ
3	器台	(11.8)			砂	a	VII	15	内外面赤彩・ミガキ
4	器台			(10.0)	A砂	b	V	45	外面ミガキ 内面ナデ 円形透孔2ヵ所確認
5	壺			9.4	A砂	a	VII	90	外面赤彩・襷ミガキ 風化著しい
6	甕				砂礫	a	VI	10	内外面ヨコハケ
7	甕				砂	a	VI	10	外面タテハケ 内面ヨコハケ
8	壺				砂	a	X	10	外面タテハケ 内面ヨコハケ

第22号住居跡 (第41図)

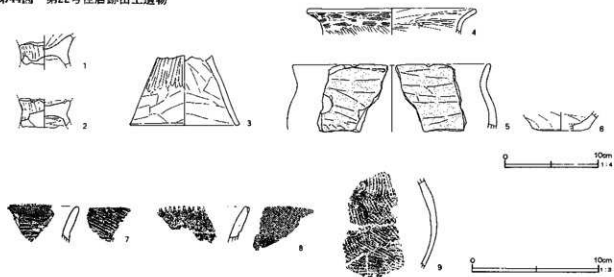
D・E-11グリッドに位置している。南側の一部はS J 20に、東側の壁は部分的に後世のピットに壊されている。平面形態は不整形であるが、西側隅のように隅丸方形になっている部分もある。規模は長径4.35m、短径3.95m、床面までの深さは約0.3mである。覆土は黒褐色土で、ローム粒子やロームブロックを少量含んでいる。

床面は中心部がやや深み、壁際に向かって緩やかに上がっている。壁溝は確認できなかった。ピットは6基検出された。いずれも不規則な配置であるが、住居内では定型的な規模であることから、柱穴の一部と考えておきたい。また、西側には楕円形の土塊状ピットP11が床下から1基検出された。規模は長径1.15m、短径0.75m、深さ0.35mである。土塊内からは遺物は出土しなかった。埴輪は検出されなかった。

第43図 第22号住居跡遺物分布図



第44図 第22号住居跡出土遺物



出土遺物 (第44図)

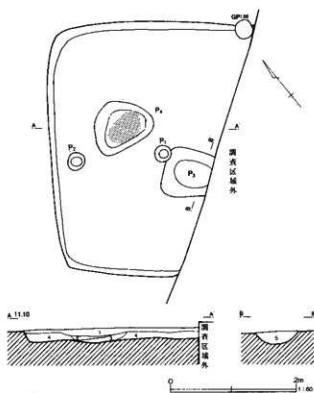
遺物は20点余り出土し、分布図(第43図)に示したように住居跡の南東側に集中する傾向がある。出土遺物には高環、台付甕、甕、小型壺などがある。1・2は高環、3は台付甕の脚部破片と考えられる。外面の

調整は1・2はヘラケズリであるが、3はミガキとヘラケズリが併用されている。4～8は甕または壺の口縁部、底部の破片である。9は小型壺または小型甕の胴部破片である。

第14表 第22号住居跡出土遺物観察表 (第44図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高坏				AC砂	c	Ⅷ	80	外面ヘラズリ 内面ナテ
2	高坏				A砂	b	V	90	外面ヘラズリ 内面ナテ
3	白付甕			11.6	AC砂	b	Ⅷ	15	外面上部ミガキ下部ナテ 内面ナテ
4	甕	(18.0)			A砂	b	VI	10	外面ハケ後ミガキ 内面ミガキ
5	甕	(20.8)			A E砂	b	Ⅷ	10	内外面赤彩・ナテ
6	甕			(6.0)	AC砂	c	IV	20	内外面ナテ
7	甕				AC砂	b	Ⅷ	10	外面斜ハケ
8	甕				A砂	b	Ⅷ	10	内外面一部赤彩 口縁部キザミ 内面羽状縄文施文
9	小型甕				A砂	c	Ⅷ	10	外面縦・斜ハケ

第45図 第21号住居跡



S J 21

- 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 暗赤褐色土 焼土粒子・焼土ブロック・ローム粒子多量含む。
- 赤褐色土 焼土。
- 暗褐色土 ロームブロック・黒色ブロック多量含む。
- 褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。

第21号住居跡 (第45図)

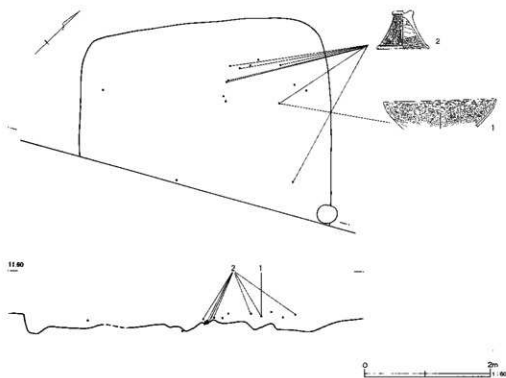
E-11グリッドに位置している。南東部が調査区外となるため、全体の約2/3が検出された。平面形態は隅丸方形で、正方形に近いものと予想される。規模は確認されている南北方向が4mで、床面までの深さは約0.3mである。覆土は暗褐色土で、上層では焼上粒子、ローム粒子、ロームブロックが少量含まれるが、下層ではロームブロックなどが多くなる傾向が認められた。

床面は部分的に凹凸がみられる。貼床は全域で確認された。ピットは4基検出された。P1・2は直径約0.2m、深さ0.2mの円形である。この他に土壌状のピットが2基検出された。P3は住居跡の中央部に位置し、東側の一部が調査区域外に入る。平面形態は不整形方形と推定され、規模は長径0.7m+α、短径0.45m、深さ0.17mである。P4はP3の北西に位置し、平面形態は楕円形である。規模は長径1m、短径0.75m、深さ0.15mである。ともに遺物は出土しなかったが、断面観察からP4は底面に焼土の堆積がまとまりで認められ、炉跡と判断した。また、壁溝は検出されなかった。

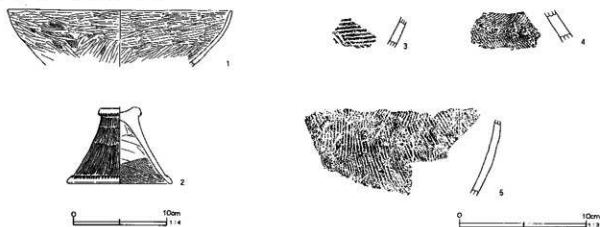
第15表 第21号住居跡出土遺物観察表 (第47図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高坏	(24.0)			砂	b	V	20	外面斜ハケの後ミガキ 内面ミガキ
2	高坏			11.2	A砂	b	Ⅷ	90	外面全面・内面一部赤彩 脚裾部・くびれ部にキザミ
3	甕				AC砂	c	VI	10	外面ハケ
4	甕				A砂	b	V	10	外面ハケ
5	甕				AC砂	c	VI	10	外面ハケ

第46図 第21号住居跡遺物分布図



第47図 第21号住居跡出土遺物



出土遺物 (第47図)

遺物は床面付近から約20点出土した。出土物には高環、壺などがある。1は高環の口縁部で、内外面と

もミガキで調整される。2は高環の脚部で底部と括れ部には押圧キザミが入る。3・4は壺の口縁部及び胴部破片である。5は壺の胴部の破片である。

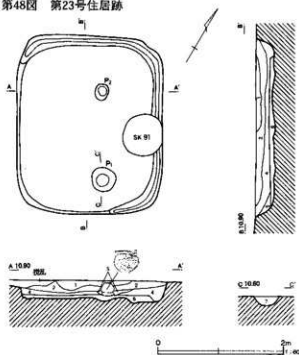
第23号住居跡 (第48図)

D-11・12グリッドに位置している。東壁の一部を後世の土壌SK91と重複する。平面形態は隅丸長方形で、今回調査された住居跡の中ではS J 13と並んで最も小型である。規模は長径2.8m、短径2.35m、床面ま

での深さは0.25mである。覆土は暗褐色土で、ローム粒子や焼土粒子が含まれる。上層には部分的にローム粒子を含む黄褐色土が上層に入る箇所もみられる。

床面は貼床によって平坦であるが、中心部から壁際

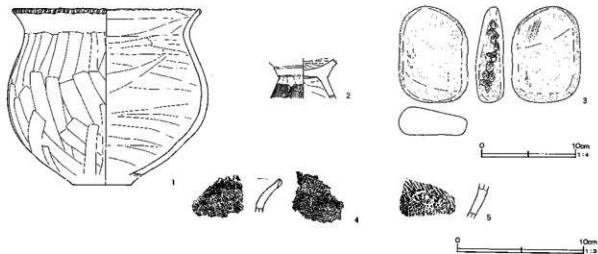
第48図 第23号住居跡



S J 23

- 1 黄褐色土 ローム粒子・炭化粒子少量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子・粘土粒子少量含む。
- 3 暗褐色土 焼土粒多量含む。
- 4 褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 5 褐色土 ロームブロック・炭灰含む。
- 6 褐色土 ロームブロック多量含む。
- 7 褐色土 ロームブロック少量含む。

第49図 第23号住居跡出土遺物



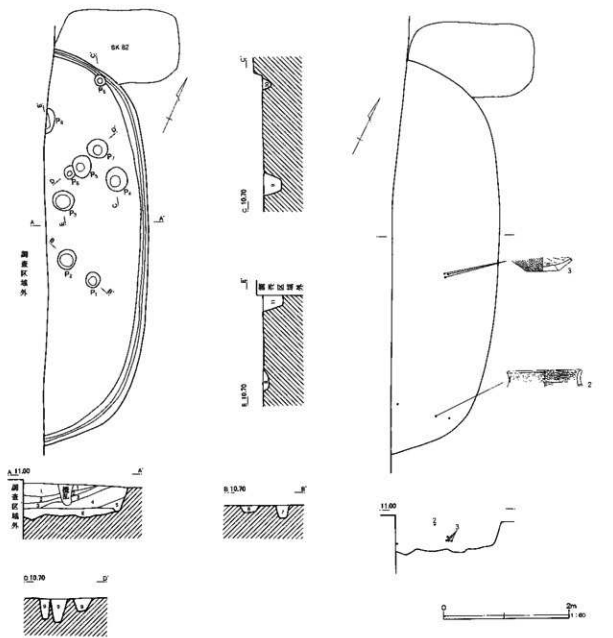
第16表 第23号住居跡出土遺物観察表 (第49図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残率%	備考
1	甕	20.0			A C 砂	b	Ⅱ	100	内外面ナテ 口縁部キザミ
2	高環				A 砂	b	Ⅲ	60	外面ハケ くびれ部粘土帯貼付
3	磨石	長さ10.2cm	幅7.3cm	厚さ3.0cm	重さ347.0g			100	
4	甕				A C 砂	b	Ⅵ	10	外面ハケ 口縁部キザミ
5	壺				A 砂	b	Ⅵ	10	外面ハケ

に向かって僅かに傾斜している。貼床は全域に及んでいるが、壁際は薄くなっている。貼床は北及び東側の壁付近に限られる。規模は幅約0.15m、深さ0.1mである。ピットは住居跡の北壁と南壁寄りに対になって2基検出された。大きさは異なるが、深さはともに約0.15mと同じであることから主柱穴の可能性が高い。

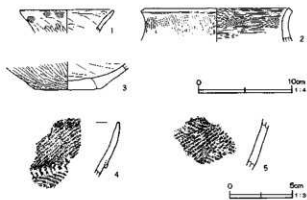
出土遺物 (第49図)

遺物は覆土中から約10点出土した。出土遺物には甕、高環、磨石などがある。1・4は甕、5は壺の破片である。1は底部を欠く。口縁端部は押圧キザミ、口縁部は横ナテ、胴部から底部にかけては縦方向のヘラケズリで調整される。内面はナテとヘラナテで調整される。4は1と同様、口縁端部に押圧キザミが入る。5は胴部破片で、やや粗いハケである。2は高環の脚部付近の破片である。脚部の外面は縦のハケ、内面はヘラナテである。坏部の内面は風化しているため、やや不明瞭であるが、ミガキとみられる。3は砂岩系の磨石である。研磨されている部分が数箇所あり、砥石である可能性もある。側面は敲打痕がみられる。



S J 24

- 1 暗褐色土 ロームブロック少量含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロック・黒色ブロック多量含む。
- 3 黒褐色土 ロームブロック多量、焼土粒子少量含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 5 黒褐色土 ローム粒子少量含む。
- 6 黒褐色土 ロームブロック・黒色ブロック多量含む。
- 7 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- 8 黒色土 焼土粒子・ロームブロック少量含む。
- 9 暗褐色土 ローム粒子微量含む。
- 10 黒色土 ローム粒子少量含む。
- 11 暗褐色土 黒色ブロック・ローム粒子少量含む。



第24号住居跡 (第50図)

E-12・13グリッドに位置している。遺構の2/3以上が調査区外にかかり、北壁の隅は後世の土壌SK 82と重複している。平面形態は隅丸方形と考えられ、規模は確認された南北方向が6.3m、床面までの深さは約0.4mである。覆土は暗褐色土で、部分的に後世の攪乱などが入る。上層から下層までロームブロックが含まれる。

床面は貼床によって、平坦に仕上げられている。貼床は調査した範囲には全体に及んでいた。ピットは9基検出されたが、位置や規模などから主柱穴はP 5だ

けと考えられる。他のピットについては、いずれも浅く、一部は後世のピットの可能性もある。P 2からはまとまって焼土が確認された。壁溝は調査区内では壁に沿っており、全周するものと推定される。規模は幅0.12~0.2m、深さ5cm前後である。炉跡は検出されなかった。

出土遺物 (第50図)

遺物は5点出土し、2・3は床面、他は覆土中からである。出土遺物には小型壺、壺、甕がある。1は小型壺の口縁部破片である。外面はハケ、下段はミガキ

第17表 第24号住居跡出土遺物観察表 (第50図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	硬度	備考
1	小型壺	(10.0)			A砂	b	V	10	外面ハケ後ミガキ 内面ナデ
2	甕	(16.0)			A砂	c	VI	10	外面タテハケ 内面ヨコハケ
3	壺			7.0	A砂	b	Ⅷ	100	外面ミガキ 内面ナデ
4	壺				AC砂	b	V	10	外面ハケ 内面ナデ
5	壺				ACE砂	c	V	10	外面ハケ

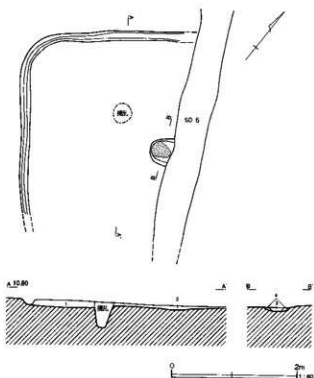
である。3は壺の底部付近、4・5は口縁部の破片である。外面はミガキ、内面はヘラナデ、底部はヘラケズリで調整される。4は複合口縁で、折り返し部分の細縄文の端に押圧のキザミが入る。5の調整は粗いハケである。2は甕の口縁部破片で、内外面ともハケで調整される。

第25号住居跡 (第51図)

D-12、E-12グリッドに位置している。住居跡の中央部付近で後世の溝跡SD 6と重複する。平面形態は隅丸長方形と考えられるが、遺構確認面が住居跡の床面にあっており、東側及び南側は既に攪乱などによって削られているため、床面や壁溝を確認することはできなかった。住居跡の規模は検出された壁溝から推測すると、長径は4m余りとみられる。

覆土は確認できなかったが、SD 6の西側では貼床が確認できた。貼床によって床面は平坦であったが、

第51図 第25号住居跡



S J 25

- 1 暗褐色土 ローム砂子・ロームブロック多量含む。
- 2 暗色土 ロームブロック多量含む。
- 3 赤褐色土 焼土ブロック多量含む。
- 4 褐色土 ローム砂子・焼土砂子多量含む。

第52図 第25号住居跡出土遺物



貼床は南側に向かって立ち上がり、攪乱の入っていない南側は貼床をしていない可能性もある。炉跡は中央やや東寄りに検出された。平面形態は楕円形とみられるが、東側がSD 6に重複する。掘り込みは浅く、焼土は西よりにまとまって確認された。また、ピットは1基(P 1) 検出されたが、位置や形態から支柱

穴の一つと考えられる。

出土遺物 (第52図)

遺物は壁溝と床面から2点出土した。1は壺、2は甕の胴部破片である。内外面とも強い横ナデで調整される。

第18表 第25号住居跡出土遺物観察表 (第52図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺				A C 砂	b	V	10	外面赤彩 粉下目状文の下部にS字結節文
2	甕				A 砂	b	VI	10	内外面ナデ

第26号住居跡 (第54図)

C-12、D-12グリッドに位置している。同時代の住居跡S J 27を切り込んで構築しているが、東側約半分は攪乱によって壊されている。平面形態は不整形円で、直径は約3.5m、床面までの深さは0.25mである。覆土は褐色土で、下層ほどロームブロックの量は多くなる。

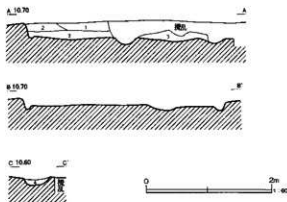
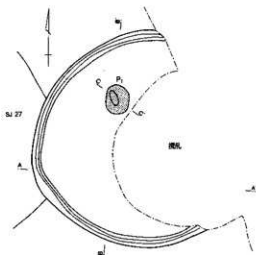
床面は緩やかな凹凸があり、貼床は確認できなかった。ピットは1基(P 1) 検出されたが、掘り込みが浅く、住居には伴わない可能性もある。壁溝は幅

0.15~0.2m、深さ約5cmで、全周するものとみられる。炉跡などは検出されなかった。

出土遺物 (第53図)

遺物は覆土中より甕の破片が1点出土した。1は甕の口縁部破片で、端部には押圧のキザミが入る。外面はハケ、内面は横ナデで調整される。

第53図 第26号住居跡出土遺物

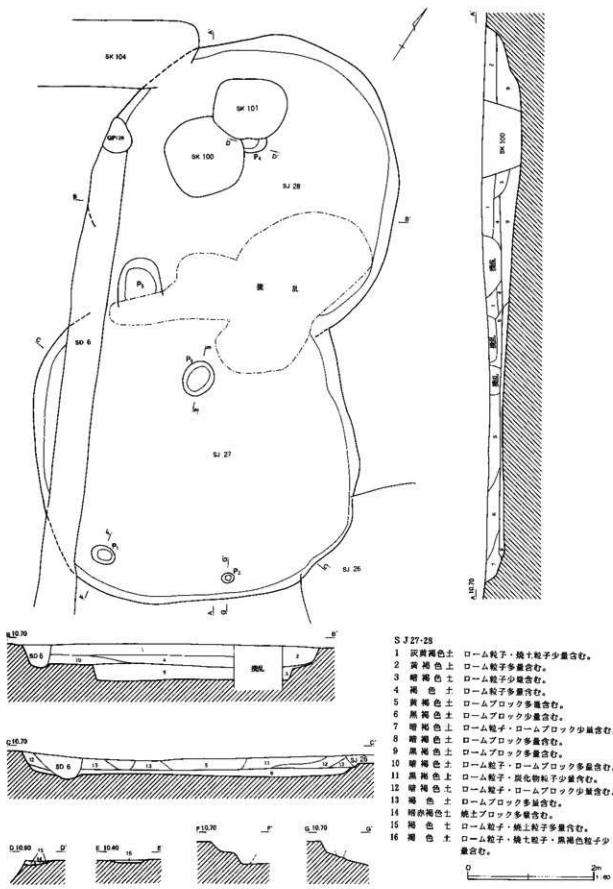


- S J 26
- 1 褐色土 ローム殻子・ロームブロック少量含む。
 - 2 明褐色土 ローム殻子・炭化殻子少量含む。
 - 3 褐色土 ロームブロック多量含む。
 - 4 赤褐色土 粘土。

第19表 第26号住居跡出土遺物観察表 (第53図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	甕				A 砂	b	VI	10	口縁端部キザミ

第55図 第27号・第28号住居跡



第27号住居跡 (第55図)

C-12、D-12グリッドに位置している。同時代の住居跡S J 28と重複し、北壁を切り込まれている。また、西辺付近をSD 6に、北辺隅をS J 28にかかる攪乱によって壊されている。この攪乱は地下式墳の可能性があり、調査の中で、S J 28側から近世の陶磁器類が多数出土した(便宜上、攪乱として調査が進行したため、グリッド出土遺物として別項で記載)。平面形態は隅丸正方形で、規模は長さ5.1m、短径5.05m、床面までの深さは約0.2mである。覆土は黒褐色土で、ローム粒子やロームブロックが少量含まれるが、層位は複雑に混ざっており、小規模な攪乱等の影響を受けていると思われる。

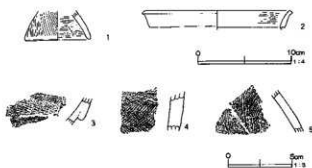
床面は中心部が高く、壁際に向かって低くなっている。貼床は約5cmの厚さで確認されたが、壁際は不明瞭であった。断面図F及びGは貼床を掘り抜いてしまった後の図である。ピットは3基検出された。P 3は明瞭ではないが、覆土中に焼土が含まれることから、炉跡の可能性が高い。P 2・3は主柱穴または支柱穴

と思われる。壁溝は検出されなかった。

出土遺物 (第56図)

遺物はいずれも覆土中から約10点出土した。出土遺物には、高環、壺、甕などがある。1は高環または器台の脚部破片である。内外面ともハケで調整される。2は壺の口縁部破片である。3は複合口縁壺の破片であり、折り返し部分は格子目状燃糸文である。4・5は壺の胴部破片である。4は羽状の細縄文、5はハケで調整される。

第56図 第27号住居跡出土遺物



第20表 第27号住居跡出土遺物観察表 (第56図)

番号	器種	口径	器高	底径 (7.0)	胎土	焼成	色調	肌率	備考	
1	高環	(16.0)		(7.0)	A C E 砂	b	V	15	内外面ハケ	
2	壺				A 砂	b	V	10		内面ハケ
3	壺				A 砂	b	VII	10		内面・外面一部赤彩 外面格子目状燃糸文
4	壺				A 砂	c	Ⅲ	10		外面羽状縄文施文
5	壺				A C 砂	c	V	10		外面ハケ 内面ナテ

第28号住居跡 (第55図)

C-11・12グリッドに位置している。S J 27を切り込んで構築されているが、覆土の中層以下が類似することや攪乱がいたるところに入るため、ともに住居の範囲は不明瞭である。平面形態は楕円形とみられ、長径は断面の観察から約5m、短径は4.8m、床面までの深さは0.25mである。覆土は、上層は灰褐色土と黄褐色土、下層は褐色土である。覆土上層は該期の住居跡の覆土としては不自然であり、人為的な埋め戻しや攪乱の可能性が考えられる。覆土にはローム粒子が多量含まれる。

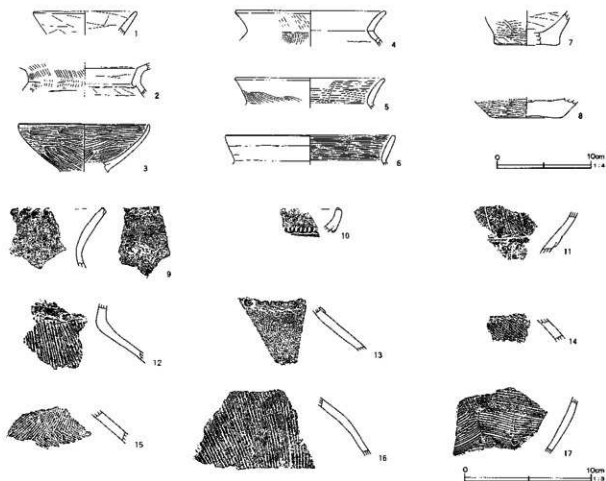
床面は貼床によって平坦に仕上げられている。貼床

の厚さは場所によって異なるが、0.2m以上の貼床がある箇所も確認された。貼床は住居の西側約1/3を除いて全域に及んでいる。炉跡は中央北寄りに検出された。後世の土壌SK100・101に大半を壊され、全体の1/4程度が残存していた。平面形態は楕円形と推定でき、掘り込みは約7cmであった。覆土は土壌の影響を受けていたが、焼土は明瞭に残っていた。P 2は楕円形を呈し、土壌状である。S J 27と重複する部分は攪乱の影響が検出されなかった。

出土遺物 (第57図)

遺物は床面や覆土中から約30点出土した。出土遺物

第57図 第28号住居跡出土遺物



には小型壺、壺、高環、甕などがある。この他にSK 100の覆土中から甕などが出土したが、が跡を壊して掘

り込んでいることから本来はこの住居跡に伴うものと考えられる（別項でSK100として記載）。1は小型壺

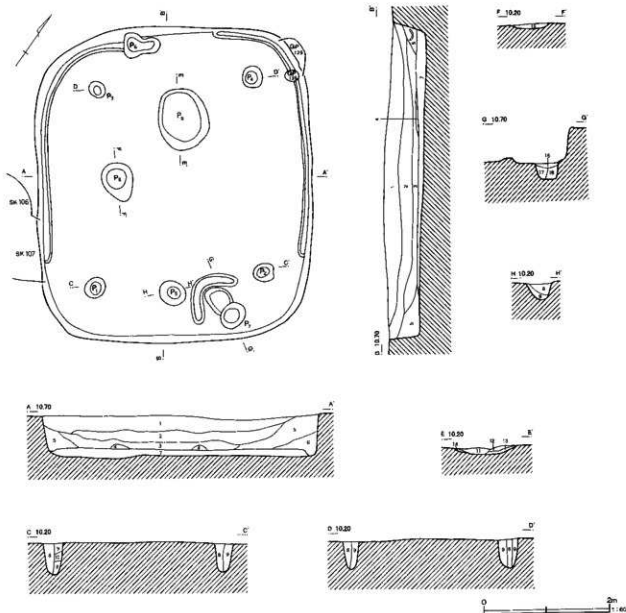
第21表 第28号住居跡出土遺物観察表（第57図）

番号	器種	口径	器高	底径	粘土	焼成	色調	焼成率	備考
1	小型壺	(11.0)			A C E 砂	c	Ⅲ	10	内外面ハケメ(風化)
2	壺				A 砂	b	V	10	外面ハケ 内面ナデ
3	高環	(14.0)			A 砂	b	VII	20	内外面赤彩・ミガキ
4	甕	(16.0)			A C 砂	b	VI	10	外面ハケ 内面ナデ
5	甕	(16.0)			A C 砂	b	V	10	内外面ハケ
6	甕	(18.0)			A C 砂	b	V	10	内面ココハケ
7	小型壺			(7.0)	A C 砂	c	VII	15	外面ミガキ 内面ナデ
8	壺			(7.6)	A C 砂	c	Ⅲ	60	外面ミガキ 内面風化による割縁顕著
9	甕				A 砂	b	V	10	外面タテハケ 口縁端部キサミ
10	甕				A 砂	b	VII	10	内外面赤彩 口縁部下端キサミ
11	壺				A C 砂	b	VII	10	外面ヘラケズリ 沈線状のキサミ
12	壺				A 砂	c	VI	10	外面縦方向ハケ
13	壺				A 砂	c	Ⅲ	10	外面S字状結節文2条 内形浮文 縄文施文L R
14	壺				A 砂	b	V	10	外面S字状結節文に区画されたR L縄文施文
15	壺				A E 砂	c	IV	10	外面羽状縄文施文
16	壺				A C E 砂	b	Ⅱ	10	外面縦方向ハケ 内面ミガキ
17	壺				A C E 砂	b	Ⅱ	10	外面縦・斜方向ハケ

の口縁部破片である。風化が進んでいるが、内外面ともハケで調整されているものとみられる。2・7・8・10~17は蓋及び小型壺の破片である。7は底部付近の破片で、外面は横及び斜方向のミガキ、内面はヘラナデされる。10の口縁部の調整は横ナデで、折り返し部

分の端部は押圧キザミが入る。3は深身の高坏坏部で、端部が内湾する。内外面とも横方向のミガキ調整された後、赤彩される。4~6・9は甕の破片で、いずれもハケで調整される。

第58図 第30号住居跡



S J 30

- 1 黄褐色土 ロームブロック多量含む。
- 2 褐色土 ロームブロック多量・焼土粒子少量含む。
- 3 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒子多量含む。
- 4 暗褐色土 焼土ブロック・炭化粒子多量含む。
- 5 黄褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量含む。
- 6 黄褐色土 ロームブロック多量含む。
- 7 褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量含む。
- 8 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量含む。
- 9 褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。

- 10 褐色土 ロームブロック少量含む。
- 11 黄褐色土 焼土ブロック・焼土粒子多量含む。
- 12 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子多量含む。
- 13 暗褐色土 焼土ブロック・焼土粒子・炭化粒子多量含む。
- 14 褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量含む。
- 15 黄褐色土 焼土ブロック・ロームブロック多量含む。
- 16 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- 17 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量含む。
- 18 褐色土 ロームブロック少量含む。

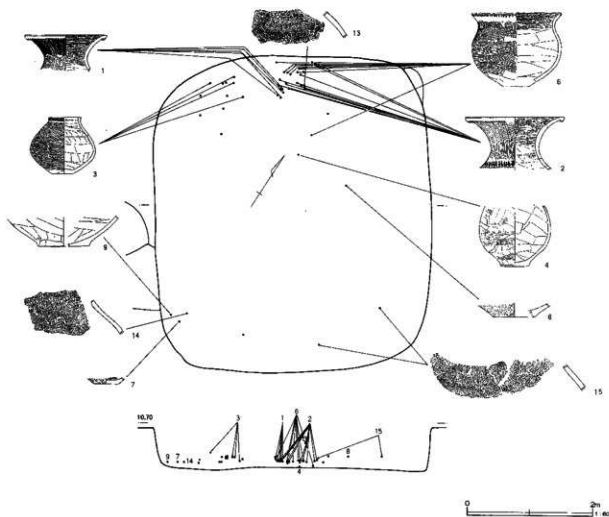
第30号住居跡 (第59図)

C・D-11グリッドに位置している。後世の土壌S K106・107に西壁の一部を壊されている。平面形態は隅丸長方形で、規模は長径5.05m、短径4.45m、床面までの深さ約0.55mである。覆土は上層は黄褐色土、下層は褐色土をベースとし、ロームブロックが多く含まれる。

床面は貼床により、平坦に仕上げられている。床面には所々に焼土がブロック状になって検出された。炉跡がP9であることから、炉から掻き出されたものと推測される。炉跡は中央やや北寄りに検出された。楕円形を呈し、規模は長径0.95m、短径0.7m、深さ0.1mである。覆土は相対的に焼土が北側、炭化物が南側

第59図 第30号住居跡遺物分布図

に集中する傾向がある。ピットは9基検出された。主柱穴はP1-4である。いずれも平面形態は円形で、直径0.25-0.3m、深さは0.45-0.5mである。P7はL字をした堤状の凸帯を伴うものと考えられ、P7と坩の間もピット状に窪んでいる。この遺構は弥生時代後期から古墳時代中期にかけてみられるもので、住居内の祭祀に関連した遺構であると考え方もある。他のピットについては、支柱穴などの可能性が考えられる。貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は北壁の中央部と南側の壁を除いて、設けられている。幅は0.1-0.15m、深さ0.1mである。

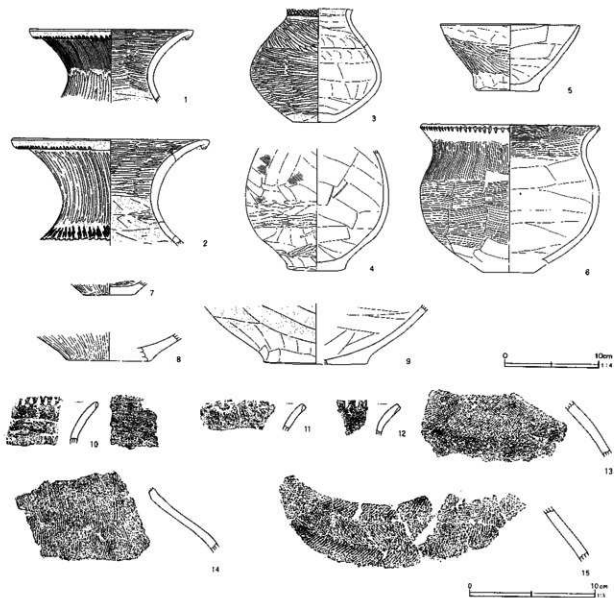


出土遺物 (第60図)

遺物は床面、覆土、壁溝などから40点余り出土している。覆土は第2層以下からの出土である。出土遺物には壺、小型壺、鉢、甕などがある。1・2は口縁部が大きく外反する複合口縁の壺である。ともに複合口縁の折り返し端部には押圧のキザミが入る。1は口縁部はハケ、下段はミガキである。2はミガキと細縄文である。3・4は小型の壺で、口縁部を欠く。3は胴部下半が大きく膨らむタイプで、胴部にミガキが多用される。4は胴部下半が緩やかに張り、底部が明確な

タイプである。ハケが主体で、ミガキは部分的である。5はやや小型の鉢である。風化しているが、内外面ともハケで調整されるとみられ、体部外面は横及び斜めのミガキである。6・10-12は甕である。いずれも口縁端部は押圧のキザミが入る。調整は内外面とも6はハケ、10-12は内面はいずれもナデであるが、外面はハケの後にナデしている。7-9は壺底部付近の破片である。外面の調整は7・8がミガキ、9はヘラケズリである。13-15は壺の胴部上半である。外面は13・15は羽状縄文、14はハケである。

第60図 第30号住居跡出土遺物



第22表 第30号住居跡出土遺物観察表 (第60図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(17.4)			A砂	b	VII	60	内外面赤彩 口縁部下編キザミ 頸部タテハケ後ミガキ
2	壺	21.0			ACE砂	b	VII	70	内外面赤彩 口縁キザミ全周せず 頸部ミガキ 肩部S字結節文
3	小型壺			4.4	A砂	b	VII	85	内外面赤彩 外面胴部ミガキ 頸部沈凹区画下に格子目状沈線
4	小型壺			(6.0)	A砂	c	Ⅷ	30	外面ハケ後一部ミガキ 内面ナデ
5	鉢	14.8	7.1	6.8	A砂	c	V	55	外面ハケ後一部ミガキ(風化) 内面ナデ
6	甕	(19.0)			AC砂	c	Ⅷ	60	口縁部キザミ 外面上中位ハケ 下位ナデ 内面ハケ 胴部ナデ
7	壺			5.6	AC砂	b	XI	80	内外面ミガキ 底部ナデ
8	壺			(9.0)	ACE砂	b	Ⅷ	10	外面ミガキ 内面ナデ
9	壺			(11.0)	ABC砂	b	XI	25	外面赤彩 外面ヘラケズリ 底部木炭痕
10	甕				AC砂	c	Ⅷ	10	口縁部キザミ 外面輪横痕明顯
11	甕				A砂	b	Ⅷ	10	口縁部キザミ
12	甕				A砂	b	Ⅷ	10	口縁部キザミ
13	壺				ACE砂	c	VII	10	外面上位羽状縄文施文 S字結節文区画下赤彩・ミガキ
14	甕				A砂	c	IV	10	外面縦・斜方向ハケ
15	壺				A砂	c	VI	10	外面羽状縄文・ハケ 内面ナデ

第31号住居跡 (第62図)

E-8グリッドに位置している。住居跡の西壁の一部は攪乱に、東側約半分は後世の溝跡SD4などと重複する。平面形態は隅丸方形と推定され、確認できる長径は6.35mで、床面までの深さは0.35mである。覆土は褐色上で、ローム粒子や焼土粒子が含まれる。壁際ではロームブロックの量が多く、壁面が崩落していることが窺われた。

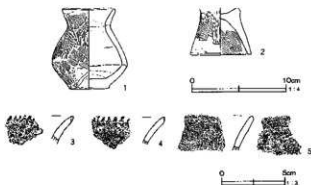
床面は平坦であるが、貼床は検出されなかった。ピットは4基検出され、P3・4がやや規模が異なるもの主幹穴と考えられる。P2については支柱穴もしくは入り口部のピットの可能性も考えられるが、P1は規模も大きく、何も出土していないため、性格不明である。壁溝、竈跡などは検出されなかった。

出土遺物 (第61図)

遺物は覆土から約10点出土した。遺物には小型壺、

白付甕、甕などがある。1は小型壺で、口縁部が短く、直線的にひらく。外面の調整はハケで行われるが、底部付近には部分的にミガキもみられる。内面はナデである。2は白付甕の脚部の破片である。内外面ともハケで調整される。3～5は甕の口縁部破片である。3と4は口縁端部に押圧のキザミが入る。5は内外面ともハケ調整である。

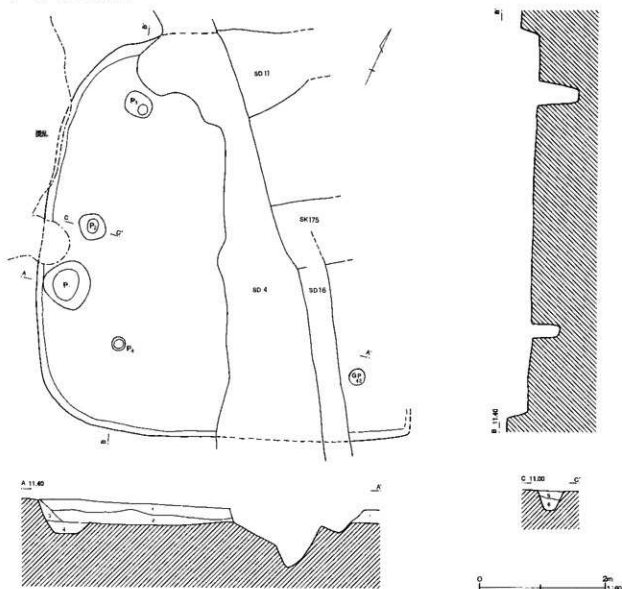
第61図 第31号住居跡出土遺物



第23表 第31号住居跡出土遺物観察表 (第61図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	小型壺	5.7	9.0	4.2	ACE砂	b	V	100	外面縦・斜ハケ 下位ミガキ 内面ナデ
2	白付甕			6.5	ACEF砂	b	Ⅷ	90	内外面ハケ
3	甕				砂	b	V	10	口縁部キザミ
4	甕				AC砂	b	Ⅷ	10	口縁部キザミ
5	甕				A砂	b	Ⅷ	10	内外面ハケ

第62図 第31号住居跡



S J 31

- 1 褐色土 ローム粒子多量含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量含む。
- 3 褐色土 ロームブロック・ローム多量含む。

- 4 褐色土 焼土粒子少量、ロームブロック少量含む。
- 5 暗褐色土 ロームブロック多量含む。
- 6 暗褐色土 ローム粒子少量含む。

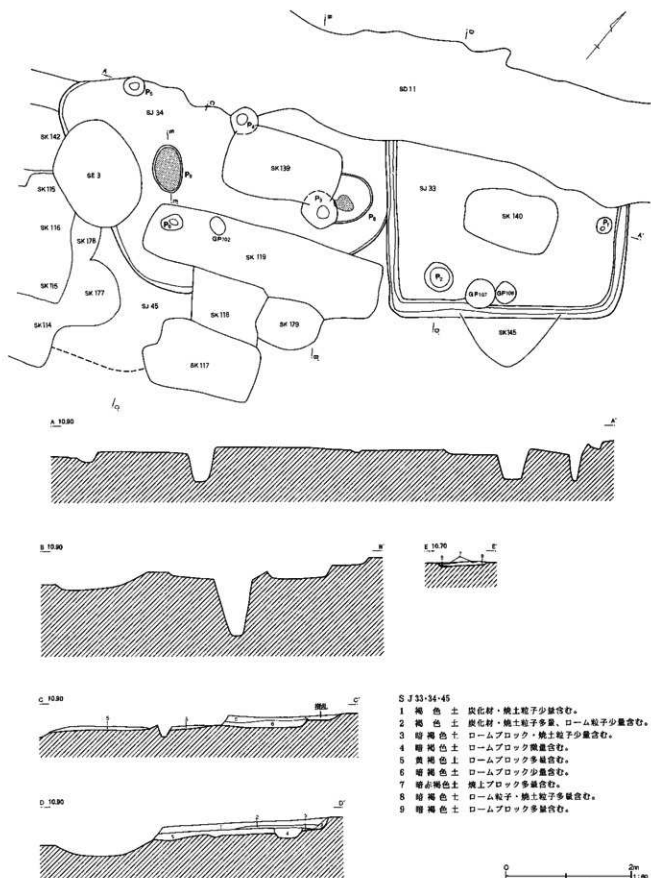
第33・34・45号住居跡 (第63図)

D-9・10グリッドに位置している。3軒の住居跡はいずれも重複関係にあり、古い順からS J 45→34→33である。これらの住居跡は大部分が後世の溝跡、土壌、攪乱なども重複し、原形を留めている部分は少ない。

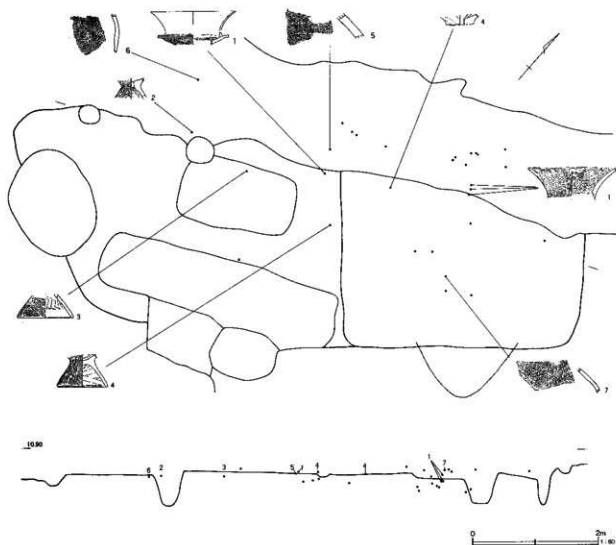
S J 33はS J 34を切り込んで構築されている。北側はSD11に全体の約1/3が壊され、南側も壁際が後世の土壌SK145、中心部をSK140などと重複する。

平面形態は正方形に近い方形である。確認できる長径は3.9m、床面までの深さは約0.1mである。覆土は褐色土で、炭化材、焼土粒子が少量含まれる。床面は平坦で、南側を中心に貼床が確認できた。ピットは2基検出された。P1は東壁際、P2は南側の壁際付近に位置している。P2については床面から掘り込まれており、規模から貯蔵穴の可能性が高い。壁溝はSD11で壊されている部分を除いて確認された。規模は幅

第63図 第33号・第34号・第45号住居跡



第64図 第33号・第34号住居跡遺物分布図



0.15~0.25m、深さ5~15cmで、南側が幅広く、深くなっている。ガラスは検出されなかった。

出土遺物 (第65図)

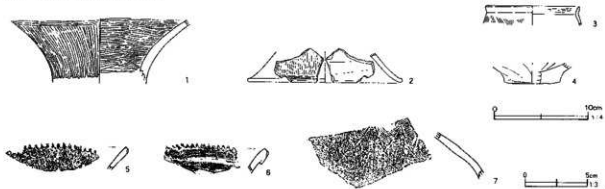
遺物は覆土及び床面から約20点出土した。また、遺物は住居跡の北側を壊しているSD11からもこの住居の遺物と考えられるものが出土しているが、それらの遺物は既に原位置を動いていると想定されることから、別途(SD11)掲載した。出土遺物には壺、高環、

甕などがある。1は広口壺の口縁部破片である。外面は端部が横、下端が縦のミガキ、内面は横のミガキが施される。2は大型高環の脚部破片と推定される。風化が進んでいるが、外面はハケで調整される。3は小型甕、4は壺の底部破片である。5は押圧キザミをもつ甕の口縁部破片である。6は複合口縁壺の口縁部破片で、端部に押圧キザミが入る。7は胴部上半の破片で、ヘラによる鋸歯文が連続する。

第24表 第33号住居跡出土遺物観察表 (第65図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	壺				ABC砂	b VII	10	内外面赤彩・ミガキ	
2	高環			(18.0)	A砂	b Ⅷ	10	外面ハケ(風化) 内面ナデ	
3	小型甕	(10.0)			AC砂	b XI	10	外面斜方向ハケ	
4	壺			(6.0)	ABC砂	b XI	40	内外面ナデ 底部ヘラケズリ	

第65図 第33号住居跡出土遺物



番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
5	甕				A C 砂	b	Ⅲ	10	口縁部キザミ
6	甕				A 砂	b	Ⅶ	10	内外面赤彩 口縁部キザミ
7	甕				A 砂	b	Ⅶ	10	外面赤彩・ミガキ 沈線区画内縄文施文RL

第34号住居跡 (第63図)

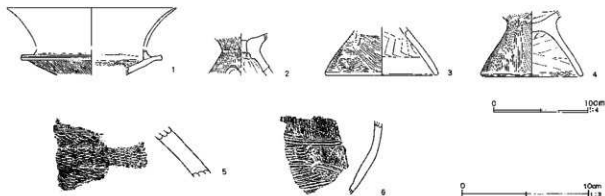
S J 34はS J 45を切り込み、東辺をS J 33、南辺をSK 118・119、西辺をSE 3、北辺をSD 11に壊されている。平面形態は隅丸台形に近く、規模は長径約5.5m、短径約3.5mと推定される。覆土は遺構確認時に床面が露出している状態であり、床面から壁面への立ち上がりも僅かなものであった。ビットは6基検出された。P 3・5・6は主柱穴と考えられる。P 3・4は規模も異なり、後世のビットである可能性がある。炉跡は(P 9)やや南西に寄って検出された。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径0.75m、短径0.5m、深さ約5cmである。焼土は覆土全体にブロック状に堆積していた。また、土塊状のビットP 8は覆土中に直径

0.2～0.3mの焼土ブロックがまとまって確認された。壁溝は検出されなかった。

出土遺物 (第66図)

遺物は床面から約10点出土した。出土物には器台、高坏、壺がある。1は器台の坏部破片である。内外面ともミガキ調整後、赤彩される。2・3は高坏の脚部で、2は三方に透かし孔をもつ。ともに外面はミガキ、内面はヘラケズリで調整される。4は台付甕で、外面はハケ、内面はヘラケズリで調整される。5・6は壺・小型の壺の胴部破片である。

第66図 第34号住居跡出土遺物



第25表 第34号住居跡出土遺物観察表 (第66図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	器台				ACE砂	b	黒	10	内外面ミガキ
2	高坏				AC砂	b	黒	40	脚部透孔径(1.6)cm 器台受部孔径(1.4)cm 外面ミガキ
3	高坏			(12.0)	ACE砂	b	黒	20	外面横・斜ミガキ 透孔1ヵ所残存
4	台付甕			(11.0)	ACE砂	b	黒	60	外面ハケ 内面ヘラケズリ
5	壺				ACDE砂	b	黒	10	S字結節文2条で文様区画格丁目状然承文
6	壺				AE砂	b	黒	10	外面ハケ

第45号住居跡 (第63図)

S J 45は重複関係から3軒の住居跡の中では最も古いと考えられるものである。S J 34と同様多くの土壇や住居跡との重複によって大部分が壊され、僅かに床面の一部が確認された。床面は破線で示した部分が

住居跡の両側の壁に相当すると考えられることから、平面形態は隅丸方形または長方形と推定される。住居内からは遺物、炉跡、ピット、壁溝、貼床などは検出されなかった。

第35号住居跡 (第67図)

E-4・5、F-4・5グリッドに位置している。西辺を擾乱によって壊されている。集落内では小規模住居の一つである。平面形態は隅丸方形で、正方形に近い。規模は長径3.1m、短径2.9m、床面までの深さは約0.1mである。覆上は黒褐色土で、ローム粒子が少量含まれる。

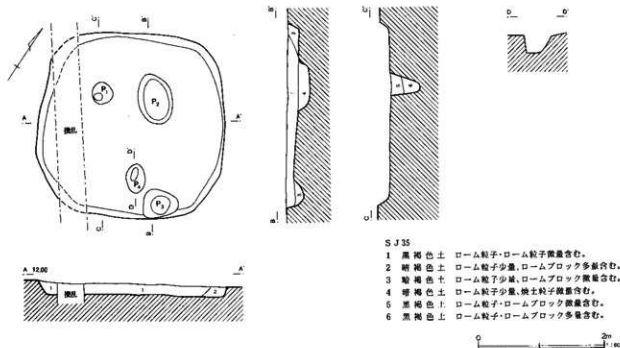
置関係から入り口のピットである可能性も考えられる。P 3については掘り込みが浅く、形態も柱穴とは考えにくいことから、貯蔵穴とみられる。壁溝は検出されなかった。

出土遺物 (第69図)

遺物は覆上及び床面から約20点出土している。出土遺物には小型壺、壺、高坏、台付甕、甕、磁石などがある。1～3は小型壺である。1は口縁部が直線的にひらき、胴部下半が大きく張るタイプである。大きく張った箇所には直径5mm程の孔が穿たれ、壺のような

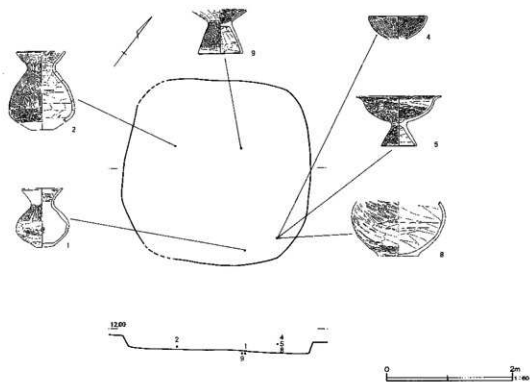
床面は緩やかな凹凸がある。貼床は検出されなかった。ピットは4基検出された。P 2は楕円形で、覆上に焼土が確認されたことから炉跡と考えられる。P 1は規模から柱穴とみられるが、P 4は楕円の形態や位

第67図 第35号住居跡

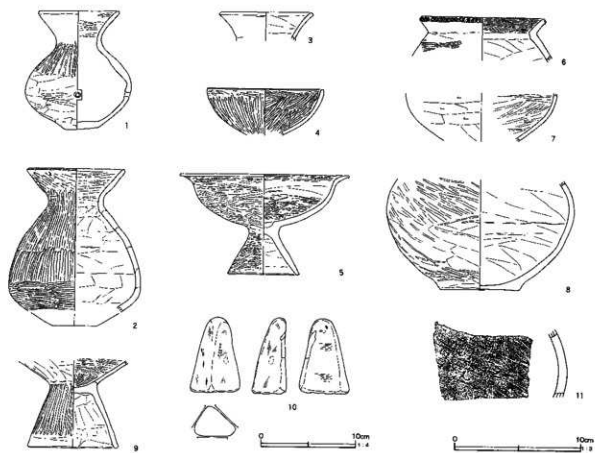


- S J 35
- 1 黒褐色土 ローム粒子・ローム粒子少量含む。
 - 2 暗褐色土 ローム粒子少量、ロームブロック多量含む。
 - 3 暗褐色土 ローム粒子少量、ロームブロック少量含む。
 - 4 暗褐色土 ローム粒子少量、焼土粒子少量含む。
 - 5 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
 - 6 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。

第68图 第35号住居跡遺物分布图



第69图 第35号住居跡出土遺物



形態をしている。器面はやや風化しているが、外面の調整は胴部上半がミガキ、下半はヘラケズリである。2は1に比べて胴部下半が膨らむタイプである。外面調整は斜め、縦、横の順にミガキ、内面は横方向のヘラナデである。底部を欠く。3は口縁部の破片。4・5は深身の高環で、4は口縁部が内湾し、5は端部が大きく外反する。5の内面中心部は窪む。ともに内外面ともミガキで調整される。6は甕の口縁部破片、9

は台付甕の脚部付近の破片である。6は内外面ともハケで調整され、端部には押圧キザミが入る。9は底部の外面がハケではなく、ヘラケズリであるのに対して、内面は粗いハケである。脚部の外面は縦のミガキ、内面は縦横のヘラケズリである。7・8・11は壺の胴部破片である。10は砥石の破片である。すべての面に研磨痕が認められる。

第26表 第35号住居跡出土遺物観察表 (第69図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎上	地色	調色	片名	備考
1	小型壺	8.5	12.5	3.6	A C 砂	b	Ⅷ	95	無彫 胴部焼成後穿孔1ヵ所 外面ヘラケズリ後ミガキ
2	小型壺	10.2			A C E 砂	c	Ⅶ	60	外面・内面顔面赤彩・ミガキ
3	小型壺 (10.0)				A 砂	c	Ⅷ	75	内外面ナデ
4	高環 (12.4)				A 砂	b	Ⅶ	60	内外面赤彩・ミガキ
5	高環 (18.0)	10.6	7.6		A 砂	c	V	60	内外面ミガキ 脚部内面煤付著
6	甕 (13.0)				A C E 砂	b	Ⅷ	40	口縁部ハケ状工具によるキザミ
7	壺				A 砂	c	V	15	外面ヘラケズリ 内面ミガキ
8	壺		8.4		A 砂	b	V	60	外面ナデ後ミガキ 内面ナデ 底部ヘラケズリ
9	台付甕		9.6		A 砂	c	Ⅷ	80	脚部外面ミガキ
10	砥石	長さ8.1cm 幅5.3cm 厚さ3.7cm 重さ145.19g						100	全面研磨痕
11	壺				A C E 砂	b	Ⅷ	10	外面ハケ後ミガキ

第36号住居跡 (第71図)

F-5グリッドに位置している。住居跡の中央部を溝状の攪乱が入り、西側は外郭の部分が攪乱によって壊されている。平面形態は隅丸方形で、規模は長径3.8m、短径3.5m、床面までの深さは0.45mである。覆土は黒褐色土で、ローム粒子が少量含まれ、壁際ではロームブロックがやや多い。

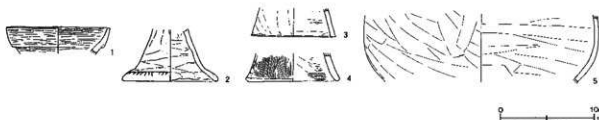
床面は平坦であるが、中央部がやや窪んでいる。貼床は検出されなかった。ピットは5基検出された。P2は炉跡で、東側を攪乱によって約1/3が壊されている。平面形態は楕円形で、規模は長径0.95m、深さは約5cm、短径については約0.7mと推定される。焼土

の堆積は薄かったが、底面に明瞭に残存していた。P1・3・5は支柱穴で、P4は入り口部のピットと推定される。溝溝は検出されなかった。

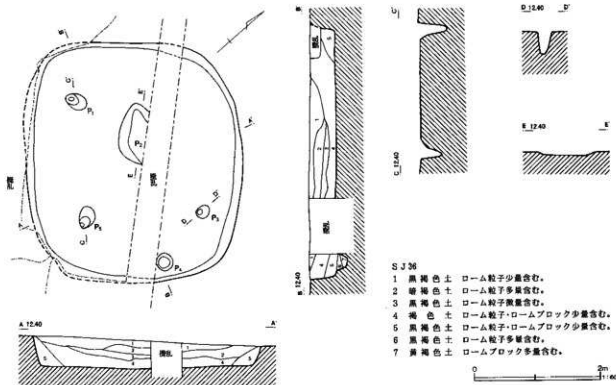
出土遺物 (第70図)

遺物は覆土及び床面から10点出土した。出土遺物には小型壺、高環、台付甕などがある。1は複合口縁壺の口縁部破片で、内外面ともナデで調整される。2は高環の脚部破片で、端部にはヘラによる押圧のキザミが入る。3・4は台付甕の脚部破片である。5は壺の胴部下半である。3～5は風化している部分もあるが、ハケで調整されているものとみられる。

第70図 第36号住居跡出土遺物



第71図 第36号住居跡



第27表 第36号住居跡出土遺物観察表 (第70図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	小型壺	(11.0)			A C砂	b VII	10	内外面赤彩・ミカキ	
2	高坏			10.2	A砂	b VII	50	外面赤彩 脚部端部キザミ	
3	古付甕			(9.0)	A砂	b VII	10	内外面ハケ(風化)	
4	古付甕			(10.0)	A砂	b V	10	内外面ハケ	
5	壺				A砂	c VI	20	内外面ハケ(風化)	

第37号住居跡 (第72図)

G-5グリッドに位置している。東辺と西辺は撓乱によって大部分が壊されている。平面形態は隅丸長方形で、規模は長径3.4m、床面までの深さは約0.45m、撓乱の入っている短径については3.1m前後と推定される。覆土は暗褐色土で、ローム粒子、ロームブロックが少量含まれる。

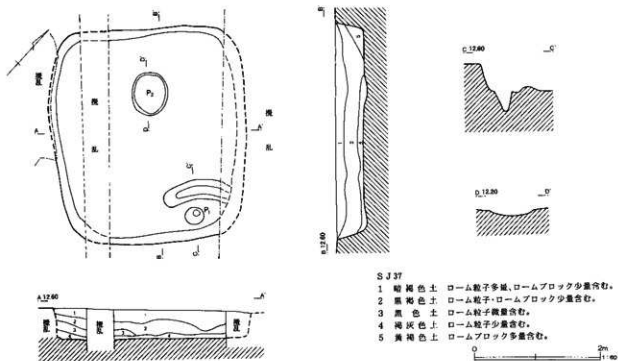
床面は所々に凹凸がみられる。貼床は検出されなかった。ピットは2基検出された。P2は炉跡で、中央やや北寄りて検出された。平面形態は楕円形で、規模は長径0.75m、短径0.55m、深さ7cmである。覆土は暗褐色土で、焼土はブロック状になっていた。P1はS J 30にみられる境状の凸帯に囲まれたピットである。ピットは直径約0.2m、深さ0.3mで、S J 30の

ような浅く、やや広いピットではなかった。境の部分では高さ5cm程で、ピットをとりまくようにつくられているが、西側が南壁との間に約0.3m空いている。この住居跡では他にピットは検出されなかったが、S J 30では柱穴を避けて設けられていることから、本来壁に取り付けてピットを囲むという造構ではないと考えられる。P1の周辺からは遺物は出土しなかった。壁溝は検出されなかった。

出土遺物 (第73図)

遺物は床面付近から10点余り出土した。出土遺物には高坏、甕、壺、甕などがある。1は複合口径の高坏である。口径部は直線的にひらき、二段の折り返しである。折り返し部分はヘラ等による刺突文が口径部を

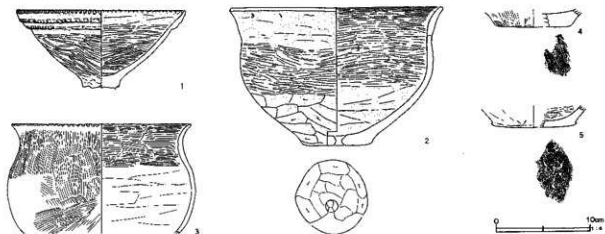
第72図 第37号住居跡



含め、三段に施文される。内外面の調整はミガキで行われ、赤彩される。2は形態的には甕であるが、底部に中心部を外れて1箇所孔が穿たれている。孔の外径

は約1cmであるが、中心部は5mm程である。内外面とも口縁部から胴部上半は横方向のミガキ、下半と底部はヘラケズリである。3は甕で、底部付近は欠く。口

第73図 第37号住居跡出土遺物



第28表 第37号住居跡出土遺物観察表 (第73図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高坏	(18.0)			A砂	b	VII	50	内外面赤彩 口縁部刺突文後ナデ(刺突文がつぶれている)
2	甕	(22.6)	14.6	7.4	A C砂	c	VII	80	内外面赤彩 底部焼成前穿孔 孔径1.3cm
3	甕	(19.0)			A砂	c	VI	10	口縁部キザミ 内外面ハケ
4	壺			(8.0)	砂	c	V	10	外面ハケ(風化)
5	壺			(9.0)	砂	c	V	15	外面ハケ(風化) 内面ミガキ

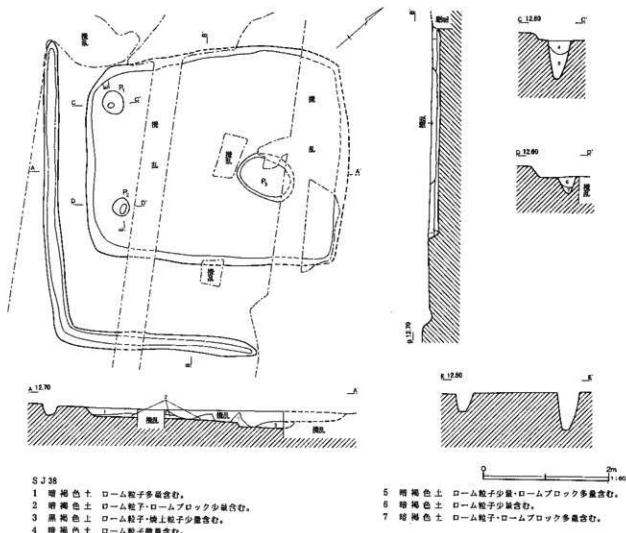
縁端部は押しキザミ、外面は縦及び斜めのハケ、内面は横方向のハケで調整される。4・5は壺の底部付近第38号住居跡（第74図）

G-4・5グリッドに位置している。住居跡の約半分は攪乱によって壊されている。また、他にも小規模な攪乱がいたるところに入っているため、破線で示した東側は推定である。この住居跡は竪穴の掘り込みの外側にL字の壁溝状溝が巡っている。便宜上一つの住居跡として調査したが、竪穴とは西側で約0.5m、南側で1.2mの距離があり、竪穴内にあるピットなどの位置関係とも合致しないことから、竪穴と溝状の遺構は同時性が薄く、異なる二軒の住居跡（S J 38-A、S J 38-B）である可能性が高い。

竪穴のS J 38-Aは平面形態が隅丸長方形になる
第74図 第38号住居跡

の破片で、基本的にはハケで調整されると考えられるが、やや風化が進んでいる。

とみられ、規模は短径3.45m、床面までの深さは0.15mである。覆土は暗褐色土で、ローム粒子が含まれるが、攪乱が所々に入っているため安定した層位は西壁付近に限られる。床面は平坦であるが、東側に向かって緩やかに傾斜している。貼床や壁溝は検出されなかった。ピットは3基検出された。P1・2は西壁寄りに設けられ、規模も異なるが、主柱穴と考えられる。P3はが跡である。平面形態は楕円形で、規模は長径0.9m、短径0.7m、深さ5cmと推定される。が跡は攪乱で約1/3が壊され、覆土にもその影響が表れ、層位に乱れが認められた。



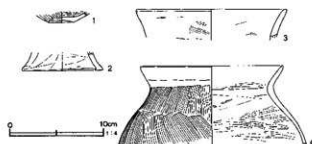
壁溝状のS J 38-BはAを囲むように西側から東側にかけて検出され、先端はともに止まっている。この溝状遺構は規模が幅0.2-0.3m、深さ0.1mであることや形態から住居の壁溝と考えられる。確認時において既に壁溝内以外の覆土はなく、S J 38-Aとの間の床面と考えられる部分と壁溝内の覆土が確認されたに留まっている。このことからBはAを覆うように重複していたことが分かるが、AとBの先後関係は明瞭ではない。しかし、Bの炉跡や柱穴となるピットは検出されていない状況から判断すると、AはBが廃棄された後に構築されたものと推定される。

出土遺物 (第75図)

遺物はS J 38-Aの覆土から10点出土した。1は小

型壺の底部付近の破片である。底部はヘラケズリ、内外面ともミガキで調整される。2は台付甕の脚部破片である。風化しているがハケ調整とみられる。3・4は甕の口縁部及び胴部にかけての破片である。ともに内外面ともハケで調整される。

第75図 第38号住居跡出土遺物



第29表 第38号住居跡出土遺物観察表 (第75図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	小型壺			2.6	A C E 砂	b	V	30	内外面ミガキ 底部ヘラケズリ
2	台付甕			(8.6)	A E 砂	b	V	20	内外面ハケ(風化)
3	甕	(16.0)			A C 砂	c	Ⅲ	10	内外面ハケ 風化顯著
4	甕	(15.0)			A C E 砂	b	V	20	内外面ハケ

第39号住居跡 (第76図)

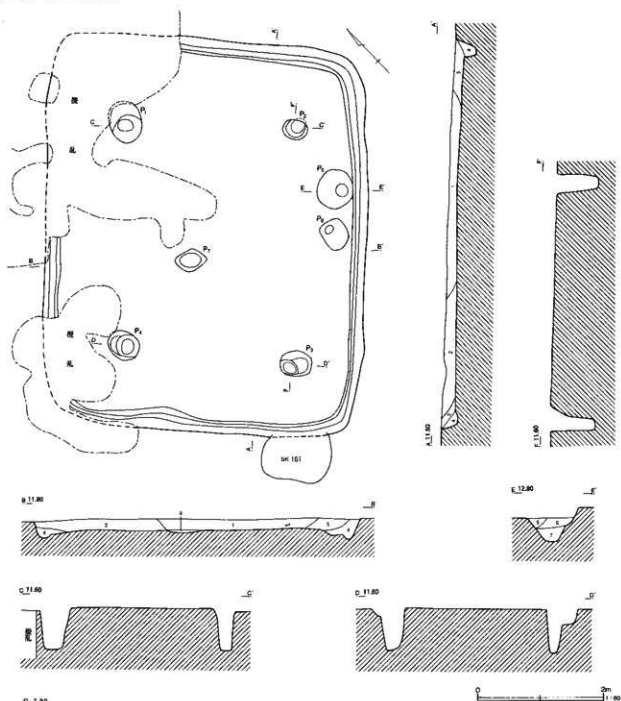
E-7・F-7グリッドに位置している。北側から西側にかけては植木の植え替えに伴う攪乱などによって壊されている。平面形態は長方形で、規模は長径6.3m、短径5.2m、床面までの深さは約0.2mである。覆土は暗褐色土で、ローム粒子が含まれる。

床面は、貼床は確認されなかったが、平坦である。壁溝はすべての壁に沿って検出されたことから、攪乱を受けている部分も本来は巡っているものと考えられ、南西部分が浅く、北側が深くなっている。幅は0.25-0.35m、深さは5-20cmである。ピットは7基検出された。P 1-4は主柱穴で、東寄りに設けられているが、壁溝からは0.6m-0.8mの位置にある。P 5・6は入り口部の柱穴とみられ、壁溝の一部を切り込んで掘られている。P 7は炉跡である。掘形は柱穴並に小型で、楕円形を呈する。規模は長径0.5m、短径0.3m、深さは約5cmである。覆土は暗褐色土で、焼土は粒子状になっていた。貯蔵穴は検出されなかった。

出土遺物 (第77図)

遺物は覆土や床面から約20点出土した。遺物には高坏、壺、甕、砥石などがある。1・2・10は複合口縁の壺である。1・2はいずれも折り返し口縁で、1の外表面は横ナデ、内表面は横ヘラミガキ、2は地文に細縄文を羽状に施し、4単位の6本一組の棒状付文を貼り付ける。また端部にも細縄文が施文される。内外面に赤彩される。3は甕の口縁部である。内外面ともミガキで調整、赤彩される。10は2と類似しており、同一個体の可能性もある。折り返しの端部は押玉キサミが入る。4から6は高坏の脚部であるが、4・5は台付甕の可能性もある。7は壺の底部破片で、小型壺の可能性もある。外面はミガキ、内面はナデである。8甕で、底部を欠く。口縁部外面は横ナデ、胴部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデである。11は小型甕の口縁部、12は甕の口縁部で、ともに端部には押玉キサミが入る。13-16は壺の胴部破片で、外面は細かいハケ

第76図 第39号住居跡



S J 39

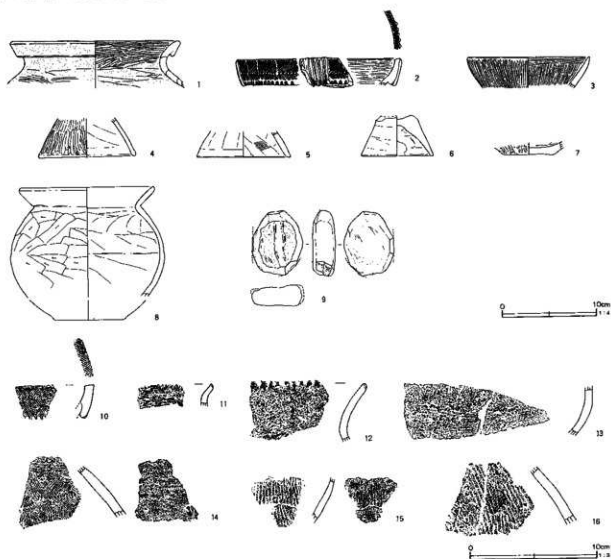
- 1 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子多量含む。
- 3 黒褐色土 ローム粒子微量、焼土粒子・焼土ブロック少量含む。
- 4 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。

- 5 暗褐色土 ローム粒子微量含む。
- 6 黒褐色土 ローム粒子少量含む。
- 7 暗褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック少量含む。
- 8 暗褐色土 焼土粒子多量、ローム粒子少量含む。

と粗いハケで調整される。内面はいずれも横ナデである。9は砂岩系の砥石である。中心部に溝状の研磨痕

が明瞭に残る。全体的に危弱で、剥離しやすい。

第77図 第39号住居跡出土土遺物

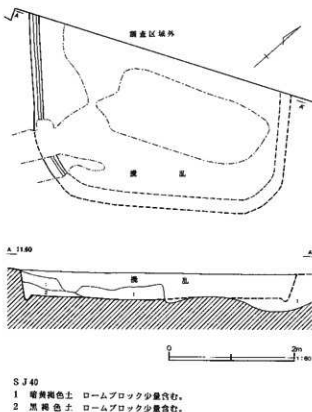


第30表 第39号住居跡出土土遺物観察表 (第77図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(18.0)			A E 砂	b	Ⅶ	15	内外面赤彩 内外面一部ミガキ
2	壺	(17.2)			A C E 砂	b	Ⅶ	10	内外面赤彩 口縁部外面羽状縄文 下端キザミ 棒状浮文5本残存
3	甕	(13.0)			A 砂	b	Ⅶ	20	内外面赤彩・ミガキ
4	高坏			(10.4)	A 砂	b	V	20	外面ミガキ 内面ナデ
5	高坏			(10.0)	A E 砂	b	V	20	内外面ナデ
6	高坏			7.6	A C E 砂	b	V	95	台密部を焼成後に2ヵ所穿孔する
7	壺			5.5	A C 砂	b	V	50	外面赤彩・ミガキ 内面ナデ・一部赤彩
8	壺	(15.4)			A D 砂	b	V	30	外面横・斜方向ヘラケズリ 内面ナデ
9	砥石	長さ6.8cm 幅5.3cm 厚さ2.3cm					Ⅳ	90	重さ88.9g
10	壺				A C E 砂	b	V	10	内面・外面一部赤彩 外面羽状縄文施文 口縁部下端キザミ
11	小型甕				砂	b	Ⅵ	10	口縁部キザミ
12	甕				A C 砂	c	Ⅵ	10	口縁部キザミ
13	甕				A C E 砂	b	V	10	外面ハケ・上半赤彩
14	壺				A C E 砂	b	V	10	外面に赤彩の痕跡 S字結節文の下位はハケ
15	壺				A C 砂	c	Ⅷ	10	外面ハケ
16	壺				A C E 砂	c	Ⅷ	10	外面ハケ

第40号住居跡 (第78図)

D・E-7グリッドに位置している。住居跡は全体の約半分が調査区にかかり、残りの北西側は調査区域外である。住居跡は大部分が攪乱のために壊れてお



第31表 第40号住居跡出土遺物観察表 (第79図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成色調	残存率	備考
1	高環	(18.0)			A C 砂	b II	15	内外面ナデ後ミガキ
2	甕	(22.0)			A 砂	b II	20	内外面ナデ 口縁部キザミ

第41号住居跡 (第80図)

E-7・8グリッドに位置している。住居跡は攪乱のために南西側の一部が確認されただけであった。平面形態は方形または長方形と考えられる。確認できた規模は長径4.7m、床面までの深さは約0.2mである。覆土は暗褐色土で、ローム粒子やロームブロックが少量含まれる。

床面は平坦であるが、壁側から中心部に向かって緩やかに傾斜している。貼床や壁溝は検出されなかった。

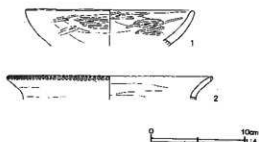
り、南西側と床面の一部が確認されたにすぎない。平面形態は隅丸方形または隅丸長方形と推定され、規模は一辺4m前後とみられる。床面までの深さは約0.45mである。覆土は暗黄褐色土で、ロームブロックが少量含まれる。

床面は平坦であるが、貼床は確認されなかった。壁溝は南西側の壁に沿って約3m検出された。規模は幅0.15m、深さ7cmである。炉跡やピットなどは検出されなかった。

出土遺物 (第79図)

遺物は覆土から2点出土した。1は高環である。やや厚みのある作りで、口縁部は内湾しながら立ち上がる。内外面とも調整は横方向のミガキである。2は甕の口縁部で、端部は押圧のキザミが入る。

第79図 第40号住居跡出土遺物

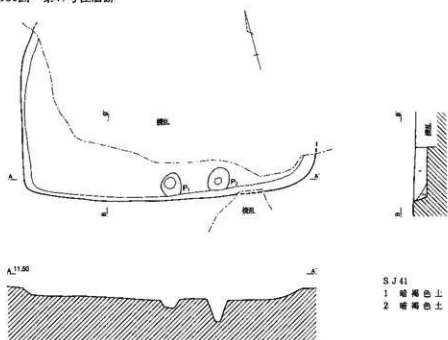


ピットは南側の壁に沿って2基検出された。2基のピットは対になるように配置され、S J 39と互いのピットの深さが異なるなど類似している。入り口になるものと考えられる。柱穴や炉跡などは検出されなかった。

出土遺物 (第81図)

遺物は覆土及び床面から約10点出土した。出土遺物には鉢、壺、甕、台付甕などがある。1は壺の口縁部

第80図 第41号住居跡

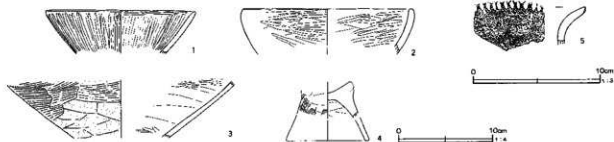


- S.J. 41
 1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
 2 暗褐色土 ロームブロック多量含む。

で、内外面とも縦方向のミガキが施され、赤彩される。2は内湾する跡の口縁部である。内外面とも横方向のミガキが施される。3は壺の胴部下半、5は壺の口縁

部である。3の調整は横ハケ、5の端部は押圧キザミである。4は台付壺の脚部である。外面はハケ、内面はヘラナデである。

第81図 第41号住居跡出土遺物



第32表 第41号住居跡出土遺物観察表(第81図)

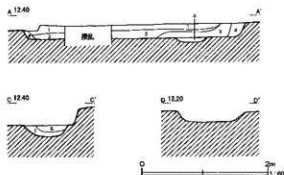
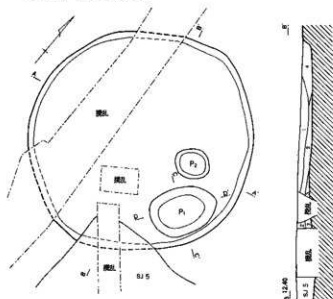
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	調整	色調	焼成率	備考
1	壺	(16.0)			A C砂	b	Ⅱ	15	内外面ミガキ
2	鉢	(18.0)			A C砂	b	Ⅱ	15	内外面ミガキ
3	壺				A砂	c	Ⅶ	10	外面赤彩・ナデ後ハケ 内面ナデ一部ミガキ
4	台付壺				A砂	b	Ⅳ	20	外面ハケ後ナデ 内面ナデ
5	壺				A砂	b	Ⅱ	10	口縁部キザミ

第42号住居跡(第82図)

G-5・6グリッドに位置している。住居跡の西寄りには擾乱、南東部を平安時代の住居跡S.J.5に壊されている。平面形態はやや歪んでいるが、円形に近い。規模は長径3.65m、短径3.5m、床面までの深さは0.2mである。覆土は黒灰褐色土でローム粒子が多量含ま

れる。床面は平垣であるが、胎床は確認されなかった。ピットは2基検出された。P.2は炉跡で、東寄りに検出された。平面形態は小規模な楕円形で、焼土はブロック状に堆積していた。P.1は土坑で、平面形態は楕円

第82図 第42号住居跡



S J 42

- 1 黒灰褐色土 ローム粒子少量含む。
- 2 黒色土 ローム粒子少量含む。
- 3 暗褐色土 ロームブロック少量含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- 5 暗褐色土 焼上粒子・焼上ブロック・ローム粒子少量含む。
- 6 黒褐色土 ローム粒子少量含む。
- 7 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。

第33表 第42号住居跡出土遺物観察表 (第83図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(20.0)			A砂	c	Ⅲ	10	内外面ハケ(風化) 広口葺の可能性あり
2	壺	(17.0)			A砂	b	V	10	外面・口縁端部羽状縄文施文 内面赤彩・ミガキ 地部RL
3	壺				AC砂	c	Ⅲ	10	無彩 外面羽状縄文施文 S字結節文 内面風化顯著

第43号住居跡 (第84図)

G-5・6、F-5・6グリッドに位置している。S J 44がS J 43か切り込んで構築されているが、ともに溝状の攪乱などによって住居跡の中央部や壁を壊されている。

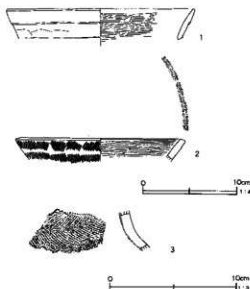
S J 43は平面形態は隅丸長方形と推定され、規模は長径5 m、短径4 m、床面までの深さは約0.3 mである。

形である。規模は長径1.1 m、短径0.75 m、深さ0.15 mである。炉跡に隣接することから貯蔵穴の可能性がある。壁溝や柱穴などは検出されなかった。

出土遺物 (第83図)

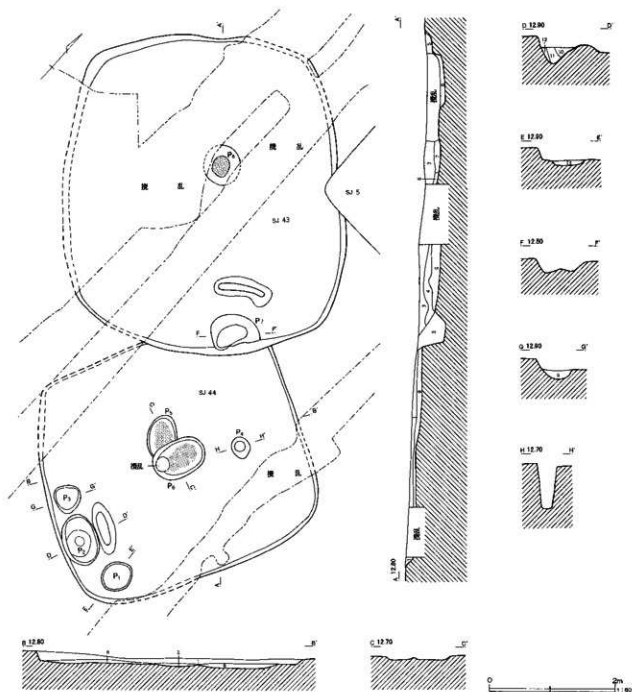
遺物は覆土から3点出土した。1～3は壺の破片で、1・2は口縁部、3は頸部の破片である。1は複合口縁で、薄い折り返しがある。外面は風化しているが、基本的には内外面ともハケで調整されていると考えられる。2は口縁部外面及び端部にRLの縄文が施文される。口縁部はやや粗いが、羽状となる。内面は横方向のミガキである。3は羽状に細縄文が施文される。

第83図 第42号住居跡出土遺物



覆土は暗褐色土で、ローム粒子、ロームブロック、焼土粒子が含まれ、少なからず攪乱の影響を受けている。

床面は所々に緩やかな凹凸がある。貼土や壁溝は検出されなかった。炉跡は中央北寄りで見出された。偶然であるが、攪乱と攪乱との間に炉床の部分だけが残存していた。掘り込みの部分は攪乱にかかっていると



SJ 43-44

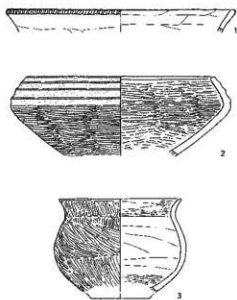
- 1 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子微量含む。
- 4 黒褐色土 ローム粒子少量、ロームブロック微量含む。
- 5 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 6 黒褐色土 ロームブロック多量含む。
- 7 黒褐色土 焼土粒子少量含む。
- 8 暗褐色土 ロームブロック多量含む。
- 9 暗褐色土 ローム粒子多量含む。
- 10 黒褐色土 ローム粒子少量含む。
- 11 暗褐色土 ローム粒子微量含む。
- 12 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。
- 13 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。

考えられ、検出することはできなかった。南東側の壁付近にはピットを囲むように堤状の凸帯が検出された。凸帯は粘土を貼ったものではなく、地山を掘り残してつくられている。ピット（P7）は壁にとりついて設けられているが、底面の中央部がやや盛り上がっている。

出土遺物（第85図）

遺物は覆土から約10点出土した。出土遺物には壺、鉢、甕がある。1は壺の口縁部で、端部は押圧キザミが入る。2は白付鉢で、脚部を欠く。口縁部に帯状の凸帯を三条もち、大きく内湾するタイプである。口縁部外面を除いて横方向のミガキが施され、全面にわたって赤彩される。3は小型の甕で、底部を欠く。口縁部が短く外反するタイプである。胴部に最大径がある。内外面ともミガキで調整される。

第85図 第43号住居跡出土遺物



第34表 第43号住居跡出土遺物観察表（第85図）

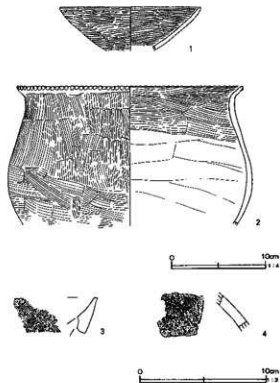
番号	器種	口径	器高	底径	胎上	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(24.0)			A C砂	b V	15		口縁部キザミ 内外面ナデ
2	白付鉢	(20.0)			A砂	b VII	15		内外面赤彩・ミガキ
3	甕	(13.0)			A砂	b V	30		内外面ミガキ

第44号住居跡（第84図）

S J 44はS J 43の南東側に構築されている。S J 43と同様、西辺及び東辺から北辺にかけても溝状の攪乱に壊されているが、遺構の残存状態はS J 43に比べて良好である。平面形態は隅丸方形で、規模は長径4.3m、短径約3.8m、床面までの深さは0.15mである。覆土は暗褐色土で、ローム粒子が少量含まれる。

床面は炉跡の付近がやや窪んでいる他、所々に凹凸がみられる。貼床は主に炉跡の周囲に2~10cm程の厚さで確認された。ピットは6基検出された。P5・6は炉跡で、中心部に設けられている。二つの炉跡はP6がP5を切り込んで構築されており、炉が付け替えられている。平面形態はともに楕円形で、規模はP5が長径0.7m、短径0.45m、深さ3cm、P6は長径0.85m、短径0.6m、深さ5cmと、付け替えたP6がやや拡大化されている。P2は住居跡の南壁にとりついて設けられた堤状の凸帯と対になるピットである。S J 43

第86図 第44号住居跡出土遺物



の場合と異なり、ピットと堤状の凸帯が接している。凸帯はS J 43の場合と同様、掘り残したものである。P 1と3はP 2を挟むように設けられているが、規模も小さく、浅いことから、直接この施設に関連するものとは考え難い。P 4は柱穴と考えられるが、対応するピットは検出されなかった。また、壁溝も確認できなかった。

出土遺物 (第86図)

遺物は覆土中から約10点出土した。1は高環の坏部で、内外面とも横方向のミガキが施される。2は甕で、口縁端部は押圧キザミが入り、内外面ともハケで調整される。3は口縁端部が薄く折り返し部分の厚い複合口縁壺である。外面はハケで調整される。4は壺の胴部上半の破片である。

第35表 第44号住居跡出土遺物観察表 (第86図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高環	(15.0)			A砂	b	Ⅶ	15	内外面赤彩・ミガキ
2	甕	(24.0)			A砂	c	Ⅵ	40	内外面ハケ 口縁部キザミ
3	壺				A砂	c	Ⅶ	10	内面赤彩 外面羽状縄文施文
4	壺				A砂	b	Ⅶ	10	外面赤彩・ミガキ

(2) 溝跡

第1号溝跡 (第87図)

D-5・E-5グリッドにかけて長さ約19mにわたって検出された。この溝は南北方向に延びるもので、北側はさらに調査区域外へ続いているとみられる。平成11年度に遺構を検出した際、この溝は覆土及び底面に多くの弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺物を伴うことや付近に方形周溝墓が存在することから、この溝も方形周溝墓の一部と考えられたが、平成12年度に調査を行った結果方形周溝墓ではなく、溝跡であることが明らかになった。この溝の性格については、遺物の出土状況から(擾乱部分などに他の時期の遺物が含まれるか)基本的には同一時期の遺物が一括で廃棄されたような状況を示している。こうした遺物の出土状況は方形周溝墓と何ら変わりはないが、現時点では方形周溝墓と考えるには溝の長さや連続性などに問題があり、集落や特定の住居群を取り囲む(環壕を含めた)区画溝の可能性を指摘するに留めておきたい。また、後述するSD13もSD1と同じ方向性をもつ溝で、覆土がやや異なることや溝が浅く、短いことなどに問題を残すが、出土遺物が同時期であることから関連する遺構であると判断した。

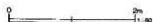
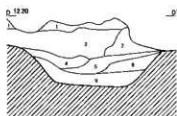
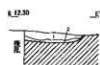
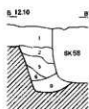
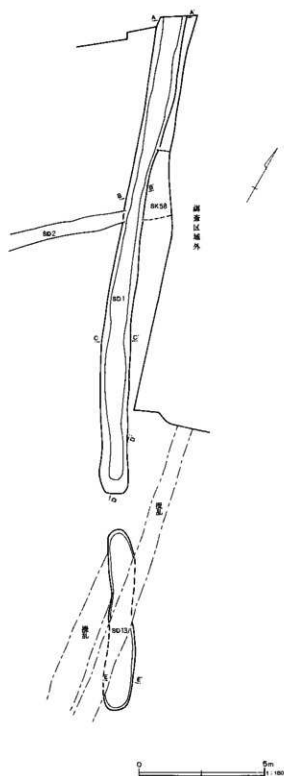
SD1の規模は幅1.1m、深さは0.4~0.7mである。

断面は箱形で、底面はやや東側に深くなっているが、平坦である。覆土は暗褐色土で、ローム粒子、ロームブロックが少量含まれるが、断面図を設定した箇所によっては覆土の最上層に黒褐色土が確認でき、基本的には暗褐色土の上層に1層存在する可能性が高い。

出土遺物 (第89図・第90図)

遺物は覆土から約70点出土した。遺物の多くは覆土中層以下から出土し、出土状況では正位または斜めになっている土器が多くみられた。出土遺物には壺、鉢、甕、台付甕などがある。1~4はいずれも複合口縁の壺である。1・3は口縁部が大きく外反し、端部付近にRLの縄文が一段施文されるものである。3は口縁部の破片であるが、胴部上半に波状文が巡ることから1・3は口径こそ異なるが類似した土器であるといえる。1は胴部上半に波状文で区画された中に三段の細縄文が巡る。3は口縁部内面にも羽状に縄文が施文される。他の部位は縦、横、斜めのミガキである。2・4は複合口縁で、内湾気味に立ち上がる壺である。2は外面に細縄文、端部に格子目状燃糸文、4は外面に細縄文を施文し、9本一組(4単位)の棒状付文が裝飾され、端部には細縄文が施文される。胴部は欠損し

第87図 第1号・第13号溝跡



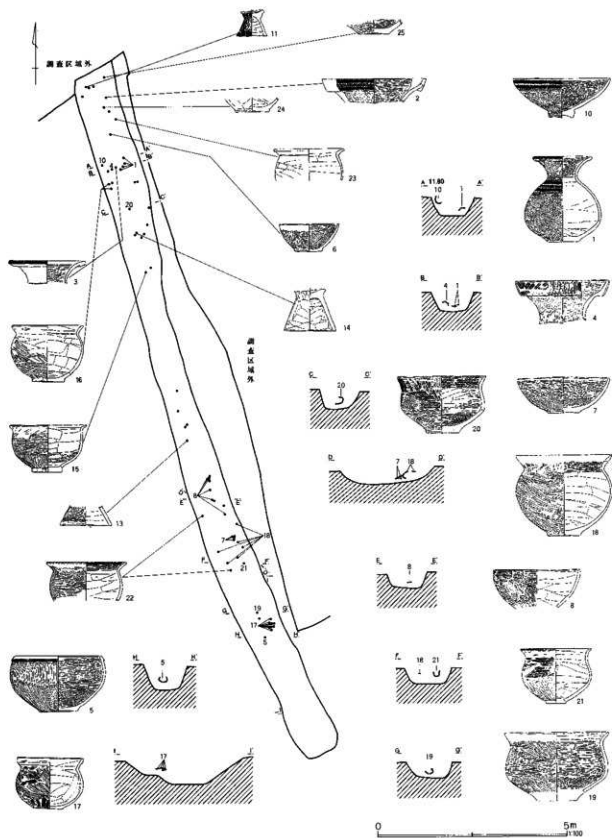
SD1

- 1 黒褐色土 焼土粒子・ローム粒子少量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒子多量含む。
- 4 黒褐色土 ローム粒子少量含む。
- 5 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 6 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子少量含む。
- 7 褐色土 焼土粒子多量、ロームブロック少量含む。
- 8 褐色土 ローム粒子少量含む。
- 9 暗褐色土 ローム粒子少量含む。

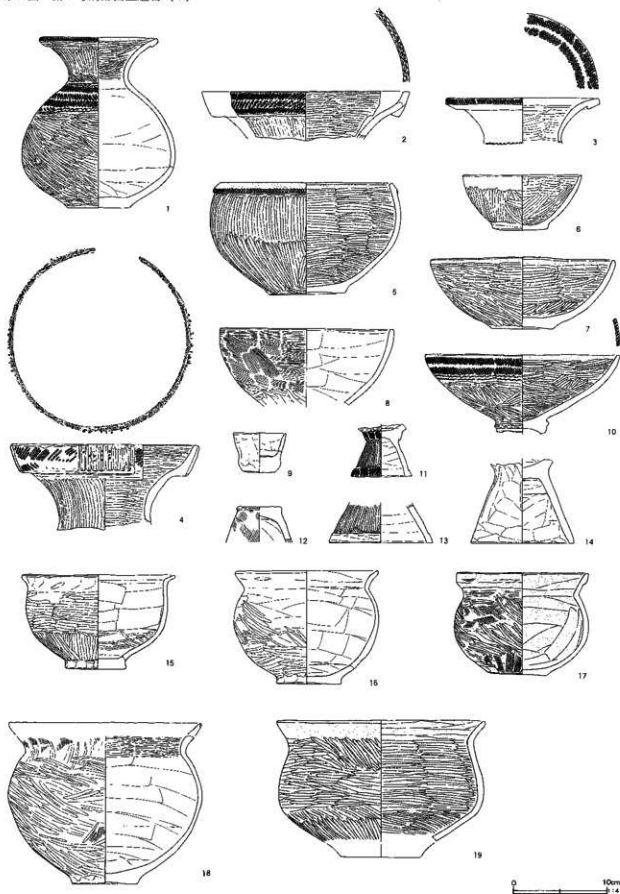
SD13

- 1 黒褐色土 ローム粒子少量含む。
- 2 黄褐色土 ロームブロック多量含む。

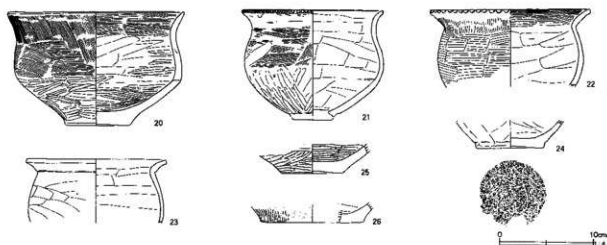
第88图 第1号沟跡遺物分布图



第89圖 第1号溝跡出土遺物(1)



第90図 第1号溝跡出土遺物(2)



第36表 第1号溝跡出土遺物観察表 (第89・90図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	片率	備考
1	壺	12.2	18.0	6.6	A砂	b	Ⅶ	60	内外面赤彩 肩部内形朱文 6箇所残存 口縁部R L縄文
2	壺	(22.0)			A E砂	b	Ⅶ	15	内外面赤彩 口縁部無彩 L R縄文・格子口状燃赤文
3	壺	(16.0)			A C砂	b	Ⅲ	20	口縁部・内面斜状縄文施文 頸部外面ナテ 下位S字結節文
4	壺	19.5			A砂	b	Ⅶ	100	内外面赤彩 口縁部棒状浮文 9本×4単位 円形朱文 2個×4組
5	無頸壺	18.2	11.8	8.2	A砂	b	Ⅶ	90	内外面赤彩・ミガキ 口縁部押圧キサミ 底部ヘラクスリ
6	鉢	12.6	7.8	5.9	A E砂	b	Ⅲ	90	無彩 内外面ミガキ
7	鉢	(19.6)	7.6	6.4	A C砂	b	Ⅶ	60	内外面赤彩・ミガキ
8	鉢	18.2			A砂	b	Ⅲ	95	外面ハケ後下位ミガキ 内面ナテ
9	ミニチュア	5.6	4.1	(3.3)	砂	c	V	85	内外面ナテ
10	高環	20.6			A砂	b	Ⅶ	95	内外面赤彩 口縁部S字結節文・羽状縄文施文・円形朱文施文
11	高環			6.4	A砂	b	Ⅶ	95	内外面赤彩 外面ミガキ 脚部増部・くびれ部粘土帯 L R縄文
12	台付甕				A砂	b	Ⅲ	50	外面ハケ 内面ナテ
13	台付甕			(11.0)	A砂	b	Ⅶ	15	外面赤彩・ハケ後縦方向ミガキ 内面ナテ
14	台付甕			11.0	A砂	b	Ⅲ	100	内外面ナテ
15	甕	16.3	9.8	6.5	A E砂	b	Ⅲ	95	外面ナテ後ミガキ 内面ナテ 一部ミガキ
16	甕	15.0	12.0	6.9	A砂	b	Ⅲ	75	外面ナテ後ミガキ 内面ナテ 底部木葉痕
17	広口壺	14.0	10.8	6.4	A C砂	b	Ⅶ	90	内外面赤彩 外面ハケ後ミガキ 内面ナテ
18	甕			7.0	砂	b	Ⅶ	60	外面ハケ後ミガキ 内面ナテ 底部ヘラクスリ
19	甕	21.2			砂	b	Ⅶ	90	内外面赤彩・ミガキ
20	甕	18.6	12.0	7.0	C砂	b	Ⅲ	95	外面ハケ後下位ミガキ 内面ヨコハケ 胴部ナテ下位ミガキ
21	甕	14.7			砂	b	Ⅳ	85	外面ハケ後ミガキ 内面ナテ 口縁部キサミ
22	甕	(17.0)			A E砂	b	Ⅲ	40	外面ハケ 内面ナテ後口縁部ヨコハケ 口縁部キサミ
23	甕	(15.0)			A砂	b	Ⅲ	25	内外面ナテ
24	小型甕			7.1	A C E砂	b	V	70	内外面ナテ
25	壺			6.4	A C D砂	b	Ⅶ	100	内外面赤彩・ミガキ
26	壺			(11.0)	A砂	c	Ⅲ	10	外面赤彩・ミガキ 内面ナテ

ているが、大半はミガキで調整されるものと考えられる。6～8は、内湾気味に開きながら立ち上がるタイプの鉢である。5は口縁部に短い複合口縁の無頸壺と考えられる。内外面とも赤彩され、口縁部下端に押圧キサミが入る。外面は縦、内面は横のミガキが施され

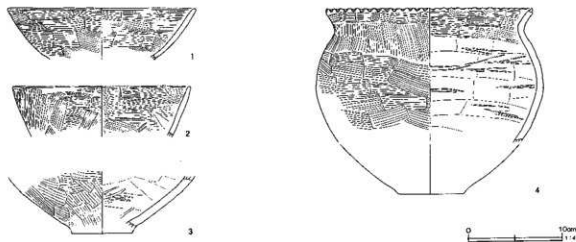
る。形態的には鉢である。鉢には大小があり、甕などと同様にミガキやハケなどの調整が混在する。8は内外面ともハケで調整されるが、他はミガキで調整されるように調整はミガキの頻度が高い。10・11は同一個体の可能性がある高環である。15・16・18・24は甕で

ある。口縁部が明瞭に「く」の字になり、胴部中央または下半が膨らむタイプである。形態的には鉢に近く、底部は明瞭につくり出す。口縁部を除く外面は縦、横、斜めのミガキで調整される。部分的にハケが入る場合もある。内面の多くはナデである。口縁部は横ナデである。21~23は外面の調整にはハケとミガキが混在
第13号溝跡 (第87図)

F-5・6グリッドに位置している。約7mにわたって検出されたが、中心部付近は溝状の攪乱と重複する。規模は幅約1m、深さ0.2~0.3mである。覆土は黒褐色土で、ローム粒子、焼土粒子が少量含まれるが、下層にはSD1と共通する暗褐色土がある。地形的にはSD13最も高く、SD1の中央部付近が低くなっているため、多少の深さや覆土による相違があるものと考えられる。SD1とSD13の間には約1.2mの掘り残り部分があるが、どのような性格のものかは現時点では断定できない。

出土遺物 (第91図)

第91図 第13号溝跡出土遺物



し、内面はヘラナデが多用される。25・26は壺底部の破片である。

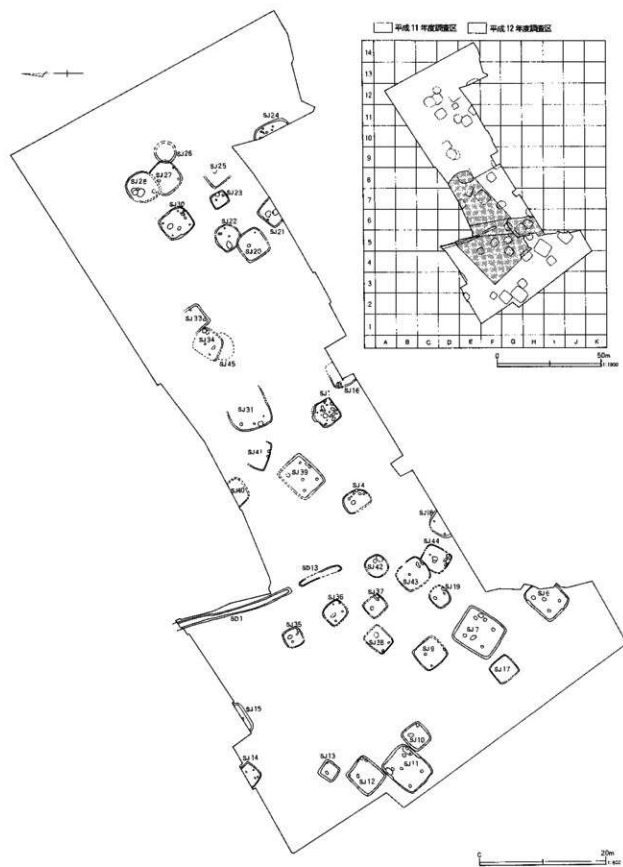
9はミニチュア(鉢)である。底部が厚く、ナデで仕上げられている。12~14は台付甕の脚部である。大(13・14)と小(12)二種類があるが、11と13のように調整と規格は必ずしも一致しない。

遺物は覆土から10点出土した。出土遺物には鉢、壺、甕がある。1・2は鉢で、1はやや深身、2は深身である。ともに内外面はハケで調整される。3は壺で、外面はハケで調整されるが、内面には部分的にミガキもみられる。4は甕である。外面はハケで調整され、口縁端部に押圧キザミが入る。

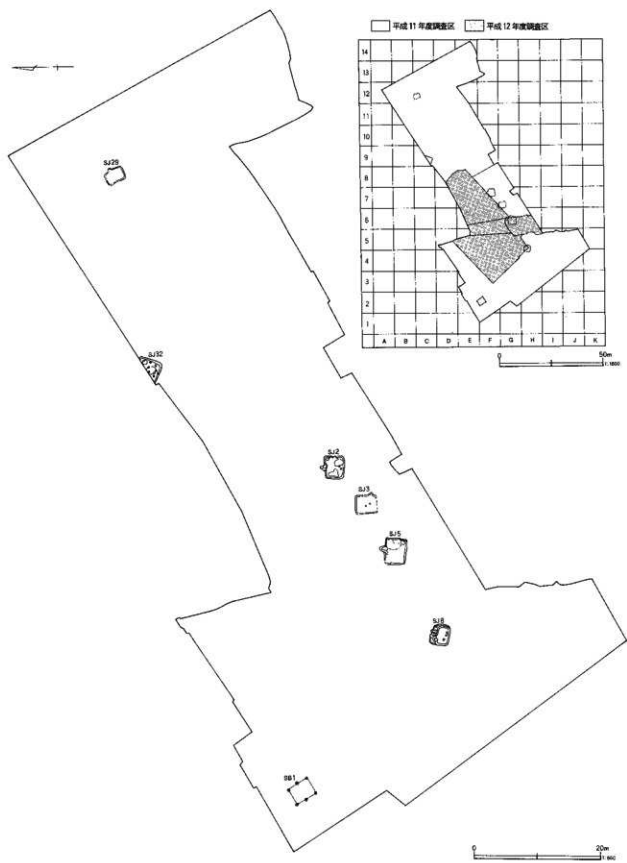
第37表 第13号溝跡出土遺物観察表 (第91図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	鉢	(20.0)			A砂	c	XI	15	内外面ハケ
2	鉢	(19.0)			A C砂	c	VI	40	内外面ハケ 後部分的にミガキ
3	壺	(22.0)			A E砂	c	VI	30	外面ハケ 内面ナデ後ミガキ 口縁部キザミ
4	甕				A砂	c	V	15	外面ハケ 内面ナデ後ミガキ

第92図 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構配置図



第93図 平安時代の遺構配置図



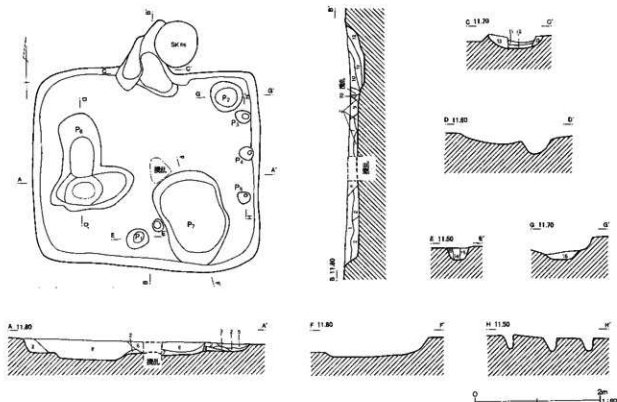
3. 平安時代の調査

概要

平安時代の集落は、調査区の中央部及び台地の縁付近で竪穴住居跡6軒と獨立柱建物跡1棟が検出された。S J 2・5・8・(32)は主軸方向が同じで、北東方向に一直線上に並び、カマドはいずれも北側に付設されている。一方台地縁辺に構築されたS J 3・29は主軸をやや東側に振り、カマドは北東方向に付設される。獨立柱建物跡は2×1間の小規模な側柱建物で、調査区の西側で1棟だけ検出された。出土遺物は須恵器環、長頸壺、蓋、甕、土師器甕、台付甕、ロクロ土師器環、埴、皿などがある。特にロクロ土師器は出土

遺物に占める割合が高く、この地域を特徴づける資料として重要な遺物である。隣接する下野田本村遺跡、東夷遺跡などでも同様な傾向が窺われ、東夷遺跡では土器焼成遺構も検出されている。基本的にこれらの遺跡は同じ台地上に展開する同一の遺跡と理解することができ、9世紀中頃から後半にかけて営まれた集落と考えられる。なお、住居内からは平安時代の土器群に混じて他の時代の土器が出土したが、遺構の重複が認められなかったため、グリッド出土遺物として掲載した。

第94図 第2号住居跡



S J 2

- 1 黒褐色土 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子少量含む。
- 2 暗褐色土 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子少量含む。
- 3 黄褐色土 焼土粒子少量、ロームブロック・暗褐色ブロック少量含む。
- 4 暗褐色土 焼土粒子・焼土ブロック少量、ローム粒子少量含む。
- 5 黒褐色土 焼土粒子・ローム粒子少量含む。
- 6 黒褐色土 焼土粒子少量、ローム粒子少量含む。
- 7 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 8 黒褐色土 焼土粒子・ローム粒子少量含む。

- 9 暗褐色土 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子・灰褐色粒子少量含む。

- 10 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子・ロームブロック含む。
- 11 暗褐色土 焼土粒子・焼土ブロック少量、ローム粒子・白色粘土ブロック少量含む。
- 12 暗褐色土 焼土粒子・焼土ブロック少量、ローム粒子少量含む。
- 13 灰褐色土 灰褐色粘土ブロック・焼土粒子少量含む。
- 14 黒褐色土 ローム粒子少量含む。
- 15 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- 16 黒褐色土 ロームブロック、焼土ブロック少量含む。

(1) 住居跡

第2号住居跡(第94図)

調査区の中央部、F-7グリッドに位置している。西壁とカマドの一部は擾乱や後世の土壌と重複し、壊されている。平面形態は東西方向に長い長方形で、規模は長径3.65m、短径3.1m、床面までの深さは0.2mである。覆土は黒褐色土で、ローム粒子、焼土粒子、炭化粒子などが含まれるが、小規模な擾乱が入っていることもあり、層位は安定していない。

カマドは北壁中央に1基付設されていた。残存長は1.2m、焚口幅約0.6mである。袖は左右とも検出されたが、基部付近は崩落していた。構築材は灰黄褐色粘土を用いてブロック状に積んでいる。燃焼面は床面から5cm程掘り込まれた楕円形の掘形で、焼土が底面に厚くレンズ状に堆積していた。燃焼部から煙道部へは煙道部が狭いこともあり、比較的急に立ち上がる。煙道部付近の覆土には焼土に混じってカマド構築土であるロームブロックや灰黄褐色粘土が多く含まれており、天井や側壁の崩落したものと推測される。

床面は多少凹凸があり、貼床は検出されなかった。床面からはビット(土塊状を含む)が8基検出された。2基の土塊状ビットはP6の断面でも明らかなように覆土の上面から掘り込まれた状況が確認できる。P7についても同様と思われる。2基の土塊は後世に帰属するものと考えられる。P2は位置や規模から貯蔵穴と考えられる。円形に近い平面形態で、直径約0.5m、深さ0.15mである。カマドに隣接することもあり、覆土には焼土ブロックが比較的多く含まれていた。P3～5はいずれも同一規模で、東壁に等間隔で位置しており、P6も含めて柱穴の一部とみられる。P1は入り口部のビットと考えられる。壁溝は検出されなかった。

出土遺物(第97図・第98図)

遺物は床面を中心に約200点出土した。出土遺物には須恵器環、高台付環、長頸壺、甕、ロクロ土器器環、塚、皿、土師器壺、台付壺、甕である。

1～5は須恵器環で、口縁部が内湾気味に立ち上が

り、端部で僅かに外反する。底部は回転糸切りである。いずれも南比企産である。6は南比企産の須恵器高台付環である。口縁部が直線的にひらく、小振りの環である。高台は貼り付けである。7～10は長頸壺である。7は胴部上半に幅約1cm、10は底部付近に回転ヘラケズリが入る。いずれも南比企産である。

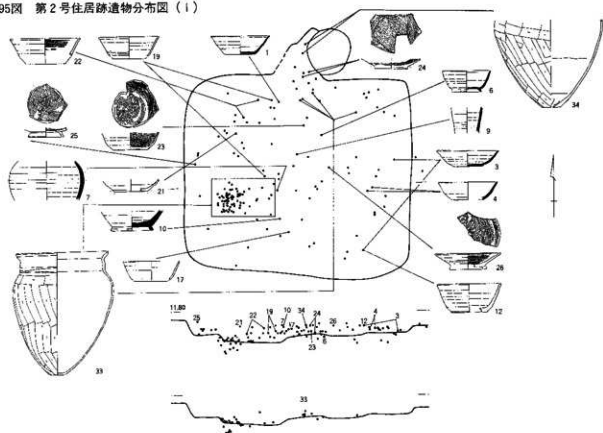
11・12は酸化焰焼成された環と塚で、広義で須恵器と呼称しても問題のない土器である。ここではロクロ成形にハケ状の痕跡を明瞭に留めていることや武蔵国外で生産された可能性なども考慮して敢えて須恵器の区別した。11の環と12の塚は明瞭にロクロの痕跡を残し、ハケのような調整具(ロクロを挽く際の布のようなもの)の痕跡を体部から口縁部にかけて残すものである。11は黒褐色をした薄いつくりで、口縁部は直線的にひらく。底部は回転糸切りである。12は底部がやや厚くつくり、口縁部は端部で僅かに外反する。ともに生産地は不明である。

13～26はロクロ土器である。13～21は環である。いずれも色調は淡褐色から赤褐色で、口縁部に比べて底部はやや厚くつくりされる。ロクロの痕跡は明瞭には残さず、底部は回転糸切りである。同時期の須恵器に比べると全体に深身で、口径と底径の比率が火きくなっている。21の体部下端はヘラケズリされる。

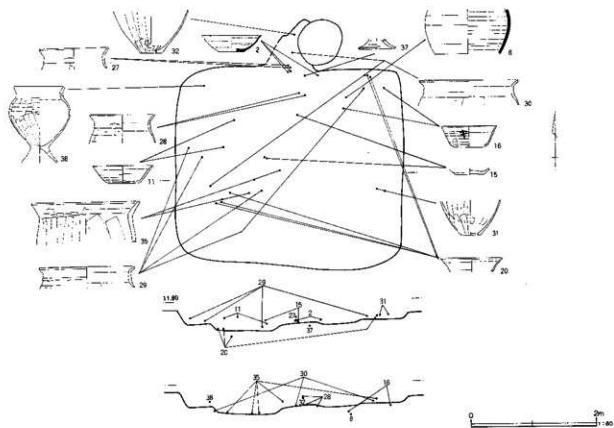
22～26は内面にミガキを伴う土器群で、13～21の土器群とは胎土が明らかに異なるものである。22は底部を、23は口縁部を欠く塚である。ミガキは基本的に横及び斜め方向に入る。23の底部は回転糸切りである。24～26は高台付皿で、口縁部から体部までが比較的短く、直線的にひらくタイプである。高台は24か削り出し、25・26が付け高台である。なお、25・26は内面が黒色処理される。

27～35は土師器甕である。27・28・31はやや小振りの「コ」の字口縁の甕である。27はやや「コ」の字がくずれているが、明瞭に「コ」の字が残る段階である。最大径は胴部上半にあり、底径は5cm弱である。

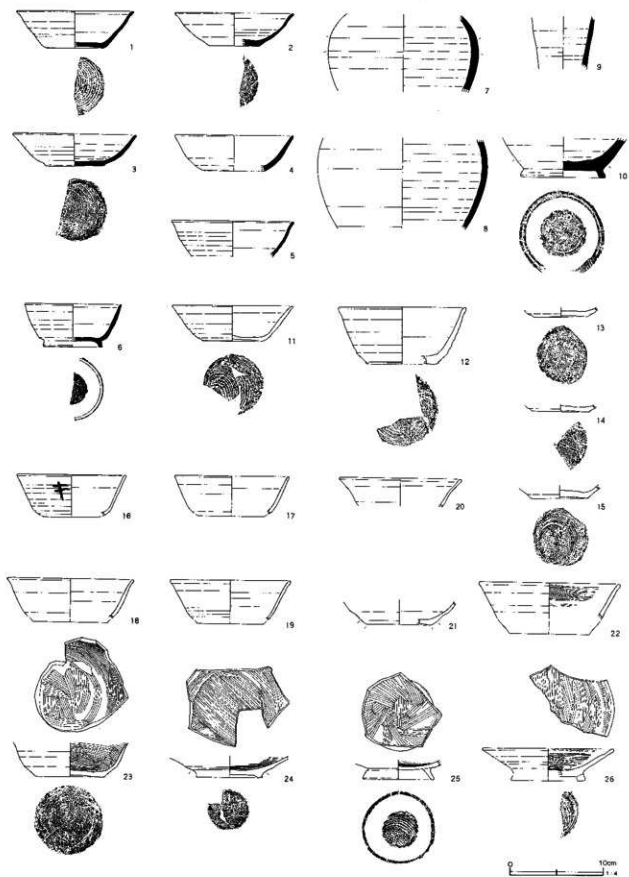
第95图 第2号住居跡遺物分布图(1)



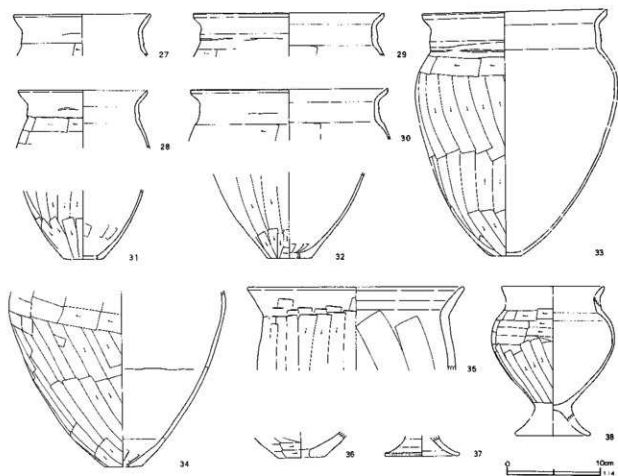
第96图 第2号住居跡遺物分布图(2)



第97图 第2号住居跡出土遺物(1)



第98図 第2号住居跡出土遺物(2)



29～34は典型的な「コ」の字口縁の甕で、小振りの甕と基本的に形態の特徴は同じである。35は厚手の甕で、口縁部は「く」の字になる。胎土はロクロ土師器の後者に似ていることから在産の可能性は少なく、搬入

されたものと考えられる。36は底部の中心部に孔をもつ甕の破片である。37・38は台付甕で、37は脚部、38は脚部から脚部へかけての破片である。脚部は大きくひらき、口縁部は甕と同じく「コ」の字とみられる。

第38表 第2号住居跡出土遺物観察表(第97・98図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	(12.3)	3.9	(6.0)	ABCDE針	b	III	30	須恵器 南北企産 ロクロナテ 底部回転糸切り
2	環	(12.4)	3.5	(5.4)	AC	a	II	30	須恵器 南北企産 ロクロナテ 底部回転糸切り
3	環	13.0	3.6	6.3	ABC針	b	I	60	須恵器 南北企産 ロクロナテ 底部回転糸切り
4	環	(12.4)			ABCDE針	a	I	30	須恵器 南北企産 ロクロナテ
5	環	(12.8)			AC針	a	III	20	須恵器 南北企産 ロクロナテ
6	高台付環	(10.2)	4.5	(6.3)	A E針	a	II	40	須恵器 南北企産 ロクロナテ 底部回転糸切り後高台貼付
7	長頸壺				ACE針	b	II	20	須恵器 南北企産 ロクロナテ 外面一部ヘラケズリ
8	長頸壺				ACE針	b	I	10	須恵器 南北企産
9	長頸壺				AC針	a	II	10	須恵器 南北企産
10	長頸壺			8.9	ACE針	b	II	60	須恵器 南北企産 体部下端ヘラケズリ 高台貼付
11	環	(12.7)	3.7	6.2	AD	b	VI	60	酸化焙焼成 ロクロナテ 底部回転糸切り
12	壺	(13.3)	6.1	(7.4)	AE	b	IX	20	酸化焙焼成 ロクロナテ 底部回転糸切り
13	環			(5.8)	ABCD	b	V	70	ロクロ土師器 ロクロナテ 底部回転糸切り
14	環			(6.0)	ACD	b	X	20	ロクロ土師器 ロクロナテ 底部回転糸切り

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	数量	備考
15	環	(11.4)		(6.0)	ABD	h	X	70	ロクロ土師器 ロクロナデ 底部回転糸切り
16	環	(12.4)			ABCD	b	V	30	ロクロ土師器 ロクロナデ 蓋土器「キ」
17	環	(12.0)			ABCE	b	VI	20	ロクロ土師器 ロクロナデ
18	環	(13.2)			ACD	b	IX	20	ロクロ土師器 ロクロナデ
19	環	(12.5)			ABD	b	IX	10	ロクロ土師器 ロクロナデ
20	環	12.7			AC	b	V	70	ロクロ土師器 ロクロナデ
21	環			(6.8)	AD	b	V	10	ロクロ土師器 ロクロナデ 体部下端ヘラケズリ
22	埴	(14.8)			ABCD	b	V	10	ロクロ土師器 ロクロナデ 内面ミガキ
23	埴			7.2	ACD	h	X	50	ロクロ土師器 ロクロナデ 内面ミガキ 底部回転糸切り
24	高台付皿				ABD	b	V	50	ロクロ土師器 ロクロナデ 内面ミガキ 高台部削り出し
25	高台付皿			7.5	ABD	h	X	70	ロクロ土師器 ロクロナデ 内面黒色処理 内面ミガキ 高台貼付
26	高台付皿	(13.7)			ABD	b	VI	30	ロクロ土師器 ロクロナデ 内面黒色処理 内面ミガキ 高台貼付
27	甕	(14.4)			ABC	b	VI	10	「コ」の字口縁 口縁部ヨコナデ 胴部横方向ヘラケズリ
28	甕	(13.8)			ABC	b	X	20	「コ」の字口縁 口縁部ヨコナデ 胴部横方向ヘラケズリ
29	甕	(20.0)			ABCD	b	V	30	「コ」の字口縁 口縁部ヨコナデ 胴部横方向ヘラケズリ
30	甕	(20.9)			ABCD	b	X	20	「コ」の字口縁 口縁部ヨコナデ 胴部横方向ヘラケズリ
31	甕			(4.2)	ABCD	b	VI	50	外面ヘラケズリ
32	甕			(4.6)	ABC	b	VI	20	外面ヘラケズリ
33	甕	(19.6)	(26.0)	(3.4)	ABC	b	X	50	「コ」の字口縁 口縁部ヨコナデ 胴部縦方向ヘラケズリ
34	甕			4.0	ABCD	b	X	70	外面ヘラケズリ
35	甕	(22.7)			ACD	b	X	20	厚手の「く」の字口縁 外面ヘラケズリ
36	甕			(4.8)	ABCE	b	V	40	穿孔 外面ヘラケズリ 内面ナデ
37	台付甕			(7.6)	ABCD	b	V	20	内外面ヨコナデ
38	台付甕				ABC	b	X	40	「コ」の字口縁 口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ

第3号住居跡 (第99図)

調査区の中央、G-6・7グリッドに位置している。S J 4 を切り込んで構築されているが、住居跡の半分以上の面積をSK44・46などの後世の土壌や擾乱と重複している。平面形態は南北方向に長い長方形で、規模は長径3.6m、短径2.9m、床面までの深さは約0.2mである。覆土は黒褐色土で、ローム粒子、焼土粒子が少量含まれるが、擾乱がいたるところに入っているため、層位は不安定である。

カマドは東壁やや南寄りに1基付設されていた。残存長は約0.4m、擾乱の影響を受けている焚口の幅は約0.5mと推定される。燃焼部は床面から約0.1m掘り込まれ、底面付近にはブロック状に焼土層が形成されていた。煙道部は燃焼部から急激に立ち上がる。なお、袖については確認されなかった。

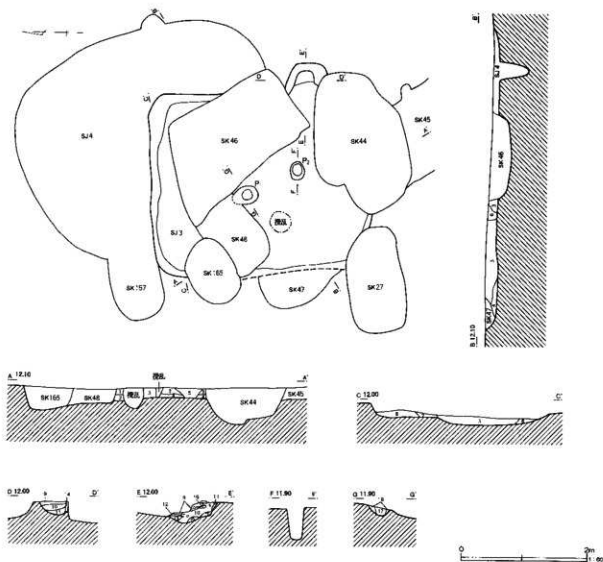
床面は擾乱の影響もあるが、凹凸が著しい。貼床は行われなかったとみられる。ピットは3基検出されたが、柱穴と考えられるのはP 2だけで、他は覆土が異なることから後世に帰属する可能性もある。壁溝は検出されなかった。

出土遺物 (第102図・第103図)

遺物はカマド、床面付近を中心に約100点出土した。特にカマドからはロクロ土師器が8個体逆さに重ねられて出土した。このような現象については、カマド祭祀などに関連する行為の可能性も指摘されている。出土遺物には須恵器埴、甕、ロクロ土師器環、埴、皿、土師器甕などがあるが、ロクロ土師器が圧倒的な量を誇る。1・2は須恵器埴の口縁部から体部にかけての破片で、南北比産である。3は須恵器甕の胴部破片で、外面は平行引きである。

4-27はロクロ土師器である。4-19は不である。S J 2 に比べると土器の厚みやつくりが異なる。口縁部から体部にかけては、直線的または内湾気味に立ち上がる。底部はやや上げ底気味で、底径は口径に対する比率が大きい。底部は回転糸切りされる。20-23は埴である。環に比べると口径と底径の比率はやや小さくなる。底部は回転糸切りである。24-27は内面にミガキが入り、内面または内外面に黒色処理される土器群である。24は体部下端と底部外周が手持ちでヘラケ

第99図 第3号住居跡



S.J.3

- 1 黒褐色土 ローム粒子多量含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒子少量含む。
- 3 黒褐色土 焼土粒子・ローム粒子少量含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- 5 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 6 黒褐色土 ローム粒子微量含む。
- 7 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。
- 8 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 9 暗褐色土 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子多量含む。

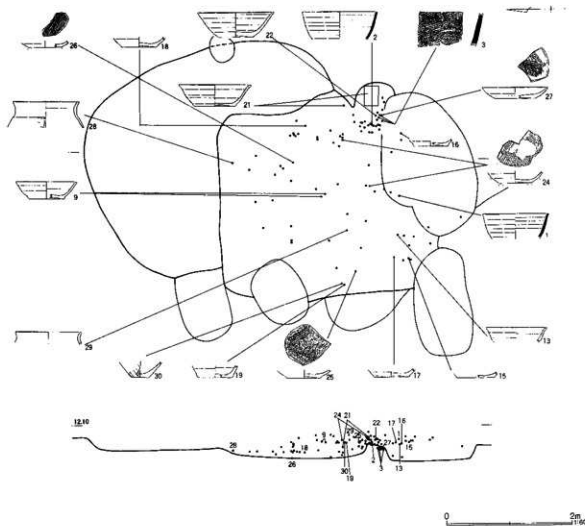
- 10 暗褐色土 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量含む。
- 11 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子微量含む。
- 12 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- 13 黄褐色土 ローム粒子多量含む。
- 14 暗褐色土 ローム粒子・薄灰色粘粒子少量含む。
- 15 暗褐色土 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 16 褐色土 粘土ブロック多量含む。
- 17 黒褐色土 粘土粒子・ローム粒子少量含む。
- 18 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。

ズリされる。24は内湾する堦の底部破片である。26は内外面とも黒色処理される堦または皿である。底部は回転ヘラケズリされる。27は皿、ミガキは見込みの部

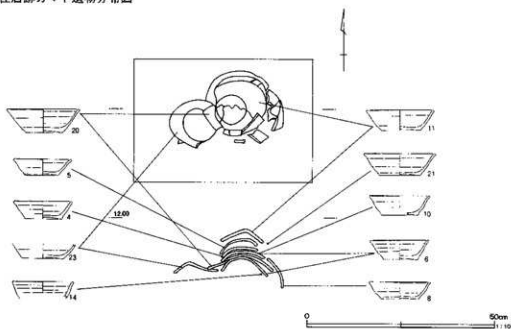
分が主体である。26を除いて回転糸切りである。

28・29は甕の口縁部破片である。30は甕の底部付近の破片である。

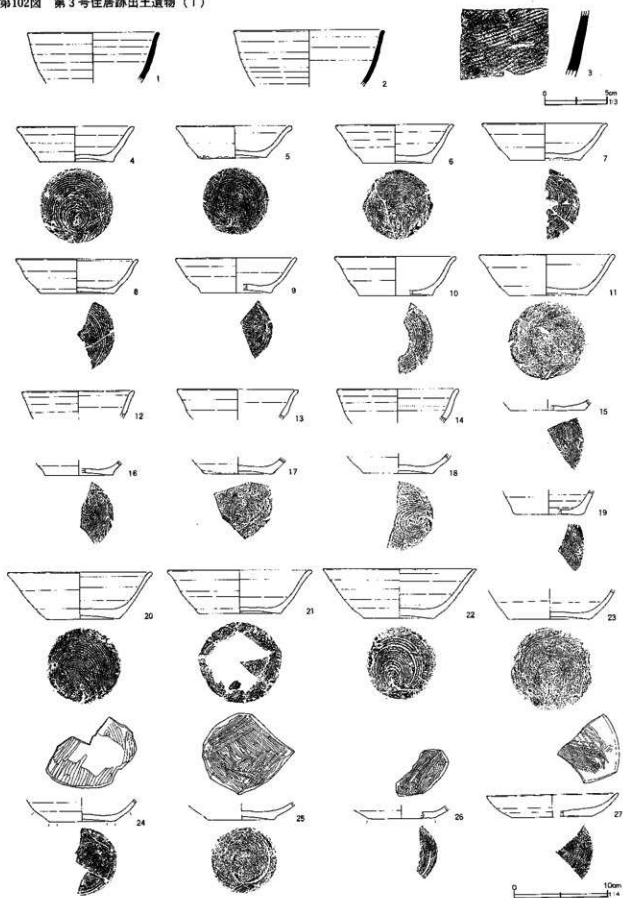
第100図 第3号住居跡遺物分布図



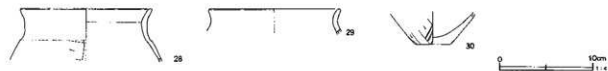
第101図 第3号住居跡カマド遺物分布図



第102图 第3号住居跡出土遺物(1)



第103図 第3号住居跡出土遺物(2)



第39表 第3号住居跡出土遺物観察表(第102・103図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	状態	備考
1	埴	(14.0)			A砂砂	a	II	10	須恵器 南北産産 ロクロナテ
2	埴	(16.0)			A C砂礫	b	II	10	須恵器 南北産産 ロクロナテ
3	甕				A E針	a	II	10	須恵器 外面平行引き
4	環	12.5	3.7	8.0	A砂	b	XI	90	ロクロ土師器 底部回転系切り
5	環	12.4	3.4	6.8	A砂	b	VII	70	ロクロ土師器 底部回転系切り
6	環	12.6	4.1	7.4	A砂	b	XI	100	ロクロ土師器 底部回転系切り
7	環	13.6	3.9	7.6	A砂	b	VII	45	ロクロ土師器 底部回転系切り
8	環	(13.0)	3.6	(7.8)	A砂	b	V	40	ロクロ土師器 底部回転系切り
9	環	(13.0)	3.7	(7.6)	A D砂	b	XI	25	ロクロ土師器 底部回転系切り
10	環	(12.9)	4.1	(7.8)	A砂	b	VII	40	ロクロ土師器 底部回転系切り
11	環	14.5	4.3	8.4	A砂	a	VII	70	ロクロ土師器 底部回転系切り
12	環	(12.0)			A砂	b	VII	20	ロクロ土師器
13	環	12.8			A砂	b	XI	45	ロクロ土師器
14	環	(13.0)			A砂	b	VII	15	ロクロ土師器
15	環			(8.0)	A砂	b	VII	25	ロクロ土師器 底部回転系切り
16	環			(7.2)	A D砂	b	XI	40	ロクロ土師器 底部回転系切り
17	環			(7.2)	A砂	b	VII	40	ロクロ土師器 底部回転系切り
18	環			7.4	A砂	a	VII	50	ロクロ土師器 底部回転系切り
19	環			(7.6)	A砂	b	XI	20	ロクロ土師器 底部回転系切り
20	埴	15.4	5.0	7.8	A D砂	a	VII	95	ロクロ土師器 底部回転系切り
21	埴	15.4	4.6	8.8	A D砂	b	VII	90	ロクロ土師器 底部回転系切り
22	埴	(16.2)	5.2	7.6	A D砂	b	VII	60	ロクロ土師器 底部回転系切り
23	埴			8.8	A砂	b	VII	70	ロクロ土師器 底部回転系切り
24	埴			(7.0)	A砂	b	VI	40	ロクロ土師器 底部回転系切り
25	埴			7.0	A D砂	b	VI	80	ロクロ土師器 底部回転系切り
26	埴			(7.0)	A砂	b	VI	25	ロクロ土師器 底部回転系切り
27	甕	(14.0)	2.4	(8.5)	A	b	VI	25	ロクロ土師器 底部回転系切り
28	甕	(14.0)			A D砂	a	VII	15	口縁部ヨコナテ 胴部横ヘラケズリ
29	甕	(14.0)			A砂	a	VII	10	口縁部ヨコナテ
30	甕			(3.8)	A砂	a	VII	20	外面ヘラケズリ 内面ヘラナテ 底部ヘラケズリ

第5号住居跡(第104図)

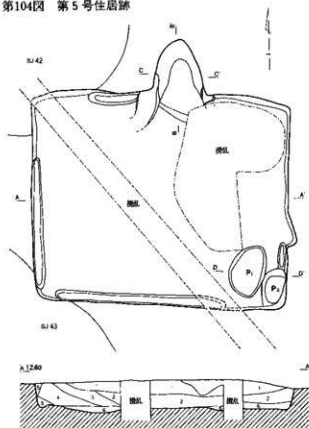
調査区のやや西より、G-6グリッドに位置している。S J 42・43を切り込んで構築されているが、カマド付近などに擾乱が入っている。平面形態は東西方向に長い長方形で、規模は長径4.25m、短径3.4m、床面までの深さ0.4mである。覆土は暗褐色土で、ローム粒子、焼土粒子が少量含まれる。

カマドは北壁中央付近に1基付設されていた。残存長は1.25m、擾乱の影響がある焚口幅は約0.8mと推

定される。袖は擾乱などにより殆どが失われていたが、部分的に袖の構築材である粘土が被熱していた。燃焼部は楕円形の掘形をもち、床面から僅かに掘り込まれていた。焼上層は煙道部にかけてブロック状に袖の構築材である粘土ブロックとともに層を成していた。煙道部はS J 2・3などに比べると長くつくられ、緩やかな勾配をもっている。

床面は平坦で、壁に沿って幅約1mの貼床が確認さ

第104図 第5号住居跡



S.J.5

- 1 暗褐色土 ローム粒子, 焼土粒子含む。
- 2 黒褐色土 ロームブロック, 焼土ブロック少量含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- 4 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック無量含む。
- 5 黒褐色土 ロームブロック多量含む。
- 6 暗褐色土 ロームブロック多量, ローム粒子少量含む。
- 7 黒褐色土 粘土, 焼土, ローム粒子少量含む。
- 8 灰黄褐色土 粘土。
- 9 灰黄褐色土 暗褐色土, 粘土粒子, 焼土粒子, 焼土ブロック多量含む。
- 10 暗褐色土 焼土粒子少量含む。
- 11 黄褐色土 ロームブロック多量含む。
- 12 黒褐色土 ローム粒子, ロームブロック少量含む。
- 13 暗褐色土 ロームブロック多量含む。



れた。ピットは南東隅に2基検出され、ともに楕円形である。貯蔵穴に匹敵する規模をもっているが、位置としてはやや不自然である。また、壁溝はすべての壁に沿って検出されたが、連続するものではない。

出土遺物 (第105図)

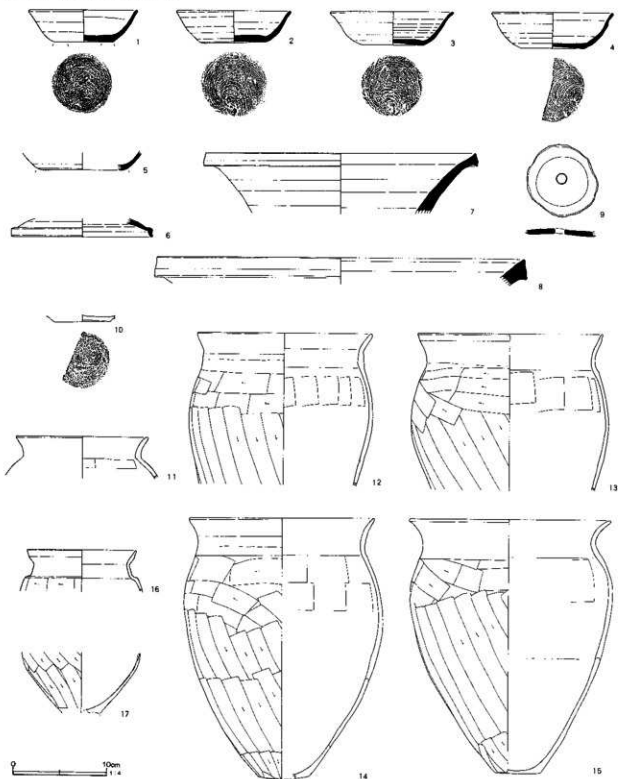
遺物は覆土を中心に約50点出土した。出土遺物には

須恵器環、蓋、甕、土師器甕、台付甕などがある。1～5は須恵器環である。1はやや小振りであるが、口径は12～13cm、底径が7cm弱である。体部はやや内湾し、口縁端部が僅かに外反する。1・5の底部は外周のみ回転ヘラケズリ、他は回転ヘラケズリである。いずれも南比企産である。6は須恵器蓋、7・8は須恵

第40表 第5号住居跡出土遺物観察表 (第105図)

番号	器種	口径	器高	底径	粘土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	11.4	3.5	6.3	ACE針	a	I	60	南比企産 ロクロナテ 底部回転系切り後外周ヘラケズリ
2	環	12.0	3.6	7.0	AE砂	b	I	80	南比企産 ロクロナテ 底部回転系切り
3	環	12.9	3.6	6.6	ACE針	a	I	60	南比企産 ロクロナテ 底部回転系切り
4	環	(12.7)	3.8	6.8	ACE針	a	II	40	南比企産 ロクロナテ 底部回転系切り
5	環	(14.8)		(8.4)	ACE針	a	I	10	南比企産 ロクロナテ 体部下端ヘラケズリ
6	蓋	(14.8)			ACE針	a	I	10	南比企産 ロクロナテ
7	甕	(28.5)			ACE砂	b	XI	10	南比企産 ロクロナテ
8	甕	(38.0)			ACE針	b	I	10	南比企産 ロクロナテ
9	紡錘車			6.0	AE砂	b	II	80	南比企産 須恵器環底部転用
10	環			5.9	ABD	b	V	50	ロクロナテ土師器 ロクロナテ 底部回転系切り
11	甕	(13.8)			ABCE砂	b	X	20	「く」の字口縁
12	甕	18.5			ABCD	b	V	40	「こ」の字口縁
13	甕	19.5			ABCD	b	V	50	「こ」の字口縁
14	甕	19.5	27.6	5.4	ABCD	b	V	50	「こ」の字口縁
15	甕	21.7	26.7	4.8	ABCD	b	V	60	「く」の字口縁
16	台付甕	(11.5)			AB	b	VI	20	「こ」の字口縁
17	台付甕				ABCE	b	VI	50	内面風化

第105図 第5号住居跡出土遺物



器裏の破片で、いずれも南比企産である。9は南比企産の須恵器坏を転用した紡錘車である。底部の中心部に直径約1cmの孔を穿っている。

11は小型の甕で、胴部が大きく張るタイプである。

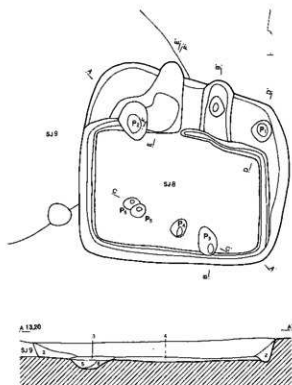
12～15は「く」の字から「コ」の字口縁の甕である。年代的には「く」の字から「コ」の字口縁への転換期とみられ、タイプが定型化していない。16・17は台付甕の破片で、16の口縁部は「コ」の字になっている。

第8号住居跡 (第106図)

調査区の西側、H-4・5グリッドに位置している。S J 9を切り込んで構築されている。平面形態は台形で、規模は長径3.35m、短径3.15m、床面までの深さは約0.5mである。覆土は黒褐色上で、ローム粒子、焼上粒子が少量含まれる。

カマドは北壁に2基検出された。検出された塚溝の状況から、この住居跡はある時期に縮小し、2軒の住居跡が重なっていることが明らかになった。カマドa(右)は古い住居跡に帰属するもので、僅かに北壁かかって東寄りにつ設されている。残存長は0.9m、燃焼部から煙道部にかけての幅は約0.45mである。断面観察では、燃焼部は床面から数cm余り掘り込まれているが、新旧の住居跡では床面の高さが異なるため、実際には0.1m余りの掘り込みがあったものと推測され

第106図 第8号住居跡



S J 8

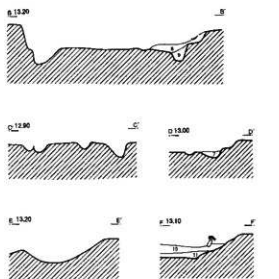
- 1 黒褐色土 ローム粒子、焼上粒子少量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子、焼上粒子少量含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒子、焼上粒子少量含む。
- 4 褐色土 ローム粒子多量、焼上粒子少量含む。
- 5 黒褐色土 ローム粒子少量、焼上粒子少量含む。

る。軸の痕跡は認められなかった。カマドb(左)は住居を縮小した段階に北壁や西よりに付設されたものである。残存長は1.2m、燃焼部の幅は約0.55mである。軸は既に攪乱などによって壊され、残存していなかった。燃焼部は床面から僅かに掘り込まれただけで、焼土も少なく、aに比べ使用期間は短かったものと考えられる。

床面は平坦であるが、新旧の住居跡には貼床は確認されなかった。新しい住居跡は古い住居跡の床面を掘り抜いて構築している。また、ピットは6基検出されたが、P1・2は古い住居跡、他のピットは新しい住居跡に伴うと考えられる。壁溝については新しい住居跡に帰属し、カマドを除いて全周する。

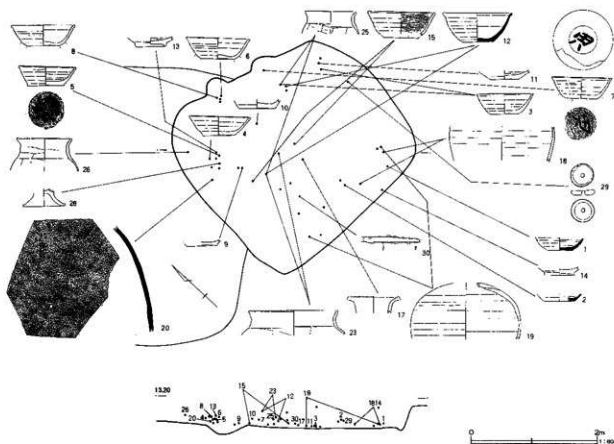
出土遺物 (第108・109図)

遺物は床面及び覆土下層から40点余りが出土して



- 6 褐色土 ローム粒子多量含む。
- 7 黒褐色土 焼上粒子、ローム粒子多量含む。
- 8 暗褐色土 焼上粒子、焼土ブロック多量含む。
- 9 褐色土 焼上粒子、ローム粒子多量含む。
- 10 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量含む。
- 11 暗褐色土 焼上粒子、ローム粒子含む。

第107図 第8号遺物分布図

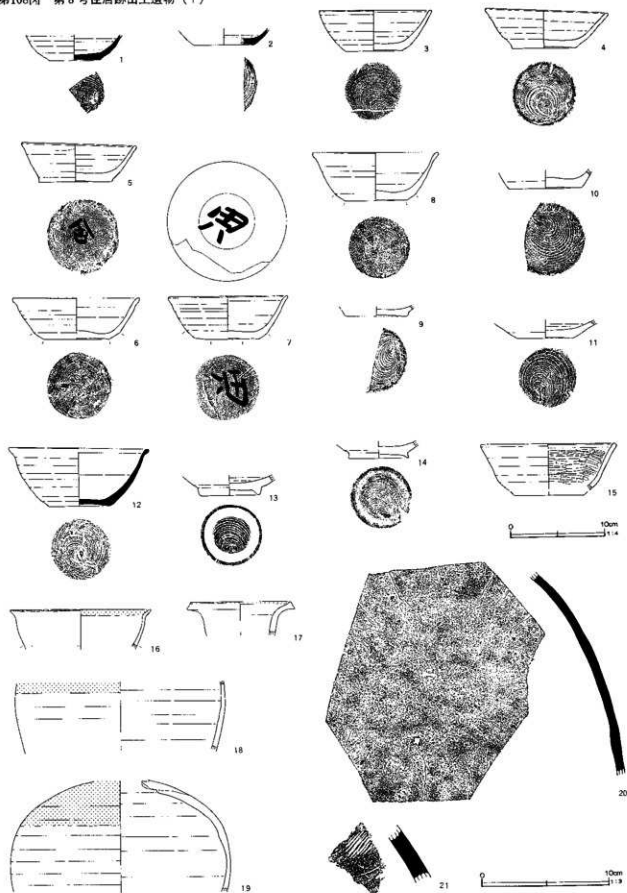


いる。遺物の分布は重複していた場合、新しい住居跡に完形品などが集中するのは常であるが、古い住居跡からも完形品に近い遺物が数点出土している。出土遺物には須恵器環、長頸瓶、甕、ロクロ土師器環、坑、灰釉長頸瓶、土師器甕、台付甕、紡錘車などがある。1・2は須恵器環の底部付近の破片である。体部がやや内湾気味に立ち上がる。底部は回転糸切りである。3～10はロクロ土師器環である。これらの土器群の特徴は口径が12～13cm、底径は7cm前後と口径に対して底径が大きく、底部のつくりが厚いなどの特徴がある。全体的な土器群の印象はS J 3に近い。底部の調整は回転糸切りが主体であるが、7は体部下端と底部外周は手持ちでヘラケズりされる。また、5の底部には「西」、10の見込みと底部には「呉」と墨書されている。「西」はカマドの西側、「呉」は古い住居跡の北東隅から出土した。ともに古い住居跡からの出土であるが、住居の隅を意識して置かれたものとみられ、住居のカ

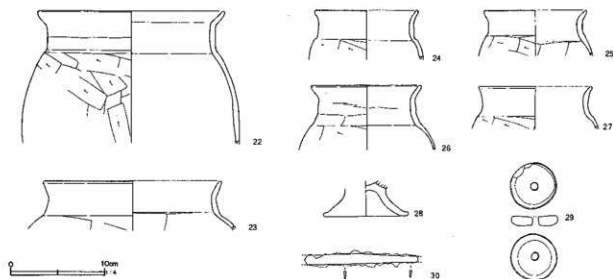
マドや廃棄に関する祭祀の可能性も考えられる。11・15はロクロ土師器壇である。内面にミガキが入る15は直線的にひらくが、他は口縁端部で外反する。13・14はロクロ土師器高台付壇である。高台は削り出して、断面は三角形である。17・18は小破片であるため断定はできないが、須恵器長頸瓶または長頸壺と考えられる。19は灰釉の長頸壺の胴部上半である。肩部に淡黄緑色の釉薬がかかる。遠江窯と考えられる。20・21は須恵器甕の胴部破片である。21の外周は部分的に平行明きが見られる。須恵器はすべて南比企業である。

22・23は土師器甕の口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部は典型的な「コ」の字である。24～28は台付甕の口縁部から胴部、及び脚部の破片である。甕と同様、台付甕も「コ」の字口縁である。29は石製の紡錘車である。中心部に直径約8mmの孔が穿たれている。

第108图 第8号位层出土文物(1)



第109図 第8号住居跡出土遺物(2)



第41表 第8号住居跡出土遺物観察表(第108・109図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環			(5.4)	A針砂	a	II	30	須恵器 南比企産 底部回転糸切り
2	環			(6.4)	A針砂	b	II	25	須恵器 南比企産 底部回転糸切り火押痕有り
3	環	11.9	4.2	6.1	A砂	b	XI	90	クロコ土師器 底部回転糸切り
4	環	13.1	4.0	6.8	A砂	b	XI	90	クロコ土師器 底部回転糸切り 内外面煤付着
5	環	12.2	4.0	7.8	A砂	b	XI	100	クロコ土師器 底部回転糸切り 底部墨書
6	環	(12.6)	4.4	6.9	A砂	b	VIII	60	クロコ土師器 底部回転糸切り
7	環	12.8	4.5	6.9	A砂	b	V	80	クロコ土師器 底部回転糸切り 底部内外面墨書
8	環	(13.4)	5.1	6.5	A砂	b	IX	65	クロコ土師器 底部回転糸切り
9	環			6.8	A	b	VII	45	クロコ土師器 底部回転糸切り
10	環			7.6	A砂	b	V	75	クロコ土師器 底部回転糸切り
11	埴			5.9	A砂	b	XI	80	クロコ土師器 底部回転糸切り
12	埴	15.0	6.2	6.4	A針砂	b	I	90	須恵器 南比企産 底部回転糸切り
13	高台付埴			6.5	A砂	b	XI	80	クロコ土師器 底部回転糸切り
14	高台付埴			6.4	A砂	b	VII	70	クロコ土師器 底部回転糸切り
15	埴	(14.2)			砂	a	XI	30	クロコ土師器 内面ミガキ
16	埴	(15.0)			A	a	I	10	灰輪陶器
17	長頸瓶	(10.6)			A	a	XII	10	灰輪陶器
18	長頸壺				A	b	I	20	灰輪陶器
19	長頸甕				A	b	I	40	灰輪陶器
20	甕				A礫	a	II	10	須恵器 南比企産
21	甕				A砂	a	II	10	須恵器 南比企産 自然物付着
22	甕	(20.0)			AB	a	VII	30	「コ」の字口縁
23	甕	(19.0)			A砂	a	VII	20	「コ」の字口縁
24	台付甕	(11.0)			AD砂	a	VII	30	「コ」の字口縁
25	台付甕	(11.0)			A砂	a	VII	20	「コ」の字口縁
26	台付甕	(11.6)			AB砂	a	VII	20	「コ」の字口縁
27	台付甕	(12.0)			AB砂	a	VII	20	「コ」の字口縁
28	台付甕			9.0	AD砂	a	VII	90	内外面ナデ
29	石製紡錘車							XV	100 重さ36.53g
30	刀子								重さ14.90g

第29号住居跡 (第110図)

調査区の東側、台地の縁辺に立地し、C-12グリッドに位置している。北側と西側から幅1m程の攪乱が入ることなどで残存状況は不良であった。平面形態は南北方向に長い長方形で、規模は長径3.35m、短径2.2m、床面までの深さは約3cmである。覆土は確認時に床面が露出している状態であったため、殆ど確認できなかった。

カマドは東壁中央に1基付設されていた。攪乱のため、焚口から燃焼部にかけては殆ど失われていた。残存したカマドから推測すると、カマドの掘り込みは殆どなく、床面の位置に等しかったものと考えられる。焼土は底面にレンズ状に堆積していた。床面は凹凸があり、貼床は検出されなかった。ピットは北西隅で1基検出された。平面形態は不整形で、土壌状である。柱穴や壁溝などは検出されなかった。

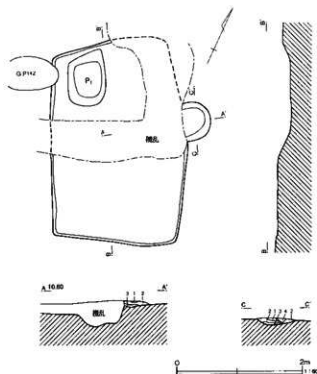
出土遺物 (第111図)

遺物はいずれも床面から約10点出土した。出土遺物はロクロ土師器杯、埴、灰釉埴、土師器甕である。1～3はロクロ土師器杯である。1のつくりはやや薄い。2・3は厚く、底部は回転糸切りである。4はロクロ土師器埴の体部から口縁部にかけての破片である。ロクロナデの痕跡が明瞭である。5は遠江産の灰釉陶器埴の底部周辺の破片である。釉薬は殆どかかっていない

第111図 第29号住居跡出土遺物

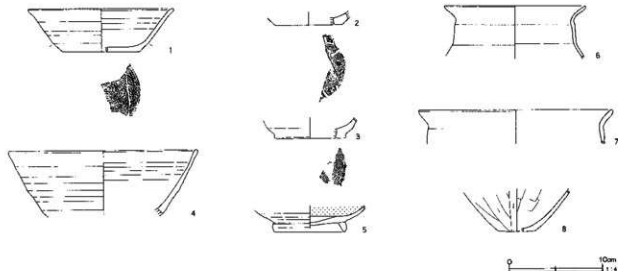
い。6～8は土師器甕で、7はやや大型の甕で、最大径を口縁部にもつものである。6・7は「コ」の字口縁の甕である。

第110図 第29号住居跡



S J 25

- 1 赤褐色土 焼土。
- 2 暗褐色土 焼土粒子少量、ローム粒子少量含む。
- 3 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量、焼土粒子少量含む。
- 4 褐色土 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量含む。



第42表 第29号住居跡出土遺物観察表 (第111図)

番号	器 種	口径	器高	底径	胎 土	焼成	色調	残存率	備 考
1	環	(15.1)	4.6	(8.1)	ABCD	b	V	20	ロクロ土師器 内面黒色処理 体部下端・底部ヘラケズリ
2	環			(7.5)	ABCD	b	VI	20	ロクロ土師器 回転糸切り
3	環			(7.7)	ABC	b	VI	20	ロクロ土師器 回転糸切り
4	埴	(19.8)			ABCD	b	VI	10	ロクロ土師器
5	高台付埴			7.5	C	a	III	80	灰釉陶器 透江疵
6	甕	(14.8)			ABC	b	VI	10	「コ」の字口縁 口縁部ヨコナデ 胴部横方向ヘラケズリ
7	甕	(20.3)			ABC	b	VI	10	「コ」の字口縁 内外面ヨコナデ
8	甕			(4.0)	ABCD	b	VI	20	外面ヘラケズリ 内面ナデ

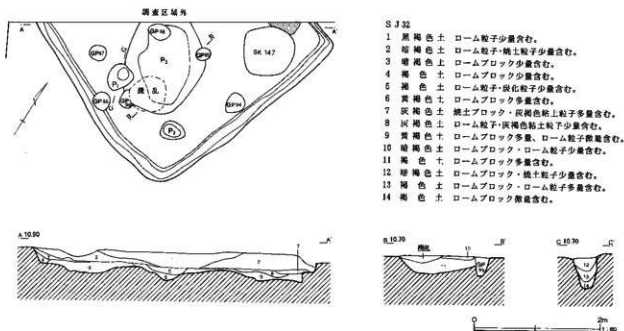
第32号住居跡 (第112図)

調査区の北側、C-9グリッドに位置している。住居跡の南側約半分が喚出された。平面形態は方形で、確認できる規模は長径3.8m、床面までの深さ0.25mである。覆土は暗褐色土で、ローム粒子・焼土粒子が少量含まれるが、攪乱や後世の遺構との重複によって層位の安定している箇所とそうでない箇所がある。カマドは調査区外にあたる北壁に付設されているものと想定される。

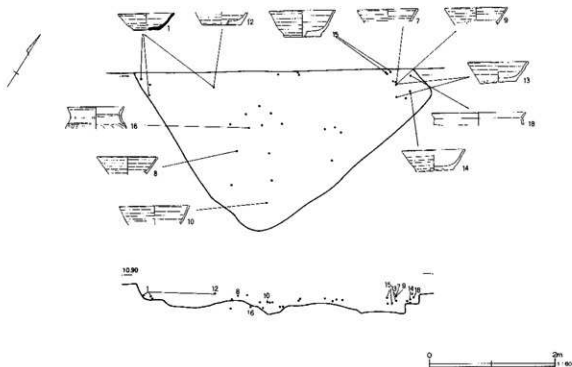
床面は平坦で、ほぼ全域にわたって貼床が確認された。貼床はロームブロックをつき固めて形成されるが、壁際などには灰白色粘土が詰められている箇所もみら

れる。ピットは3基検出された。P1・2は平面形態が楕円形で、規模はともに長径約0.4m、短径はP1が0.35m、P2が0.3m、深さ約0.5mである。P1の覆土には部分的に焼土も含まれていた。P3は土壌状の掘形をもち、貼床で床面が整えられた後に構築されている。規模は長径1.5m以上、短径1.3m、深さ約0.2mである。覆土には炭化物などが含まれるが、遺物も混入しないことから、性格は不明瞭である。また、北東隅付近ではほとんどまって焼土(スクリーントーン部分)が検出されたことから、焼土の左側、北壁にカマドが付設されている可能性が高い。壁溝は壁に沿ってすべ

第112図 第32号住居跡



第113図 第32号住居跡遺物分布図



て巡っていることから、カマドを除いて全周するものと推測される。規模は幅0.15～0.25m、深さ約5cmである。

出土遺物 (第114図)

遺物は床面、覆土から30点出土した。出土遺物には須恵器環、ロクロ土師器環、埴、土師器台付甕、甕、砥石などである。

1～4は須恵器環の口縁部及び体部付近の破片である。体部は内湾気味で、口縁端部は僅かに外反する。底部は回転糸切りで、1・4は東金子産、2・3は南比企産である。5～15はロクロ土師器である。いずれもロクロナデの痕跡を明瞭に残し、底部が体部から口

縁部にかけてと比べて厚く作られている。大部分は環であるが、口径が13cm前後、器高が5cmを境にして体部の張る埴と張らない環に二分できそうである。

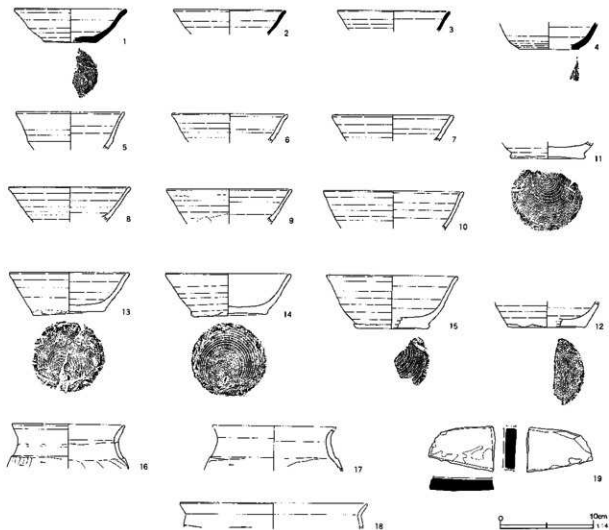
10～12、15は埴と考えられる。環、埴とも底部は回転糸切りである。

16・17は土師器台付甕の口縁部破片である。口縁部は「コ」の字がやややくすれ、口径と最大径をもつ胴部との差が大きくなっている。18は口縁部が短く、最大径をもつ甕である。19は南比企産の須恵器甕を転用した砥石である。研磨面は外面の一面を除いてすべて使用痕が認められる。

第43表 第32号住居跡出土遺物観察表 (第114図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	環	12.0	3.6	5.8	AC砂礫	a	I	70	須恵器 東金子産 底部回転糸切り
2	環	(12.0)			A	a	III	10	須恵器 南比企産
3	環	(12.0)			A砂	a	I	10	須恵器 南比企産
4	環			(6.4)	A砂	a	I	10	須恵器 東金子産 底部回転糸切り
5	環	(11.6)			AD砂	b	II	10	ロクロ土師器
6	環	(12.4)			AC砂	b	III	30	ロクロ土師器
7	環	(12.8)			A	b	III	25	ロクロ土師器
8	環	(13.0)			ACE砂	b	III	15	ロクロ土師器
9	環	(13.4)			A	b	III	30	ロクロ土師器 外面下位ユヒナデ

第114図 第32号住居跡出土遺物



番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
10	埴	(15.0)			ACDE砂	b	Ⅷ	15	ロクロ土師器
11	埴			7.7	AC砂	b	Ⅷ	60	ロクロ土師器 底部回転糸切り
12	埴			(8.0)	AC砂	b	Ⅷ	20	ロクロ土師器 底部回転糸切り
13	環	12.8	4.6	7.6	A砂	b	Ⅷ	70	ロクロ土師器 底部回転糸切り
14	環	13.4	4.6	8.0	AC砂	b	Ⅷ	90	ロクロ土師器 底部回転糸切り
15	埴	(14.0)	5.6	(7.8)	AC砂	b	Ⅷ	20	ロクロ土師器 底部回転糸切り
16	台付甕	(12.0)			ABC砂	b	Ⅵ	10	「コ」の字口縁 口縁部ヨコナテ 胴部横方向ヘラケズリ
17	台付甕				ACE砂	b	V	10	「コ」の字口縁 口縁部ヨコナテ 胴部横方向ヘラケズリ
18	甕	(20.0)			AD砂	b	V	10	「コ」の字口縁口縁部ヨコナテ
19	砥石				A砂	a	I	10	須恵器 南比金産 炭転用

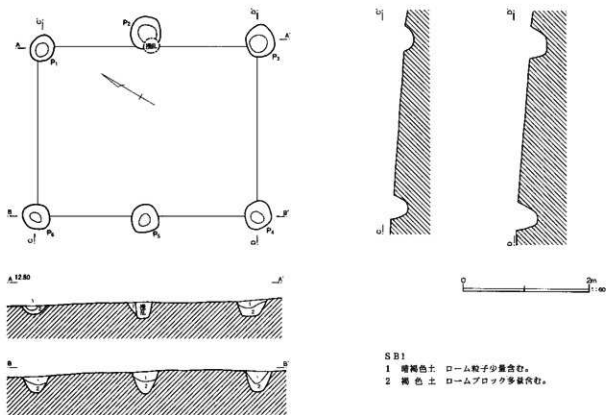
(2) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡 (第115図)

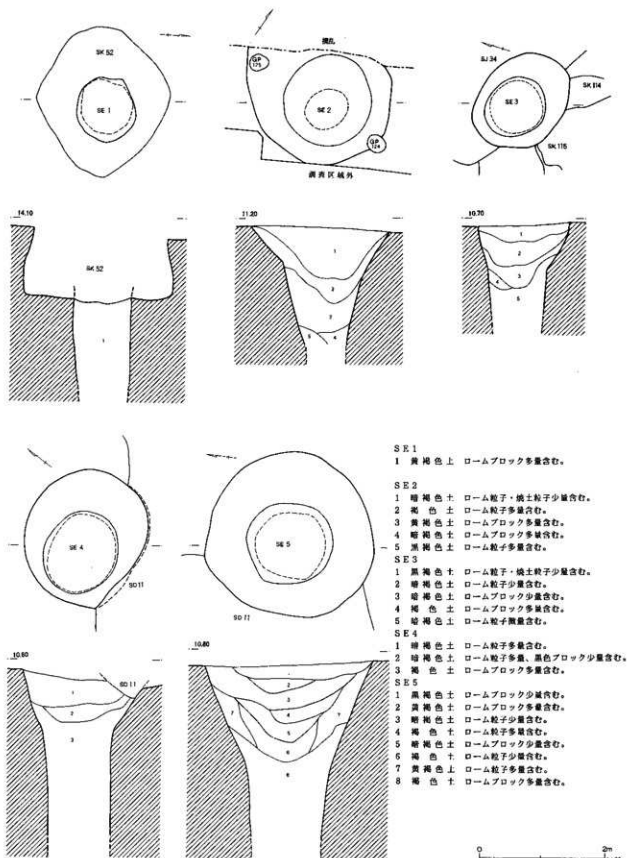
調査区の西隅、E・F-2グリッドに位置し、部分的に擾乱と重なるが、時期の明確な他の遺構との重複はない。柱穴からは遺物が出土しなかったため、その帰属時期が問題となるが、覆土が平安時代の住居跡に類似していることなどから、本稿では該期の遺構として取り扱った。規模は桁行2間(3.6m)、梁行1間(2.7

m)の側柱建物で、主軸はN-27°-Wである。主軸方位で考えれば竪穴住居とは異なり、平安期の遺構である可能性は薄くなる。6基検出されたピットは、平面形態が円形に近く、直径約0.4m、深さ0.15~0.35mである。柱痕跡は確認されなかった。

第115図 第1号掘立柱建物跡



第116図 第1号~第5号井戸跡



4. 中・近世の調査

概要

中・近世の遺構は井戸跡5基、溝跡13条、土壇171基、地下式墳6基、室跡2基、ビット150基が検出された。遺構の多くは他の時期の遺構や擾乱と重複し、主に調査区の中央部から東側にかけて分布する。遺構による

各時期の広がりや遺物の有無や遺構形態の類似性から、各時期毎にその広がりを示すことは困難であった。従って、本項では確実に時期を捉えられる遺構を除いては一括して掲載し、記述も省いた。

(1) 井戸跡 (第116図)

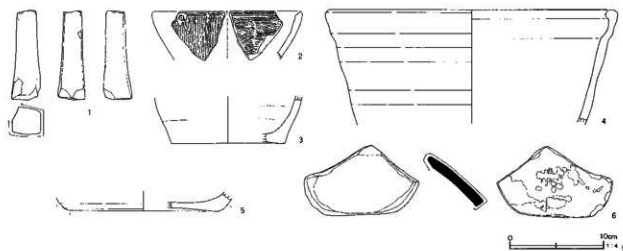
井戸跡は調査区内から5基検出された。SE 1を除いた4基は調査区の東側に位置している。いずれも水位が高く、底面までは確認できなかった。遺物はSE 2と5から出土したが、主体は中世である。

SE 1はI・J-4グリッドに位置する。後世の土壇SK52と重複し、開口部を削平している。断面は形態的に逆ハの字と考えられる。SE 2はF-10グリッドに位置する。北側の約1/3は擾乱によって壊されている。断面は逆ハの字である。覆土から砥石が1点出土した。SE 3はD-9グリッド、SE 4はC・D-第117図 井戸跡出土遺物

10グリッドに位置する。ともに楕円形を呈し、断面は逆ハの字である。SE 5はC・D-10グリッドに位置する。大型で、断面は逆ハの字である。

出土遺物 (第117図)

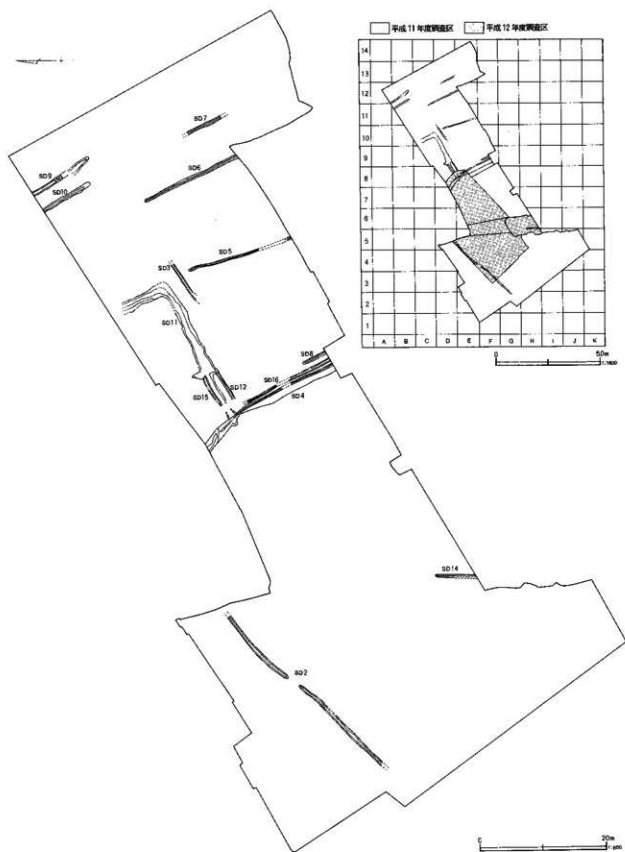
1はSE 2出土の砥石である。欠損部を除いては全面研磨されている。2〜6はSE 5出土遺物である。2は弥生時代後期の鉢で、周辺から混入したものである。3〜5は在地産の上器類で、風化が著しい。6は須恵器甕を転用した砥石である。



第44表 井戸跡出土遺物観察表 (第117図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	砥石							90	SE 2
2	鉢	(16.0)			A C砂	b	VII	10	SE 5 内外面赤彩・ミガキ 外面黒色付着物
3	鉢			(12.0)	A 針砂	b	II	10	SE 5 外面平行叩き 内面ナデ
4	鍋	(31.0)			A E砂礫	c	XI	15	SE 5 在地産 外面ココナテ 内面風化のため剥離顕著
5	鉢			(15.5)	砂	b	VII	20	SE 5 胴部下端・底部ヘラケズリ
6	砥石				A 砂	a	II	10	SE 5 須恵器甕転用 外面平行叩き・ヘラケズリ

第118図 海跡配置図



(2) 溝跡

溝跡は14条検出された。大半は小規模な溝で、南北方向に主軸をもつ溝であった。出土遺物は少なく、周辺の遺構からの混入が多かった。ここでは其件遺物が確実な溝について記載し、他は省略した。混入したとみられる遺物については、グリッドに掲載した。

第2号溝跡 (第119図)

D-5グリッドからG-2グリッドにかけて位置している。溝跡は北東方向に延び、E-4・F-4グリッドで一旦途切れるが、覆土や形態から一条の溝と考えた。途切れている長さは約2.3mあり、出入口の施設などの可能性も考えられる。溝跡は調査区の北側でSD1、南側でSJ11を切り込んで構築されているが、SD1の北側ではSK58に壊されている。断面の形態は箱形で、検出された長さ約32m、幅0.5~0.8m、深さ約0.1mである。

出土遺物 (第121図)

遺物は覆土から播鉢が1点出土した。1は丹波産播鉢の口縁部破片である。

第3号溝跡 (第120図)

D-10グリッドに位置している。SK168を切り込み、SK124に壊されている。溝跡は直線的で、約8m検出されたが、SK124と重複する部分で「L」字に曲がる可能性がある。規模は幅約0.5m、深さ0.25mである。

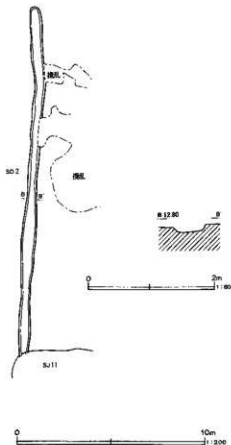
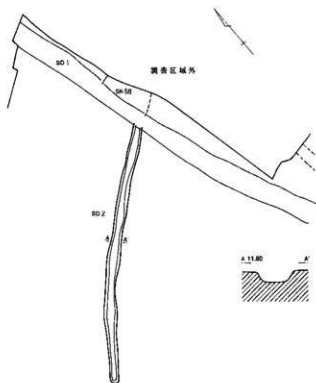
出土遺物 (第121図)

遺物は覆土から須恵器杯が1点出土した。2は体部が内湾気味で、底部は回転糸切りである。南北企業である。

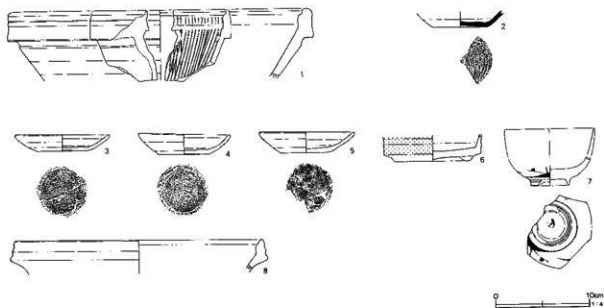
第4号溝跡 (第122図)

調査区の中央、D-8からF-9グリッドにかけて位置し、緩く弧を描くような南北溝である。この溝跡はSD16と平行するものであるが、断面観察からSD16の覆土の中に構築されていることが明らかになった。E-8グリッドより北側では擾乱などの影響もあり、形態がくずれている。断面形態は西側が緩やかで、東側がやや急に立ち上がる箱薬研である。規模は幅

第119図 第2号溝跡



第121図 第2号～第4号溝跡出土遺物



2.4m、深さ1.3mである。覆土は黒褐色土で、ローム粒子や焼土粒子、上層では浅間A軽石（1783年降下）とみられる粒子も含まれる。

出土遺物（第121図）

遺物は主に覆土から約10点出土した。3～6はかわかけの皿で、覆土中層から出土した。いずれも風化が著しいが、ロクロナデで仕上げられる。底部は回転糸切りである。6は徳利の底部付近で、瀬戸美濃産である。7は染付磁器碗で、肥前産である。8は楕鉢の口

縁部である。塚産とみられる。6～8はかわかけとは出土位置が異なり、溝中に掘り込まれた土壌などに伴う遺物と考えられる。

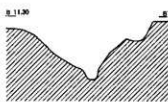
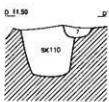
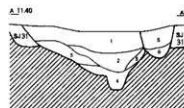
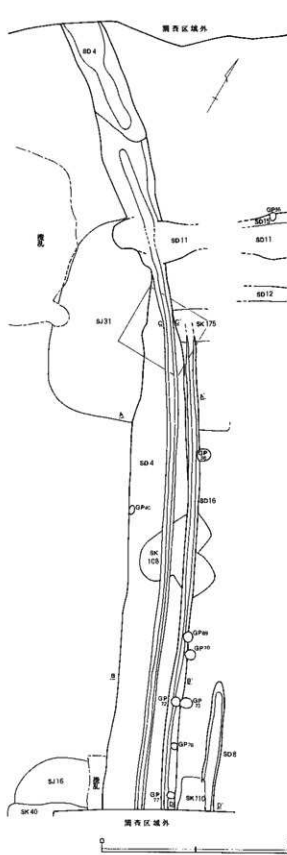
第8号溝跡（第122図）

F-9グリッドに位置している。南側は調査区外に延びているが、南北方向の溝で、約4mが検出された。規模は幅約0.5m、深さ0.2mで、断面は緩い箱形である。覆土は黒褐色土で、ローム粒子が少量含まれる。

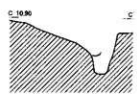
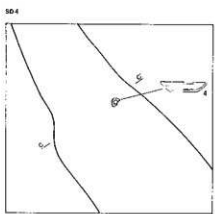
第45表 第2号～第4号溝跡出土遺物観察表（第121図）

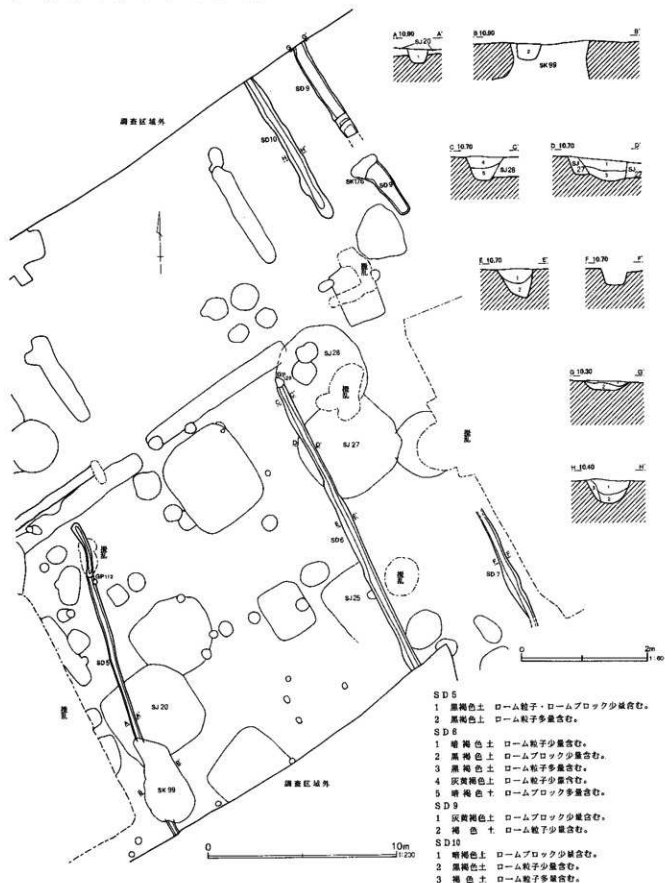
番号	器種	口径	器高	底径	粘土	焼成	色調	検出層	備考
1	楕鉢	(31.6)			ACE砂	a	VII	10	SD 2 体部外面回転ヘラケズリ
2	環			(5.8)	砂礫	a	II	20	SD 3 須恵器 体部ロクロナデ 底部回転糸切り
3	かわかけ	10.0	1.8	5.4	砂	b	IX	60	SD 4 底部回転糸切り
4	かわかけ	9.8	2.2	5.4	砂	b	IX	90	SD 4 底部回転糸切り
5	かわかけ	10.2	2.2	5.3	砂	b	IX	70	SD 4 底部回転糸切り
6	徳利			(10.4)	A砂	a	Ⅷ	80	SD 4 底部回転ヘラケズリ 高台貼付
7	碗			4.1	—	a	III	60	SD 4 広東碗
8	楕鉢	26.4			砂	a	V	10	SD 4 内外面ナデ 塚産か

第122図 第4号・第8号・第16号溝跡

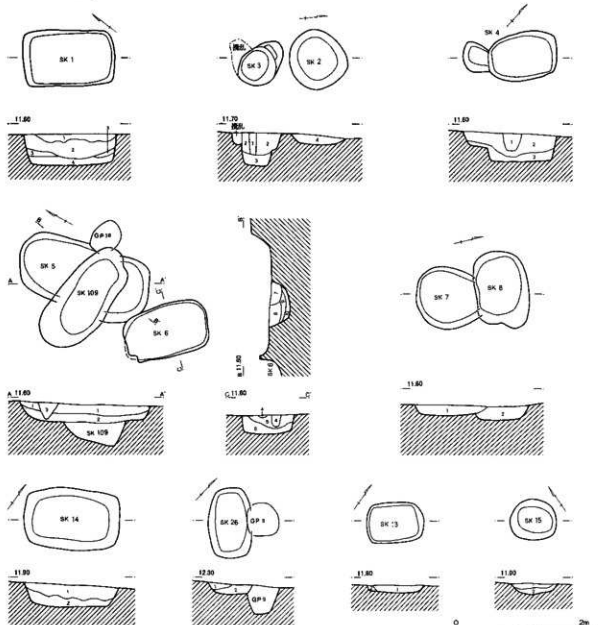


- SD4・8・16
- 1 黒褐色土 ローム粒子多量、焼土粒子・浅間A層石粒子少量含む。
 - 2 黒褐色土 ローム粒子多量含む。
 - 3 暗褐色土 ロームブロック多量含む。
 - 4 黒褐色土 ローム粒子少量含む。
 - 5 黒褐色土 ローム粒子・浅間A層石粒子少量含む。
 - 6 暗褐色土 ローム粒子多量含む。
 - 7 黒褐色土 ローム粒子少量含む。





第124図 土壌 (1)



SK 1

- 1 黒褐色土 ローム粒子少量、焼土粒子微量含む。
- 2 暗褐色土 炭化粒子・ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 3 黒褐色土 ローム粒子少量含む。
- 4 黒褐色土 ローム粒子微量含む。

SK 2・3

- 1 黒褐色土 ローム粒子微量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。
- 3 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 4 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック微量含む。

SK 4

- 1 黒褐色土 焼土粒子・ローム粒子少量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量、炭化粒子少量含む。
- 3 黒褐色土 ローム粒子少量含む。

SK 7・8

- 1 褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。

SK 13

- 1 黒褐色土 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子多量含む。

SK 5・6・10

- 1 黒褐色土 ローム粒子微量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量含む。
- 4 黒褐色土 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量含む。
- 5 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。
- 6 黒褐色土 ローム粒子少量含む。
- 7 黒褐色土 ローム粒子微量含む。
- 8 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- 9 暗褐色土 ローム粒子微量含む。
- 10 暗褐色土 ロームブロック多量含む。

SK 14

- 1 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子少量含む。

SK 15

- 1 黒褐色土 炭化粒子・ローム粒子少量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子少量含む。

SK 26

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- 2 褐色土 ロームブロック多量含む。

(3) 土壌

土壌は179基検出されたが、地下式墳、室跡については別記した。縄文時代のTピットも1基検出されたが、縄文時代の項目の中に掲載した。土壌の分布範囲は調査区の中央部に最も多く、次いで東側が多い。西側には殆どみられなかった。平面形態は方形(長方形含む)、円形、楕円形、不整形などがあり、方形が最も多い。長径約2m、短径約1m、深さ約0.3mが平均的な規模であるが、長さが5mを超える溝状の上墳も5基検出された。土壌の集中する地点は重複関係が著しく、覆土が類似し、断面観察が不明瞭なものもある。

a. 土壌

第4号土壌 (第124・146図1)

F-8グリッドに位置する。西側にピット状の張り出し状の部分がある。規模は長径1.5m、幅0.69m、深さ0.45mである。1は高坏の脚部小破片で、覆土中より出土した。混入遺物と考えられる。

第16号土壌 (第126・146図2)

G-8グリッドに位置し、SK17・18に約半分を壊される。長方形を呈し、幅は1.05m、深さ0.3mである。遺物は覆土から出土し、2は内面に八方向からの粗い描き目が入る播鉢で、推定口径26.5cmである。在地産と考えられる。

第17号土壌 (第126・146図3)

G-8グリッドに位置し、SK16に直交して構築される。長方形を呈し、SK18と同規模の掘り込みをもつ。遺物は覆土から出土した砥石の破片(第146図3)1点である。

第18号土壌 (第126・146図4)

G-8グリッドに位置している。平面形態は長方形で、長径4.35m、短径1.11m、深さ0.35mの規模がある。西側には長さ約1mの段があり、2基の土壌が重

遺物は播鉢、砥石、内耳鍋、鉢、皿、土人形、灯明皿、焙烙などの中・近世のものを中心であるが、多くは地下式墳などのある程度時期を特定できる遺構から出土している。土壌には周辺の住居跡から混入したとみられる甕、鉢、壺、ロクロ土師器、須恵器環など時期を問わず伴う場合が多くみられた。従って、遺物は伴うものの、土壌が構築された年代を特定できるものは極めて少なかった。以下、遺物が出土した土壌について記載した。

複している可能性もある。4は高坏の脚部で、外面は風化しているが、内面はハケの調整が明瞭に残る。混入遺物と考えられる。

第24号土壌 (第126・146図14)

G-7グリッドに位置している。SK23・25に北西側を壊されている不整形の土壌である。14は甕の口縁部破片で、覆土より出土した。掘り込みが浅く、グリッドピットなどとも重複するため、遺物は混入したものと考えられる。

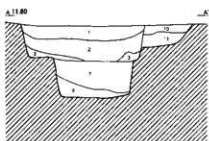
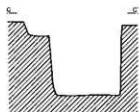
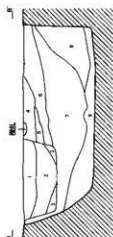
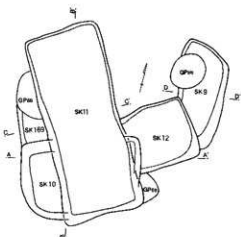
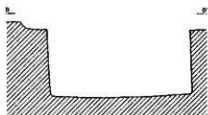
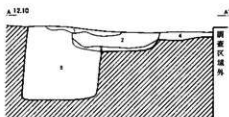
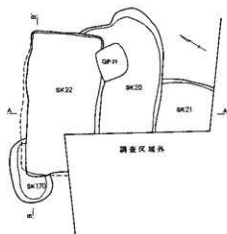
第27号土壌 (第127・146図17)

G-7グリッドに位置している。S J 3を切り込んで構築されている隅丸長方形の土壌である。17は外面に平行叩きをもつ甕の胴部破片で、覆土中から出土した。S J 3から混入したものと考えられる。

第29号土壌 (第127図・146図15)

G-6グリッドに位置し、SK30を切り込んで構築されている。平面形態が楕円形のやや深い土壌である。15は甕の口縁部破片である。混入したものと考えられる。

第125回 土墳 (2)

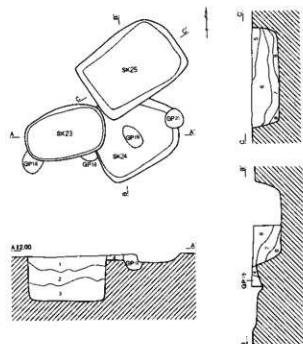
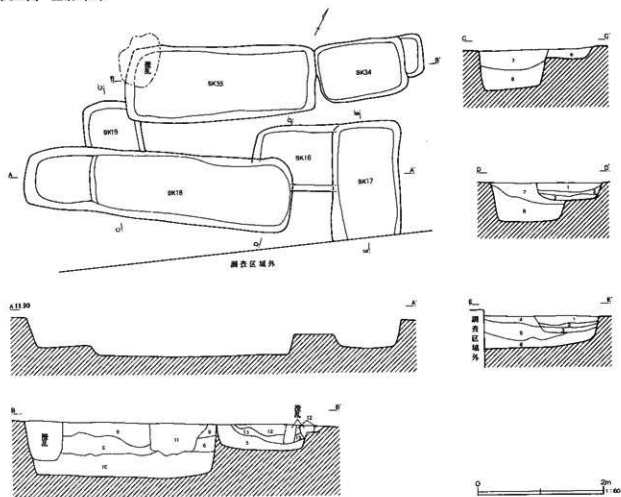


SK10・11・12

- 1 黒褐色土 粘土粒子・ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒子少量含む。
- 3 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック微量含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量、粘土粒子微量含む。
- 5 褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。
- 6 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。
- 7 暗褐色土 ロームブロック多量、ローム粒子少量含む。
- 8 暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒子微量含む。
- 9 黒褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック少量含む。
- 10 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 11 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。

SK20・21・22

- 1 黒褐色土 ローム粒子少量、粘土粒子微量含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 3 黒褐色土 ローム粒子多量含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック微量含む。
- 5 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。



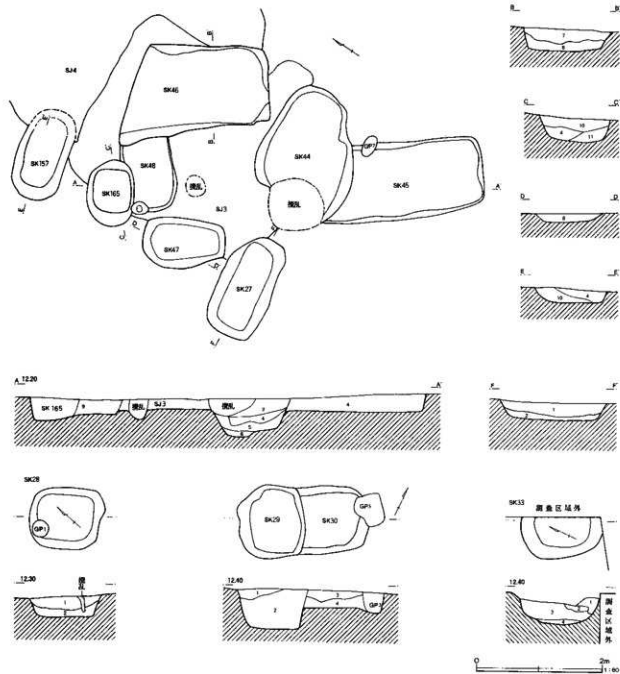
SK 16・17・18・19・24・35

- 1 黒褐色土 ローム粒子少量含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 3 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 5 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 6 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 7 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- 8 暗褐色土 ローム粒子少量、ロームブロック少量含む。
- 9 黒褐色土 炭化粒子・ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 10 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量、炭化粒子少量含む。
- 11 暗褐色土 ローム粒子少量、ロームブロック・炭化粒子少量含む。
- 12 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック・黒褐色粒子・炭化粒子・粘土粒子少量含む。
- 13 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量、炭化粒子少量含む。

SK 23・24・25

- 1 黒褐色土 焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子少量含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒子・黒褐色土少量含む。
- 5 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量、焼土粒子少量含む。
- 6 黒褐色土 ローム粒子少量含む。
- 7 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック・黒褐色粒子少量含む。
- 8 暗褐色土 ローム粒子少量含む。

第127図 土壌(4)



S K 27・44・45・46・47・48・157・185

- 1 褐色土 ロームブロック多量含む。
- 2 褐色土 ローム粒子少量含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量、焼土粒子少量含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 5 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子少量含む。
- 6 暗褐色土 ローム粒子多量含む。
- 7 黒褐色土 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子・ロームブロック微量含む。
- 8 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 9 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック微量含む。
- 10 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。
- 11 黒褐色土 ローム粒子微量含む。

S K 28

- 1 褐色土 ロームブロック・黒色粒子多量含む。
- 2 褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。

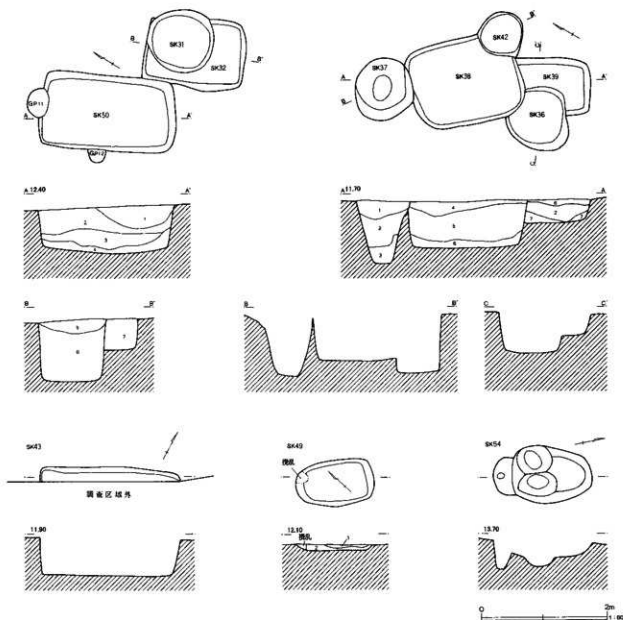
S K 29・30

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロック多量含む。
- 3 暗褐色土 炭化粒子・ローム粒子少量含む。
- 4 暗褐色土 ロームブロック少量含む。

S K 33

- 1 黒色土 炭化物多量、焼土粒子少量、ローム粒子微量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量、暗褐色粒子少量含む。
- 3 暗褐色土 炭化粒子・ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量、黒褐色ブロック少量含む。

第128図 土壌 (5)



S K 31・32・50

- 1 暗褐色土 炭化粒子・ローム粒子・ロームブロック・黒褐色ブロック少量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量、黒褐色ブロック少量含む。
- 3 暗褐色土 黒褐色ブロック・ロームブロック多量、ローム粒子少量含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。
- 5 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- 6 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 7 黄褐色土 ロームブロック・黒色ブロック多量含む。

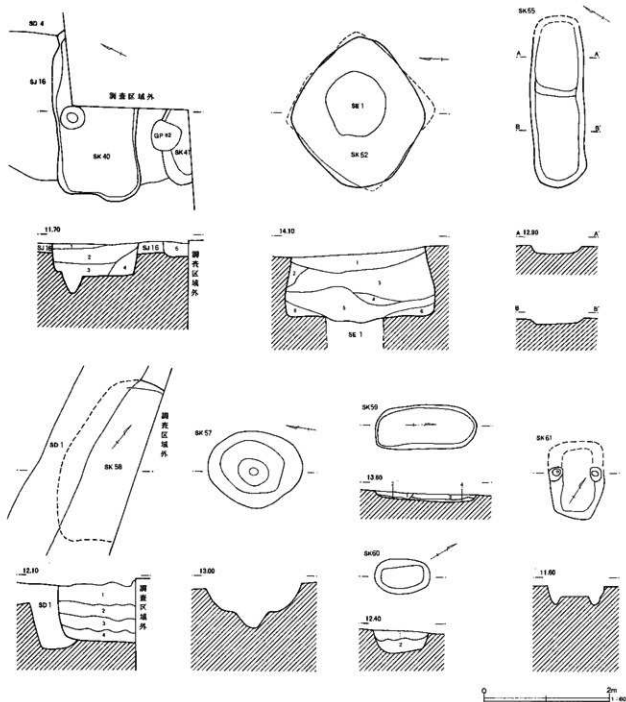
S K 49

- 1 暗褐色土 ローム粒子・黒褐色粒子少量含む。
- 2 黄褐色土 ローム粒子多量、黒褐色ブロック少量含む。

S K 37・38・50

- 1 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。
- 4 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量、焼土粒子微量含む。
- 5 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量、黒褐色ブロック少量含む。
- 6 黒褐色土 ローム粒子少量、炭化粒子微量含む。
- 7 黒褐色土 ローム粒子少量含む。

第129回 土壌 (6)



S K 40・41

- 1 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子少量含む
- 2 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子微量含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量、焼土粒子微量含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック・黒褐色粒子少量含む。
- 5 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子少量含む。

S K 52

- 1 黒褐色土 焼土粒子少量、ローム粒子微量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。
- 3 暗褐色土 焼土粒子少量、ローム粒子少量含む。
- 4 灰黄褐色土 ローム粒子微量含む。
- 5 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量、炭化粒子少量含む。
- 6 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。

S K 58

- 1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロック少量含む。
- 3 暗褐色土 ロームブロック少量含む。
- 4 黄褐色土 ロームブロック多量含む。

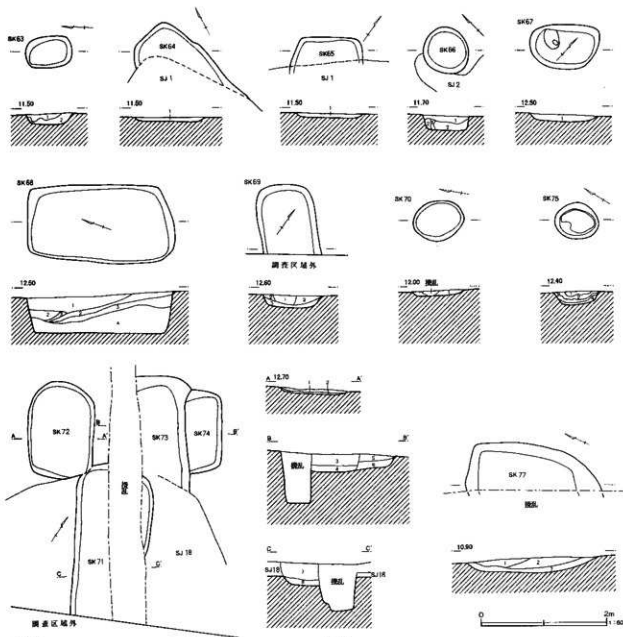
S K 59

- 1 暗褐色土 ローム粒子微量含む。
- 2 褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。

S K 60

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- 2 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。

第130図 土坑 (7)



SK63

- 1 黒褐色土 ローム粒子少量含む。
- 2 黄褐色土 ローム粒子少量含む。

SK64・65

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量、黒褐色ブロック微量含む。

SK66

- 1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック・黒褐色粒子少量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 3 黄褐色土 ロームブロック少量含む。

SK67

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量含む。

SK68

- 1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック・黒褐色ブロック少量含む。
- 2 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 3 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。

SK69

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子・黒褐色粒子少量含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。

SK70

- 1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。

SK71・72・73・74

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- 2 褐色土 ロームブロック少量含む。
- 3 灰黄褐色土 ローム粒子多量、焼土粒子微量含む。
- 4 暗褐色土 ロームブロック少量含む。
- 5 褐色土 ローム粒子少量含む。
- 6 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- 7 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 8 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子少量含む。

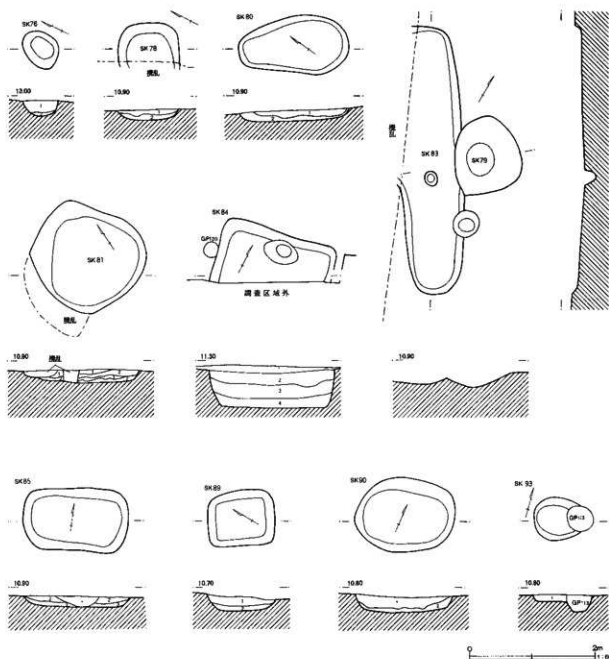
SK75

- 1 赤褐色土 焼土粒子・焼土ブロック多量、炭化粒子少量含む。
- 2 暗赤褐色土 焼土粒子・焼土ブロック多量含む。
- 3 暗褐色土 焼土粒子多量、ローム粒子少量含む。
- 4 褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。

SK77

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- 2 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 3 褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック少量含む。

第131図 土壌 (8)



S K 78

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- 2 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。

S K 78

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。

S K 80

- 1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック・褐色粒子少量含む。
- 2 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。

S K 81

- 1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック・黒褐色ブロック少量含む。
- 2 黄褐色土 ロームブロック多量、暗褐色粒子少量含む。

S K 84

- 1 褐色土 ロームブロック少量含む。
- 2 褐色土 ロームブロック少量、炭化物微量含む。
- 3 暗褐色土 ロームブロック多量含む。
- 4 暗褐色土 ロームブロック少量含む。

S K 85

- 1 褐色土 ロームブロック多量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- 3 暗褐色土 ロームブロック少量含む。

S K 89

- 1 褐色土 焼上粒子・ローム粒子多量含む。
- 2 褐色土 ローム粒子多量含む。

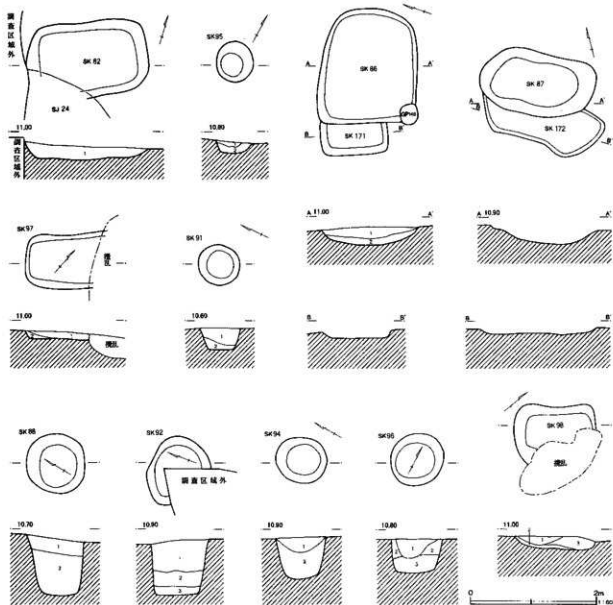
S K 90

- 1 暗褐色土 炭化物・ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 2 褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。

S K 92

- 1 褐色土 ローム粒子多量含む。

第132図 土壌 (9)



SK82
1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。

SK86
1 暗褐色土 ロームブロック多量含む。
2 褐色土 ロームブロック多量含む。

SK88
1 褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
2 暗褐色土 ローム粒子少量含む。

SK91
1 黒褐色土 ロームブロック少量含む。
2 黒褐色土 ロームブロック微量含む。

SK92
1 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子微量含む。
2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
3 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。

SK94
1 暗褐色土 ローム粒子少量、焼土粒子微量含む。
2 暗褐色土 ローム粒子少量含む。

SK95
1 褐色土 ローム粒子少量含む。

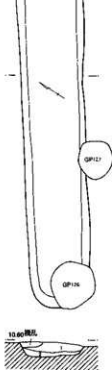
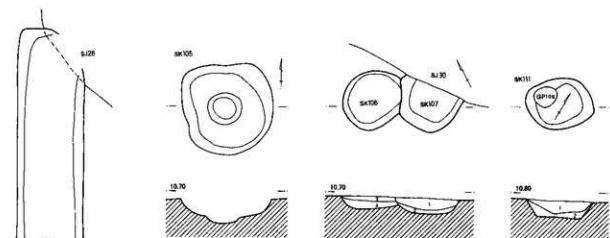
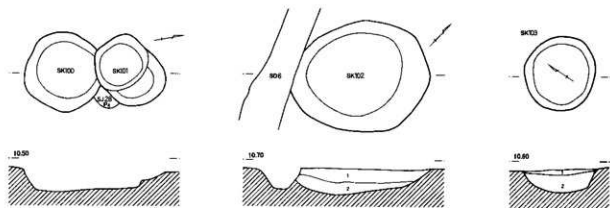
2 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。

SK96
1 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
2 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック・黒褐色粒少量含む。
3 暗褐色土 ローム粒子微量含む。

SK97
1 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
2 黄褐色土 ローム粒子多量含む。

SK98
1 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
2 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
3 黄褐色土 ローム粒子多量、暗褐色粒少量含む。

第133図 土壌 (10)



SK 102

- 1 褐色土 炭化粒子・ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 2 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。

SK 103

- 1 灰褐色土 ローム粒子・黒色粒子多量含む。
- 2 褐色土 ローム粒子多量含む。

SK 104

- 1 暗褐色土 ローム粒子・黒褐色粒子多量、粘土粒子・炭化粒子少量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子少量含む。

SK 106・107

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- 2 灰褐色土 ローム粒子少量含む。
- 3 褐色土 ローム粒子少量含む。
- 4 暗褐色土 ロームブロック少量含む。

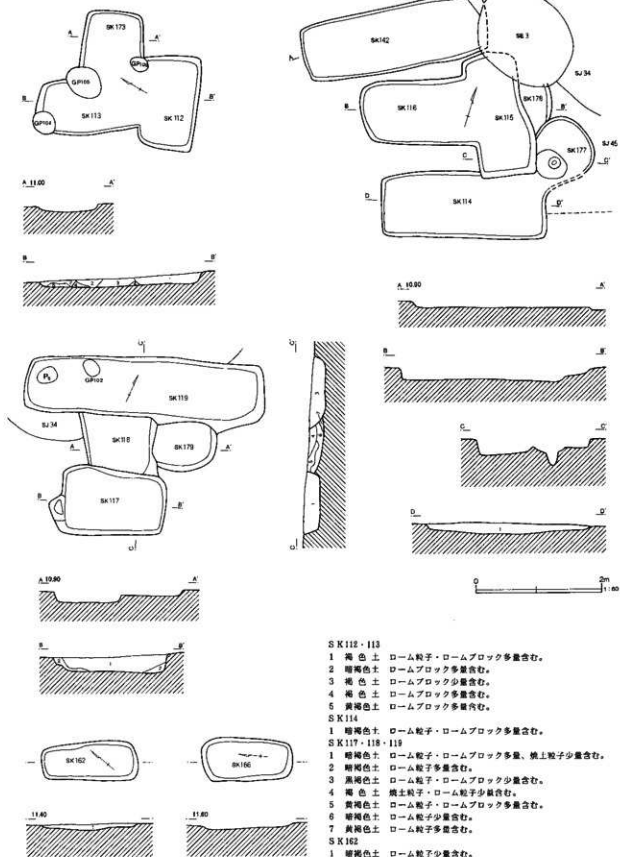
SK 110

- 1 灰褐色土 ローム粒子少量含む。
- 2 灰黄褐色土 ロームブロック多量含む。
- 3 灰褐色土 ローム粒子少量含む。
- 4 暗褐色土 ロームブロック少量含む。

SK 111

- 1 褐色土 ローム粒子少量含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロック少量含む。

第134図 土壌 (11)



S K 112・113

- 1 褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロック多量含む。
- 3 褐色土 ロームブロック少量含む。
- 4 褐色土 ロームブロック多量含む。
- 5 黄褐色土 ロームブロック多量含む。

S K 114

- 1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。

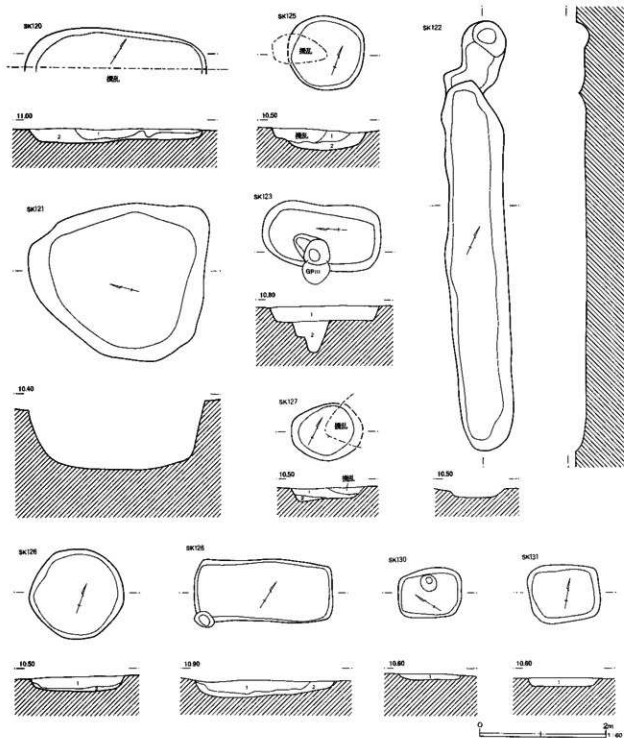
S K 117・118・119

- 1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量、焼土粒子少量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子多量含む。
- 3 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 4 褐色土 焼土粒子・ローム粒子少量含む。
- 5 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。
- 6 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- 7 黄褐色土 ローム粒子多量含む。

S K 162

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量含む。

第135図 土坑 (12)



S K 120

- 1 暗褐色土 ロームブロック少量含む。
- 2 黄褐色土 ローム塊。

S K 123

- 1 褐色土 ローム粒子少量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子少量含む。

S K 125

- 1 褐色土 ローム粒子・暗褐色粒子少量含む。
- 2 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。

S K 130

- 1 褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。

S K 126

- 1 褐色土 ローム粒子・暗褐色粒子少量含む。
- 2 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。

S K 127

- 1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 2 黄褐色土 ローム粒子多量含む。

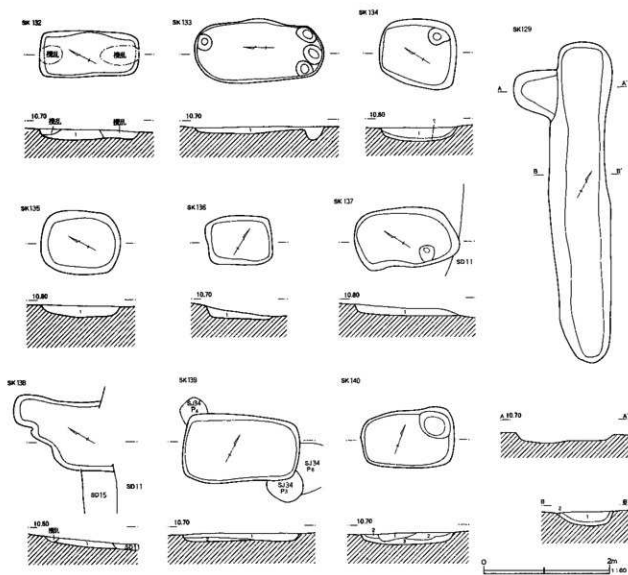
S K 128

- 1 暗褐色土 黄土粒子・ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 2 褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。

S K 131

- 1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。

第136図 土坑 (13)



- S K 129
 1 黄褐色土 ローム粒子・暗褐色粒子・灰白色微粒子少量含む。
 2 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- S K 132
 1 褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- S K 133
 1 褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック少量含む。
- S K 134
 1 褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
 2 褐色土 ロームブロック多量含む。
- S K 135
 1 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。

- S K 136
 1 褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- S K 137
 1 褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- S K 138
 1 褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。
- S K 139
 1 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子少量含む。
 2 褐色土 ローム粒子多量含む。
- S K 140
 1 褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
 2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
 3 黄褐色土 ロームブロック多量含む。

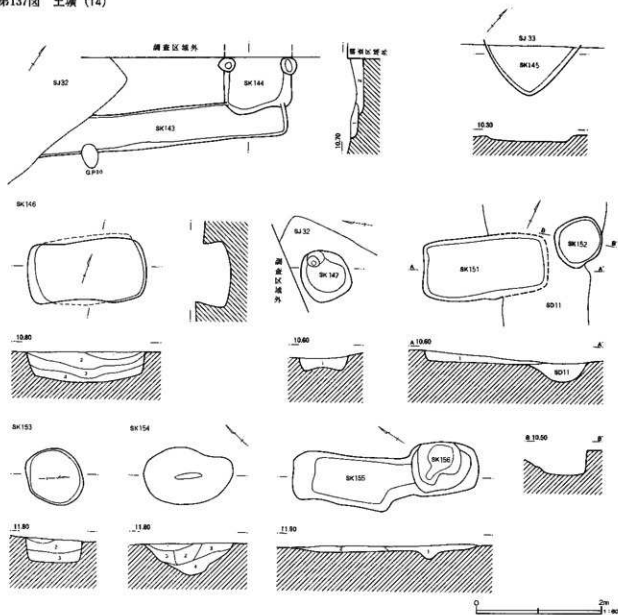
第38号土坑 (第128・146図5)

F-7・8グリッドに位置し、SK37・42に一部を壊されている。平面形態は隅丸方形で、規模は長径1.77m、短径1.38m、深さ0.75mである。5は覆土から出土したかわかけの口縁部破片である。

第39号土坑 (第128・146図16)

F-8グリッドに位置し、SK38などに切り込まれている。平面形態は長方形とみられ、掘り込みは0.38mとやや浅い。16は覆土中から出土した甕の口縁部破片である。内外面ともハケで調整される。

第137図 土坑 (14)



S K 143・144

- 1 黒褐色土 ローム粒子少量含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロック多量含む。

S K 146

- 1 黒褐色土 ローム粒子少量含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロック少量含む。
- 3 暗褐色土 ロームブロック多量含む。
- 4 黒褐色土 ローム粒子微量含む。

S K 147

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量含む。

S K 151

- 1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。

S K 153

- 1 暗褐色土 焼土ブロック・ローム粒子少量含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒子少量含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。

S K 154

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子微量含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。
- 4 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。

S K 155・156

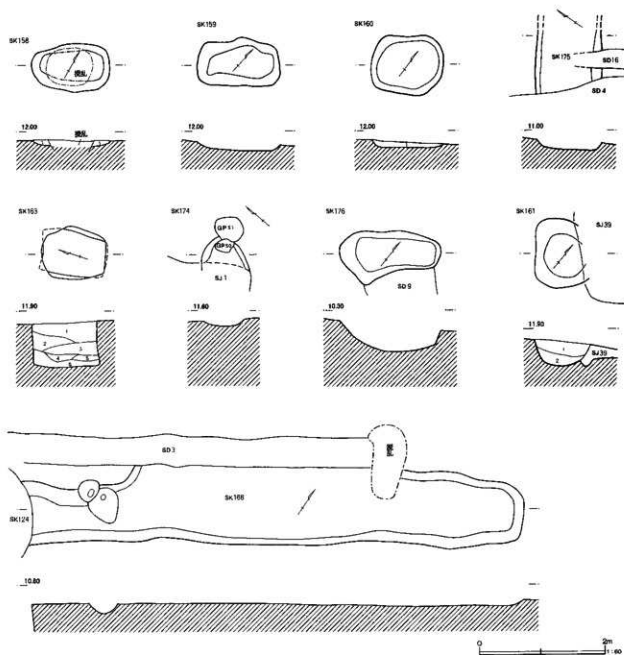
- 1 黒褐色土 ローム粒子少量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子少量含む。

第44号土坑 (第127・146図8・9)

G-7グリッドに位置している。S J 3を切り込んで構築されている。平面形態は不整形形で、規模は長径1.8m、短径1.45m、深さ0.61mである。8・9は覆

土から出土したもので、8はロクロ土師器、9は須恵器環で、ともにS J 3から混入したものと考えられる。

第138図 土坑 (15)



- S K 156
1 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
S K 160
1 暗褐色土 ローム粒子多量含む。
S K 161
1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。
2 暗褐色土 ローム粒子少量含む。

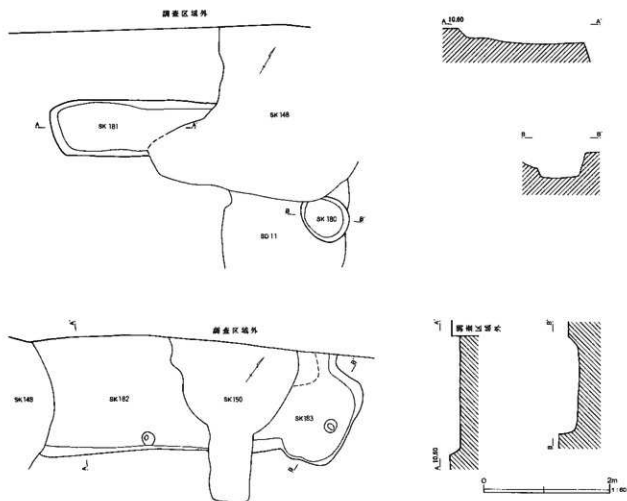
- S K 163
1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
2 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
3 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
4 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。
5 黄褐色土 ロームブロック多量含む。
6 黒褐色土 ローム粒子少量含む。

第46号土坑 (第127・146図6)

F・G-7グリッドに位置し、S J 3のカマド西側付近に構築されている。平面形態は不整形で、長径2.5m、短径1.5m、深さ0.35mである。6はロクロ土

師器の底部破片で、SK44と同様S J 3からの混入とみられる。

第139図 土坑 (16)



第48号土坑 (第127・146図7)

G-7グリッドに位置する。S J 3の中に構築され、SK 46・165と重複する。7はクロコ土師器環である。S J 3からの混入遺物と考えられる。

は長径1.27m、短径1.2m、深さ0.3mである。覆土には焼土が多く含まれる。21-23・28は本来S J 28に伴うものとみられる。21・22は高環の脚部、23・28は甕の口縁部である。

第52号土坑 (第129・146図13)

I・J-4グリッドに位置し、SE 1の直上に構築されている。平面形態は正方形に近い不整形で、断面は下方が広がる「下膨れ」状である。規模は長径2.01m、短径1.98m、深さ1.05mである。13は砥石で、欠損部を除いては全面に研磨された痕跡が認められる。

第114号土坑 (第134・147図26)

D・E-9グリッドに位置し、SK 115などに一部を壊されている。平面形態は長方形で、規模は長径2.65m、短径1.05m、深さ0.15mである。26は播鉢で、底部に欠く。丹波産。

第100号土坑 (第133・147図21-23・28)

C-12グリッドに位置し、S J 28のガサP 4の一部を壊して構築している。平面形態は円形に近く、規模

第116号土坑 (第134・147図30)

D・E-9グリッドに位置し、SK 115と重複する。平面形態は長方形と推定される。30は須恵器甕の破片で、外面は波状文が巡る。

b. 地下式墳

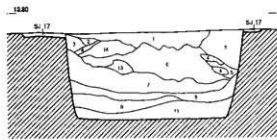
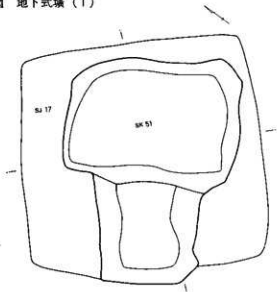
地下式墳は6基検出された。平面形態はT字形が多く、SK51の他はいずれも南側に開口部をもつ。主に江戸時代後期頃の遺物を伴う。また、SJ28・29の調査において擾乱した部分からも江戸時代後期の陶磁

器類が多数出土し、地下式墳であった可能性が高いが、遺構が不鮮明であったため、グリッド出土遺物として取り扱った。なお、地下式墳は特に番号をつけず、土壌番号のまま記載した。

第51号土壌 (第140・146図10～12・18)

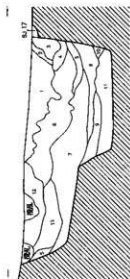
I-4グリッドに位置し、SJ17の中心部に構築されている。平面形態はT字形で、規模は長径3.6m、短径2.85m、深さ1.4mである。南西側が細長く掘り込まれ、出入り口部と考えられる。最下層にはロームブロックが多量に堆積し、天井部は一気に崩落したものと考えられる。遺物は小型甕、土玉、鍋、砥石が出土している。10・11は周辺の住居跡からの混入遺物と考えられる。12の土鍋は在地産と考えられる。18は須恵器甕を転用した砥石で、断面部分を中心に研磨している。

第140図 地下式墳 (1)



第99号土壌 (第141・147図19・20)

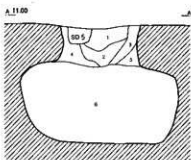
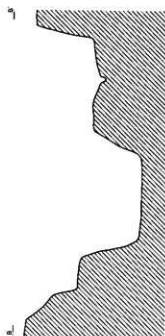
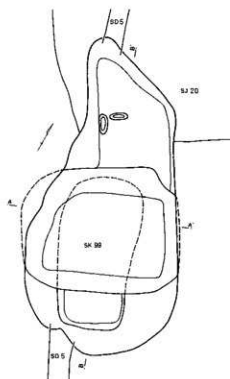
E-11グリッドに位置し、SJ20の南隅にかかって構築され、SD5に中央部を壊されている。平面形態は南側に出入り口部をもつT字形であるが、北側にも同様の掘り込みがある。この掘り込みは、後世の土壌が重複した可能性もあるが、再度方向を変えて掘り直したものとみられる。天井は一気に崩落したとみられ、ロームブロックが室内に広がっていた。遺物は2点出土した。19は在地産の鉢、20は生産地不明の播鉢である。



SK51

- 1 灰黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。
- 2 黒色土 ローム粒子少量含む。
- 3 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。
- 4 灰褐色土 ロームブロック多量含む。
- 5 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。
- 6 黒褐色土 焼土粒子・ローム粒子少量含む。
- 7 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。
- 8 褐色土 ロームブロック少量含む。
- 9 暗褐色土 ロームブロック多量含む。
- 10 黒褐色土 ローム粒子多量含む。
- 11 褐色土 ロームブロック多量含む。
- 12 灰黄褐色土 ローム粒子少量含む。
- 13 暗褐色土 炭化粒子・ローム粒子少量含む。
- 14 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。

第141図 地下式竈（2）



SK 99

- 1 褐色土 ロームブロック多量含む。
- 2 暗褐色土 黄土粒子・ローム粒子多量含む。
- 3 黄褐色土 ローム粒子多量含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒子・黒色粒子多量含む。
- 5 褐色土 ローム粒子多量含む。
- 6 黄褐色土 ロームブロック多量含む。

第108号土壇（第142・147図24・25・29）

E-8グリッドに位置し、西側をSD4・16に壊されている。平面形態はT字形で、規模は長径2.6m、短径2.4m、深さ2.3mである。入り口部は東側に設けられ、室内に下りる途中には足かけとみられるピットが壁面に直交して設けられていた。遺物は播鉢、内耳鍋、須恵器甕の破片が出土した。須恵器甕は混入したものとみられる。

第124号土壇（第142・147図27）

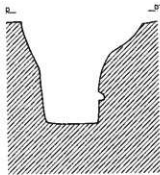
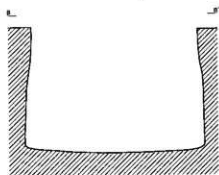
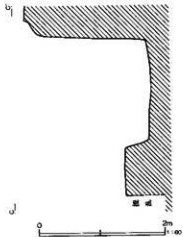
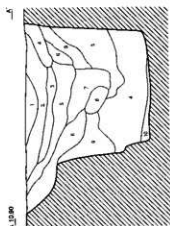
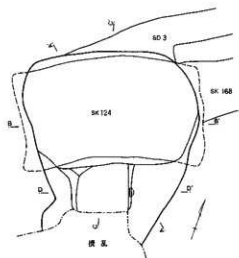
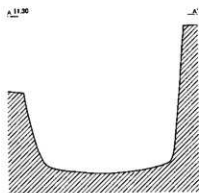
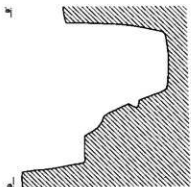
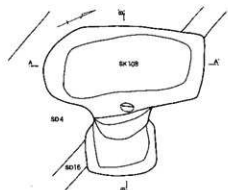
D-10グリッドに位置するが、南側を攪乱、北側をSD3などによって壊されている。平面形態はT字形

と推定され、規模は攪乱のために入り口部となる南側が不明であるが、室内の長径が3m、深さは1.95mである。入り口部の東側の壁面には足かけとみられる直径0.15m程のピットが壁面に直交して設けられていた。遺物は常滑産とみられる播鉢の破片が覆土から1点出土した。

第164号土壇（第143・148図41）

D-8グリッドに位置し、北西の一部を攪乱によって壊されている。平面形態は不整形で、T字形の両脇が短くなったような形態である。長径2.85m、短径2.25m、深さ1.4mと小規模である。下層にはロームブ

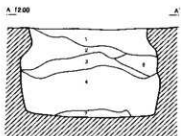
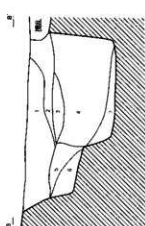
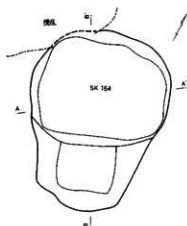
第142図 地下式壙 (3)



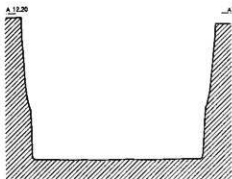
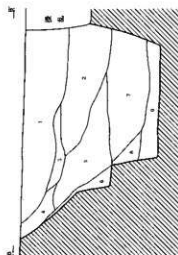
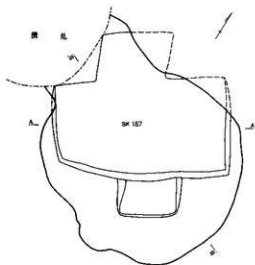
SK124

- 1 黒褐色土 ローム粒子少量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
- 3 黒褐色土 ローム粒子少量含む。
- 4 褐色土 ロームブロック多量含む。
- 5 褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。
- 6 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
- 7 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。
- 8 黄褐色土 ロームブロック多量含む。
- 9 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。
- 10 黒褐色土 ローム粒子多量含む。

第143図 地下式墳(4)



- SK 164
- 1 褐色土 混入物なし。
 - 2 暗褐色土 混入物なし。
 - 3 黒色土 混入物なし。
 - 4 黄褐色土 ロームブロック多量含む。
 - 5 黒褐色土 ローム粒子少量含む。
 - 6 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
 - 7 黒褐色土 ローム粒下・ロームブロック少量含む。
 - 8 黄褐色土 ローム混。



- SK 167
- 1 暗褐色土 ロームブロック多量、ローム粒子少量含む。
 - 2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。
 - 3 黒褐色土 ローム粒子少量含む。
 - 4 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
 - 5 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
 - 6 黄褐色土 ロームブロック多量含む。
 - 7 黄褐色土 ロームブロック多量含む。
 - 8 暗褐色土 ロームブロック多量含む。
 - 9 暗褐色土 ロームブロック少量含む。

ロックの堆積が顕著で、天井の崩落は明らかである。遺物は須恵器環の破片が1点出土したが、周辺の住居跡から混入したものとみられる。

第167号土壌(第143・148図43~48)

F-7グリッドに位置し、西側の一部を攪乱によっ

て壊されている。平面形態は十字形と推定され、入り口部が南北に設けられているものと考えられる。規模は長径2.9m、短径2.85m、深さ2.1mであるが、室内は入り口部に対して長大である。遺物は播鉢、甕(弥生時代後期から古墳時代前期)、ロクロ上師器(平安時代)の破片が出土している。

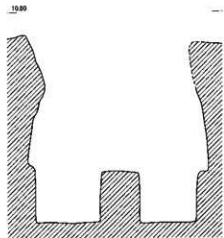
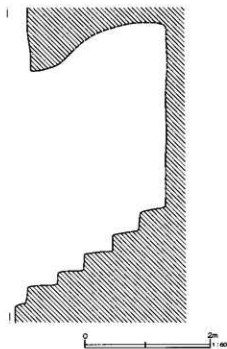
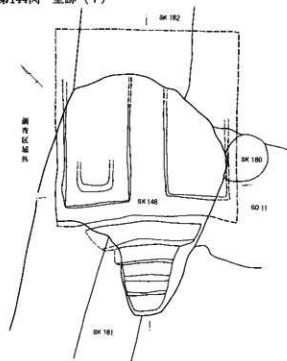
C. 室跡

調査区の北側で、主軸を直交させて構築された室跡が2基検出された。いずれも階段の入り口をもち、室内の床面に並列する長方形の土壇を2基掘り込んだものである。室跡は地域などによって形態などが異なるが、その用途についても貯蔵庫、穴蔵、麹室、もやし栽培用地下室などの説がある。現在ではもやし栽培説が有力とされているが、この周辺地域でもやし栽培が行われていた記録はなく、考え難い面もある。この周辺の地域ではこうした地下室は俗に穴蔵と呼称され、現在でも使われているものが少なくなく、多くは穀物類の貯蔵やウドの栽培などを主目的に利用され、戦時

中に至っては防空壕としても使われたようである。地下室でもやし栽培が行われていた事例があるにしても、すべての地域や地下室にあてはまるものとは限らない。

遺物については、皿、搦鉢、土人形、古銭、磁石、鉄釘、煙管などが出土している。いずれも江戸時代後期に帰属する遺物であるが、出土遺物に偏重がみられる。とりわけ搦鉢の出土比率は高く、今後遺構の性格を考えていく上で重要な要素の一つになっていく可能性がある。

第144図 室跡(1)



第148号土壇 (第144・148図31～39)

C-10グリッドに位置している。他の遺構との重複によって不明瞭な部分もあるが、一辺約2.9m、深さ2.3mの正方形の形態に長さ約1.5mの階段を伴う出入り口部を南西に設けたものである。室内は側壁、奥壁ともオーヴァハングするが、奥壁は側壁に比べて大きく抉られている。床面は平坦で、側壁に沿って長さ約2.5m、幅約1m、深さ約0.7mの土壇が2基掘り込

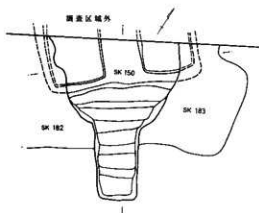
まれている。天井部は崩落しているが、遺構確認面からでも0.5m以上あったものと推測される。階段は勾配が急で、検出された6段は出入り口に向かって狭くなっている。出入り口の地上部分には覆いなどが設けられていたものと推測される。遺物は皿、播鉢、焙烙、土人形などが出土した。中でも播鉢は出土量が多く、よく使い込まれているものである。

第150号土壇 (第145・148図40・42)

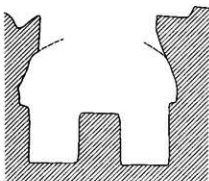
C-10グリッドに位置し、調査区内にかかった遺構の約半分が検出された。SK148の北東約2mに位置し、出入り口部を南東に設けていることから、SK148とは主軸を直交して構築されている。室内の規模は南北方向が調査区外にあるため断定できないが、東西方向が約2.6m、深さ2.35mあり、SK148とはほぼ同規模と推定される。床面は平坦で、同規模の土壇が2基掘り込まれている。土壇は側壁に沿って掘られるが、断

面観察からは側壁のオーヴァハングは土壇を掘る際に抉られたものとみられる。出入り口部の階段は6段検出され、出入り口に向かって狭くなっている。階段はSK148に比べると約1.8mの長さか採られており、勾配がやや緩やかになっている。遺物は灯明皿と砥石が覆土から出土している。灯明皿は瀬戸美濃産で、口縁には煤の痕跡が認められる。砥石は破片であるが、よく使い込まれている。

第145図 室跡 (2)

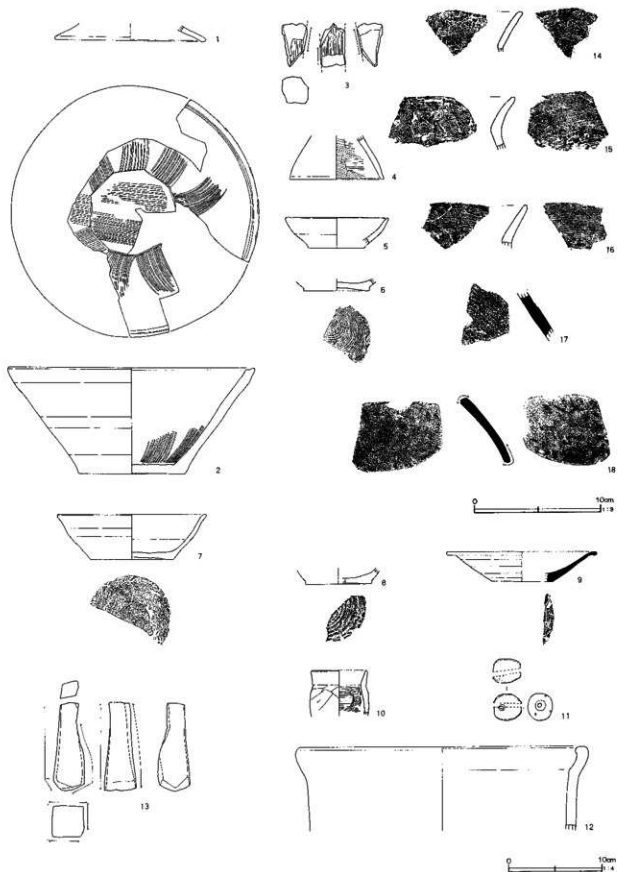


10-80

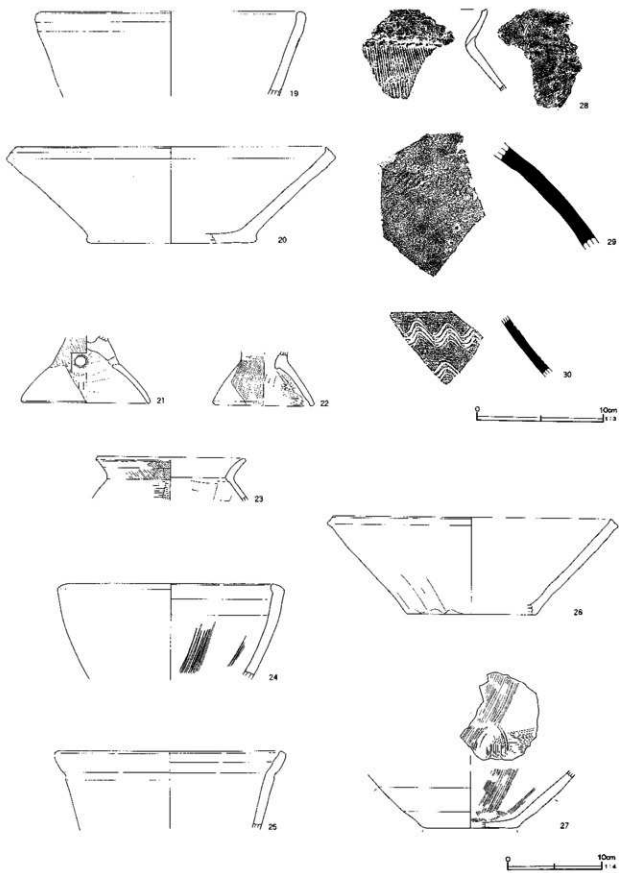


0 2m 40

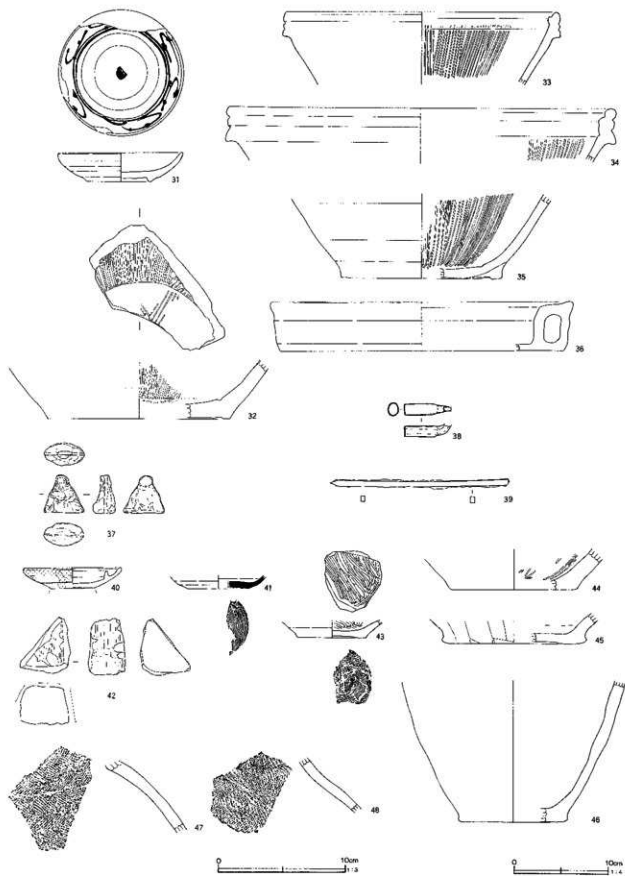
第146图 土坑出土遗物 (1)



第147図 土壙出土遺物(2)



第148図 土坑出土遺物 (3)



第46表 土壌出土遺物観察表 (第146図～第148図)

番号	部 種	口径	器高	底径	胎 上	焼成	色調	残存率	備 考		
1	高坏			(16.0)	砂	b	V	10	S K 4 内外面ナテ		
2	擂鉢	26.4	11.2	11.4	A砂礫	b	VII	50	S K 16 外面ヨコナテ 内面ナテ後拂目 底部ヘラケズリ		
3	砥石	残存長4.6cm 幅2.7cm 厚さ2.9cm						I	10	S K 17 重さ33.77g	
4	高坏			(10.0)	砂	a	VII	10	S K 18 外面風化 内面ハケ		
5	かわらけ	(11.0)			B砂	b	VII	10	S K 38 風化顕著		
6	坏			(7.0)	A砂	a	XI	30	S K 46 ロクロ土師器 底部回転系切り		
7	埴	(15.8)	4.8	8.8	砂	b	X	40	S K 48 ロクロ土師器 底部回転系切り		
8	坏			(7.0)	A砂	b	XI	25	S K 44 ロクロ土師器 底部回転系切り		
9	埴	(16.0)	3.1	(6.5)	A針砂礫	b	I	30	S K 44 須恵器 ロクロナテ 底部回転系切り		
10	小型甕	(6.0)			A砂	a	VI	20	S K 51 口縁部ヨコナテ 体部外面斜方向ヘラケズリ		
11	土玉	直径3.0cm 孔径0.4cm			砂	a	XI	100	S K 51 重さ22.99g		
12	鍋	(31.2)			砂礫	b	II	10	S K 51 内外面ヨコナテ		
13	砥石	長さ9.3cm 幅3.4cm 厚さ3.3cm						I	100	S K 52 重さ121.46g	
14	甕				砂	a	VI	10	S K 24 内外面ハケ		
15	甕				砂	a	V	10	S K 29 内外面ハケ		
16	甕				砂	a	V	10	S K 39 内外面ハケ		
17	埴				A針砂	a	I	10	S K 27 須恵器 外面平行叩き 内面同心肉文		
18	砥石				A針	a	I	10	S K 51 須恵器甕転用		
19	鉢	(28.6)			A砂	b	V	15	S K 99 内外面ナテ		
20	擂鉢	(33.0)	10.2	(18.8)	A砂礫	a	VII	20	S K 99 内外面ナテ 内面研磨痕顕著 底部ヘラケズリ		
21	高坏			(13.6)	A砂	a	VII	40	S K 100 胴部透孔4ヶ所 外面縦方向ミガキ 内面ヘラケズリ		
22	高坏			(10.4)	A砂	b	VII	30	S K 100 内外面ハケ 一部ナテ・ヘラケズリ		
23	甕	(16.0)			A砂	a	V	20	S K 100 口縁部斜ハケ後一部ヨコナテ		
24	鉢	(21.2)			A砂礫	a	VII	10	S K 108 内外面ヨコナテ 内面叩目		
25	鉢	(24.6)			A	b	VII	10	S K 108 口縁部ヨコナテ 胴部ナテ		
26	こね鉢	(30.8)	10.2	(13.8)	A砂礫	b	VII	10	S K 114 内外面ナテ 外面下半縦方向ヘラケズリ		
27	擂鉢			(9.6)	A礫	a	I	10	S K 124		
28	甕				A B砂	a	VII	10	S K 100 口縁部ヨコナテ 体部外面タテハケ 内面斜ミガキ		
29	甕				A砂礫	a	II	10	S K 108 須恵器甕転用 外面と破面の一部に研磨痕		
30	甕				A砂	a	I	10	S K 116 外面波状文・ナテ・自然軸付着 内面ナテ		
31	皿	13.4	3.1	6.8	A	a	III	90	S K 148 肥前系		
32	擂鉢			(18.6)	A礫	b	VII	15	S K 148		
33	擂鉢	(18.8)			A砂	a	VII	10	S K 148		
34	擂鉢	40.2			砂礫	b	VII	10	S K 148		
35	擂鉢			(17.2)	A礫	b	VII	15	S K 148		
36	焙烙	(32.0)	5.2	(30.2)	A砂	a	V	10	S K 148		
37	土人形		4.0	4.3	A C砂	b	淵	100	S K 148 重さ16.78g		
38	キセル	残存長4.9cm 厚さ1.3cm						a	XV	60	S K 148 重さ9.34g
39	釘	残存長19.1cm 厚さ0.95cm						a	VI	90	S K 148 重さ33.07g
40	灯明皿	(10.6)	2.2	(4.8)	A	a	X	30	S K 150 底部回転ヘラケズリ		
41	坏			6.5	A針砂	a	II	30	S K 164 須恵器 底部回転系切り		
42	砥石	残存長6.0cm 幅4.8cm 厚さ4.0cm						III	10	S K 150 重さ108.03g	
43	坏			(7.3)	A砂	a	VI	35	S K 167 ロクロ土師器 底部回転系切り 内面黒色処理・ミガキ		
44	擂鉢			(13.2)	A砂礫	a	VII	10	S K 167 外面横方向ヘラケズリ後ヨコナテ 内面ナテ		
45	擂鉢			(15.6)	A砂礫	a	V	25	S K 167 外面ヘラケズリ 内面ナテ 底部ナテ後未調整		
46	甕			11.4	A E砂礫	a	VI	15	S K 167		
47	甕				砂	b	V	10	S K 167 外面縄文施文 内面ナテ		
48	甕				A砂	a	VII	10	S K 167		

第47表 土填一覧表

番号	位置	主軸方向	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
1	F-8	N-37°-W	1.50	0.90	0.52
2	F-8	N-59°-E	0.97	0.94	0.18
3	F-8	N-42°-W	0.83	0.64	0.54
4	F-8	N-49°-E	1.50	0.78	0.47
5	E-8	N-15°-W	2.15	1.03	0.30
6	E・F-8	N-44°-W	1.38	0.85	0.32
7	F-8	N-14°-E	—	0.99	0.18
8	F-8	N-85°-W	1.17	0.88	0.22
9	F・G-8	N-5°-E	—	0.73	0.17
10	G-8	N-71°-E	—	1.27	0.51
11	F・G-8	N-29°-W	3.06	1.23	1.13
12	F・G-8	N-56°-E	—	1.95	0.36
13	F-8	N-33°-E	0.94	0.65	0.12
14	F・G-7	N-55°-E	1.52	1.01	0.96
15	F-7	N-34°-W	0.76	0.65	0.19
16	G-8	N-64°-E	—	1.05	0.30
17	G-8	N-30°-W	—	1.07	0.51
18	G-8	N-67°-E	4.28	1.08	0.60
19	G-8	N-34°-W	—	—	0.18
20	G-7・8	N-60°-E	—	—	0.33
21	G-7	—	—	—	0.15
22	G-7	N-60°-E	2.31	1.16	1.18
23	G-7	N-74°-E	1.32	0.83	0.71
24	G-7	N-49°-E	—	—	0.09
25	G-7	N-54°-E	1.60	1.15	0.45
26	G-7	N-48°-W	1.12	0.69	0.18
27	G-6・7	N-85°-E	1.72	0.91	0.29
28	G-6	N-41°-W	1.15	0.98	0.34
29	G-6	N-27°-W	1.16	1.05	0.65
30	G-6	N-64°-E	—	1.05	0.29
31	G-6	N-23°-W	1.05	1.02	0.99
32	G-7	N-23°-W	1.61	1.12	0.49
33	G-7	N-25°-W	—	—	0.37
34	G-8	N-61°-E	1.77	0.94	0.41
35	G-8	N-61°-E	3.03	1.16	0.87
36	F-8	N-85°-W	1.01	0.97	0.63
37	F-7・8	N-61°-E	0.97	0.94	1.01
38	F-7・8	N-41°-W	1.77	1.38	0.75
39	F-8	N-25°-W	—	0.90	0.38
40	F-8・9	N-63°-E	—	1.36	0.80
41	F・G-9	—	—	—	0.27
42	F-8	N-84°-E	0.73	0.67	0.93
43	G-8	N-62°-E	2.26	—	0.57
44	G-7	N-77°-E	1.78	1.56	0.29
45	G-7	N-38°-W	—	1.26	0.37
46	F・G-7	N-35°-W	—	1.25	0.35
47	G-6	N-32°-W	1.33	0.81	0.15
48	G・F-7	N-52°-E	—	0.82	0.23
49	G-7	N-52°-W	1.25	0.71	0.10
50	G-7	N-32°-W	2.25	1.18	0.75

番号	位置	主軸方向	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
51	I-4	N-56°-E	3.56	2.80	1.39
52	I・J-4	N-37°-E	2.44	2.30	1.09
53	H-3・4	N-49°-W	2.92	0.86	0.95
54	H-3	N-12°-E	1.62	0.92	0.45
55	G-3	N-58°-E	(2.72)	0.78	0.13
56 欠番					
57	G-3	N-8°-W	1.49	1.22	0.68
58	D-5	N-18°-W	—	—	0.97
59	I-5	N-3°-E	1.62	0.71	0.13
60	F-3	N-31°-E	0.89	0.55	0.37
61	E-8	N-29°-W	(1.23)	0.91	0.29
62 欠番					
63	F-8	N-5°-W	0.75	0.51	0.18
64	F-8	N-11°-W	—	—	0.07
65	F-8	—	—	—	0.07
66	F-7	N-45°-W	0.75	0.74	0.24
67	G-6・7	N-47°-W	1.09	0.71	0.12
68	G・H-7	N-22°-E	2.32	1.25	0.65
69	H-7	N-40°-W	—	0.92	0.20
70	G-7	N-10°-W	0.82	0.65	0.09
71	H-6	—	—	—	0.37
72	H-6	N-32°-W	1.54	1.03	0.09
73	G・H-6	—	—	—	0.29
74	G・H-6	—	—	—	0.25
75	F-3	N-33°-W	0.71	0.59	0.23
76	F-2	N-11°-E	0.63	0.50	0.26
77	E-10・11	N-25°-W	—	—	0.25
78	E-10	N-28°-W	—	—	0.17
79	D・E-10	N-48°-W	1.23	1.05	0.25
80	D-12・13	N-37°-W	1.77	0.92	0.18
81	E-13	N-20°-W	4.30	1.55	0.23
82	E-12・13	N-73°-E	1.97	1.18	0.25
83	D・E-10	N-30°-W	4.22	0.98	0.20
84	F-10	—	—	—	0.66
85	E-13	N-82°-E	1.77	1.00	0.18
86	E-13	N-71°-E	1.82	1.59	0.30
87	E-13	N-65°-W	1.85	1.01	0.25
88	D-11	N-30°-W	0.95	0.94	0.91
89	D-11	N-31°-W	1.09	0.90	0.23
90	D-12	N-37°-E	1.62	1.20	0.25
91	D-11・12	N-25°-W	0.67	0.66	0.35
92	E-12	N-21°-W	—	—	0.89
93	D-10	N-76°-E	—	0.70	0.11
94	D-11	N-30°-W	0.83	0.73	0.67
95	D-11	N-30°-W	0.67	0.60	0.20
96	D-11	N-31°-E	0.85	0.83	0.55
97	E-13	N-47°-E	—	0.85	0.12
98	E-13	N-40°-E	—	—	0.20
99	E-11	N-19°-W	—	—	1.85
100	C-12	N-10°-E	1.22	1.21	0.37

番号	位置	主軸方向	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
101	C-12	N-58°-E	0.91	0.78	0.27
102	D・E-12	N-48°-E	(2.26)	1.77	0.42
103	C-11	N-58°-E	1.20	1.12	0.37
104	C-11	N-57°-E	8.96	1.04	0.25
105	D-11	N-88°-E	1.46	1.42	0.28
106	D-11	N-78°-E	(1.03)	0.86	0.21
107	D-11	—	—	—	0.26
108	E-8	N-26°-E	2.58	2.36	2.08
109	E-8	N-78°-E	1.82	0.81	0.66
110	F-9	N-27°-W	—	0.78	0.79
111	D-10	N-59°-E	1.08	0.82	0.28
112	E-9	N-66°-E	—	0.90	0.18
113	E-9	N-31°-W	—	0.87	0.16
114	D・E-9	N-77°-E	2.62	1.06	0.20
115	D・E-9	N-22°-W	—	0.92	0.25
116	D・E-9	N-74°-E	—	1.05	0.20
117	D-9	N-68°-E	1.86	1.67	0.29
118	D-9	—	—	—	0.16
119	D-9	N-67°-E	3.83	0.96	0.25
120	E-9	N-58°-E	—	—	0.23
121	B-12	N-15°-W	2.82	2.41	1.01
122	B-11	N-25°-W	6.82	0.87	0.21
123	D-10	N-8°-E	1.92	1.07	0.75
124	D-11	N-69°-E	—	—	1.99
125	C-11	N-70°-E	(1.22)	1.18	0.32
126	C-11	N-72°-E	1.50	1.41	0.24
127	C-11	N-63°-E	—	0.91	0.21
128	E-8・9	N-60°-E	2.22	0.96	0.27
129	C-10	N-30°-W	5.09	0.90	0.25
130	C・D-9	N-32°-W	1.02	0.76	0.10
131	D-9	N-81°-E	1.14	0.91	0.15
132	C-9	N-25°-W	1.62	0.73	0.17
133	C-9	N-1°-W	2.06	1.01	0.13
134	C・D-9	N-32°-W	1.26	1.09	0.23
135	D-9	N-29°-W	1.28	1.01	0.19
136	D-9	N-58°-E	1.05	0.80	0.15
137	D-9	N-33°-E	1.65	0.95	1.15
138	D-9	N-32°-W	—	—	0.12
139	D-9	N-52°-E	1.86	1.05	0.13
140	D-9・10	N-71°-E	1.52	0.90	0.20
141	欠番				
142	D-9	N-64°-E	—	1.02	0.11

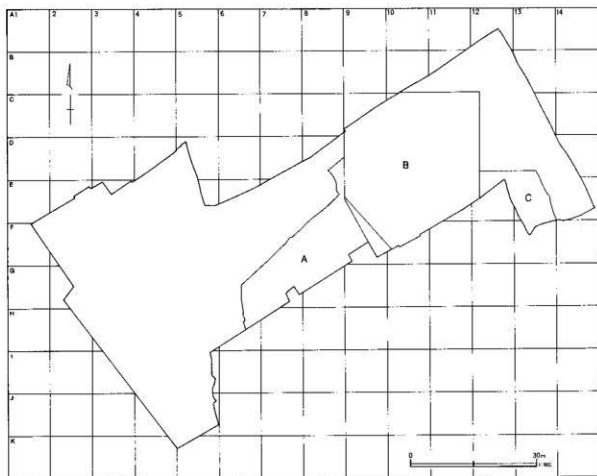
番号	位置	主軸方向	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
143	C-9	N-51°-E	—	0.61	0.13
144	C-9	—	—	1.08	0.20
145	D-10	—	—	—	0.10
146	D-10	N-71°-E	1.91	1.01	0.50
147	C-9	N-83°-E	0.82	0.81	0.21
148	C-10	N-45°-E	—	—	2.95
149	欠番				
150	B・C-10	N-33°-W	—	—	2.37
151	C-10	N-61°-E	—	1.11	1.06
152	C-10	N-74°-E	0.80	0.77	0.48
153	F-6	N-3°-E	0.92	0.89	0.38
154	F-6	N-43°-E	1.42	0.92	0.51
155	F-6	N-29°-W	—	0.80	0.10
156	F-6	N-36°-W	—	—	0.12
157	F-6	N-72°-E	—	0.81	0.23
158	F-6・7	N-61°-E	1.25	0.75	0.10
159	F-7	N-47°-E	1.32	0.70	0.10
160	F-7	N-52°-E	1.15	0.91	0.09
161	F-7	N-38°-W	—	—	0.40
162	E-8	N-41°-W	1.55	0.62	0.11
163	F-6	N-19°-W	1.05	0.80	0.70
164	F-6	N-17°-W	2.87	2.22	1.38
165	G-6	N-60°-E	1.06	0.76	0.38
166	E-7	N-7°-W	1.46	0.70	0.07
167	F・G-6	N-69°-W	—	—	2.16
168	D-10・11	N-55°-E	—	1.15	0.09
169	F・G-8	—	—	—	0.14
170	G-7	N-42°-E	1.02	0.60	0.13
171	E-13	N-23°-W	—	—	0.11
172	E-13	N-58°-W	—	—	0.11
173	E-9	N-65°-W	—	0.98	0.11
174	F-8	—	—	—	0.10
175	E-8	—	—	—	0.13
176	B-12	N-51°-E	1.62	0.61	0.40
177	D-9	—	—	—	0.15
178	D-9	—	—	—	0.08
179	D-9	—	—	—	0.09
180	C-10	N-89°-W	0.83	0.70	0.34
181	C-9・10	N-59°-E	—	(0.91)	0.12
182	C-10	—	—	—	0.17
183	B・C-10	—	—	—	0.26

(4) ビット (第150図～第152図)

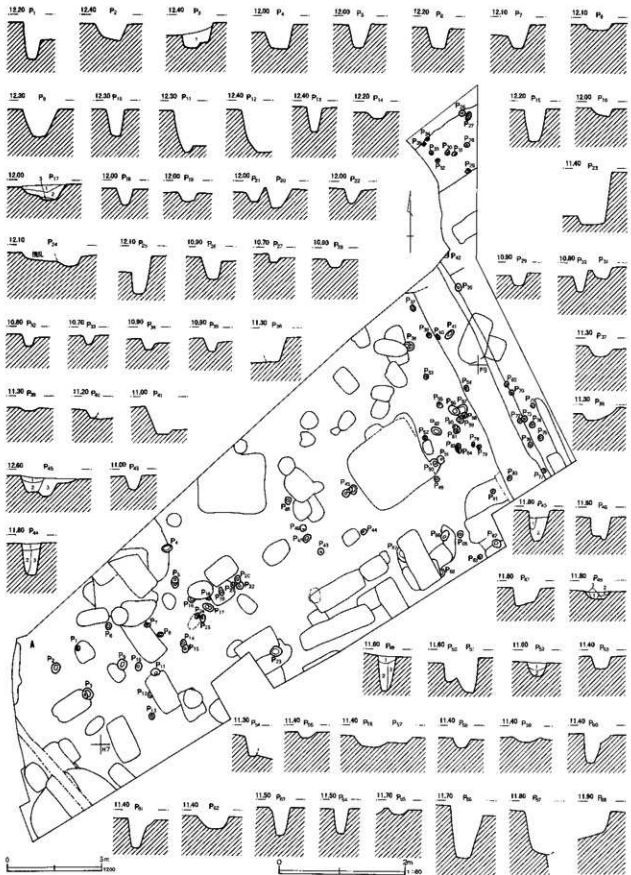
ビットは調査区の中央部から東側を中心に150基検出された。150基のビットの中には柱底跡があり、明らかに建物の柱穴と考えられるものや、浅く小規模な土壌状で性格の分からないものなどがある。いずれも他のビットなどと複合せず、単独ビットと判断し、取り扱ったものである。柱穴と考えられるビットについては、孤立柱建物跡も1棟確認されていることから周辺に同様なビットを求めたが、攪乱などもあり、検出までには至らなかった。平面形態は円形、楕円形のものが多く、稀に方形に近いものがある。規模は直径が

0.2～0.3m、深さ0.3m前後のものが中心である。ビットの時期は遺物を伴っていないため特定することはできないが、江戸時代の遺物を伴う土壌や溝と重複することや弥生時代から古墳時代前期、平安時代などの遺構の覆土とは異なることから、中・近世以降とみなし、一括して掲載した。また、ビットの形態であっても、覆土が攪乱土である場合は除外した。なお、掲載にあたっては、便宜上、ビットの集中する地点を調査区の西側からA・B・Cの3箇所のブロックに分けた。

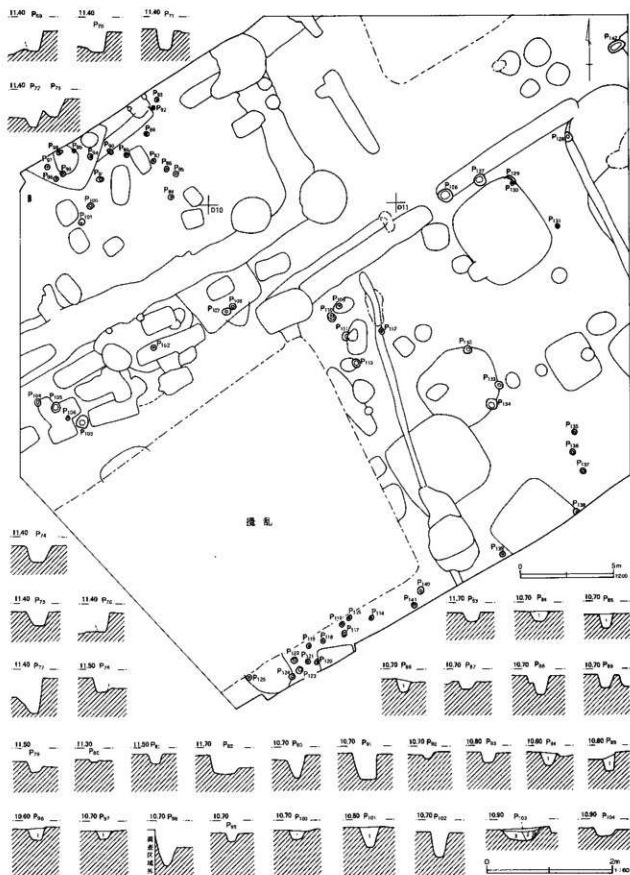
第149図 ビット概略図



第150図 ビット (A)



第151図 ビット (B)



第152図 ビット (C)



GF3
1 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。

GP17
1 暗褐色土 ローム粒子・黒褐色粒子少量含む。
2 黄褐色土 ローム粒子少量含む。
3 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。

GP43
1 暗褐色土 ローム粒子・黒褐色粒子少量含む。
2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック・黒褐色ブロック多量含む。

GP44
1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック・黒褐色粒子少量含む。
2 暗褐色土 ローム粒子・炭化物粒子少量含む。
3 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。

GP45
1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。
3 黄褐色土 ローム粒子少量、ロームブロック少量含む。

GP48
1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。

2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。
3 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。

GP49
1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。
2 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
3 黄褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。

GP52
1 暗褐色土 ローム粒子・黒褐色粒子少量含む。
2 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。

GP84-85-95
1 黄褐色土 ロームブロック少量含む。
GP86-94-98
1 暗褐色土 ロームブロック少量含む。

GP97-100-101
1 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
1 黄褐色土 ローム粒子少量含む。
2 褐色土 ローム粒子多量含む。
3 暗褐色土 ローム粒子多量含む。

GP107-108
1 黒褐色土 炭化物・粘土粒子少量含む。
2 暗褐色土 ローム粒子少量含む。

3 褐色土 ローム粒子・ロームブロック多量含む。
GF114-117-118-123-140
GF121-122-127-142
GF115
1 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
GF116
1 暗褐色土 ロームブロック・暗褐色土少量含む。

GF119
1 暗褐色土 ローム粒子・粘土粒子多量含む。
GF121-122-127-142
1 暗褐色土 ロームブロック少量含む。
GF135-136
1 暗褐色土 ローム粒子少量含む。
GF141
1 暗褐色土 ロームブロック少量含む。
GF143
1 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。

GF144~146
1 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロック少量含む。

GF149-150
1 赤褐色土 焼土粒子・粘土ブロック多量含む。
2 黄褐色土 ローム粒子多量、暗褐色土微量含む。

0 2m 100

第48表 ビット一覧表

番号	位置	形態	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
1	G-6	楕円形	0.27	0.25	0.42
2	G-6	楕円形	0.55	0.52	0.24
3	G-6	円形	0.51	0.49	0.26
4	F-7	楕円形	0.49	0.37	0.32
5	G-7	楕円形	0.61	0.42	0.34
6	G-7	円形	0.36	0.35	0.32
7	G-7	楕円形	0.37	0.20	0.26
8	G-7	楕円形	0.42	0.29	0.10
9	G-7	円形	0.60	0.52	0.42
10	G-7	楕円形	0.32	0.31	0.40
11	G-7	楕円形	0.43	0.35	0.62
12	G-7	不整形	—	0.23	0.66
13	G-7	楕円形	0.25	0.24	0.38
14	G-7	不整形	0.33	0.27	0.10
15	G-7	楕円形	0.36	0.34	0.50
16	G-7	不整形	0.36	0.27	0.12
17	G-7	不整形	0.72	0.42	0.24
18	G-7	不整形	—	—	0.26
19	G-7	楕円形	0.41	0.25	0.16
20	G-7	円形	0.38	0.28	0.18
21	G-7	円形	0.29	0.28	0.30
22	G-7	円形	0.49	0.43	0.20
23	G-7	不整形	0.57	0.45	0.80
24	G-7	楕円形	0.38	0.32	0.18
25	G-7	楕円形	0.46	0.34	0.46
26	D-8	円形	0.33	0.32	0.30
27	D-8	楕円形	0.48	0.18	0.10
28	D-8	円形	0.30	0.24	0.12
29	D-8	不整形	0.30	0.25	0.18
30	D-8	不整形	0.30	0.29	0.30
31	D-8	楕円形	0.31	0.27	0.16
32	D-8	円形	0.22	0.19	0.16
33	D-8	円形	0.23	0.19	0.14
34	D-8	円形	0.23	0.22	0.14
35	D-8	円形	0.24	0.23	0.18
36	E-8	円形	0.41	0.40	0.38
37	E-8	円形	0.37	0.36	0.16
38	E-8	円形	0.54	0.44	0.14
39	E-8	円形	0.29	0.28	0.06
40	E-8	楕円形	0.31	0.18	0.12
41	E-8	楕円形	0.62	0.34	0.42
42	E-8	不整形	—	—	0.22
43	F-8	円形	0.36	0.31	0.48

番号	位置	形態	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
44	F-8	円形	0.36	0.26	0.50
45	F-8	不整形	0.88	0.42	0.28
46	F-8	円形	0.34	0.33	0.36
47	F-8	楕円形	0.52	0.36	0.28
48	F-8	不整形	0.42	0.37	0.12
49	F-8	円形	0.28	0.27	0.54
50	F-8	円形	0.28	0.21	0.30
51	F-8	円形	0.45	0.40	0.52
52	F-8	円形	0.31	0.29	0.22
53	F-8	円形	0.32	0.31	0.20
54	F-8	楕円形	0.27	0.22	0.32
55	F-8	円形	0.34	0.28	0.12
56	F-8	楕円形	0.67	0.48	0.18
57	F-8	楕円形	0.71	0.57	0.10
58	F-8	楕円形	0.37	0.28	0.16
59	F-8	楕円形	0.42	0.34	0.10
60	F-8	円形	0.31	0.28	0.46
61	F-8	円形	0.28	0.23	0.45
62	F-8	楕円形	0.56	0.38	0.18
63	F-8	円形	0.36	0.27	0.44
64	F-8	円形	0.28	0.22	0.40
65	F-8	円形	0.34	0.31	0.10
66	F-8	楕円形	0.58	0.51	0.74
67	F・G-8	不整形	0.88	—	0.66
68	G-8	不整形	0.48	0.26	0.40
69	F-9	円形	0.33	0.29	0.32
70	F-9	円形	0.32	0.31	0.32
71	F-9	円形	0.29	0.26	0.32
72	F-9	円形	0.31	0.29	0.45
73	F-9	円形	0.35	0.31	0.30
74	F-9	円形	0.41	0.37	0.26
75	F-9	円形	0.37	0.34	0.22
76	F-9	円形	0.24	0.21	0.30
77	F-9	円形	0.26	0.24	0.56
78	F-8	楕円形	0.26	0.25	0.22
79	F-9	円形	0.25	0.24	0.14
80	F-9	楕円形	0.31	0.20	0.04
81	F-9	円形	0.28	0.21	0.16
82	F-9	楕円形	0.50	0.46	0.30
83	G-9	円形	0.30	0.25	0.16
84	C-9	円形	0.31	0.28	0.16
85	C-9	円形	0.24	0.21	0.22
86	C-9	円形	0.24	0.21	0.18

番号	位置	形態	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
87	C-9	円形	0.27	0.25	0.14
88	C-9	楕円形	0.36	0.28	0.30
89	C-9	円形	0.26	0.25	0.22
90	C-9	楕円形	0.39	0.26	0.34
91	C-9	楕円形	0.40	0.25	0.40
92	C-9	円形	0.21	0.19	0.10
93	C-9	円形	0.23	0.21	0.18
94	C-9	円形	0.34	0.31	0.20
95	C-9	円形	0.21	0.20	0.24
96	C-9	円形	0.27	0.26	0.20
97	C-9	円形	0.26	0.24	0.14
98	C-9	楕円形	0.32	0.26	0.56
99	C-9	円形	0.27	0.22	0.14
100	C-9	円形	0.29	0.26	0.14
101	D-9	円形	0.34	0.33	0.32
102	D-9	楕円形	0.30	0.24	0.40
103	E-9	不整形	0.67	0.63	0.20
104	E-9	楕円形	0.40	0.33	0.12
105	E-9	円形	0.59	0.47	0.12
106	E-9	円形	0.30	0.23	0.18
107	D-10	楕円形	0.47	0.44	0.72
108	D-10	円形	0.35	0.33	0.34
109	D-10	円形	0.35	0.33	0.42
110	D-10	不整形	0.52	0.38	0.38
111	D-10	不整形	0.52	—	0.70
112	D-10	円形	0.32	0.22	0.32
113	D-10	円形	0.45	0.42	0.26
114	F-10	楕円形	0.39	0.28	0.18
115	F-10	楕円形	0.27	0.24	0.20
116	F-10	円形	0.35	0.34	0.36
117	F-10	楕円形	0.40	0.32	0.30
118	F-10	円形	0.33	0.29	0.28

番号	位置	形態	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
119	F-10	円形	0.29	0.27	0.40
120	F-10	不整形	0.27	0.26	0.18
121	F-10	円形	0.31	0.26	0.24
122	F-10	円形	0.37	0.33	0.26
123	F-10	円形	0.37	0.36	0.42
124	F-10	円形	0.34	0.29	0.32
125	F-10	円形	0.29	0.28	0.22
126	C-11	楕円形	0.79	0.72	0.36
127	C-11	円形	0.60	0.57	0.16
128	C-11	不整形	0.56	0.42	0.40
129	C-11	不整形	—	—	0.40
130	C-11	楕円形	0.22	0.21	0.46
131	D-11	円形	0.27	0.26	0.18
132	D-11	円形	0.43	0.42	0.38
133	D-11	円形	0.50	0.42	0.50
134	E-11	円形	0.59	0.56	0.56
135	E-11	円形	0.28	0.27	0.22
136	E-11	円形	0.31	0.31	0.28
137	E-11	円形	0.33	0.31	0.30
138	E-11	円形	0.32	0.31	0.30
139	E-11	円形	0.38	0.29	1.30
140	F-11	円形	0.28	0.24	0.32
141	F-11	円形	0.32	0.20	0.36
142	C-12	楕円形	0.90	0.48	0.14
143	E-12	円形	0.32	0.29	0.38
144	E-13	円形	0.37	0.32	0.52
145	E-13	円形	0.25	0.24	0.24
146	E-13	円形	0.32	0.30	0.46
147	E-13	円形	0.38	0.35	0.46
148	E-13	楕円形	0.34	0.29	0.38
149	E-13	楕円形	0.39	0.25	0.08
150	E-13	楕円形	0.26	0.18	0.08

(5) グリッド出土遺物

グリッド扱いとしたものは遺構に伴わずグリッド内から単独で出土した遺物、本来は遺構に伴うものであるが、遺構外から出土した遺物、出土地点が明らかで

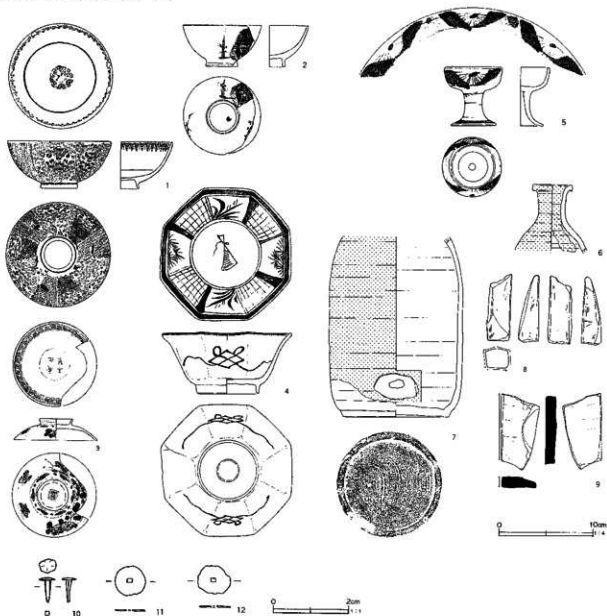
はない遺物、表採された遺物、住居跡から出土した遺物であるが、明らかに異なる遺構に帰属する遺物が対象である。

出土遺物 (第153図～第155図)

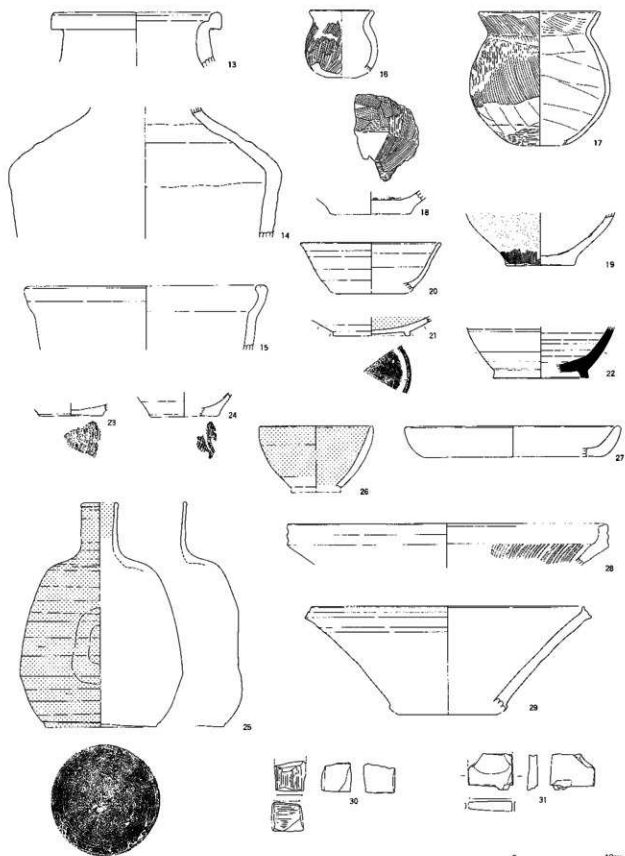
第153図は重複するS J 27・28の間に構築された地下式塙(擾乱)に伴うと考えられる遺物である。9を除いては概ね江戸時代後期以降に属するものとみられる。1は瀬戸系磁器碗である。1は草花文を三組三単

位で組み合わせたものである。高台及び見込みは薄く作られる。2は産地不明の磁器碗である。3は肥前系の蓋で、見込みに「成化年製」と入った蓋である。4は内面に草花文を描く八角の肥前系鉢である。5は瀬戸産の仏飯具で、半菊花文が描かれている。6・7は

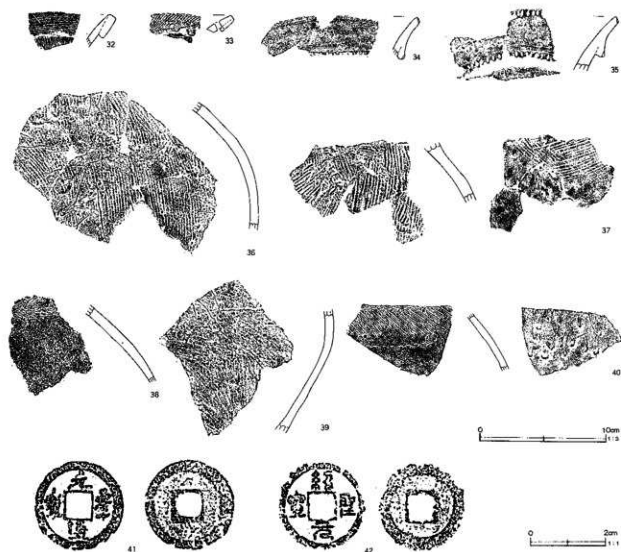
第153図 グリッド出土遺物(1)



第154図 グリッド出土遺物(2)



第155図 グリッド出土遺物(3)



徳利で、いずれも瀬戸美濃産である。7は胴部下半に意図的か割られ、孔が空いている。8・9は砥石で、8は石製、9は須恵器甕を転用したものである。10～12は青銅製の鋳と中子である。中子は薄い作りで、鋳に止められた状態で出土した。

第154図13～17、第155図32～35・38・40は本来重複する住居跡や土壇に帰属すると考えられる遺物である。13～15は多くの土壇と重複するS J 3の覆土から出土したものである。13・14は常滑産甕の口縁部及び肩部の破片である。15は内耳の鍋と考えられ、在地産である。16は風化が進んでいるが、外面はミガキで調整される。32・33はS J 42と重複するS J 5から出土した甕破片である。41は「元豊通寶」、42は「紹聖元寶」

とともに北宋銭である。17はS J 9と重複するS J 8から出土した甕で、底部を欠く。内外面ともハケで調整されるが、部分的にヘラケズリされる箇所がある。18は甕の底部、20はクロコ上師器環の口縁部、21は灰釉陶器皿で、底部に窯記号がある。22は須恵器長頸壺の底部付近の破片。23～25は弥生時代後期から古墳時代前期の溝跡SD 1から出土したものである。23・24はクロコ上師器環の底部、25は瀬戸美濃産の徳利である。26は瀬戸美濃産の天目茶碗、27は在地産の鉢、28・29は摺鉢である。30・31はSD 11から出土した砥石と硯の破片である。31は硯で使用された後、側面を砥石としても二次利用している。

第49表 グリッド出土遺物観察表 (第153図～第155図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	保存率	備考
1	碗	11.0	5.0	3.8		a	III	95	S J 28内ムロ 染付
2	碗	8.2	4.4	3.4	A	a	I	80	S J 28内ムロ 染付
3	蓋	8.9	2.3	3.6		a	III	75	S J 28内ムロ 染付 内面「成化年製」
4	鉢	13.8	6.4	6.4		a	III	100	S J 28内ムロ 染付
5	仏飯具	5.6	6.2	4.8		a	III	100	S J 28内ムロ
6	徳利	4.0			A	a	Ⅷ	80	S J 28内ムロ
7	徳利			11.2	砂	a	Ⅷ	90	S J 28内ムロ
8	砥石	長さ7.2cm 幅2.5cm 厚さ2.1cm					III	90	S J 28内ムロ 重さ44.6g
9	砥石				A砂	a	I	10	S J 28 須恵窯製転用 内外面ナテ
10	鉄	長さ1.30cm 上部直径0.90cm 重さ0.49g						100	S J 28 下部方彫断面 0.20×0.20cm
11	鉄	直径1.60cm 重さ0.44g						95	S J 28 孔径0.25×0.30cm方孔
12	鉄	直径0.70cm 重さ0.41g						85	S J 28 孔径0.25×0.20cm方孔
13	甕	18.2			砂礫	a	VII	10	S J 3 口縁部ヨコナテ
14	甕				砂礫	a	VII	20	S J 3 胴部径(28.8cm) 内面ヨコナテ 輪積痕明顯
15	鉢	25.2			砂	b	XI	10	S J 3 外面椀付者 内外面ナテ
16	小型甕	6.9			A B C E	b	V	40	F-3・5 外面ミガキ
17	甕	(13.0)			A C E 砂	b	V	40	S J 8 外面ナテ後継方向ハケ 内面ナテ
18	壺			8.6	A砂	b	VII	50	C-12 外面ナテ・ミガキ 内面ハケ
19	壺			7.4	A B C D	b	VII	40	S J 5 外面赤彩・タテハケ 内面風化
20	埴	(14.8)			A砂	b	V	20	C-12 ロクロ土埴器
21	埴			(8.2)	A砂	a	I	20	E-7 灰釉陶器 底部外面露記号
22	長頸壺			(10.2)	A砂	a	I	15	表採 須恵器 体部下廻回転ヘラズリ
23	環			7.0	A C 砂	a	Ⅷ	10	S D 1 ロクロ土埴器 底部回転承切り
24	環			(7.4)	A砂	b	Ⅷ	10	S D 1 ロクロ土埴器 底部回転承切り
25	徳利	3.5	23.7	11.8	A	a	V	95	S D 1 「人形徳利」形
26	天目茶碗	(11.8)			砂	a	X	25	H-6 瀬戸美濃産
27	鉢	(23.0)	3.2	(18.8)	砂	a	VII	10	表採 内外面ロクロナテ 底部ヘラズリ
28	播鉢	(33.6)			砂礫	a	VII	15	D-10
29	播鉢	(29.0)			A砂礫	b	V	20	表採 内外面ナテ 外面ヘラズリ後ナテ 下端指頭痕あり
30	砥石	残存長3.2cm 幅3.4cm 厚さ3.3cm						XI	S D 11 重さ46.02g
31	砥石	残存長3.8cm 幅4.6cm 厚さ1.0cm						II	S D 11 製転用 重さ28.03g
32	壺				A C D	b	V	10	S J 5
33	壺				A D	b	V	10	S J 5 外面赤彩 縄文LR施文
34	壺				A砂	a	VII	10	S K 141 外面赤彩(剥落) 内面横方向ミガキ
35	壺				A砂	a	VII	10	S K 141 外面赤彩(剥落) 内面横方向ミガキ
36	壺				砂	a	VII	10	F-7
37	壺				A砂	a	VII	10	F-7 外面ハケ 内面ハケ・ナテ
38	壺				A C	b	VII	10	S J 5 外面赤彩・ミガキ
39	壺				砂	c	X	10	G-5
40	壺				A C 砂	b	Ⅷ	10	S D 1 S字結節文区画内縄文R L施文
41	古銭	直径2.35cm							北宋銭 元宝通寶 重さ3.90g
42	古銭	直径2.30cm							北宋銭 紹聖元宝 重さ2.23g

V 調査の成果

1. 遺構の分布と集落形成

今回報告する下野田稲荷原遺跡では弥生時代後期から古墳時代前期にかけての住居跡39軒、平安時代の住居跡6軒、掘立柱建物跡1棟などが検出された。既に浦和市遺跡調査会によって下野田稲荷原遺跡では数十軒の住居跡が確認され、弥生時代中期から古墳時代前期及び平安時代の集落の存在が明らかにされていた。その後、下野田稲荷原遺跡の北側に位置する下野田本村遺跡、南側に位置する東裏遺跡で当該期の住居跡の他に方形周溝墓や縄文時代中期の住居跡も検出され、予想以上に広がりをもつ集落であることがわかった。

下野田本村、同稲荷原、東裏の3遺跡は遺跡名こそ異なるが、同時代の遺構の広がりや同じ台地上に隣接して立地することなどから一つの遺跡として捉えることができる。しかも制限された中ではあるが、台地の要所で調査が行われており、ある程度遺跡の全体像が捉えられたといっても過言ではない。第156図はこれまでに検出された各時代の住居跡等の位置を示したものである。調査された範囲は3遺跡とも台地の東側半分にかけているが、主に下野田稲荷原遺跡、東裏遺跡の調査が進んでいる。

弥生時代後期から古墳時代前期の遺構は、これらの遺跡北側に集中する傾向が窺われる。東裏遺跡でも住居跡は検出されているが、主に下野田稲荷原遺跡に隣接した付近であることから、集落は下野田稲荷原、同本村遺跡を中心とした地域に展開しているものとみられる。また、下野田稲荷原遺跡の中心部では2基の方形周溝墓が検出されている。この調査区では住居跡がまったく検出されなかったことや付近の調査区でも方形周溝墓に向かって遺構の密度が薄くなることから、この一角に墓域が形成されていた可能性がある。

一方、集落をのせる台地は南側が高く、北側に向かって緩やかに傾斜している。方形周溝墓が検出された南側のやや標高の高い調査区では、弥生時代中期の住居跡が検出されている。現時点では、この台地上では該

期で最も古い住居跡である。今回報告した下野田稲荷原遺跡や下野田本村遺跡では、弥生時代後期から古墳時代にかけての集落が中心であることや、浦和市遺跡調査会で調査した下野田稲荷原遺跡の遺構・遺物がやや古い様相をもっていることなどを考慮すると、南側から北側に向かって次第に集落形成が進められていったことも考えられる。

また、今回の調査では、既に検出されていた方形周溝墓の他に、多量の該期の土器を伴う溝跡が検出された。溝跡の形状は方形周溝墓と類似しているが、途切れるため区画溝と判断したが、集落の中央を貫くように構築されており、問題として残った。

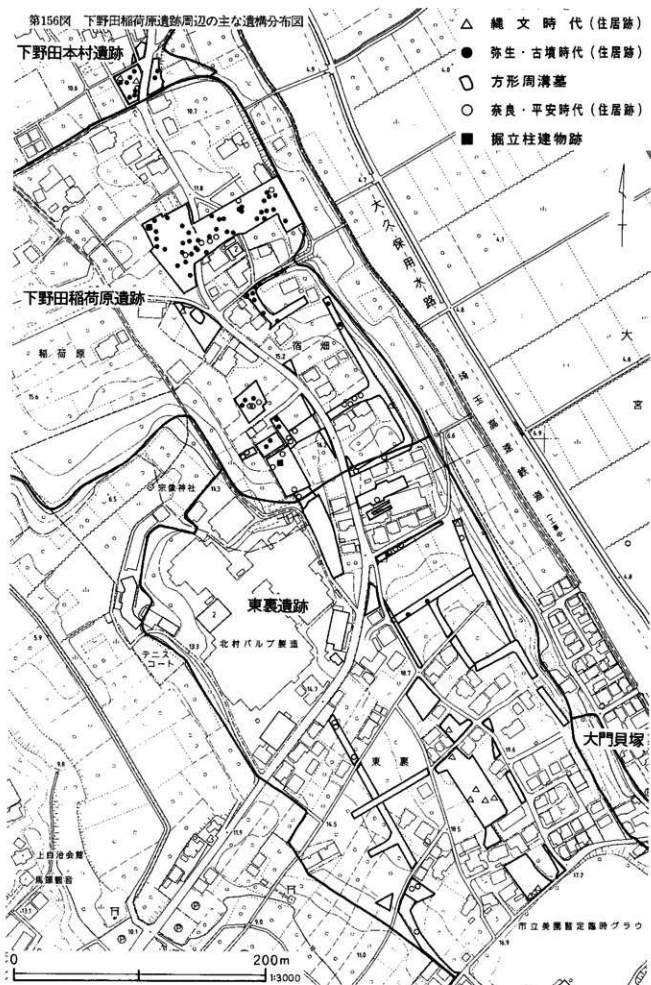
平安時代の遺構は弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落とは異なり、分散する傾向が窺われる。各調査地点では、平均して5または6軒規模の住居跡が調査されている。これまでの調査で弥生時代後期から古墳時代前期の集落のように台地の高い部分を中心に形成されるのではなく、低地付近にまで住居跡が構築されているのがわかる。浦和市遺跡調査会の調査では少数ではあるが、奈良時代の集落が存在したことも確認されている。本格的に集落が形成されるのは、平安時代になってからである。

平安時代の集落については、過去に住居跡の配置について、ある一定の距離に小規模または単独で構築されていることが指摘されてきた。しかし、近年の調査ではそのような状況とは異なる集落も数多く存在することもわかってきた。下野田稲荷原遺跡や東裏遺跡の遺構分布をみると、数軒の規模でまとまりをもちながら集落が形成されていたものと推定される。出土遺物からみた集落の年代は9世紀代が中心で、特に9世紀中頃を中心とした時期に画期があるように思われる。

その傍証のひとつとして搬入土器の多様化があげられる。下野田稲荷原遺跡では奈良時代に集落の形成が始まるが、県内津守に西部地域などと大きく異なる土器

第156図 下野田稲荷原遺跡周辺の主な遺構分布図

- △ 縄文時代(住居跡)
- 弥生・古墳時代(住居跡)
- 方形周溝墓
- 奈良・平安時代(住居跡)
- 掘立柱建物跡



組成はみられない。ところが、9世紀代になると従来からの土器に加え、灰釉陶器、ロクロ土師器（黒色処理した土器群を含む）の出土比率が増してくる。特にロクロ土師器は一地域からの搬入ではなく、複数の地域から供給されていることがわかった。こうした流通進んだ背景にはこの集落が土器の生産地と近いことや交易上の経路が付近に存在したことなどがあげられる。そして、この遺跡が発展した大きな理由には東側に広がる広大な低地が生活基盤として役割を担っていたものと考えられる。

大宮台地東部における平安時代の集落では、須恵器や土師器に混じてロクロ土師器や酸化焰焼成の上器

群が多くみられる。大宮台地東部の遺跡では下総国や常陸国とも近いことから、既に両国で生産された土器類が出土していることが知られている。浦和市遺跡調査会の調査では、下野田稲荷原遺跡からロクロ土師器を生産したとみられる土器焼成遺構が検出されている。今回報告したロクロ土師器の中にはその土器焼成遺構の土器と類似したものが含まれており、一部は周辺で供給が賄われていたことを示す事象として注目される。以上、下野田稲荷原遺跡の集落形成について概観してきたが、筆者の力量不足もあり、十分な検討ができなかった。機会を改めて検討したい。

2. 弥生時代後期から古墳時代前期における出土遺物の分類と課題

下野田稲荷原遺跡から出土した弥生時代後期から古墳時代前期の土器群について、以下のように分類を行った。前項でも触れたように下野田稲荷原遺跡は南北に細長い台地に立地しているため、今回分類した土器群が下野田稲荷原遺跡のすべてを包括するものではないが、この集落特有の様相は反映されているものと捉えている。また、時期区分については明確に弥生時代後期、古墳時代前期と呼称できるものは少なかったため、これらを連続する一つの時期として考えた。本稿では、器種分類した器形の特徴を示すとともに、器種別の様相を提示した。

壺形土器（第157図）

本遺跡からは殆どの住居跡で、複数の形態をもつ壺形土器が出土している。壺形土器は大きく分けて単純口縁壺と複合口縁壺がある。相対的に単純口縁壺は小型で、本文中では小型壺と称した。底部が小さいタイプが主体である。複合口縁壺は多様性があり、頸部を長く採る場合が多くみられた。折り返し口縁の壺も複合口縁壺に含め、大きさや形態の違いなどから、II-VIII類に分類した。また、本遺跡から出土する壺類の器面はミガキが施されている場合が多くみられるが、中にはミガキを施す前段階のヘラケズリやナデをそのまま

残す場合もみられた。部位では特に胴部下半に集中する。

I 単純口縁壺

I a 類 口縁部は緩やかな「く」の字にひらき、胴部中央が大きく膨らみ、比較的底部を大きくつくる壺である。(SJ 7-2、13-1)

I b 類 口縁部は明瞭に「く」の字にひらき、胴部下半が膨らみ、底部は小さい壺である。(SJ)24-1、30-3、35-1・3)

I c 類 小型で、口縁部が短く、「く」の字にひらく。胴部下半が下膨れ状に膨らみ、器形の割には底径が大きい壺である。(SJ)31-1)

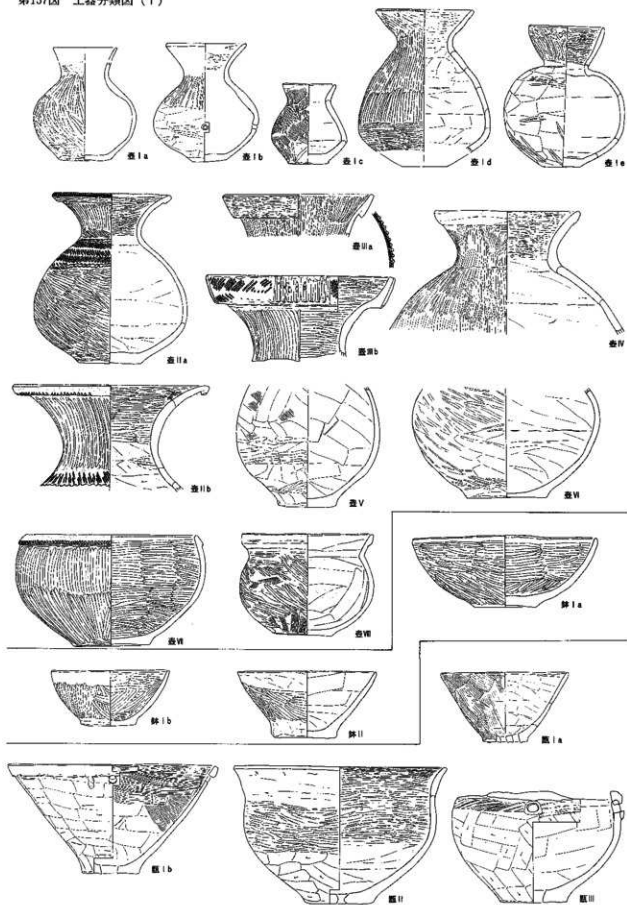
I d 類 やや人型で、形態はc類に類似する。口縁部は「く」の字にひらくが、括れが設けられている壺である。(SJ)35-2)

I e 類 口縁部が直線的に立ち上がる壺で、頸部の括れが明瞭である。(SJ)10-1)

2 複合口縁壺

II a 類 複合部が短く、「く」の字に口縁部が外反する比較的小型の壺である。基本的に複合部には押し止のキザミまたは刺突状片痕、胴部上半に

第157图 土器分類圖(1)



- はLRまたはRLの縄文を三段乃至羽状に施し、円形浮文を貼付する場合がある。胴部下半が大きく膨らむ。(SJ30-1、SD 1-1・3)
- II b類 a類と基本的には同じ形態で、大型の壺である。(SJ30-2、33-1)
- III a類 複合部が長く、「く」の字の屈曲度はII類に比べてやや小さい壺である。胴部の破片は少なかったが、下半部が膨らむものとみられる。複合部は基本的にナデやミガキで棒状浮文などは貼付されない。(SJ 7-1、36-1)
- III b類 類より大型で、「く」の字の屈曲度が類より大きく、複合部に棒状浮文、格子目状捺糸文、縄文を施文する壺である。(SJ11-1、39-2、SD 1-2・4)
- IV類 複合部が短く、折り返し部分が薄く、器肉が厚い。全体的にII類に近いが、装飾的な要素が少ない壺である。(SJ12-1)
- V類 やや長胴化し、胴部下半が膨らむ壺である。IV類に近い口縁部が胴部に対して小さい複合口縁壺の可能性が高いとみられるが、I類の可能性もある。(SJ30-4)
- VI類 胴部下半に膨らみをもつ壺で、口縁部は複合口縁である。(SJ20-5、35-8)
- VII類 無頸の壺で、機能的には鉢に近い。胴部がやや張り、口縁部は僅かに内傾する。複合口縁の折り返し部分は薄く、短い。(SD 1-5)
- VIII類 口縁部が短く、直線的に立ち上がる壺で、最大径が口縁部にある広口壺の類である。口縁部の折り返し部分は短く、肥厚する。(SJ42-1、SD 1-17)

鉢形土器 (第157図)

鉢は口縁部に最大径をもつタイプが主体であるが、相対的に出土量は少ない。小型の鉢は明確に底部をつくり出す。体部などの調整はミガキとナデが中心であるが、底部付近の調整はヘラケズリを残す場合がある。

- I a類 最大径を口縁部にもつ鉢である。口縁部はやや内湾気味で、底径や器高に対して口径が大きい浅鉢といえるものである。(SJ41-2、SD 1-7・8、13-1・2)
- I b類 I a類と類似した形態の小型鉢であるが、底径や器高に対して口径が小さいため、やや深鉢に近い。(SD 1-6)
- II類 逆台形に近い形態で、口縁部が直線的に立ち上がる鉢である。(SJ30-5)

甔形土器 (第157図)

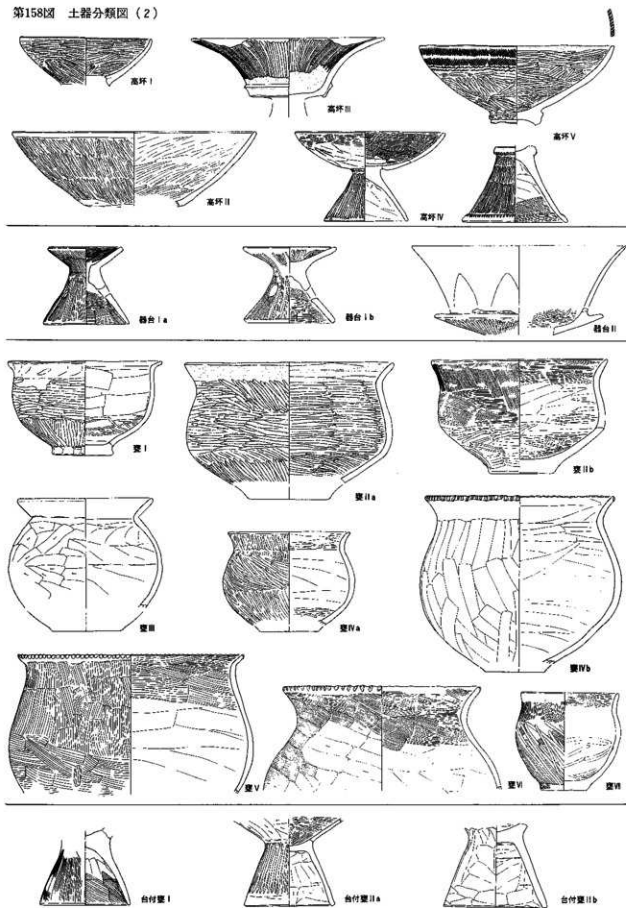
甔は鉢とはほぼ同量出土した。形態的には逆台形をした鉢や甕に類したタイプである。底部の凹孔は中心部を意識しているが、厳密にはやや外れている。多孔の甔I aは他の甔に比べて孔の空け方が雑である。また、口縁部付近に対になる孔をもつ甔も2点出土した。周辺には粘土も補強されており、吊り手を意識したものと考えられる。

- I a類 口縁部が直線的にひらく、小型の甔である。(SJ13-2)
- I b類 I a類と同形態であるが、やや大型で、複合口縁をもつ甔である。複合口縁下には対になる孔が穿たれ、吊り手状の機能をもっていたものと考えられる。(SJ10-6)
- II類 甔形土器に近い形態で、口縁部は緩やかに外反する甔である。(SJ37-2)
- III類 鉢形土器に近い形態で、口縁部はやや内湾するやや特殊な甔である。I b類と同様に口縁部には対になる孔が穿たれるが、その周辺には補強用粘土が貼付される。(SJ 7-6)

高環形土器 (第158図)

高環は量的に多くないが、ヴァリエーションは豊富である。その中には環部が碗形に近い形状のタイプが主体である。III類やSJ37-1などの装飾性をもつ高環は小破片を含めても量的に少ない。SJ37-1は台付鉢や甔の可能性も考えられる。大型のII類は東海地方

第158圖 土器分類圖(2)



西部の影響を受けた高環と考えられている。また、高環の中には胎土の異なるものがあり、他の地域から搬入された可能性も考えられる。

I 類 口縁端部が内湾またはひらく、環部が碗形に近い高環である。環部下端に明瞭な段をもつか否かは断定できない。(SJ 7-9、28-3、39-3、41-1、44-1)

II 類 大型の高環で、口縁部は内湾気味に立ち上がる。環部下端の段は明瞭である。(SJ 7-10)

III 類 口縁部は大きく外反し、環部下端を突起状に裝飾する甕である。環部下端の段は明瞭である。(SJ 7-7、11-2)

IV 類 口縁部は内湾して立ち上がり、環部に対して脚部が高くつくられる高環である。(SJ10-3・5、40-1)

V 類 口縁端部が僅かに内湾し、裾端部がひらく高環である。環部と脚部の括れ部分には粘土を貼付し、押圧キザミなどで裝飾する他、口縁部にも縄文を羽状に施文する場合がある。(SJ21-1・2、36-2、SD 1-10・11)

器台形土器 (第158図)

器台も量的に少ない。破片も含めて I 類が主体である。II 類は特殊器台形土器、異形器台などと称され、広範囲に分布する。祭祀などに関わる特殊な土師器と考えられている。

I a 類 小型器台で、やや直線的にひらき、器受部が浅いものである。口唇部は明瞭な面をつくる。(SJ 7-15)

I b 類 小型器台で、I a 類と同様直線的にひらくが、器受部と脚部の口径が同じものである。(SJ10-2、20-3)

II 類 裝飾器台である。脚部は出土していないが、一般的に通常の器台に比べて大型で、碗形の環部をもつ高環の脚部に類似した大きくひらくタイプである。(SJ 7-8、34-1)

甕形土器 (第158図)

甕は壺とともに量的に多く、集落内において最も普及していた器種のひとつである。今回報告した甕類の呼称については、研究者によって鉢、小型鉢と器種分類される場合がある。基本的に出土量の多い器種であり、その用途などを考える上にも口縁部の短い壺とともに問題のある上器群である。特に分類する上で問題となるのは浅い扁平な甕 I 類、II a 類、II b 類の 3 種である。一般的に多くの集落で見られる IV 類とは器高が低く、口縁部が広いことや口縁端部にキザミがみられないことなど外観上の印象が異なり、機能的に IV 類などと同じとは考え難い面がある。甕類の調整は外観上はミガキとハケが混在し、部分的にヘラケズリを残す場合があり、I 類から IV 類、VII 類はミガキとハケ、V・VI 類はハケで調整される傾向が窺われた。また、台付甕については脚部の破片が多く、口縁部・胴部の破片が少なかったが、基本的には IV b 類、V 類に近い形態とみられる。

I 類 口縁部が短く、直線的にひらく甕である。最大径は口縁部にある。(SD 1-15)

II a 類 胴部が張り、口縁部が「く」の字にひらく、やや大型の甕である。(SD 1-19)

II b 類 II a 類と同様の形態で、小型の甕である。(SD 1-20)

III 類 口縁部は直線的にひらき、胴部中央が張る甕である。最大径は胴部にある。(SJ28-6、35-6、39-8、SD 1-23)

IV a 類 口縁部は緩やかに外反し、胴部中央が張る小型の甕である。(SJ 1-1、43-3)

IV b 類 IV a 類と同様の形態で、大型の甕である。(SJ 9-4、13-4、23-1、28-4・5、30-6、37-3、SD 1-18)

V 類 口縁部が短く外反し、胴部が緩やかに張る甕である。最大径は胴部にある。(SJ14-1、22-5、24-2、44-2)

VI 類 口縁部は甕類の中では最も長く、外反する。最大径は胴部にある。(SJ12-2、38-4)

VII 類 口縁部は短く、直立気味に立ち上がる小型の
甕である。(SJ 7-16、11-5)

(SJ 7-13)

II a 類 脚部の内面が平底状で、薄手の台付甕である。
(SJ 7-14、31-2、35-9)

台付甕 (第158図)

II b 類 脚部の内面が平底状で、厚手の台付甕である。
(SJ34-4、SD 1-14)

I 類 脚部の内面が丸底状になる台付甕である。

引用・参考文献

- 石坂俊郎 (1999) 『下野田本村遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第255集
岩田明弘 (1999) 『中里前原遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 第228集
小川順一郎 (1985) 『天神山・宮脇遺跡』 川口市遺跡調査会報告書 第6集
書上元博 (1994) 『稲荷台遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第139集
柿沼幹大他 (1985) 『上台遺跡群—B地点—七郷神社裏遺跡—』 川口市遺跡調査会報告書 第5集
君島勝秀 (1999) 『外東／神田天神後／久保染里』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第206集
近藤行仁他 (1996) 『東裏遺跡発掘調査報告書 (第3次)』 浦和市遺跡調査会報告書 第217集
佐々木義則 (1998) 『常陸におけるロクロ成形土師器環の展開』 慶良輪考古 第20号
笠生 衛 (1990) 『房総における黒色土器の展開と終焉』 『東国土器研究』 第3号
寺内正明 (1989) 『椿山遺跡—第3・4次調査—』 埼玉県蕨田市文化財調査報告書 第13集
富田和夫 (1997) 『関東西部—武蔵国を中心—』 『古代の土師器生産と焼成遺構』 窯跡研究会編
半澤幹雄 (1997) 『関東東部—千葉県内を中心—』 『古代の土師器生産と焼成遺構』 窯跡研究会編
丹羽孝志 (1998) 『新堀敷遺跡 D区—第2分冊—』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書 第194集
福田 聖 (1993) 『狐塚遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第124集
宮崎由利江 (1989) 『御蔵山中遺跡』 大宮市遺跡調査会報告 第26集
渡辺 一 (1985) 『夙原遺跡 (歴史時代・図版編)』 川口市遺跡調査会報告書 第7集
渡辺 一 (1996) 『大宮台地東部における平安時代の二三の問題』 『埼玉地域の文化の研究』

註 第158図の作成にあたっては、浦和市遺跡調査会よりご協力を賜った。